
久 喜 市

小林八束1遺跡Ⅲ

総合交付金（河川）工事（小林調節池）

埋蔵文化財発掘調査報告

（第1分冊）

2019

埼玉県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 第1号方形周溝墓出土土器



2 第40号住居跡出土土器

序

埼玉県では、「希望と安心」「活躍と成長」「うるおいと誇り」の埼玉を目指すべき将来像に掲げ、それらを実現するための様々な施策に取り組んでいます。その中には、あらゆる危機や災害に備え生活の安心を高めるための、総合的な治水対策が含まれています。

久喜市小林地内に計画された、小林調節池建設事業もその一環です。久喜市内には、周知の埋蔵文化財が多数所在しており、今回発掘調査を行った小林八束1遺跡もその一つです。この発掘調査は、埼玉県の委託を受け、調節池建設のための事前調査として当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、現在平坦な水田地帯となっている地表面下から、埋没していた当時の台地と谷の遺跡があらわれました。その台地の上からは、縄文時代や古墳時代を中心とした数多くの遺構や遺物が発見されました。中でも今から約1,700年前の古墳時代の住居跡群と、それらを壊して造られた方形周溝墓群が注目されます。特に方形周溝墓群は地形が埋没していたため、盛土が残っており、埼玉県内では貴重な調査例となりました。一方の谷は、水場として利用されており、斜面からは古墳時代の木組遺構が見つかりました。木材を組み合わせたこの遺構は、当時の人々が水場へ下りる施設であったと推定されます。このように今回の発掘調査によって、古墳時代の人々の営みを知る上で、大変貴重な資料を得ることができました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部文化資源課をはじめ、埼玉県国土整備部河川砂防課、埼玉県杉戸県土整備事務所、久喜市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

令和元年11月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 藤 田 栄 二

例　言

- 1 本書は久喜市に所在する小林八東1遺跡第3次・第4次調査の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下の通りである。

小林八東1遺跡（No. 84 - 044）
第3次調査
久喜市菖蒲町小林字八東4800番地他
平成25年1月15日付教生文第2-58号

第4次調査
久喜市菖蒲町小林字八東4741番地他
平成25年5月15日付教生文第2-4号
- 3 発掘調査は、小林調節池建設工事に先立つ埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課（当時）が調整し、埼玉県の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 各事業の委託事業名は、下記の通りである。

発掘調査事業（平成24年度）
「総合交付金（河川）工事（小林調節池・事業地内埋蔵文化財発掘調査業務委託その1）」

発掘調査事業（平成25年度）
「総合交付金（河川）工事（小林調節池・事業地内埋蔵文化財発掘調査業務委託その2）」

整理・報告書作成事業（平成30年度）
「総合交付金（河川）工事（小林調節池・事業地内埋蔵文化財整理業務委託）」

整理・報告書作成事業（平成31年度）
「総合交付金（河川）工事（小林調節池・事業地内埋蔵文化財整理業務委託）」
- 5 発掘調査、整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。

発掘調査は、第3次調査を平成24年11月1日から平成25年3月29日まで西井幸雄、岩瀬譲が、平成25年4月1日から平成26年3月31日まで西井、上野真由美、小出輝雄、

滝澤誠が担当した。

第4次調査は平成25年4月1日から平成25

年11月28日まで古谷涉、砂生智江が担当した。

整理・報告書作成事業は、平成30年度から平成31年度（令和元年度）まで実施した。

平成30年度は平成30年4月1日から平成31年3月31日まで実施し、吉田稔、山本靖、福田聖、青木弘、砂生が担当した。

平成31年度は平成31年4月15日から令和元年9月30日まで実施し、青木が担当した。

報告書は令和元年11月22日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第457集として印刷、刊行した。

6 発掘調査における基準点測量は、第3次調査は株式会社サクラプランニングに、第4次調査は株式会社ビッソ測量設計に委託した。

空中写真撮影は、第3次調査は株式会社G I S関東に、第4次調査は株式会社新日本エグザに委託した。

自然科学分析は、第3次調査（発掘）は株式会社パレオ・ラボに、第3次調査（整理）はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

7 卷頭図版の写真撮影は、小川忠博氏に委託した。

8 発掘調査における写真撮影は、各担当者が行い、出土遺物の写真撮影は青木が行った。

9 出土品の整理と図版作成は、吉田・山本・福田・青木・砂生が行い、上野、渡辺清志、矢部瞳、魚水環、金子直行、吉留頌平の協力を得た。

10 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、IV-1を吉留、IV-2・V-1を上野、その他を青木が行った。

11 本書の編集は青木が行った。

12 本書にかかる諸資料は、令和元年12月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。

13 発掘調査と本書の作成に際し、下記の機関・
方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝
致します。(敬称略)
久喜市教育委員会 東部地区文化財担当者会
池尻 篤

凡 例

1 遺跡全体におけるX・Y座標の値は、世界測地系による国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯 $36^{\circ} 00' 00''$ 、東経 $139^{\circ} 50' 00''$ ）に基づく座標値であり、Z座標の値は標高を示す。また、各挿図に示した方位はすべて座標北を示す。

G-18グリッド北西杭の座標は、以下の通りである。

X=6400.000m、Y=-21070.000m、Z=8.996m、北緯 $36^{\circ} 03' 26''$ 、東経 $139^{\circ} 35' 58''$

2 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標第IX系に基づく $10 \times 10\text{m}$ の範囲を1グリッドとし、調査区全体に方眼網を組んだ。

3 グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばA-1グリッドと呼称した。

4 本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下の通りである。

S B…掘立柱建物跡 S D…溝跡

S E…井戸跡 S I…竪穴状遺構

S J…竪穴住居跡 S K…土壙

S L…畠跡 S P…炉穴 S R…方形周溝墓

S X…性格不明遺構 Pit・P…小穴・柱穴

5 本書における挿図の縮尺は、以下の通りである。ただし、一部例外もある。

全体図 1:500 遺構図 1:60・1:30

土器実測図・拓影図等 1:3・1:4

土製品・土玉・土錘・玉類 1:1・1:3

石器・石製品 1:3・2:3

旧石器 4:5 陶磁器 1:4

出土状況図の遺物は、上記の50%縮小

6 遺構図・遺物実測図の表記方法は以下の通りである。

・■焼土 ■炭 ■粘土 ■地山

・彩色等の特徴をもつ土器は、その範囲に網を掛けた表示した。

赤彩10% 被熱・炭化・煤50%

7 遺構断面図に表記した水準数値は標高（m）で示した。

8 遺物観察表の表記方法は以下の通りである。

・器種は、土師器、須恵器と表記した。

・遺物の計測値は原則cm、g単位で示した。

・（ ）は推定値、〔 〕は残存値を示す。

・胎土は土器に含まれる特徴的な鉱物等を記号で示した。

A : 雲母 B : 片岩 C : 角閃石・輝石

D : 長石 E : 石英 F : 軽石 G : 砂粒子

H : 赤色粒子 I : 白色粒子 J : 針状物質

K : 黒色粒子 L : その他

・残存率は、図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・焼成は良好・普通・不良の3段階で示した。

・色調は『新版標準土色帖』に照らし、最も近い色相を記した。

・備考には、注記番号・諸特徴を記した。

・住居跡は北を基準に、北西から時計回りにA区～D区に区分し、遺物を一括して取り上げた。

・方形周溝墓の盛土と周溝は、北を基準に北西から時計回りに1区～8区に区分し、遺物を一括して取り上げた。

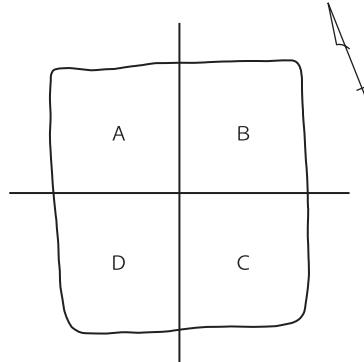
9 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図、治水地形分類図（鴻巣）、久喜市発行の1/2,500都市計画図、および産業技術総合研究所地質調査総合センター発行の20万分の1地質図幅を編集して使用した。

10 遺構番号は、原則、調査時のものを用いたが、整理作業と第1次・第2次調査成果を踏

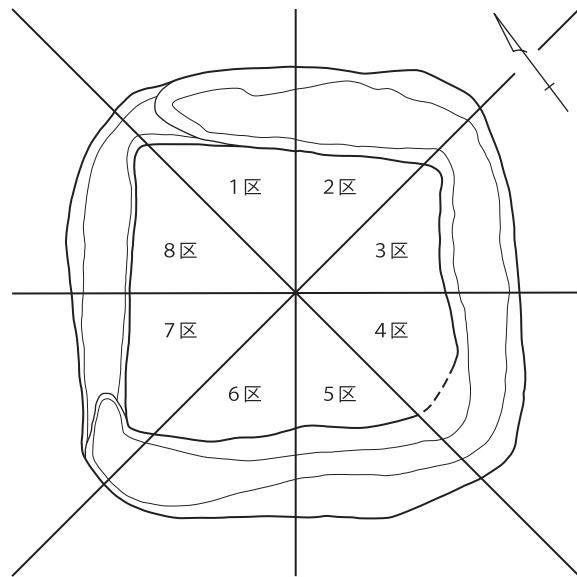
まえた変更結果は以下に示した。

11 文中の引用文献は、（著者（組織名）発行

年）の順で表記し、参考文献とともに巻末に掲載した。



住居跡の一括遺物取り上げ区分模式図



方形周溝墓の一括遺物取り上げ区分模式図

遺構名新旧対照表

調査次数	新	旧	備考
第3次	第2号竪跡	第1号竪跡	
第3次	第3号竪跡	第2号竪跡	旧SD35～SD41
第4次	第4号竪跡	第3号竪跡	旧SD24～SD28
第4次	第5号竪跡	第4号竪跡	
第3次	第3号竪穴状遺構	第1号竪穴状遺構	
第4次	第4号竪穴状遺構	第2号竪穴状遺構	
第4次	第35号炉穴	第33号炉穴	
第3次	第2号埋甕	第1号埋甕	
第3次	第3号埋甕	第2号埋甕	

目 次

(第1分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1	(5) 畠跡	405	
1	発掘調査に至る経過	1	(6) 壁穴状遺構	411	
2	発掘調査・報告書作成の経過	2	(7) 土壙	412	
	(1) 発掘調査	2	(8) ピット	421	
	(2) 整理・報告書の作成	2	(9) グリッド出土遺物	421	
3	発掘調査・報告書作成の組織	3	4	中・近世の遺構と遺物	426
II	遺跡の立地と環境	4	(1) 溝跡	426	
1	地理的環境	4	(2) 土壙	429	
2	歴史的環境	7	(3) ピット	432	
III	遺跡の概要	16	V	第4次調査区の遺構と遺物	433
1	小林八束1遺跡の概要	16	1	縄文時代の遺構と遺物	433
2	小林八束1遺跡の基本層序	33	(1) 住居跡	433	
IV	第3次調査区の遺構と遺物	36	(2) 炉穴	451	
1	旧石器時代の遺物	36	(3) 土壙	452	
2	縄文時代の遺構と遺物	38	(4) ピット	483	
	(1) 住居跡	38	(5) グリッド出土遺物	483	
	(2) 埋甕	51	2	古墳時代の遺構と遺物	501
	(3) 土壙	53	(1) 住居跡	501	
	(4) ピット	95	(2) 方形周溝墓	533	
	(5) 水場遺構出土遺物	98	(3) 井戸跡	548	
	(6) 谷遺物包含層出土遺物	106	(4) 溝跡	548	
	(7) グリッド出土遺物	133	(5) 畠跡	552	
3	古墳時代の遺構と遺物	169	(6) 壁穴状遺構	553	
	(1) 住居跡	169	(7) 土壙	556	
	(2) 方形周溝墓	292	(8) ピット	562	
(第2分冊)			(9) グリッド出土遺物	562	
	(3) 水場遺構・木組遺構	345	3	中・近世の遺構と遺物	564
	(4) 溝跡	404	(1) 掘立柱建物跡	564	

(2) 溝跡	564	5 分析のまとめ	585
(3) 土壌	564	VII 調査のまとめ	586
(4) ピット	568	1 調査の成果	586
VI 自然科学分析	571	2 古墳時代前期の土器の特徴と変遷	587
1 放射性炭素年代測定	571	3 古墳時代前期の遺構の特徴と変遷	608
2 花粉分析	575	引用・参考文献	
3 大型植物遺体分析	579	(第3分冊)	
4 樹種同定	582	写真図版	

挿図目次

(第1分冊)

第1図 埼玉県の地形	4
第2図 遺跡周辺の古地形・旧流路	6
第3図 周辺の遺跡	8
第4図 縄文時代後期・晩期の遺跡	12
第5図 古墳時代の遺跡	14
第6図 調査区位置図(1)	17
第7図 調査区位置図(2)	18
第8図 第3次・第4次調査区合成図	20
第9図 第3次調査区遺構配置図(1)	21
第10図 第3次調査区遺構配置図(2)	22
第11図 第3次調査区遺構配置図(3)	23
第12図 第3次調査区遺構配置図(4)	24
第13図 第3次調査区遺構配置図(5)	25
第14図 第3次調査区遺構配置図(6)	26
第15図 第3次調査区遺構配置図(7)	27
第16図 第3次調査区遺構配置図(8)	28
第17図 第4次調査区遺構配置図(1)	29
第18図 第4次調査区遺構配置図(2)	30
第19図 第4次調査区遺構配置図(3)	31
第20図 第4次調査区遺構配置図(4)	32
第21図 基本層序(1)	34
第22図 基本層序(2)	35
第23図 旧石器遺物出土位置図	36
第24図 調査区域内出土旧石器	37
第25図 第3次調査区の縄文時代の遺構	39
第26図 第4号住居跡	40

第27図 第31号住居跡	41
第28図 第31号住居跡遺物出土状況	44
第29図 第31号住居跡出土遺物(1)	45
第30図 第31号住居跡出土遺物(2)	46
第31図 第31号住居跡出土遺物(3)	47
第32図 第31号住居跡出土遺物(4)	48
第33図 第31号住居跡出土遺物(5)	49
第34図 第99号住居跡・出土遺物	50
第35図 第2・3号埋甕	51
第36図 第2・3号埋甕出土遺物	52
第37図 第456号土壙～第463号土壙	54
第38図 土壙出土遺物(1)	55
第39図 第460号土壙遺物出土状況	56
第40図 土壙出土遺物(2)	57
第41図 土壙出土遺物(3)	58
第42図 第464号土壙～第594号土壙	60
第43図 第467号土壙遺物出土状況	61
第44図 土壙出土遺物(4)	62
第45図 土壙出土遺物(5)	64
第46図 第596号土壙～第612号土壙	65
第47図 第613号土壙～第629号土壙	66
第48図 土壙出土遺物(6)	67
第49図 土壙出土遺物(7)	69
第50図 第630号土壙～第647号土壙	72
第51図 第648号土壙～第657号土壙	73
第52図 土壙出土遺物(8)	74

第 53 図	土壌出土遺物(9)	75
第 54 図	土壌出土遺物(10)	76
第 55 図	第658号土壌～第673号土壌	78
第 56 図	土壌出土遺物(11)	79
第 57 図	土壌出土遺物(12)	80
第 58 図	第670号土壌遺物出土状況	81
第 59 図	土壌出土遺物(13)	82
第 60 図	土壌出土遺物(14)	83
第 61 図	第673号土壌遺物出土状況	85
第 62 図	土壌出土遺物(15)	86
第 63 図	第675号土壌～第686号土壌	88
第 64 図	土壌出土遺物(16)	89
第 65 図	第682号土壌遺物出土状況	90
第 66 図	土壌出土遺物(17)	91
第 67 図	第3次調査区の縄文時代のピット(1)	94
第 68 図	第3次調査区の縄文時代のピット(2)	95
第 69 図	ピット出土遺物	95
第 70 図	第3次調査区の縄文時代のピット(3)	96
第 71 図	水場遺構の検出状況	98
第 72 図	水場遺構出土遺物(1)	100
第 73 図	水場遺構出土遺物(2)	101
第 74 図	水場遺構出土遺物(3)	102
第 75 図	水場遺構出土遺物(4)	103
第 76 図	水場遺構出土石器(1)	104
第 77 図	水場遺構出土石器(2)	105
第 78 図	谷部	107
第 79 図	谷遺物包含層出土遺物(1)	109
第 80 図	谷遺物包含層出土遺物(2)	110
第 81 図	谷遺物包含層出土遺物(3)	111
第 82 図	谷遺物包含層出土遺物(4)	112
第 83 図	谷遺物包含層出土遺物(5)	113
第 84 図	谷遺物包含層出土遺物(6)	115
第 85 図	谷遺物包含層出土遺物(7)	116
第 86 図	谷遺物包含層出土遺物(8)	117
第 87 図	谷遺物包含層出土遺物(9)	118
第 88 図	谷遺物包含層出土遺物(10)	119
第 89 図	谷遺物包含層出土遺物(11)	120
第 90 図	谷遺物包含層出土遺物(12)	121
第 91 図	谷遺物包含層出土遺物(13)	122
第 92 図	谷遺物包含層出土遺物(14)	123
第 93 図	谷遺物包含層出土遺物(15)	124
第 94 図	谷遺物包含層出土土製品	126
第 95 図	谷遺物包含層出土石器(1)	127
第 96 図	谷遺物包含層出土石器(2)	128
第 97 図	谷遺物包含層出土石器(3)	129
第 98 図	谷遺物包含層出土石器(4)	130
第 99 図	谷遺物包含層出土石製品	131
第100図	グリッド出土遺物(1)	134
第101図	グリッド出土遺物(2)	135
第102図	グリッド出土遺物(3)	136
第103図	グリッド出土遺物(4)	139
第104図	グリッド出土遺物(5)	140
第105図	グリッド出土遺物(6)	141
第106図	グリッド出土遺物(7)	142
第107図	グリッド出土遺物(8)	143
第108図	グリッド出土遺物(9)	144
第109図	グリッド出土遺物(10)	145
第110図	グリッド出土遺物(11)	146
第111図	グリッド出土遺物(12)	147
第112図	グリッド出土遺物(13)	148
第113図	グリッド出土土偶(1)	150
第114図	グリッド出土土偶(2)	151
第115図	グリッド出土土製耳飾り	152
第116図	グリッド出土土製品	153
第117図	グリッド出土石器(1)	155
第118図	グリッド出土石器(2)	156
第119図	グリッド出土石器(3)	157
第120図	グリッド出土石器(4)	158
第121図	グリッド出土石器(5)	159
第122図	グリッド出土石器(6)	160
第123図	グリッド出土石器(7)	161
第124図	グリッド出土石器(8)	162
第125図	グリッド出土石器(9)	163
第126図	グリッド出土石製品	164

第127図	第3次調査区の古墳時代の住居跡	170	第164図	第53・55～57号住居跡全体図	216
第128図	第3号住居跡	172	第165図	第53号住居跡(1)	217
第129図	第5号住居跡	173	第166図	第53号住居跡(2)	218
第130図	第6号住居跡	173	第167図	第53号住居跡(3)	219
第131図	第6号住居跡出土遺物	174	第168図	第53号住居跡遺物出土状況	220
第132図	第30号住居跡(1)	175	第169図	第53号住居跡出土遺物(1)	222
第133図	第30号住居跡(2)	176	第170図	第53号住居跡出土遺物(2)	223
第134図	第82号住居跡(1)	177	第171図	第55号住居跡	225
第135図	第82号住居跡(2)	178	第172図	第55号住居跡出土遺物	226
第136図	第82号住居跡出土遺物	179	第173図	第56号住居跡	227
第137図	第40・42・43号住居跡全体図	181	第174図	第56号住居跡遺物出土状況	228
第138図	第40号住居跡(1)	182	第175図	第56号住居跡出土遺物	228
第139図	第40号住居跡(2)	183	第176図	第57号住居跡(1)	229
第140図	第40号住居跡遺物出土状況	184	第177図	第57号住居跡(2)	230
第141図	第40号住居跡出土遺物(1)	186	第178図	第57号住居跡出土遺物	231
第142図	第40号住居跡出土遺物(2)	187	第179図	第54号住居跡	232
第143図	第40号住居跡出土遺物(3)	188	第180図	第58号住居跡	233
第144図	第42号住居跡(1)	189	第181図	第58号住居跡出土遺物	234
第145図	第42号住居跡(2)	190	第182図	第59号住居跡	235
第146図	第42号住居跡出土遺物	191	第183図	第59号住居跡出土遺物	236
第147図	第43号住居跡(1)	194	第184図	第60号住居跡(1)	237
第148図	第43号住居跡(2)	195	第185図	第60号住居跡(2)	238
第149図	第43号住居跡出土遺物(1)	196	第186図	第60号住居跡出土遺物	239
第150図	第43号住居跡出土遺物(2)	197	第187図	第65号住居跡	240
第151図	第41・52号住居跡(1)	199	第188図	第65号住居跡遺物出土状況	241
第152図	第41号住居跡出土遺物	200	第189図	第65号住居跡出土遺物	242
第153図	第52号住居跡出土遺物	201	第190図	第67号住居跡	243
第154図	第44号住居跡	203	第191図	第67号住居跡遺物出土状況	244
第155図	第44号住居跡遺物出土状況	204	第192図	第67号住居跡出土遺物	245
第156図	第44号住居跡出土遺物(1)	205	第193図	第72号住居跡	246
第157図	第44号住居跡出土遺物(2)	206	第194図	第72号住居跡出土遺物	247
第158図	第45号住居跡	209	第195図	第73・74・80号住居跡全体図	248
第159図	第45号住居跡出土遺物	210	第196図	第73号住居跡(1)	249
第160図	第46・51号住居跡	212	第197図	第73号住居跡(2)	250
第161図	第46・51号住居跡遺物出土状況	213	第198図	第73号住居跡遺物出土状況	251
第162図	第46号住居跡出土遺物	214	第199図	第73号住居跡出土遺物(1)	252
第163図	第51号住居跡出土遺物	215	第200図	第73号住居跡出土遺物(2)	253

第201図	第74号住居跡	255	第238図	第3号方形周溝墓(1)	295
第202図	第80号住居跡	256	第239図	第3号方形周溝墓(2)	296
第203図	第80号住居跡出土遺物	257	第240図	第3号方形周溝墓(3)	297
第204図	第75号住居跡	257	第241図	第3号方形周溝墓遺物出土状況(1)	298
第205図	第76-A・B号住居跡	259	第242図	第3号方形周溝墓遺物出土状況(2)	299
第206図	第76-A号住居跡	260	第243図	第3号方形周溝墓遺物出土状況(3)	300
第207図	第76-A号住居跡出土遺物	261	第244図	第3号方形周溝墓出土遺物(1)	301
第208図	第77号住居跡	262	第245図	第3号方形周溝墓出土遺物(2)	302
第209図	第77号住居跡出土遺物	262	第246図	第3号方形周溝墓出土遺物(3)	303
第210図	第78号住居跡	263	第247図	第4号方形周溝墓(1)	306
第211図	第78号住居跡出土遺物	264	第248図	第4号方形周溝墓(2)	307
第212図	第81号住居跡	265	第249図	第4号方形周溝墓(3)	308
第213図	第81号住居跡出土遺物	265	第250図	第4号方形周溝墓主体部	309
第214図	第83号住居跡	266	第251図	第4号方形周溝墓遺物出土状況(1)	310
第215図	第83号住居跡出土遺物	266	第252図	第4号方形周溝墓遺物出土状況(2)	311
第216図	第84号住居跡	268	第253図	第4号方形周溝墓出土遺物(1)	312
第217図	第84号住居跡遺物出土状況	269	第254図	第4号方形周溝墓出土遺物(2)	313
第218図	第84号住居跡出土遺物	270	第255図	第5号方形周溝墓(1)	315
第219図	第89号住居跡	271	第256図	第5号方形周溝墓(2)	316
第220図	第89号住居跡出土遺物	272	第257図	第5号方形周溝墓(3)	317
第221図	第90号住居跡	274	第258図	第5号方形周溝墓遺物出土状況(1)	318
第222図	第90号住居跡遺物出土状況	275	第259図	第5号方形周溝墓遺物出土状況(2)	319
第223図	第90号住居跡出土遺物	276	第260図	第5号方形周溝墓出土遺物(1)	321
第224図	第91号住居跡	277	第261図	第5号方形周溝墓出土遺物(2)	322
第225図	第91号住居跡遺物出土状況	278	第262図	第5号方形周溝墓出土遺物(3)	323
第226図	第91号住居跡出土遺物	279	第263図	第6号方形周溝墓(1)	325
第227図	第96号住居跡	281	第264図	第6号方形周溝墓(2)	326
第228図	第92号住居跡	282	第265図	第6号方形周溝墓(3)	327
第229図	第92号住居跡出土遺物	283	第266図	第6号方形周溝墓主体部	328
第230図	第93号住居跡	285	第267図	第6号方形周溝墓硬化面	329
第231図	第93号住居跡出土遺物	286	第268図	第6号方形周溝墓出土遺物(1)	330
第232図	第94号住居跡	287	第269図	第6号方形周溝墓出土遺物(2)	331
第233図	第95号住居跡	288	第270図	第7号方形周溝墓(1)	335
第234図	第95号住居跡出土遺物	289	第271図	第7号方形周溝墓(2)	336
第235図	第98号住居跡	290	第272図	第7号方形周溝墓(3)	337
第236図	第98号住居跡出土遺物	291	第273図	第7号方形周溝墓埋設土器出土状況	338
第237図	第3次調査区の古墳時代の方形周溝墓	293	第274図	第7号方形周溝墓出土遺物	339

- 第275図 第8号方形周溝墓 341
 第276図 第8号方形周溝墓遺物出土状況 342

- 第277図 第8号方形周溝墓出土遺物 343

表目次

(第1分冊)

第 1 表	周辺の遺跡一覧	9	第 29 表	第58号住居跡出土遺物観察表	234
第 2 表	調査区域内出土旧石器観察表	38	第 30 表	第59号住居跡出土遺物観察表	236
第 3 表	第4号住居跡ピット計測表	40	第 31 表	第60号住居跡出土遺物観察表	239
第 4 表	第31号住居跡ピット計測表	42	第 32 表	第65号住居跡出土遺物観察表	242
第 5 表	第99号住居跡ピット計測表	50	第 33 表	第67号住居跡出土遺物観察表	245
第 6 表	縄文時代の住居跡計測表	50	第 34 表	第72号住居跡出土遺物観察表	247
第 7 表	埋甕計測表	51	第 35 表	第73号住居跡出土遺物観察表	253
第 8 表	第462号土壙出土木製品観察表	54	第 36 表	第80号住居跡出土遺物観察表	257
第 9 表	第3次調査区の縄文時代の土壙計測表	92	第 37 表	第76-A号住居跡出土遺物観察表	261
第 10 表	第3次調査区の縄文時代のピット計測表	97	第 38 表	第77号住居跡出土遺物観察表	262
第 11 表	土偶・耳飾り・土製品観察表	152	第 39 表	第78号住居跡出土遺物観察表	264
第 12 表	石器・石製品観察表	166	第 40 表	第81号住居跡出土遺物観察表	265
第 13 表	第3次調査区古墳時代住居跡計測表	171	第 41 表	第83号住居跡出土遺物観察表	266
第 14 表	第6号住居跡出土遺物観察表	174	第 42 表	第84号住居跡出土遺物観察表	270
第 15 表	第82号住居跡出土遺物観察表	180	第 43 表	第89号住居跡出土遺物観察表	272
第 16 表	第40号住居跡出土遺物観察表	188	第 44 表	第90号住居跡出土遺物観察表	276
第 17 表	第42号住居跡出土遺物観察表	192	第 45 表	第91号住居跡出土遺物観察表	280
第 18 表	第43号住居跡出土遺物観察表	197	第 46 表	第92号住居跡出土遺物観察表	283
第 19 表	第41号住居跡出土遺物観察表	200	第 47 表	第93号住居跡出土遺物観察表	286
第 20 表	第52号住居跡出土遺物観察表	201	第 48 表	第95号住居跡出土遺物観察表	289
第 21 表	第44号住居跡出土遺物観察表	206	第 49 表	第98号住居跡出土遺物観察表	291
第 22 表	第45号住居跡出土遺物観察表	210	第 50 表	第3次調査区方形周溝墓計測表	294
第 23 表	第46号住居跡出土遺物観察表	214	第 51 表	第3号方形周溝墓出土遺物観察表	303
第 24 表	第51号住居跡出土遺物観察表	215	第 52 表	第4号方形周溝墓出土遺物観察表	313
第 25 表	第53号住居跡出土遺物観察表	224	第 53 表	第5号方形周溝墓出土遺物観察表	323
第 26 表	第55号住居跡出土遺物観察表	226	第 54 表	第6号方形周溝墓出土遺物観察表	331
第 27 表	第56号住居跡出土遺物観察表	228	第 55 表	第7号方形周溝墓出土遺物観察表	340
第 28 表	第57号住居跡出土遺物観察表	231	第 56 表	第8号方形周溝墓出土遺物観察表	344

写真図版目次

(第1分冊)

卷頭図版 1 1 第1号方形周溝墓出土土器

2 第40号住居跡出土土器

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経過

埼玉県では、新たに平成 29 年度からの 5 年間の県政運営の基本となる『埼玉県 5か年計画—希望・活躍・うるおいの埼玉—』を策定し、各分野での施策に取り組んでいる。このうち生活の安心を高める分野では、「危機や災害に備える」という基本目標を掲げ、台風や集中豪雨などにより引き起こされる浸水被害や土砂災害から、県民の生命や財産を守るために、治水・治山対策や土砂災害防止対策を進めている。こうした中で、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

総合治水対策特定河川事業元荒川（小林調節池建設事業）における埋蔵文化財の所在およびその取扱いは、平成 14 年 11 月 20 日に実施した「平成 15 年度公共事業と埋蔵文化財の調整会議」において、河川砂防課から工事箇所や工事計画の説明があった。文化財保護課（当時）では、周辺に埋蔵文化財包蔵地が所在しないこと、現在の地形から低湿地と想定されること、菖蒲町教育委員会（当時）の意見等を踏まえて、工事に着手して差し支えない旨、口頭で回答し、平成 14・15 年度に北側の調節池「池Ⅱ」の一時掘削が施行された。

一時掘削終了後の平成 16 年 4 月 8 日、菖蒲町教育委員会から調節池法面において、多量の土器が発見されたとの報があり、翌 9 日、当課職員が現地を確認したところ、縄文土器片が多数確認され、さらには遺構断面が法面に露出しており、周辺は埋没ローム台地であることが判明した。

4 月 12 日に河川砂防課に状況説明を行い、今後の工事計画や取扱いについて協議し、未掘削部分の確認調査を実施することが了承された。

なお 4 月 22 日に菖蒲町教育委員会から当該箇所の「新規遺跡の発見届」が提出され、県教育委

員会は同日付で受理し「池Ⅱ」周辺を「小林八束 1 遺跡」として埋蔵文化財包蔵地に登載した。

平成 16 年 4 月 22 日付け河砂第 70 号で、河川砂防課長より文化財保護課長あて「小林調節池改修事業地内における埋蔵文化財の所在および取扱いについて」の照会があった。小林八束 1 遺跡範囲内「池Ⅰ」の未掘削範囲は、出水期明けの 11 月 10 日～12 日の 3 日間で確認調査を実施した結果、遺構・遺物が濃密に分布することが判明し、平成 16 年 11 月 17 日付け教文第 1220 号で、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査が必要な旨、回答した。

その後、関係機関で協議を重ね、発掘調査は公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（以下「事業団」）が実施機関としてあたることになった。

小林八束 1 遺跡の発掘調査のうち、本報告にかかる第 3 次調査、第 4 次調査は平成 24・25 年度に発掘調査が実施された。

なお、文化財保護法第 94 条の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から平成 18 年 10 月 20 日付け河砂第 495 号で提出され、記録保存のための発掘調査を実施する必要がある旨の指示通知は下記のとおりである。

平成 18 年 12 月 28 日付け教生文第 4-1419 号

また同法第 92 条の規定による発掘調査届が公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、それに対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は下記のとおりである。

第 3 次調査 平成 25 年 2 月 15 日 教生文第 2-58 号

第 4 次調査 平成 25 年 5 月 15 日 教生文第 2-3 号

（埼玉県教育局市町村支援部文化資源課）

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

小林八束1遺跡の第3次・第4次発掘調査は、総合交付金（河川）工事（小林調節池・事業地内埋蔵文化財発掘調査業務委託その1・その2）に先立ち実施した。調査面積は合計9,460m²（第3次5,140m²、第4次4,320m²）である。

第3次調査は、平成24年11月1日から平成25年3月29日（平成24年度）、平成25年4月1日から平成26年3月31日（平成25年度）の二箇年にわたり実施した。

平成24年11月20日に発掘調査届等の事務手続きを行った。11月に事務所を設置後、重機による表土掘削を行った。表土掘削後、基準点測量を実施し、人力による遺構確認と精査を開始した。

遺構確認作業の結果、縄文時代の住居跡と古墳時代の方形周溝墓や住居跡のほか、谷部へ下る斜面から木組遺構などが検出された。確認された遺構は順次掘削・精査に着手し、順次、土層断面図・平面図の作成、写真撮影を行った。7月10日と12月12日に空中写真撮影、10月8日と12月9日に高所作業車による写真撮影、11月29日に自然科学分析を実施した。

3月下旬に調査区の埋め戻し作業を進め、3月5日に発見届と保管証を提出し、調査を終了した。事務所等の施設は第3次調査終了後、3月下旬に撤収した。

第4次調査は、平成25年4月1日から平成25年11月28日まで実施した。

平成25年4月1日に発掘調査届等の事務手続きを行った。4月から5月上旬にかけて重機による表土掘削を行った。表土掘削後、基準点測量を実施し、人力による遺構確認と精査を開始した。

遺構確認作業の結果、縄文時代の住居跡と古墳時代の方形周溝墓や住居跡などが検出された。確認された遺構は順次掘削・精査に着手し、順次、土層断面図・平面図の作成、写真撮影を行った。

11月21日に空中写真撮影を実施した。

12月4日に発見届と保管証を提出し、12月から1月にかけて調査区の埋め戻し作業を進め、調査を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書作成事業は、平成30年4月1日から令和元年9月30日まで2箇年にわたり実施した。

4月から出土遺物の水洗・注記・接合・復元作業を行った。復元を終えた遺物は、平成31年3月まで実測、トレース、採拓を行った。実測には磁気式3次元位置計測装置、正射投影画像撮影機などを活用した。仕上がったトレース図と拓本は、スキャナでパソコンに取り込み、印刷用の版下を作成した。2月と7月には図版用の遺物写真を撮影し、発掘調査で撮影された遺構写真と合わせて、写真図版用の版下データを作成した。

発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等は、照合・修正を加えた第二原図を作成した。これをスキャナでパソコンに取り込み、画像編集ソフトを用いてトレースした。これに土層説明等を組み込み、印刷用の版下データを作成した。

自然科学分析は、平成30年10月に第3次調査で出土した木製品の樹種同定を委託した。

報告書の巻頭写真は、平成30年11月に古墳時代の方形周溝墓や住居跡から出土した土器類を対象に撮影を委託した。

10月から各版下データをもとに、原稿の執筆と報告書の割付・編集を行った。その後、原稿を印刷業者に入稿した。3回の校正を経て、令和元年11月22日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第457集『小林八束1遺跡III』を刊行した。

遺物および図面類・写真類・データ類等の諸資料は、9月に整理分類の上、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3 発掘調査・報告書作成の組織

平成 24 年度（発掘調査）

理 事 長	中 村 英 樹	調査部	
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳 一 郎	調 査 部 長	昼 間 孝 志
総務部		調 査 部 副 部 長	剣 持 和 夫
総務部副部長	富 田 和 夫	調査監兼調査第一課長	瀧 瀬 芳 之
総務課長	矢 島 将 和	主 査	西 井 幸 雄
		主 査	岩 瀬 讓

平成 25 年度（発掘調査）

理 事 長	中 村 英 樹	調査監兼調査第二課長	赤 熊 浩 一
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳 一 郎	主 査	西 井 幸 雄
総務部		主 査	上 野 真 由 美
総務部副部長	富 田 和 夫	主 任	古 谷 渉
総務課長	藤 倉 英 明	事 事	小 出 輝 雄
調査部		事 事	砂 生 智 江
調査部長	昼 間 孝 志	主 事	滝 泽 誠
調査部副部長	剣 持 和 夫		

平成 30 年度（報告書作成）

理 事 長	藤 田 栄 二	調査部	
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久	調 査 部 長	瀧 瀬 芳 之
総務部		調 査 部 副 部 長	吉 田 稔
総務部副部長	田 中 広 明	調査部副部長兼整理第二課長	山 本 靖
総務課長	新 井 了 悟	主幹兼整理第一課長	福 田 聖
		主 任	青 木 弘
		主 事	砂 生 智 江

平成 31 年度（報告書作成）

理 事 長	藤 田 栄 二	調査部	
常務理事兼総務部長	高 津 導	調 査 部 長	黒 坂 稔 二
総務部		調査部副部長兼整理第一課長	上 野 真 由 美
総務部副部長	山 本 靖	主 任	青 木 弘
総務課長	新 井 了 悟		

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

小林八束1遺跡は、埼玉県の東部、久喜市菖蒲町小林字八束に所在する。遺跡はJR高崎線桶川駅から北東へ約7km、JR宇都宮線久喜駅から西方へ約7kmに位置している。

第1図に埼玉県の地形と小林八束1遺跡の位置を示した。埼玉県は西高東低の地形で、これにより大きく三つの地域に分けられる。すなわち、関東山地と秩父盆地からなる県西部地域（秩父）、それに連なる丘陵と台地からなる県中部地域（比企・入間）、荒川と中川の低地帯と、それに挟まれた大宮台地からなる県東部地域である。

埼玉県の北東部に位置する旧菖蒲町は、2010年に久喜市、鷺宮町、栗橋町との新設合併により、新たに久喜市として新たな歩みを始めた。

久喜市は埼玉県の東部に位置し、北は加須市、南は蓮田市・白岡市・宮代町・杉戸町・幸手市、

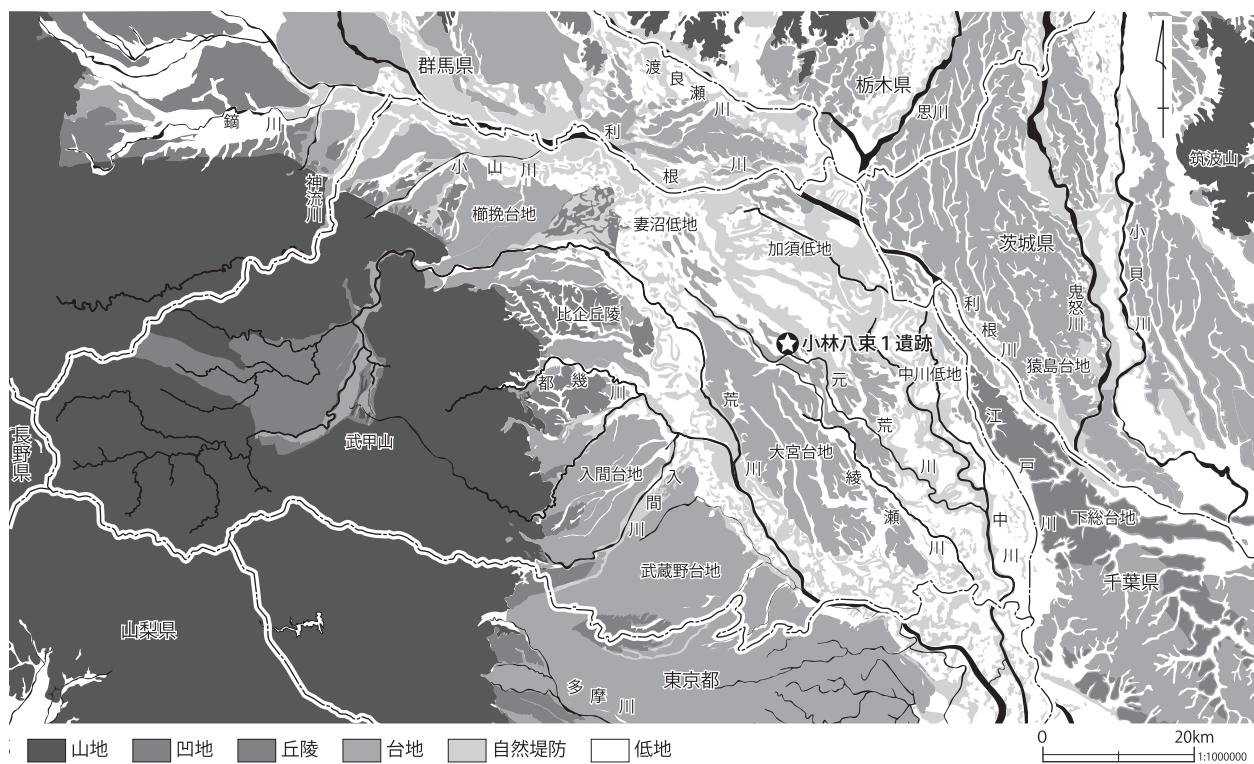
東は利根川を境に茨城県古河市・五霞町、西は鴻巣市・桶川市に接している。市域は東西約 15.6 km、南北約 13.2 km（面積 82.41 km²）、人口は 153,290 人（令和元年9月1日）である。

気候は内陸性の太平洋側気候に属し、夏は高温多湿、冬は低温乾燥である。

遺跡の所在する菖蒲町は埼玉県の中東部に所在し、商業中心の市街地と南東部の工業団地からなる。南西境を元荒川が、中央部を見沼代用水が流れ、星川、野通川などの河川によって、肥沃な水田地帯が形成されている。また、台地部は梨の中的産地としても知られている。

周辺の地形は、大宮台地と加須低地からなり、大宮台地が北方の加須低地に移行する部分にあたり、遺跡の乗る台地部の標高は11m前後である。

大宮台地は旧浦和市（現さいたま市）から鴻巣



第1図 埼玉県の地形

市まで続く、長さ 30 km、幅 8 ~ 10 km の台地である。かつては群馬県館林辺りまで続く台地であったが、関東造盆地運動による地盤沈降や、河川の浸食、堆積作用により、寸断された島状の台地となっている。また、加須低地と接する辺りでは、低地部との比高差が少ない平坦な地形を形成している。遺跡の北側に広がる加須低地は、利根川沿いに発達した沖積低地である。台地が沈降するとともに、河川堆積物が堆積することにより形成された低地であり、沖積層下に埋没した台地が検出されることもある。

近世以前の周辺地形と古環境

遺跡周辺の河川は現在、北から東側に星川と見沼代用水、西側に附廻堀悪水路・沼落悪水路、南西側に野通川、さらに南に元荒川が南流している。これらのうち、見沼代用水と附廻堀悪水路・沼落悪水路、野通川は、江戸時代享保年間（1716 年～1736 年）に開削された用悪水路である。なお、いずれの河川も、現在の流路は昭和時代初期に改修されたものである。

以上より江戸時代以前には、遺跡の北側には星川、南側には元荒川が南流しており、両河川に挟まれる形で数多の沼沢地が存在していた。

沼沢地に目を転じると、遺跡が所在する菖蒲地区の低地部には、現在、大半が開発により水田となっているが、かつては小林沼、栢間沼、皿沼などが存在した。中でも小林八束 1 遺跡の西方に位置する小林沼は、かつては現在よりも広範囲（長さ約 3.5 km、幅約 0.6 km）に広がる自然沼だった。

元禄 5（1702）年の「堤土置争論裁許状（白岡市田口家文書）」の絵図には、小林沼等の沼と元荒川・野通川・星川等の河川、および周辺の道が描かれている（東部地区文化財担当者会 2013）。ここから小林沼は東西に広くなり、星川や野通川から支川や水路が流入している状況がわかる。

以上より、元禄 5 年以前の小林八束 1 遺跡は、この小林沼と星川から流れる支川（水路）に挟ま

れた台地上に立地していた。これを裏付けるように、第 3 次調査区内では、台地から谷へと下る斜面地から、古墳時代前期の木製品や木組遺構が検出された。この斜面地には砂質粘土層や草本質泥炭層が堆積しており、沼沢地が存在したことがうかがわれる。

こうした河川流路と沼地は、後述する享保の改革に伴う新田開発と見沼代用水の開削によって、現代の景観につながる水田地帯へと大きく変化を遂げる。

遺跡周辺の古環境については、第 3 次調査（本報告）では水場遺構（木組遺構）の土層堆積物（第 298 図参照）の花粉分析と大型植物遺体分析、および出土木製品の樹種同定分析を実施した。その結果、調査区周辺の植生を知る手掛かりが得られた（第 VI 章参照）。

花粉分析の結果、6 世紀初頭とされる榛名山の噴火による噴出物である榛名山二ッ岳火山灰（Hr-FA）より前に堆積した土層中（15・17 層）から、試料採取地点の古環境を示す低湿地由來の花粉が確認された。そのほか、第 17 層からは、コナラ属コナラ亜属を代表とする落葉広葉樹が確認され、台地上などに落葉広葉樹林が広がっていたことが推定されている。加えて、スギ属やコナラ属アカガシ亜属も確認されており、低地から台地にかけてスギ林などの照葉樹林も存在していたとされる。上位の第 15 層ではコナラ属コナラ亜属が増加するとともに、大型植物遺体分析でナラ類やクヌギ類が確認されたことから、これらの落葉広葉樹林の存在を指摘している。こうした傾向は木製品の樹種同定分析結果にも認められ、木製品はコナラ属クヌギ節が多く、用材として遺跡周辺の樹木を利用したことがうかがわれる。

そのほか第 15 層では栽培植物のヒヨウタンやイネとともに、水田雑草にもなる植物（ヤタデなど）が確認され、当時、周辺に水田が存在していたことが推定されている。



第2図 遺跡周辺の古地形・旧流路

2 歴史的環境

旧石器時代

小林八東1遺跡では、旧石器時代の遺物は本調査で初めて検出された。ただし、旧菖蒲町をはじめ、旧川里町（現鴻巣市）、旧騎西町（現加須市）など、元荒川や綾瀬川に面した大宮台地でも加須低地に接する辺りでは、旧石器時代の遺跡はあまりみつかっていない。土地の沈降や河川による台地の浸食、沖積層の堆積など、様々な要因が作用していると思われる。

綾瀬川や元荒川流域でも、伊奈町・蓮田市以南では、旧石器時代の遺跡が発見されている。綾瀬川流域の伊奈町では、戸崎前遺跡（150）、原・谷畠遺跡（153）、北遺跡（155）、大山遺跡（163）、上尾市では宿前Ⅲ遺跡（114）、二十一番耕地I遺跡（117）、諏訪坂貝塚（120）がある。戸崎前遺跡では2箇所、北遺跡では3箇所、大山遺跡でも3箇所の石器集中が検出され、武藏野IV層下部に相当するナイフ形石器や角錐状石器が出土した。原・谷畠遺跡では、細石刃や石核が出土している。諏訪坂貝塚、宿前Ⅲ遺跡、二十一番耕地I遺跡は、綾瀬川支流の原市沼川右岸に所在し、宿前Ⅲ遺跡や二十一番耕地I遺跡ではナイフ形石器が、諏訪坂貝塚では細石刃が出土した。

荒川流域では、鴻巣市中三谷遺跡（53）、北本市提灯木山遺跡（65）、蓮田市宿下貝塚（169）、同市天神前遺跡（173）、同市ささら遺跡（175）、同市久台遺跡（176）が旧石器時代の遺跡である。提灯木山遺跡では、3面の文化層があり、第1面から細石刃、第2面からナイフ形石器などが出土している。元荒川右岸側では中心的な遺跡であろう。宿下貝塚では、1箇所の石器集中が検出された。中三谷遺跡や天神前遺跡、久台遺跡ではナイフ形石器が、ささら遺跡では石槍が出土している。

荒川左岸では、上尾市殿山遺跡・古墳（139）は国府形を含むナイフ形石器が出土したことで注目された。

この他、桶川市大沼遺跡（86）、同市大平遺跡（87）、上尾市柏座遺跡（132）、同市石神遺跡（137）などが挙げられる。大沼遺跡では3箇所の石器集中が検出された。柏座遺跡や石神遺跡ではナイフ形石器が出土している。

加須低地の埋没台地上では、加須市（旧騎西町）前遺跡（41）から黒曜石製の小型槍先形尖頭器が集中して出土した。久喜市九宮2遺跡（6）では、石器集中が検出され、ナイフ形石器が出土した。この他にも、加須低地には多くの遺跡が埋没しているものと考えられる。

縄文時代

縄文時代では早期後半以降に集落遺跡が増加する。早期末から前期前半期には、縄文海進に伴う内湾の拡大によって、遺跡（貝塚）が増加する。前期後半期に、海退により沿岸地域の遺跡数が減少し、さらに前期末から中期初頭前葉には遺跡数が激減する。晩期後半から弥生時代初頭にかけても遺跡数が激減し、極めて小規模の遺跡が存在するのみとなっているが、その背景は不明である。

早期初頭では、久喜市九宮1遺跡（5）において撫糸文系土器が出土している。

早期後半では、綾瀬川右岸に位置する伊奈町薬師堂根遺跡（148）は、戸崎前遺跡と近接し、条痕文系土器を出土する堅穴住居跡が検出された。両遺跡とも4軒の住居跡が検出されたが、戸崎前遺跡の1軒は大型住居跡であった。住居跡以外に炉穴も多く発見されている。元荒川左岸の白岡市中妻遺跡（204）では、条痕文系土器を伴う堅穴状遺構が検出された。この他、元荒川左岸の天神前遺跡、中妻遺跡、白岡市入耕地遺跡（208）、同市山遺跡（211）、荒川左岸の柏座遺跡、綾瀬川流域の諏訪坂貝塚などでは、炉穴が検出されている。

地図に掲載していないが、荒川左岸の上尾市薬師耕地前遺跡では早期後半条痕文期の貝塚が、隣



第3図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧（第3回）

No.	遺跡名	所在	No.	遺跡名	所在	No.	遺跡名	所在
1	小林八束1遺跡		61	中上手II遺跡		121	觀音山遺跡	
2	小林八束2遺跡		62	堀込I遺跡		122	愛宕山遺跡	
3	神ノ木遺跡		63	堀込II遺跡		123	三番耕地遺跡	
4	神ノ木2遺跡		64	原遺跡		124	東町二丁目遺跡	
5	九宮1遺跡		65	提灯木山遺跡		125	十二番耕地III遺跡	
6	九宮2遺跡		66	南遺跡		126	榎戸遺跡	
7	丸谷下遺跡		67	下原遺跡		127	八番耕地遺跡	
8	小塚下遺跡		68	榎戸I～III遺跡		128	氷川遺跡	
9	栢山小塚遺跡		69	デーノタメ遺跡	北本市	129	後耕地遺跡	
10	天王山北遺跡		70	台原I遺跡		130	向山遺跡	
11	神明神社東遺跡		71	台原III遺跡		131	神明東遺跡	
12	地獄田遺跡		72	勝林山中遺跡		132	柏座遺跡	
13	東浦古墳		73	両大師裏遺跡		133	糲谷遺跡	
14	菖蒲城		74	勝林遺跡		134	後山遺跡	上尾市
15	物見塚古墳	久喜市	75	東谷足I遺跡		135	小谷津遺跡	
16	柏間古墳群		76	下石戸下遺跡		136	山下遺跡	
17	堀之内遺跡		77	北本宿遺跡		137	石神遺跡	
18	宮浦遺跡		78	堀之内I遺跡		138	雲雀遺跡	
19	新堀遺跡		79	後谷遺跡		139	殿山遺跡・古墳	
20	足利政氏館跡		80	新田遺跡		140	八幡遺跡	
21	道合中遺跡		81	諏訪野遺跡		141	小林遺跡	
22	道合遺跡		82	谷津貝塚		142	畔吉遺跡	
23	馬場遺跡		83	諏訪北I遺跡		143	在家遺跡	
24	光明寺遺跡		84	諏訪北II遺跡		144	箕輪II遺跡	
25	御陣山遺跡		85	諏訪南遺跡		145	中井遺跡	
26	医王院遺跡		86	大沼遺跡		146	箕輪I遺跡	
27	江川東遺跡		87	大平遺跡		147	宿北II遺跡	
28	部井遺跡		88	永久保遺跡		148	薬師堂根遺跡	
29	不動寺遺跡		89	前領家遺跡		149	向原遺跡	
30	三宝寺遺跡		90	東台遺跡		150	戸崎前遺跡	
31	真名板高山古墳	行田市	91	三ツ木城跡		151	相野谷遺跡	
32	葛瀬氏館跡		92	愛宕西遺跡		152	八幡谷遺跡	
33	町屋本村遺跡	羽生市	93	高井東遺跡	桶川市	153	原・谷畠遺跡	
34	種垂城・小沼耕地遺跡		94	愛宕遺跡		154	大針貝塚	
35	上種足三番遺跡		95	高井北遺跡		155	北遺跡	伊奈町
36	下崎仲郷遺跡		96	高井遺跡		156	小貝戸貝塚	
37	戸崎城		97	高井泥炭層遺跡		157	氷川神社裏遺跡	
38	修理山遺跡		98	高井南遺跡		158	久保山遺跡	
39	萩原遺跡		99	滝の宮坂遺跡		159	志久遺跡	
40	私市城		100	狐塚遺跡		160	丸山遺跡	
41	前遺跡	加須市	101	小在家遺跡		161	小室天神前遺跡	
42	町並遺跡		102	薬師堂遺跡		162	伊奈氏屋敷跡・赤羽遺跡	
43	道上遺跡		103	楽上遺跡		163	大山遺跡	
44	鐘撞山遺跡（油井城）		104	砂ヶ谷戸II遺跡		164	雅楽谷遺跡	
45	花崎遺跡		105	砂ヶ谷戸I遺跡		165	亀の子山遺跡	
46	下谷遺跡		106	楽中遺跡		166	御林遺跡	
47	鶴ヶ塚古墳		107	熊野神社古墳		167	宿上遺跡	
48	水深遺跡		108	谷津下I遺跡		168	宿浦遺跡	
49	赤城遺跡		109	平塚氷川遺跡		169	宿下貝塚	
50	笠原古墳群		110	南前遺跡		170	江ヶ崎貝塚	
51	戸崎遺跡		111	前通遺跡		171	黒浜新井遺跡	
52	丸池遺跡		112	中妻三丁目遺跡		172	寺前平方遺跡	蓮田市
53	中三谷遺跡		113	尾山台遺跡		173	天神前遺跡	
54	生出塚遺跡		114	宿前III遺跡	上尾市	174	帆立山遺跡	
55	天神遺跡		115	秩父山遺跡		175	さら遺跡	
56	雑木林遺跡		116	二十一番耕地II遺跡		176	久台遺跡	
57	上手遺跡		117	二十一番耕地I遺跡		177	堂山公園遺跡	
58	谷足I遺跡	北本市	118	十五番耕地遺跡		178	黒浜（炭釜屋敷）貝塚	
59	谷足II遺跡		119	十四番耕地遺跡		179	椿山遺跡	
60	中上手I遺跡		120	諏訪坂貝塚		180	荒川附遺跡	

No.	遺跡名	所在	No.	遺跡名	所在	No.	遺跡名	所在
181	坂堂貝塚		211	山遺跡		241	金重西遺跡	
182	閑山貝塚		212	タカラ山遺跡		242	本宿西遺跡	
183	城西谷遺跡		213	川端遺跡		243	本宿東遺跡	
184	閑戸前田遺跡		214	下小笠原遺跡	白岡市	244	本宿東西遺跡	
185	閑戸吹上遺跡		215	清左衛門遺跡		245	平林寺前原遺跡	
186	閑戸足利遺跡		216	赤砂利・宿赤砂利		246	西原三遺跡	
187	綾瀬貝塚		217	前田遺跡		247	箕輪東遺跡	さいたま市岩槻区
188	上閑戸貝塚	蓮田市	218	鹿室上宿北遺跡		248	箕輪遺跡	
189	根金大山遺跡		219	鹿室上宿遺跡		249	西原遺跡	
190	的場遺跡		220	鹿室新切遺跡		250	西原南遺跡	
191	井沼遺跡・館跡		221	鹿室本宿遺跡		251	加倉貝塚	
192	榎戸遺跡		222	鹿室中宿遺跡		252	加倉遺跡	
193	八番溜遺跡		223	鹿室薄倉遺跡		253	加倉洞雲寺境内遺跡	
194	宮ノ前遺跡		224	古ヶ場貝塚		254	東北原遺跡	
195	黒浜拾九町遺跡		225	羽鳥山貝塚		255	丸ヶ崎遺跡	
196	鳴岡遺跡		226	古ヶ場二丁目遺跡		256	稻荷原遺跡	さいたま市見沼区
197	上荒井ヶ崎西遺跡		227	上野遺跡		257	貝崎貝塚	
198	柏崎遺跡		228	上野八番遺跡		258	深作氷川神社裏遺跡	
199	上荒井ヶ崎遺跡		229	裏慈恩寺新房遺跡		259	宮ヶ谷塔貝塚群	
200	皿沼遺跡		230	裏慈恩寺寺原遺跡		260	高山台遺跡	
201	下荒井ヶ崎遺跡		231	上野貝塚		261	B-37号遺跡	
202	天神山東遺跡		232	表慈恩寺北遺跡		262	B-44号遺跡	
203	天神山遺跡	白岡市	233	上野二丁目遺跡		263	山王遺跡	さいたま市北区
204	中妻遺跡		234	馬込三番遺跡		264	奈良瀬戸遺跡	
205	神山遺跡		235	馬込遺跡		265	B-43号遺跡	
206	白岡東遺跡		236	平林寺遺跡		266	B-45号遺跡	
207	正福院貝塚		237	平林寺西東遺跡		267	水川遺跡	
208	入耕地遺跡		238	平林寺境内遺跡				
209	茶屋遺跡		239	掛貝塚				
210	新屋敷遺跡		240	金重東遺跡				

接する平方貝塚では早期末の貝塚が発見されており、元荒川・綾瀬川流域よりも早い時期に貝塚が形成されている。貝塚を伴う集落遺跡は、前期初頭の花積下層式から前期中葉関山式を経て、前期中葉黒浜式期が最も多く、前期後葉諸磯a式期になるとその数が減り、c式以降はみられなくなる。

前期になると、元荒川・綾瀬川・荒川流域では、関山式から黒浜式期にかけての貝塚を伴う集落遺跡が数多く形成されている。元荒川流域では蓮田市黒浜（炭釜屋敷）貝塚（178）、同市宿上遺跡（167）、宿下貝塚、天神前遺跡、白岡市正福院貝塚（207）、さいたま市古ヶ場貝塚（224）、綾瀬川流域では蓮田市閑山貝塚（182）、さいたま市貝崎貝塚（257）、伊奈町大針貝塚（154）、同町小貝戸貝塚（156）、蓮田市坂堂貝塚（181）がある。大針貝塚は綾瀬川流域最奥の貝塚である。荒川流域では、河川の堆積作用の影響か貝塚形成

が低調である。

前期後葉諸磯式期の元荒川流域では、正福院貝塚、蓮田市江ヶ崎貝塚（170）、天神前遺跡、蓮田市綾瀬貝塚（187）、さいたま市掛貝塚（239）が、綾瀬川流域では貝崎貝塚がある。なお、正福院貝塚と綾瀬貝塚は、綾瀬川水系最奥の貝塚である。

前期に続き集落形成が盛んになるのは、中期中葉勝坂式から中期後葉加曾利E式期にかけてである。荒川水系では、支流の江川に面して、北本市デーノタメ遺跡（69）、桶川市諏訪野遺跡（81）、同市高井遺跡（96）、上尾市中井遺跡（145）、綾瀬川水系では、原・谷畠遺跡、北遺跡、上尾市秩父山遺跡（115）があり、それぞれ大規模な環状集落を形成している。デーノタメ遺跡、高井遺跡、諏訪野遺跡、原・谷畠遺跡と北遺跡は、谷を隔ててそれぞれ対峙するような位置関係にあり、相

補的な関係が推定される。これら大規模な環状集落は、加曽利E III式に至ると住居跡の数が減少し、環状への志向性が薄れる傾向がみられる。周辺には小規模な遺跡が増加していくことから、環状集落の解体と分散居住の状況を示していると考えられる。加曽利E III式およびそれ以降の時期の住居が主体となる遺跡として、久喜市神ノ木2遺跡（4）では、加曽利E III式からE IV式の住居が100軒以上調査されており、この地域の中心的位置を占める集落と考えられる。そのほかは、桶川市諏訪北II遺跡（84）、同市諏訪南遺跡（85）、同市高井北遺跡（95）、上尾市前通遺跡（111）、二十一番耕地I遺跡、薬師堂根遺跡、戸崎前遺跡、蓮田市椿山遺跡（179）、山遺跡、加須市修理山遺跡（38）などの比較的小規模な集落が多い。

縄文時代中期末葉の加曽利E IV式から後期前葉堀之内2式期にかけても、この地域では小規模な遺跡が多い。遺跡の様相に大きな変化がみられるのは、後期後葉の加曽利B式期以降である。

荒川流域では、小林八束1遺跡の約3km北西には、後期末から晩期の住居跡や、祭祀の場が存在したと考えられる久喜市地獄田遺跡（12）がある。

地獄田遺跡は、埋没したローム台地の縁辺部に形成された遺跡で、谷を囲むように住居跡や竪穴状遺構が検出された。検出された住居跡は6軒で、曾谷式から晩期安行式土器が出土した。また、土偶や耳飾り、石棒、石剣などの祭祀遺物が集中している場所も検出されている。

小林八束1遺跡から約10km北西には、ミミズク形土偶の出土で著名な鴻巣市赤城遺跡（49）がある。赤城遺跡は、谷を取り巻く台地上に居住域が形成されており、谷部には土偶や石棒等の祭祀遺物が集中する地点が検出された。小林八束1遺跡や地獄田遺跡でも類似した様相が指摘されており、遺跡の性格や遺構の機能を知るうえで注目される。

小林八束1遺跡の約4km南西の綾瀬川右岸に

は、桶川市後谷遺跡（79）がある。環状盛土を伴い、後期末から晩期の住居跡が検出されたほか、谷部にかけて、いわゆる水場遺構が検出された。遺跡からは、耳飾りを装着したと考えられる土偶や、漆塗りの櫛や飾弓などが出土し、これらは国の重要文化財に指定されている。

同じ綾瀬川右岸に在り、後谷遺跡の約6.5km南東には、本上遺跡が存在する。この遺跡も径が100mを超える環状盛土の存在が想定されている。盛土の一部が調査され、住居跡とともに多量の土器や土製品などが出土した。

元荒川流域には、蓮田市雅楽谷遺跡（164）、久台遺跡、ささら遺跡、白岡市前田遺跡（217）、同市清左衛門遺跡（215）が存在している。このうち雅楽谷遺跡と久台遺跡が盛土をもつ遺跡である。雅楽谷遺跡では、長径160m、短径110mで、中央部に径が40～45mの窪地をもつ環状盛土遺構の存在が明らかになっている。また、110号土壙から出土した安行式土器が一括して埼玉県指定文化財となっている。

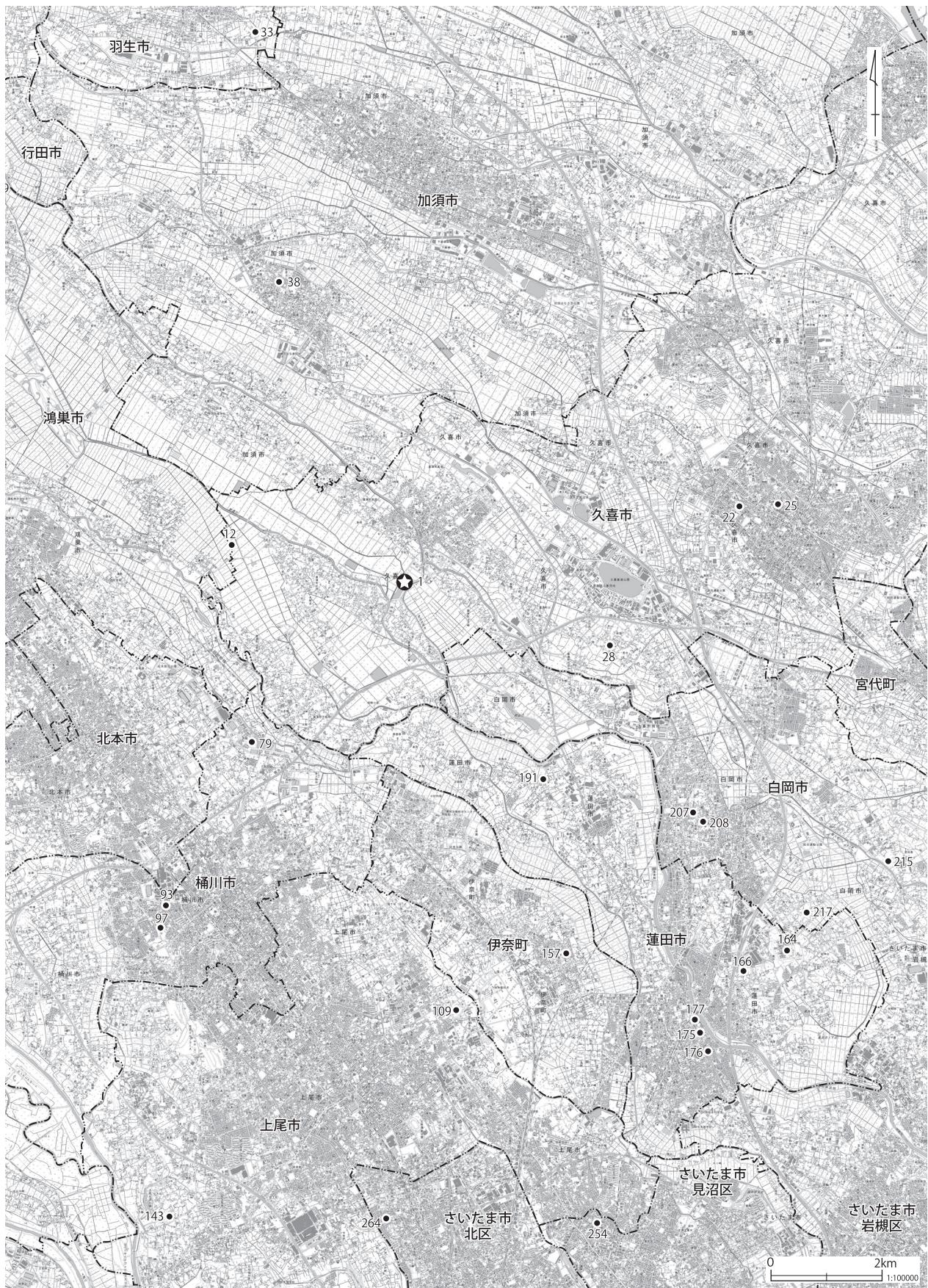
久台遺跡は安行式期の住居跡が調査された。包含層からは多量の遺物が出土しており、中でも亀形土製品が出土したことで知られている。

久台遺跡とささら遺跡は、遺構部分と包含層の関係で把握されている。そして雅楽谷遺跡と前田遺跡は、直線距離にして約1kmと至近であり、両者の関係が注目される。有機的に関連した遺跡群として評価すべきなのであろう。

荒川流域では、桶川市高井東遺跡（93）、さいたま市東北原遺跡（254）、同市奈良瀬戸遺跡（264）があり、高井東遺跡には盛土が存在したと考えられる。

弥生時代

縄文時代晩期後半以降は遺跡数が激減する。このような状況は弥生時代を通じて認められ、当地域では遺跡がほとんど確認されていない。空白の時代となっている。



第4図 繩文時代後期・晩期の遺跡

古墳時代

古墳時代に入ると、それまでの状況を払拭するよう遺跡が急増する（第5図）。

小林八束1遺跡では、これまでの調査で古墳時代前期の方形周溝墓や住居跡のほか、谷跡から農具などの木製品や木組遺構が検出された。

上流の加須市種垂城・小沼耕地遺跡（34）からも、方形周溝墓が検出されている。元荒川左岸の蓮田市荒川附遺跡（180）は、100軒を超える古墳時代の住居跡が検出されており、恐らくこの流域では最大規模の集落と考えられる。

綾瀬川水系では、薬師堂根遺跡、戸崎前遺跡、大山遺跡、上尾市尾山台遺跡（113）が古墳時代前期の集落として挙げられる。戸崎前遺跡では、40軒を超える住居跡や、方形周溝墓が検出されている。

古墳時代に至って、元荒川や綾瀬川流域の開発が進められたことを示している。

やや時代が下ると、近接する神ノ木2遺跡で古墳が築造された。同遺跡からは、方墳跡2基、円墳跡2基、周溝状遺構2基が検出された。また5世紀中葉と考えられる土壙1基から、鉄刀・鉄劍が各1振に加え、鉄鎌や鉄鏃が出土した。

久喜市東浦古墳（13）は6世紀中葉に築造された前方後円墳で、全長57mを測る。

久喜市栢間古墳群（16）は埼玉県選定の重要な遺跡となっており、現在、前方後円墳2基を含む9基の古墳が残る。久喜市天王山北遺跡（10）で確認された本村1号墳（前方後円墳）を除いて、発掘調査は行われていない。古墳群の中心となる天王山塚古墳は、墳長約109mの前方後円墳で、墳丘から埴輪片や角閃石安山岩が採集されている。埴輪の一部は鴻巣市生出塚埴輪窯産とされる。角閃石安山岩は加工痕が残ることから、横穴式石室を構成する石材と推定されている。古墳時代後期の大型前方後円墳である。

鴻巣市生出塚遺跡（54）は古墳時代後期に造

営された埴輪窯跡として知られている。ここで製作された埴輪は、埼玉県内はもとより、千葉県や東京都、神奈川県の古墳から出土しており、国内でも屈指の埴輪生産遺跡といえる。

奈良・平安時代

大山遺跡では、台地斜面部から、現在までに28基の堅形炉と呼ばれる製鉄炉が調査されている。加えて鍛冶工房跡や多数の堅穴状遺構、粘土採掘坑なども存在することから、当時の当地域における鉄の大生産地であることが明らかになった。

元荒川右岸に展開する荒川附遺跡は、古墳時代の集落としても知られているが、奈良・平安時代の住居跡も60軒以上が調査されており、この時期の大規模な集落でもある。鍛冶工房跡が検出されていることから、鍛冶を行っていた集落の可能性がある。荒川左岸の椿山遺跡からは鉄滓が出土しており、荒川附遺跡から椿山遺跡への変遷が推定されている（蓮田市遺跡調査会 1989、埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2007a）。

中・近世

小林八束1遺跡の1.5km北西には、古河公方足利成氏の築城とされる久喜市菖蒲城（14）が存在した。陣屋跡の一部が移築され、現在は公園となっている。加須市（旧騎西町）にある私市城（40）は根古屋城とも呼ばれている。築城時期は不明だが、上杉氏配下の太田氏により築城されたとの説がある。発掘調査により、障子堀や橋跡、井戸跡などが発掘されている。

伊奈町伊奈氏屋敷跡・赤羽遺跡（162）は、伊奈備前守忠次の陣屋跡として知られている。発掘調査では障子堀が検出されており、埼玉県指定史跡となっている。

蓮田市井沼遺跡・館跡（191）は、14世紀から16世紀頃の館跡と推定されている。

小林八束（おばやしはっそく）の由来

江戸時代後期に編纂された『新編武藏風土記



第5図 古墳時代の遺跡

稿』には「小林村」とある。「小林（おばやし）」という地名は、室町時代中期（15世紀末）にこの地を開いたとされる太田修理が、後に「小林」と姓を改め、小林周防守と称したことに由来するという伝承がある（蘆田編 1963、菖蒲町教育委員会 2006）。旧菖蒲町に残されている近世の石造物には、「小林村」の記載がある例がいくつか存在する（菖蒲町教育委員会 1982）。そのうち、確認できた中では、妙福寺所蔵の釈迦如来像（延宝7（1679）年）が古い事例で、江戸時代の初めにはすでに「小林村」が存在していたことがうかがわれる。

また、上柏間の石造馬頭観音菩薩立像（道標）（天明3（1783）年）には、「右ハいはつきみち（岩槻道） 左ハをはやしみち（小林道）」と刻まれており、当時「をはやしみち」という道が存在していたことが分かる（埼玉県立博物館 1992）。

そして、明治時代初期に編纂された『武藏国郡村誌』には、「小林村（をばやしむら）」の小字として30の地名が記されている。その中に「八束（はちそく） 野々宮後の東に連る東西30間南北3町30間」とある（埼玉県 1954）。

享保の改革と見沼代用水の開削・沼地の開拓

小林沼をはじめとする沼地は、江戸幕府徳川吉宗の代に執り行われた享保の改革における新田開発（小林沼の開発は享保13（1728）年）によって、堀上田へと姿を変えた。それとともに、小林沼周辺には附廻堀悪水路や沼落悪水路が整備された。そしてこれらの開発とともに進められた事業が、見沼代用水の開削である。

見沼代用水は、享保12（1727）年に幕府勘定吟味役の井沢弥惣兵衛によって開削された。開削の結果、用水・悪水の統御と生産の安定化が進んだ。また、旧菖蒲町では菖蒲河岸が営まれ、水運の拠点の一つとなった（埼玉県 1993、東部地区文化財担当者会 2015）。

水難と土地改良の歴史

その一方、河川や用排水路および沼に囲まれたこの地域は、古来より数多くの大雨や大水による水難に見舞わされてきた。

近現代に至り、この地域に大きな被害をもたらした水難に、明治23（1890）年、明治31（1898）年、明治43（1910）年の水難が挙げられる（埼玉県教育委員会 1979）。特に明治43（1910）年の水難の被害状況を伝える『柏間村水難誌』には、菖蒲町下柏間・上柏間・柴山枝郷の3大字における全戸数484戸中460戸が浸水被害を受けたとある。小林周辺も2階建ての主屋の庇まで水が上がった家屋もあったという（東部地区文化財担当者会 2013）。そのため、わずかに残る台地上には水塚が数多く残されている。これらの水塚の多くは明治時代に築かれ、江戸時代後期以降、度重なる水難の度に造られた。

また、『武藏国郡村誌』の「小林村」の説明には、「舟車 水害予備船162艘」との記載がある（埼玉県 1954）。この艘数は旧菖蒲町や周辺の蓮田市、白岡市と比べて群を抜いて多い（埼玉県 1993）。これは旧小林村が低湿地に立地し、野通川（元荒川）沿いで多くの用悪水堀に囲まれており、水難時に絶えず湛水する地域だったためである。

その後も水難は続き、特に昭和22（1947）年のカスリーン台風による被害は、埼玉県東部に大きな被害をもたらした。こうした災害の対策は、土地開発と表裏一体となって県全体で進められた。災害対策は水塚や水害予備船の準備から、大規模な河川改修や区画整理へと姿を変えたのである。

小林八束1遺跡の調査事由である小林調節池は、土地改良事業（農業基盤整備）の一環として昭和57（1982）年から整備が始められた。調節池の堤防にはラベンダーが植栽されており、花の季節には観賞に訪れる人々の賑わいがある。

III 遺跡の概要

1 小林八束1遺跡の概要

小林八束1遺跡は、埼玉県の東部、久喜市菖蒲町小林4741番地他・4800番地他に所在し、久喜市役所菖蒲支所の南側に造られた調節池の周囲に位置している。小林八束1遺跡の南側には、小林八束2遺跡がある。

周辺には、星川、野通川、元荒川をはじめとする大小の河川や用水が南東方向に流れ、肥沃な水田地帯を形成している。台地の東端部には、見沼代用水が流れている。

遺跡は標高11m前後の台地上に形成されている。調査区域内の地形は大きく谷と台地に分かれ、第3次調査区の北側では、谷へと向かう斜面地が検出された。平成29～30年度に実施された第6・7次調査によって、この斜面地から北側に南北方向に延びる谷が確認されている。第3次調査区の東側から第4次調査区にかけては埋没台地が広がる。

小林八束1遺跡は、小林調節池の建設を契機として、平成20年度に第1次調査、平成23～24年度に第2次調査が実施され、その成果はそれぞれ報告されている（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2008b、同2018a）。平成24～25年度には今回報告する第3次・第4次調査が実施された。その後、平成26年度に第5次調査、平成29～30年度に第6・7次調査が実施された。

第1次調査は調節池の東側で実施された。調査面積は500m²と狭い範囲ながら、縄文時代後期の住居跡2軒と土壙7基、古墳時代前期の住居跡10軒と方形周溝墓3基、古代から近世の溝跡3条、土壙1基、炭焼窯1基が検出された。縄文時代の遺物では、土器や石器などとともに小型の筒形土偶やミミズク形土偶などが出土した。

第2次調査は調節池の西側で実施された。調査面積は5,020m²である。縄文時代の住居跡11軒、

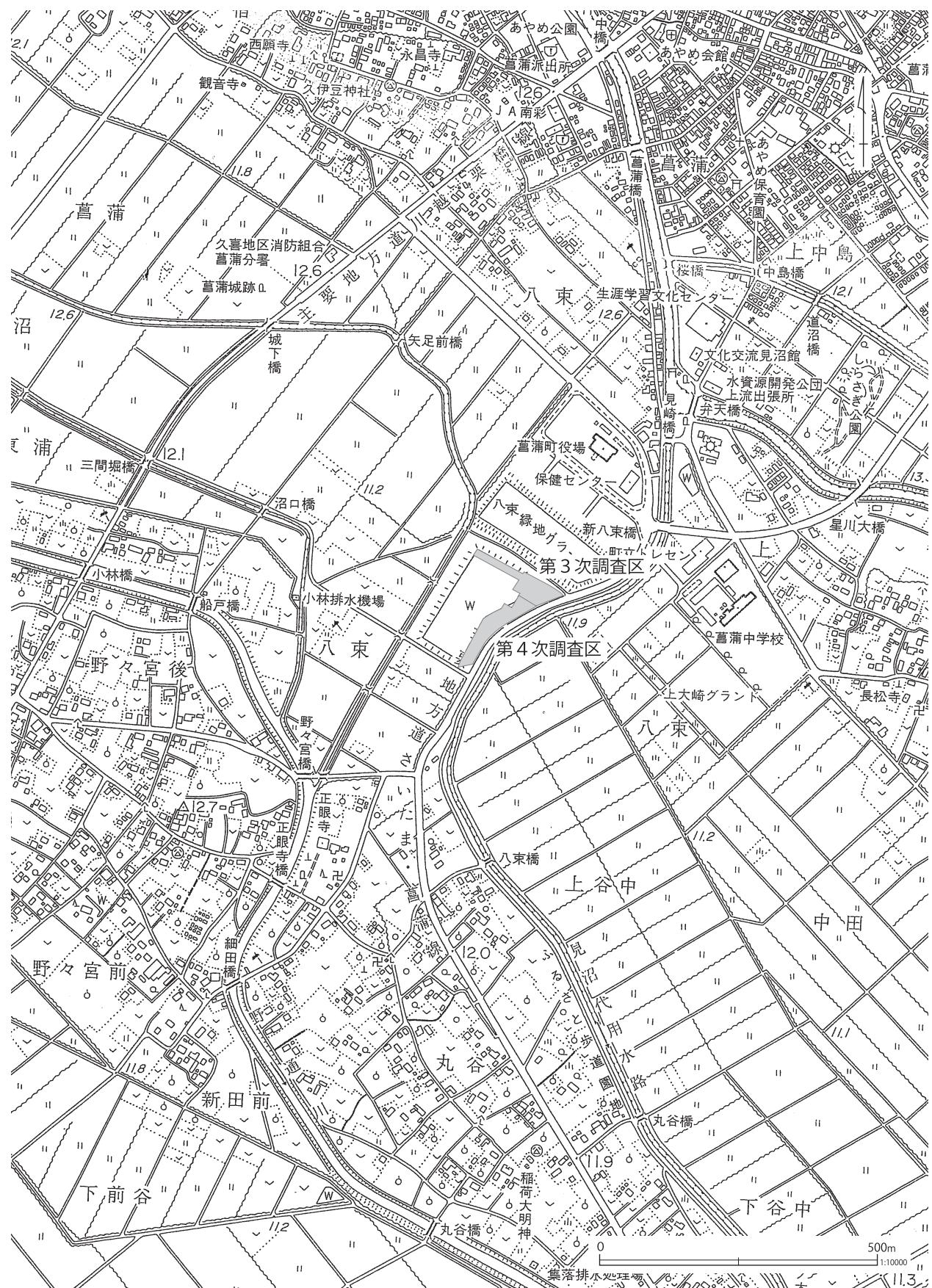
祭祀遺物集中地点1箇所、土器集中地点1箇所、炉穴32基、土壙406基、埋甕1基、盛土遺構1箇所、古墳時代の住居跡6軒、竪穴状遺構2基、中・近世の土壙29基、井戸跡5基、掘立柱建物跡1棟、溝跡14条、畝跡（畠跡）1箇所、ピット37基が検出され、多量の遺物が出土した。

縄文時代では、早期と後晩期の遺構が集中する。早期の遺構は炉穴32基、土壙108基である。調査区の中央部から南側にかけて分布している。後晩期の遺構は、住居跡11軒、祭祀遺物集中地点1箇所、土器集中地点1箇所、土壙298基、埋甕1基、盛土遺構1箇所が検出された。これらの遺構の多くは、盛土遺構内で確認された。盛土遺構は調査区中央から北側に位置し、台地の平坦面から谷の肩部にかけて、弧状もしくは馬蹄形に形成されていた。

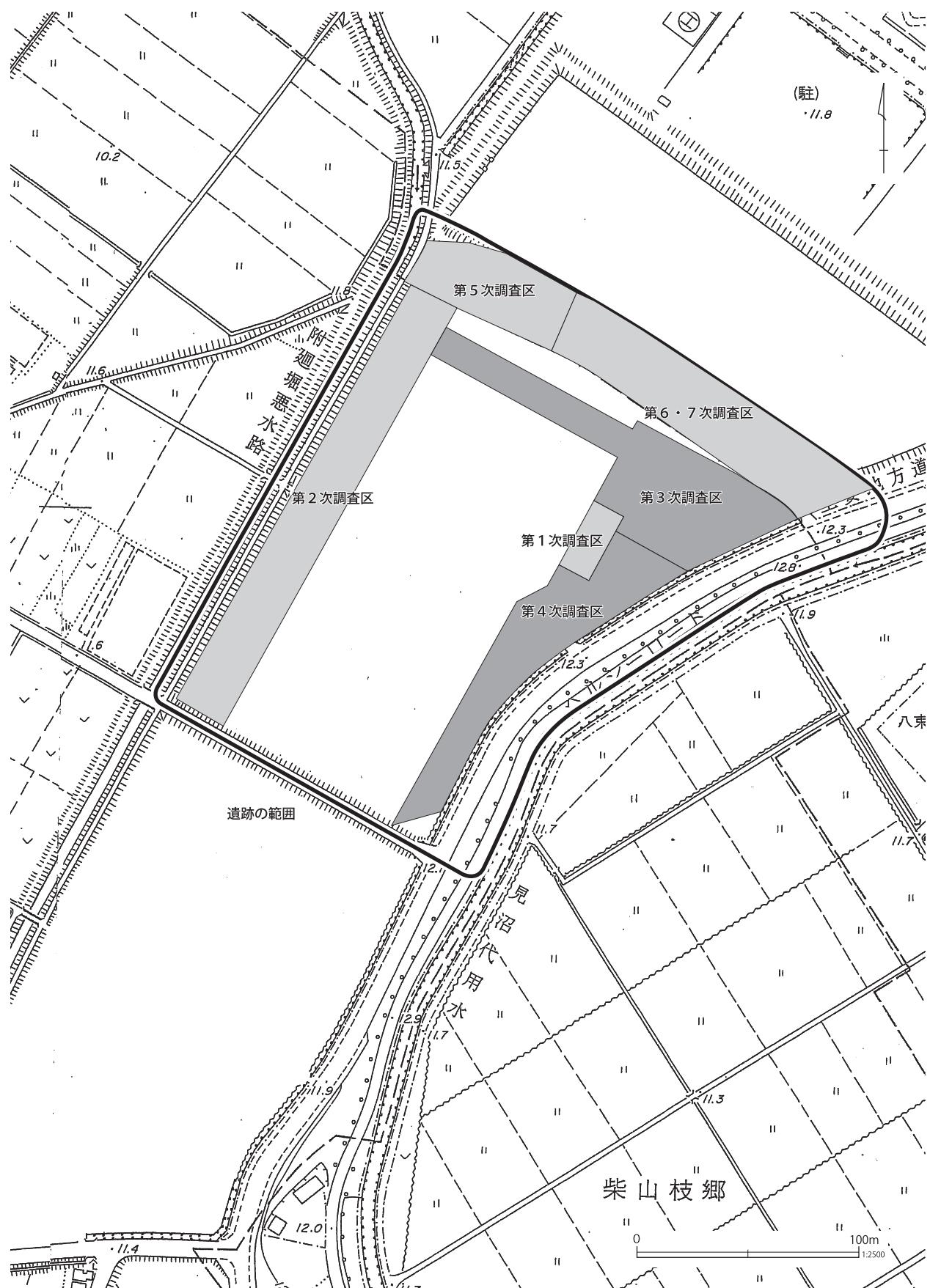
古墳時代の遺構は古墳時代前期に属し、調査区の南側に分布する。

本書で報告する第3次調査では、縄文時代の住居跡3軒、埋甕2基、土壙101基、ピット148基、古墳時代の住居跡45軒、方形周溝墓6基、水場遺構1箇所、木組遺構2箇所、溝跡5条、畠跡2箇所、竪穴状遺構1基、土壙30基、ピット29基、中・近世の溝跡2条、土壙14基、ピット7基が検出された。これらの他に、調査区内から旧石器時代の石器が出土した。また、水場遺構の北西部では、谷に向かう傾斜面から縄文時代から古墳時代にかけての遺物包含層が確認された。

第4次調査では縄文時代の住居跡7軒、炉穴1基、土壙61基、ピット24基、古墳時代の住居跡16軒、方形周溝墓3基、井戸跡2基、溝跡9条、畠跡2箇所、竪穴状遺構1基、土壙17基、ピット13基、中・近世の掘立柱建物跡1棟、溝跡1条、土壙9基、ピット32基が検出された。これらの



第6図 調査区位置図（1）



第7図 調査区位置図（2）

うち、第1号溝跡は第3次調査から続く溝である。

第3・4次調査で検出された遺構の時代は、縄文時代後期と古墳時代前期が大半を占める。

縄文時代後期の遺構は住居跡と土壙を中心とする。また、谷部で遺物包含層が認められた。これらから出土した遺物は、土器（深鉢・浅鉢・注口土器等）、土偶（筒形・ミミズク形）、耳飾りなどである。時期は後期前葉が主体を占める。

古墳時代前期の遺構のうち、住居跡は方形周溝墓に壊される形で分布しており、一部は第4次調査区の南側に広がる。両調査区で合計61軒が確認された。住居跡の規模については、4.00m前後の住居跡が多い中、第53号住居跡は7.00m前後と比較的大型である。なお、この住居跡からは北陸系の装飾器台が出土した。遺物の出土量は住居跡間で多寡が認められた。最も多くの遺物が出土した第40号住居跡では、掲載遺物のうち複合口縁壺や単口縁壺が8点、台付甕が9点、平底の甕が1点、高坏が5点、ミニチュア土器2点、勾玉1点、貝巣穴痕泥岩1点が出土した。出土土器の多くは在地系の土器だが、上述の北陸系装飾器台や信州系高坏（第45号住居跡）、東海系の壺・甕類といった外来系土器も認められる。

方形周溝墓は第3次調査区の東側から、第4次調査区の北側の台地上にかけて集中して墓域を形成している。これらは地表面下に埋没していたため、9基中7基の方形周溝墓に盛土が残存していた。主体部は、第4号方形周溝墓と第6号方形周溝墓にのみ確認された。それぞれガラス小玉等の玉類が出土した。主な出土遺物は、第1号方形周溝墓では、周溝から完形・半完形で5個体（口縁部片と第1号溝出土遺物を含めると9個体）の焼成前底部穿孔壺が出土した。第8号方形周溝墓では線刻を施す大型の底部穿孔壺が出土した。

水場遺構・木組遺構は、第3次調査区の北側中央部の谷へ至る斜面で検出された。この遺構の包含層からは農耕具をはじめ、多数の木製品や自然

木が出土した。第1号木組遺構は杭や板材を組み合わせて構築されていたが、転用材が多い。水場遺構から出土した農耕具は、平鍬・横鍬・鋤・横槌・堅杵などがあり、中には未成品も確認された。

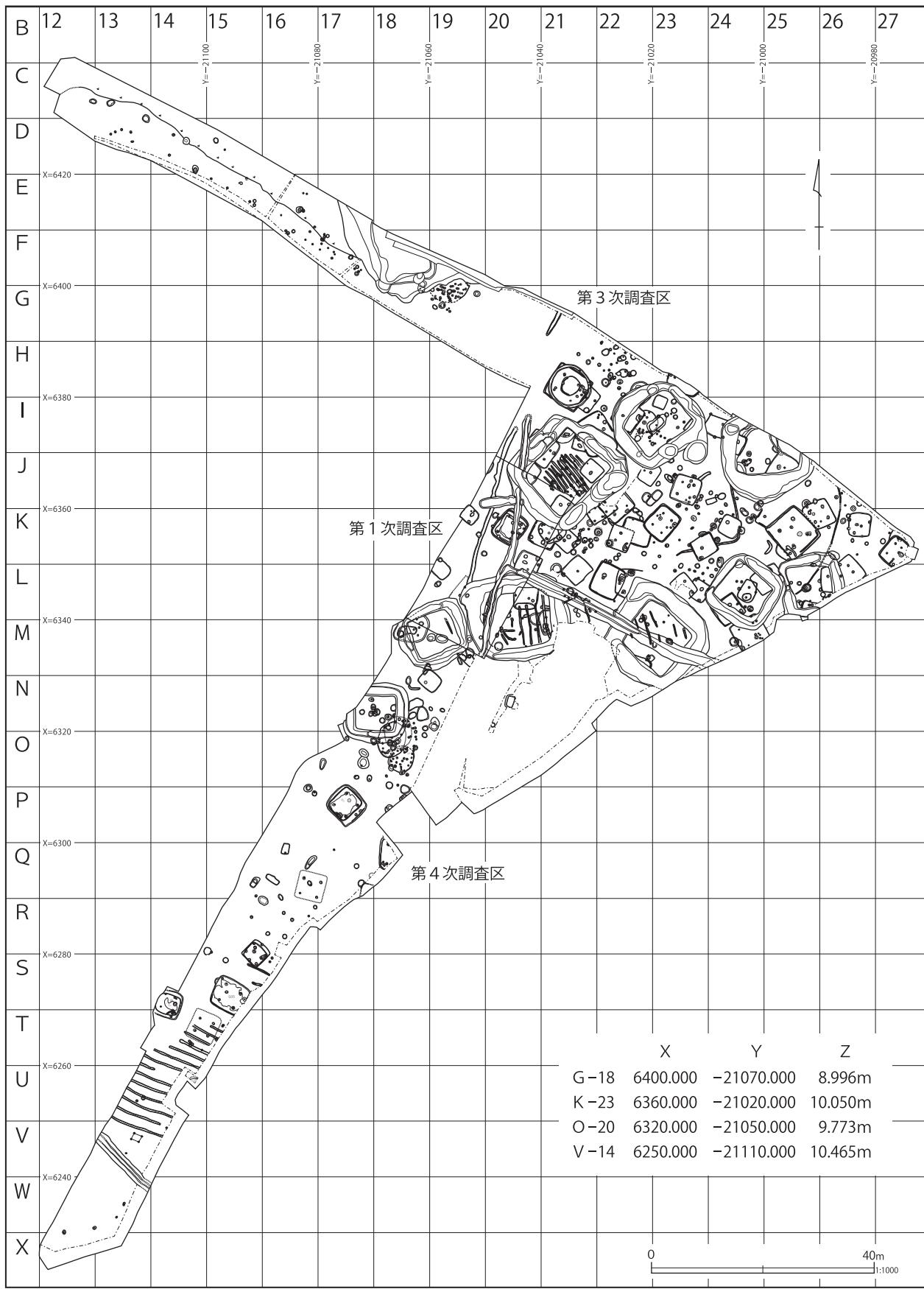
これらの多くは樹種同定の結果、コナラ属クヌギ節と同定された。これに対し、水場遺構・木組遺構の土層堆積における花粉分析・大型植物遺体分析の結果では、木組遺構が造られ、遺物が出土した第15層～第17層には、コナラ属コナラ亜属（大型植物遺体分析では第17層からクヌギ節の果実とコナラ節の殻斗が産出）が多く認められた。各土層の堆積時には、遺跡周辺の台地上に落葉広葉樹林が広がっていたと推定される結果が得られた。

一方、第15層と第17層では、湿地林要素のハンノキ属とトネリコ属が、草本花粉では好湿性のガマ属やヒルムシロ属、ガガブタなどが確認されており、第15層と第17層堆積時（木組遺構形成時）には、遺跡周辺の低湿地にハンノキ属やトネリコ属、ガマ属、ヒルムシロ属、ガガブタなどが生育していたと思われる。以上より、水場遺構・木組遺構の位置する谷傾斜面は、低湿地環境にあったと考えられる。

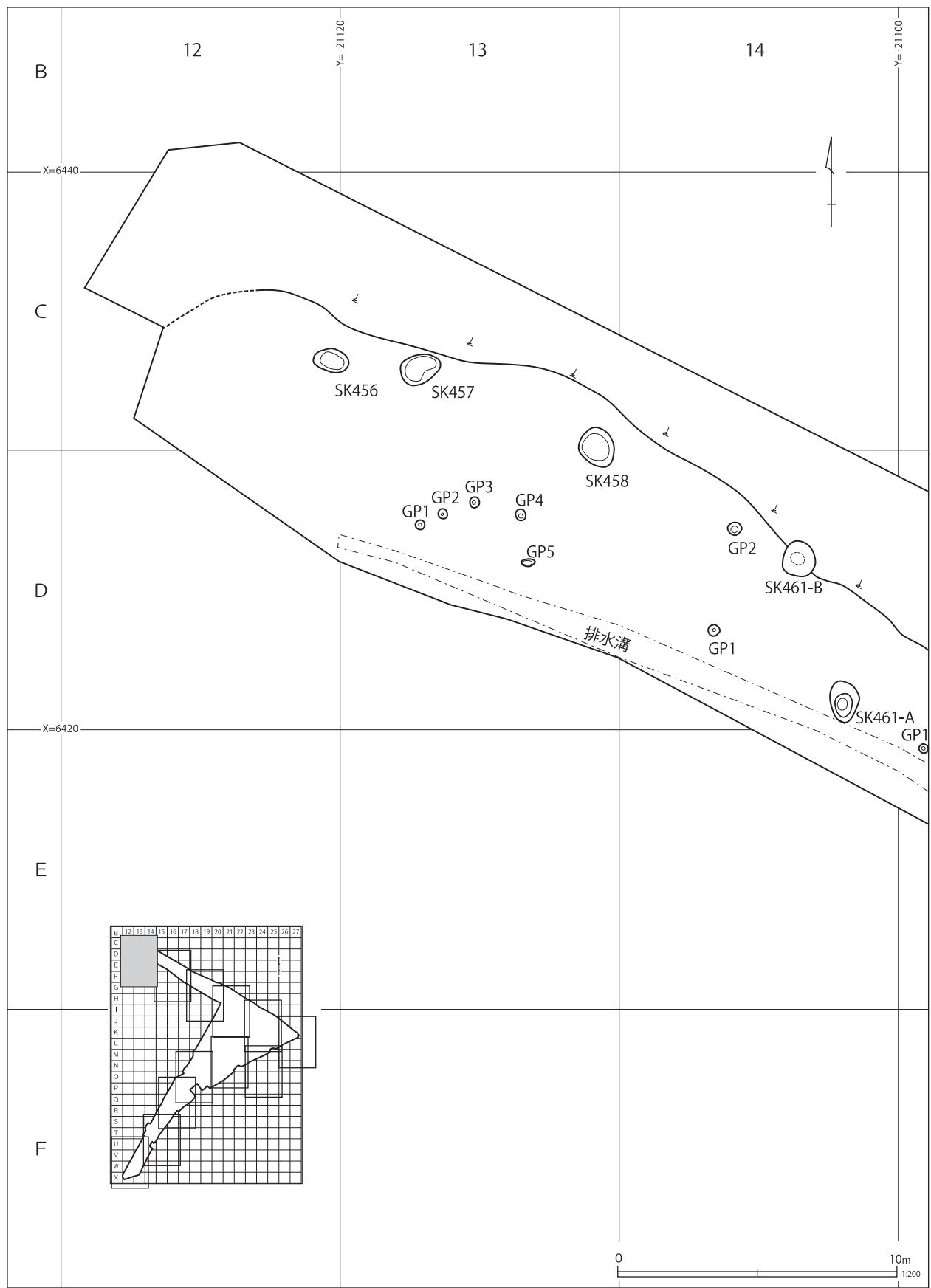
第1号木組遺構の性格は、本遺構が谷へと向かう傾斜面に位置することから、水場に下りるための施設であったと推定される。また、上述の木製品が出土し、周辺植生とも樹種が対応する点から、一時的に木製品の製作も行っていたと推定される。

中・近世の遺構は数少ないが、第3・4次調査で検出された第1号溝跡は、断面形が薬研形の大型の溝で調査区内を縦横に走る。この溝跡に伴う遺構は確認されていないが、何らかの施設を区画する溝と考えられる。

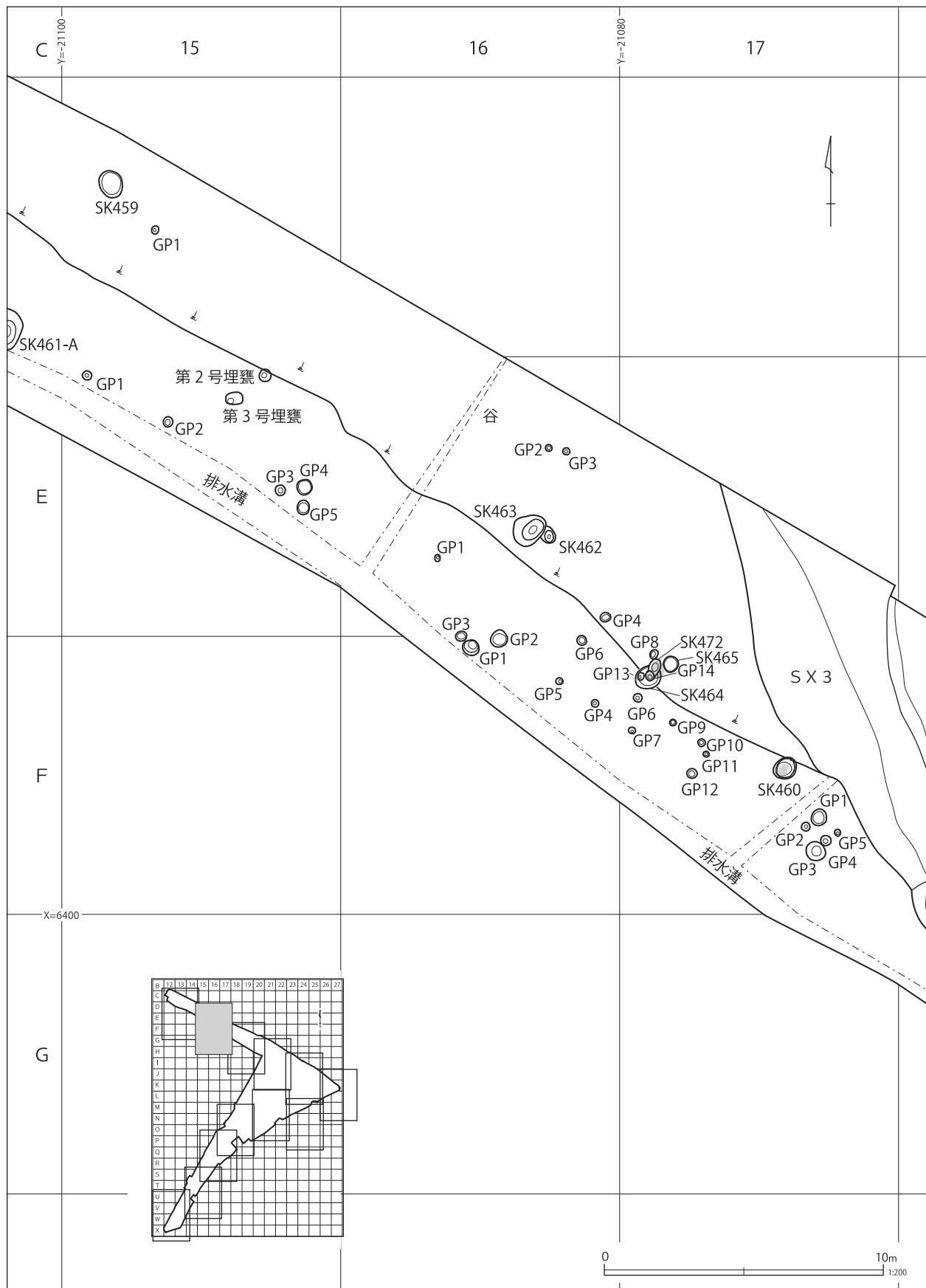
出土遺物は第3・4次調査合計でコンテナ518箱である。主に縄文時代後期の土器や土製品、古墳時代前期の土師器、木製品が出土した。



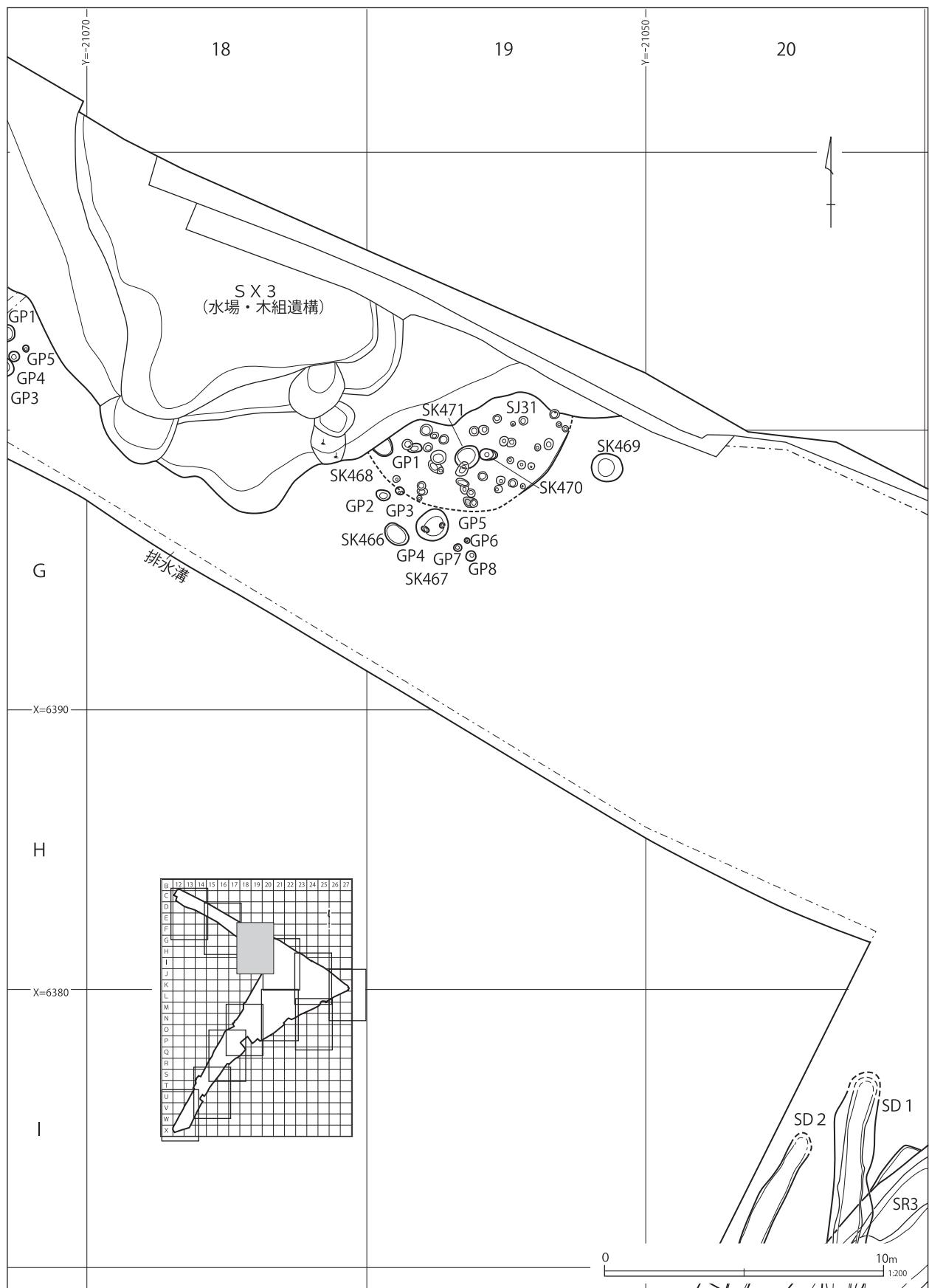
第8図 第3次・第4次調査区合成図



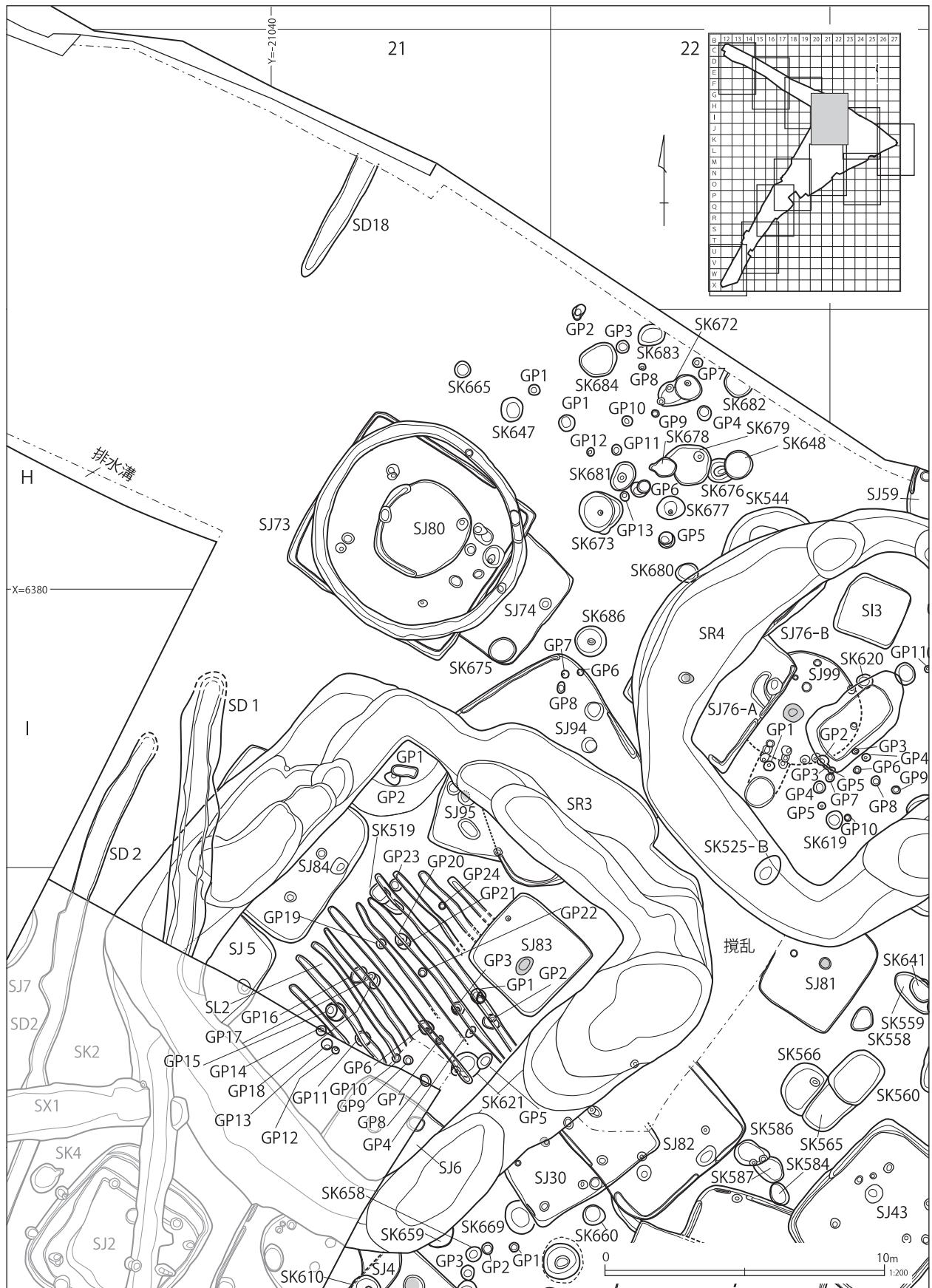
第9図 第3次調査区遺構配置図（1）



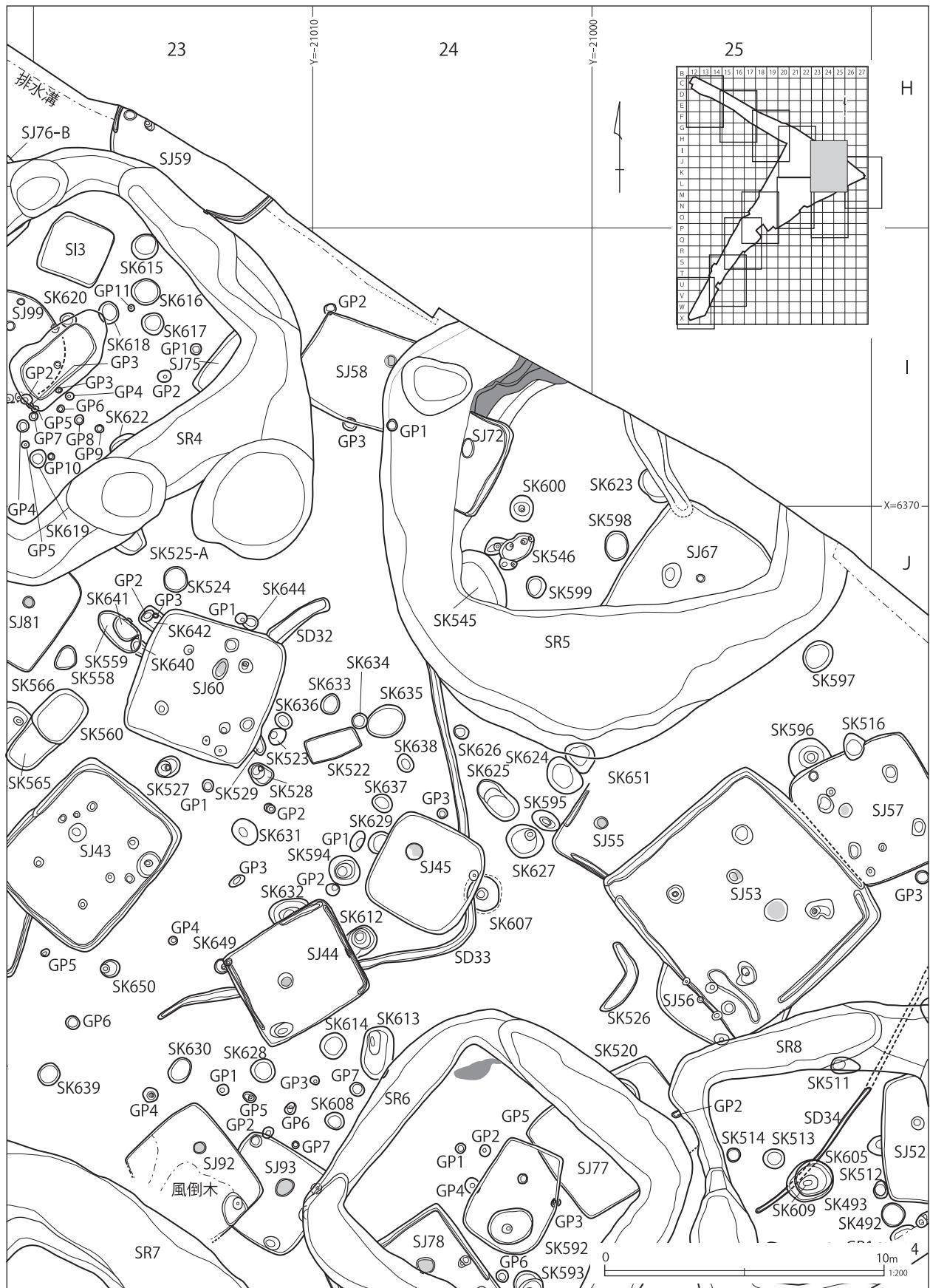
第10図 第3次調査区遺構配置図（2）



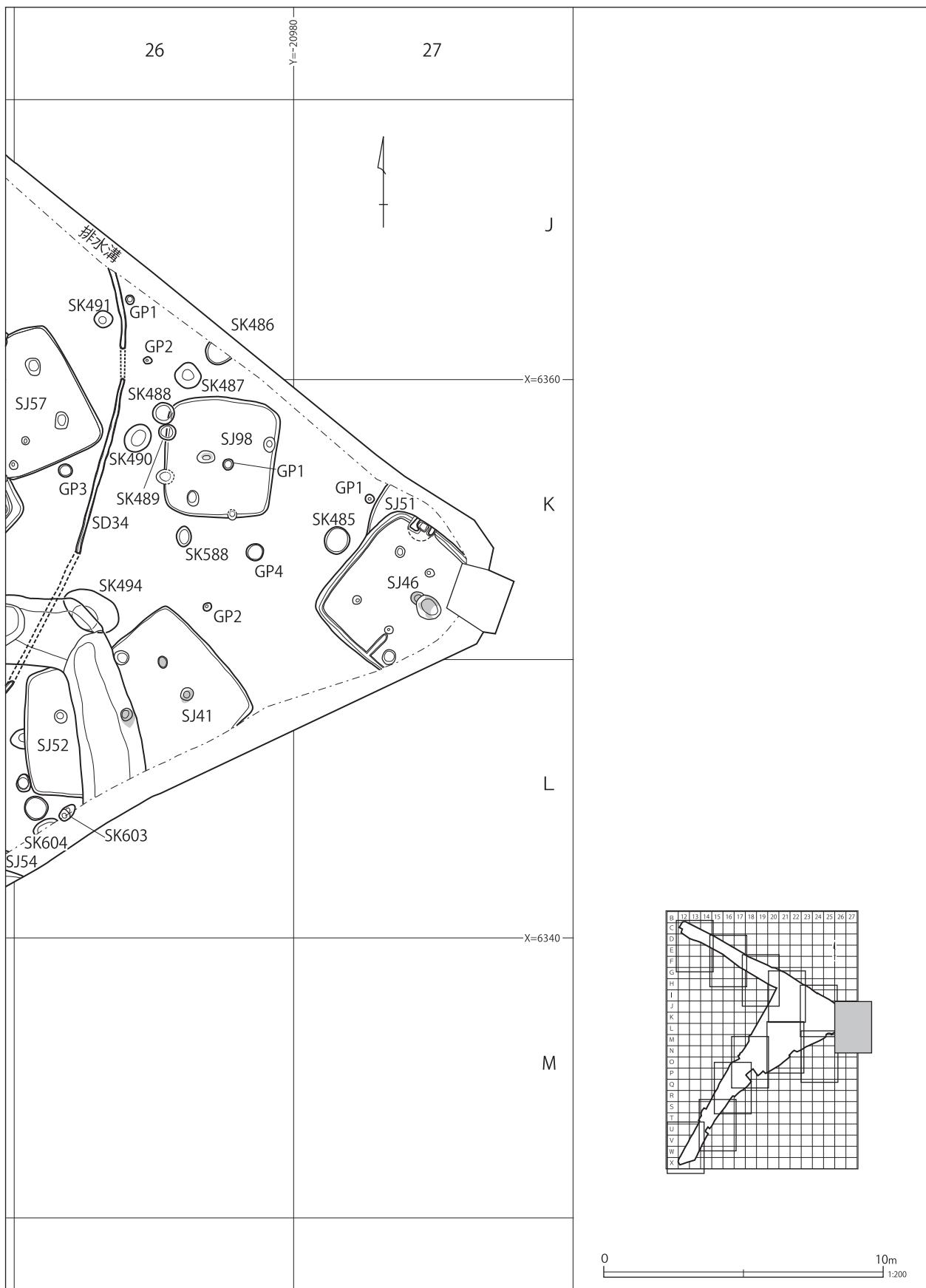
第11図 第3次調査区遺構配置図（3）



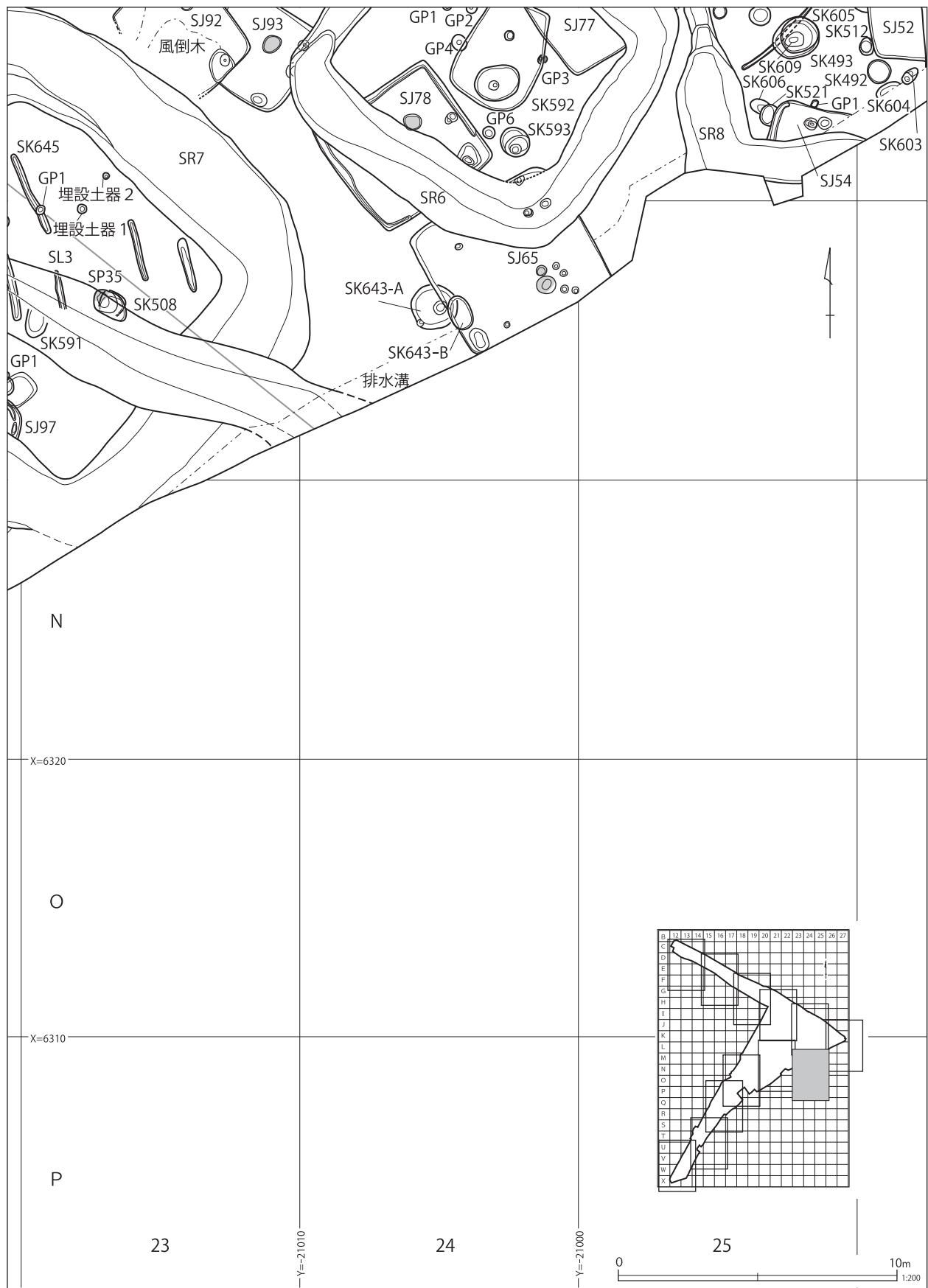
第12図 第3次調査区遺構配置図（4）



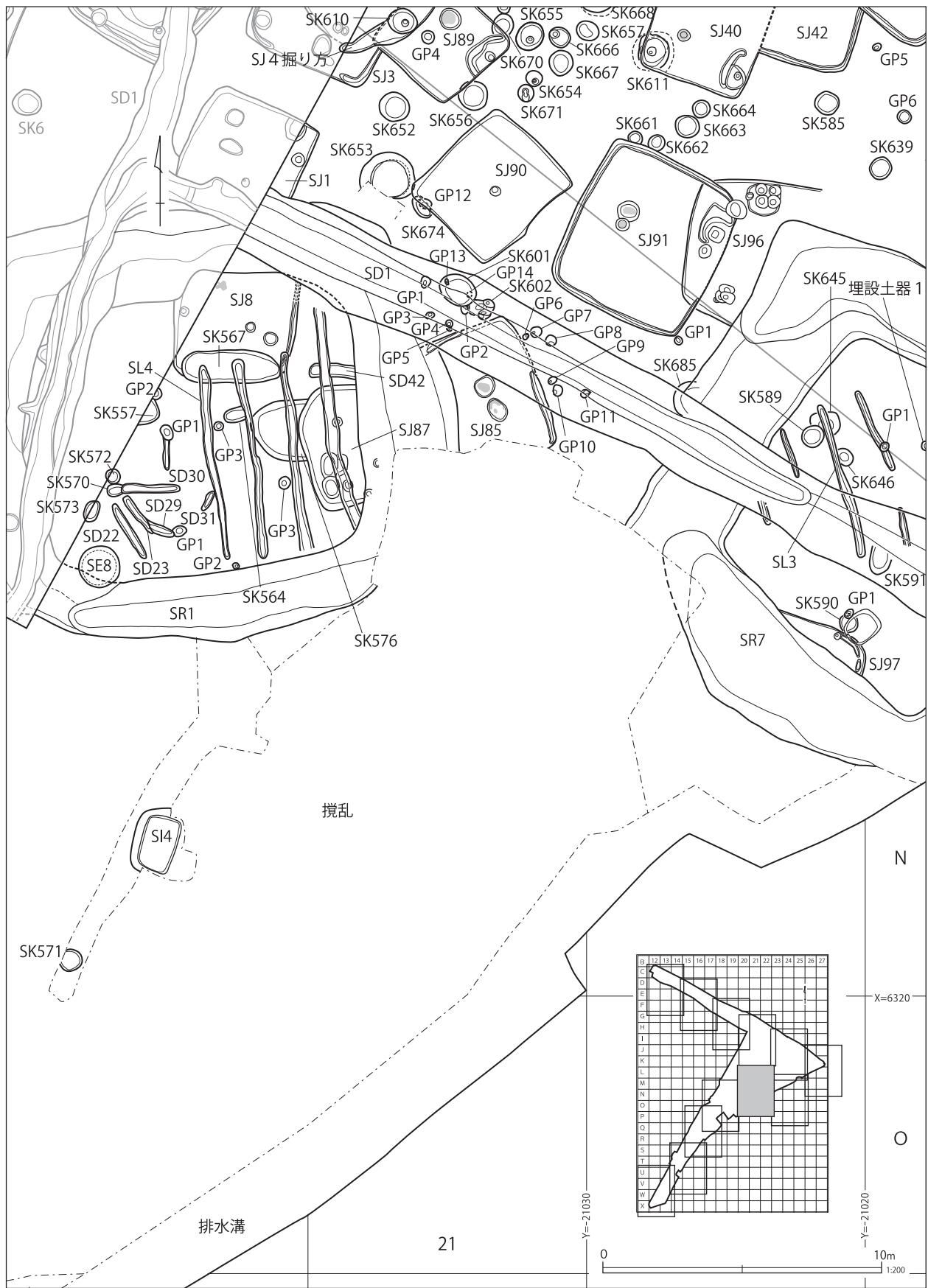
第13図 第3次調査区遺構配置図（5）



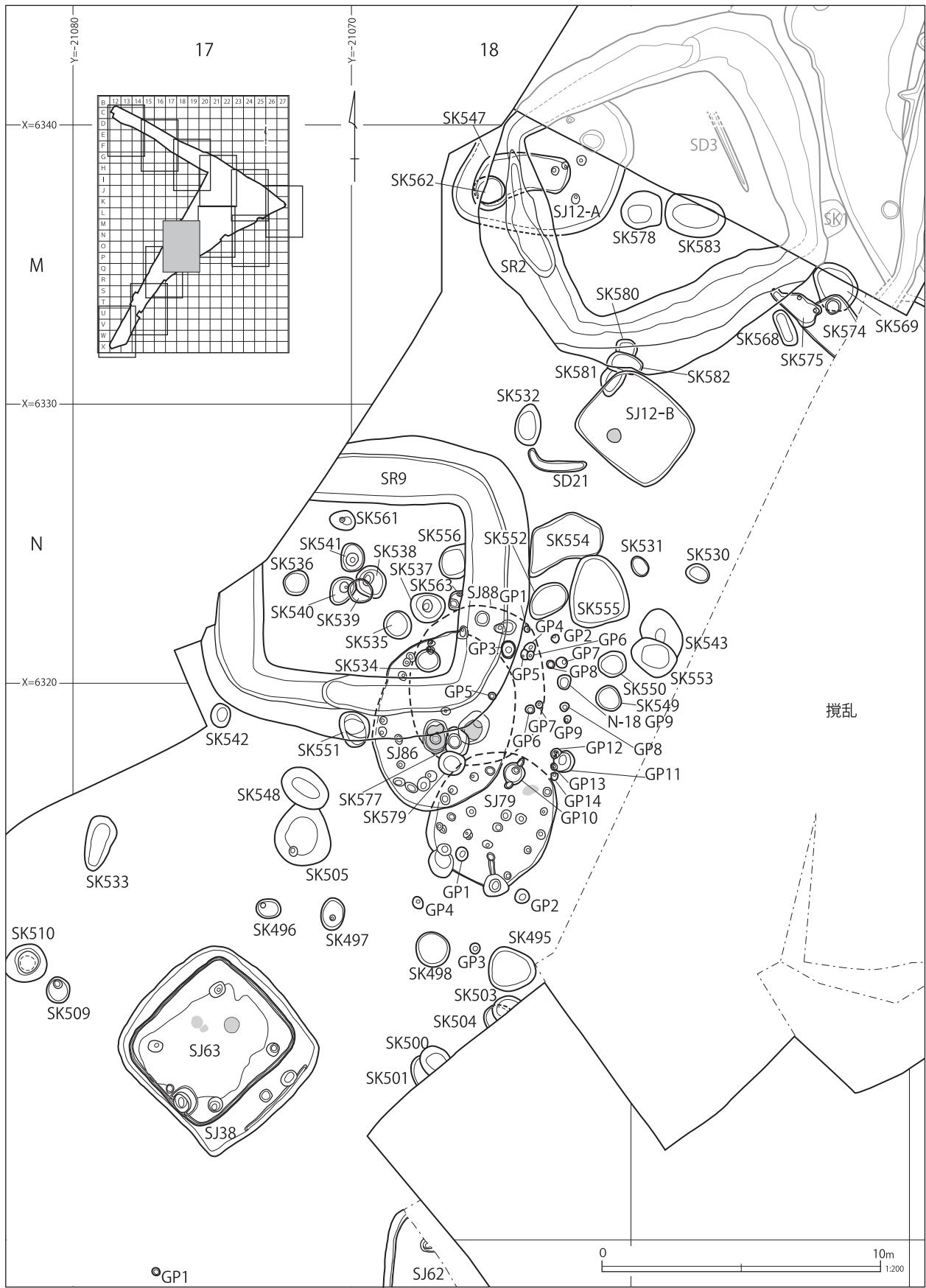
第14図 第3次調査区遺構配置図（6）



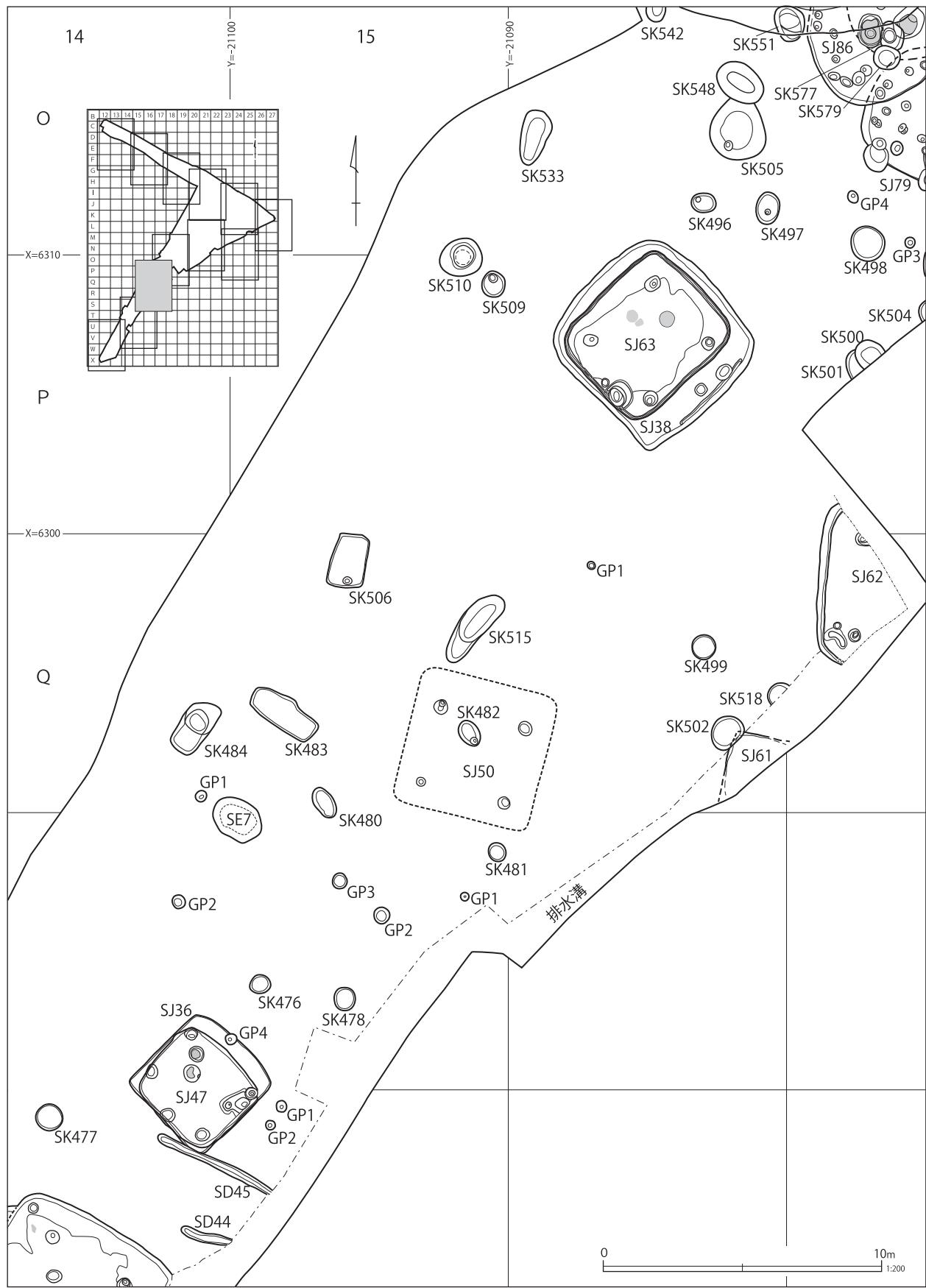
第15図 第3次調査区遺構配置図（7）



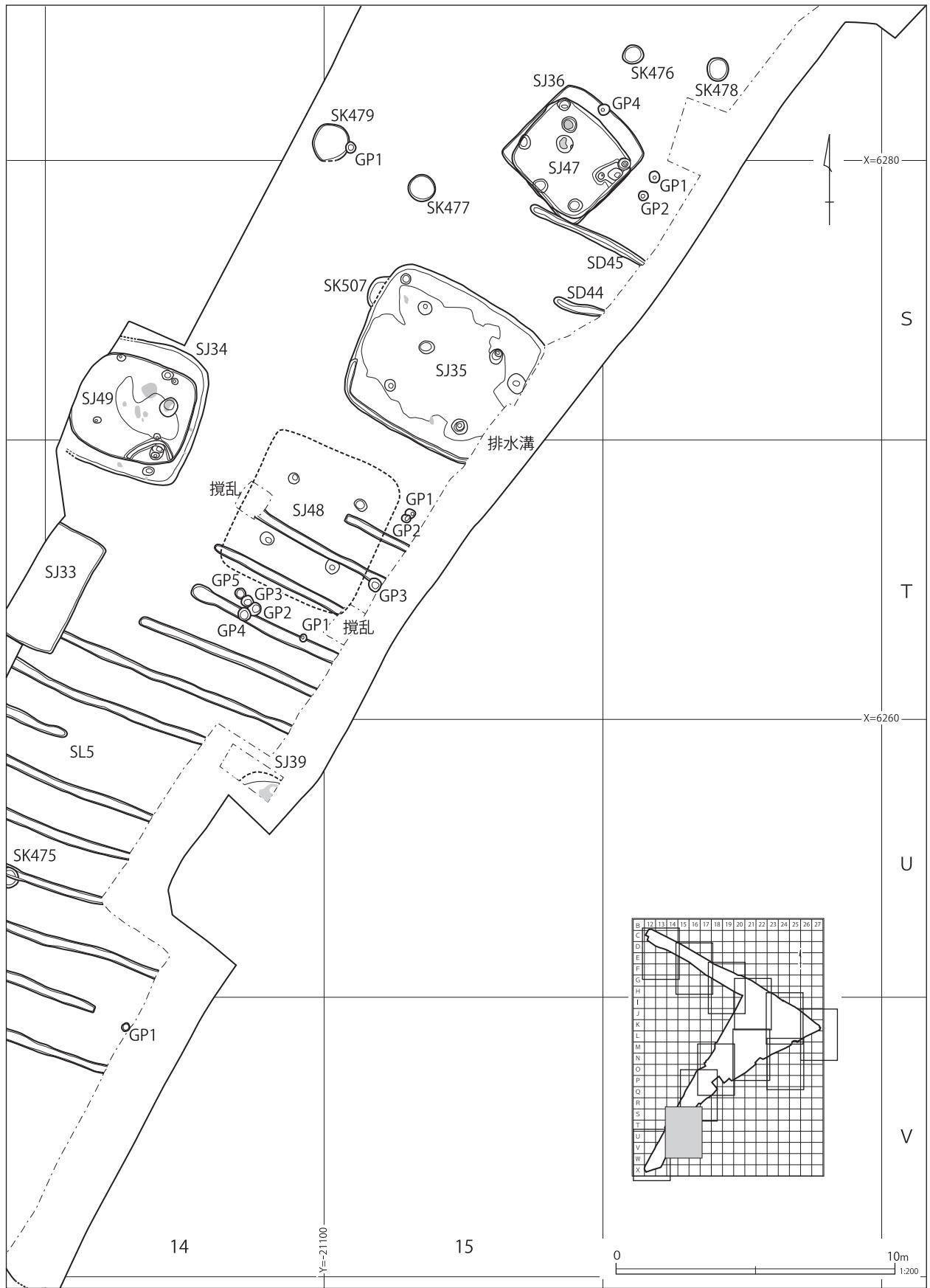
第16図 第3次調査区遺構配置図（8）



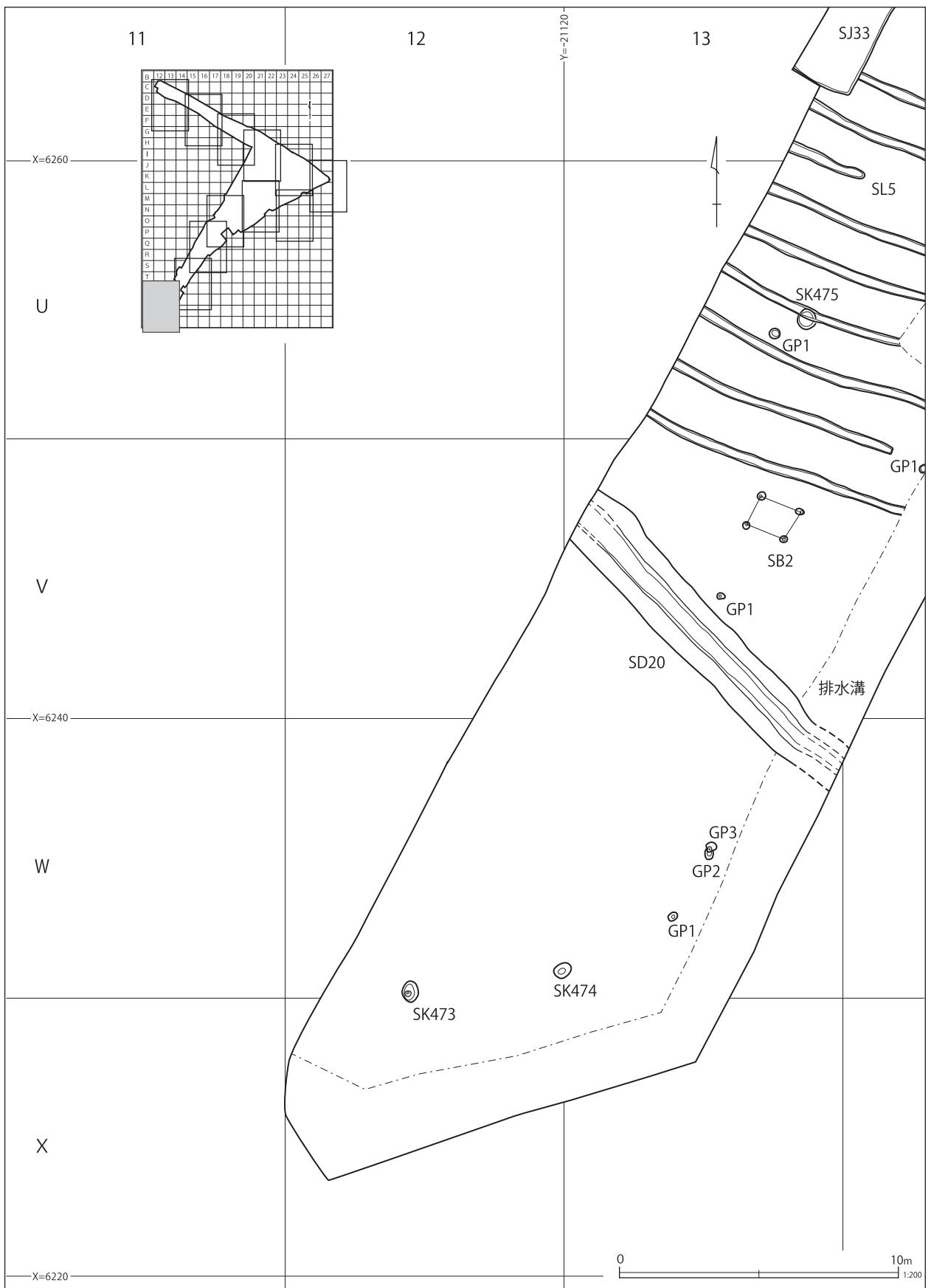
第17図 第4次調査区遺構配置図（1）



第18図 第4次調査区遺構配置図（2）



第19図 第4次調査区遺構配置図（3）



第20図 第4次調査区遺構配置図（4）

2 小林八束1遺跡の基本層序

基本層序は第3次調査区北側の壁面と、第3次調査区内に設定した旧石器時代の遺物の有無を確認するためのテストピットで記録した（第21・22図）。

まず、調査区北側の壁面は、木組遺構（水場遺構）が位置するF-18グリッドの壁面とともに、H-23・J-26グリッドの堆積状況を記録した。

F-18グリッドは谷に向かって傾斜する斜面地にあたり、滯水していたことから水場遺構・木組遺構として多数の木製品が出土した地点である。第6～8・10・14～17層のように、草本質泥炭層を主体とし、当時は湿地が形成されていたと考えられる。これらの土層の花粉分析の結果、第15層と第17層では低湿地由来の植物が確認されている（第VI章参照）。

加えてこれらの土層中にはテフラの堆積が確認された。第8層では、天仁元（1108）年に噴火した長野県・群馬県浅間山の噴出物である浅間B軽石（As-B）が確認された。

続く第9層では、6世紀初頭に噴火した群馬県榛名山の噴出物である榛名ニッ岳渋川火山灰（Hr-FA）が確認された。

この2種のテフラは、参考に示した第2次調査西壁（G-7グリッド）で初めて確認された（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2018a）。第3次調査区内で確認されたことによって、これらのテフラが遺跡の北半で面的に堆積していたことが明らかになった。

なお、G-7グリッド（第2次調査区）とF-18グリッドで確認されたHr-FA層は、F-18グリッドの方が約0.60m高いことが判明した。

水場遺構では第16層相当の土層中から自然木（No.25）が出土した。この木材の放射性炭素年代測定を実施した結果、その年代値は176-192cal ADおよび198-222cal ADと2世紀末頃と算出された（第VI章参照）。

これらの堆積状況は、本遺跡の変遷とともに、両テフラの堆積が確認された遺跡間の年代的併行関係を知る上で重要な手がかりとなるだろう。

次にH-23グリッドとJ-26グリッドは台地上の土層堆積で、F-18グリッドとは堆積状況が異なる。

H-23グリッドは、粘土層と砂層が互層状に堆積する。ソフトローム層（武藏野台地標準層序Ⅲ層相当）以下では、ハードローム層（IV層相当）と第1暗色帶（V層相当）は確認されなかった。

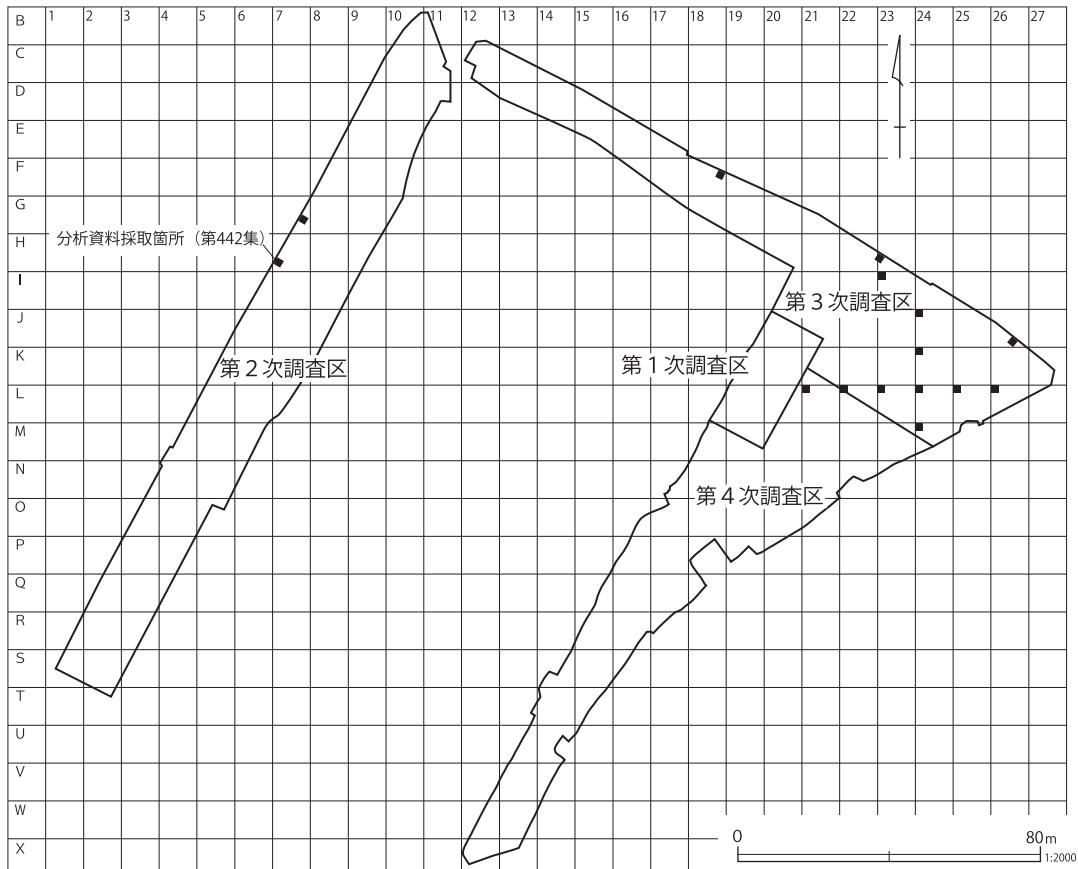
J-26グリッドも粘土層と砂層が互層状に堆積するが、粘土層の割合が高い。ソフトローム層以下は、やはりハードローム層が確認されず、第1暗色帶が薄く堆積する。なお、H-23グリッドとJ-26グリッドでは、第2層中に天明3（1783）年に噴火した群馬県浅間山の噴出物である浅間A軽石（As-A）が確認された。

テストピットは2.00m×2.00mの規模で、I-21～23、J-24・25、K-23～26、L-21～26、M-22～24グリッドの北西隅角に、合計18箇所設定し、各々の東壁と南壁の堆積状況を記録した。これらのうち、I-23、J-24、K-24、L-24、M-24グリッドの東壁と、L-21～26グリッドの南壁を第22図に示した。

これらのテストピットでは、ソフトローム層以下の堆積を確認した。いずれも他地点と同様に、ハードローム層の堆積が顕著ではない。

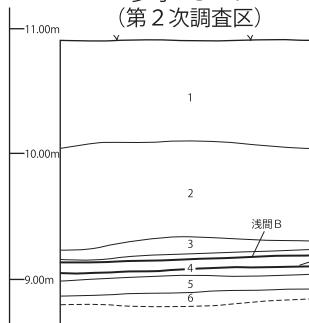
各グリッド間の土層の比高差は、全てのグリッドで確認された第VII層上面をもとに確認すると、I-23グリッドが標高約9.50mと高く、L-24～26グリッドが標高約9.10mと低い。

なお、これらのテストピットから遺物は出土しなかつたが、グリッド出土遺物から旧石器時代の遺物が確認された（次章参照）。



参考 : G-7

(第2次調査区)

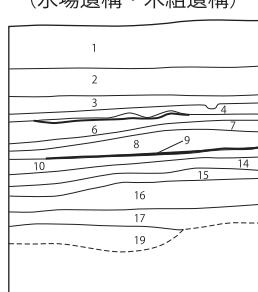


G-7 (第2次調査区)

- 1 表土
2 黄灰色粘土
3 黑褐色土
4 暗褐色土 上位に浅間B (As-B) 下位に榛名山二ツ岳洪川テフラ (Hr-FA)
5 褐色土 浅間C (As-C) を含む可能性
6 黑褐色土

F-18

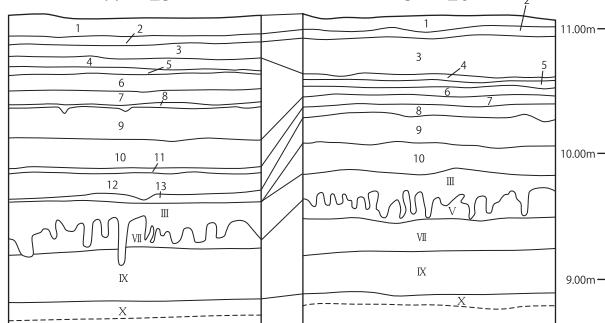
(水場遺構・木組遺構)



F-18 (水場遺構・木組遺構)

- 1 黄灰色土 砂質粘土
2 黑褐色土 粘土層 黒色と黄灰色の粘土が5cm程度で互層になっている間に火山灰と思われる厚さ2mm程度の砂層が挟まる
3 黑褐色土 粘土層 2層をベースに植物(木等)少量
4 黑褐色土 粘土層と黒色土の混じり
5 黑色土 草本質泥炭少量 6層上部に部分的に白色粘土が薄く入る粘性あり
6 黑褐色土 草本質泥炭少量 6層より草本質泥炭層多量
7 黑褐色土 草本質泥炭層 8層より草本質泥炭層多量
8 黑褐色土 火山灰 (Hr-FAか)
9 黑褐色土 草本質泥炭層
10 黑褐色土 草本質泥炭層
11 黑褐色土 草本質泥炭層 粘性あり
12 黑褐色土 草本質泥炭層 粘性あり
13 黑褐色土 ロームブロック 草本質泥炭多量
14 黑褐色土 草本質泥炭層 粘性あり
15 黑褐色土 草本質泥炭層 粘性あり
16 黑褐色土 ロームブロック 草本質泥炭多量
17 黑褐色土 草本質泥炭層 粘性あり
18 黑褐色土 ロームブロック 草本質泥炭多量 木片(枝片)多量

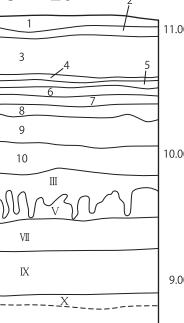
H-23



H-23

- 1 オリーブ黒土 表土
2 灰色土 浅間A
3 灰色土 粘土層
4 灰オリーブ土 砂質粘土層
5 灰色土 砂層 薄い層が互層になっている
6 灰オリーブ土 砂質粘土層
7 灰オリーブ土 砂質粘土層 ガラス質粒子多量
8 オリーブ色土 腐食土の薄い層
9 灰オリーブ土 根の痕によるマンガンの斑文多量
10 灰色土 粘土層
11 灰色土 砂層
12 暗緑灰色土 砂質粘土層(谷の覆土に似る)
13 黒色土 古墳時代の表土層(薄い)

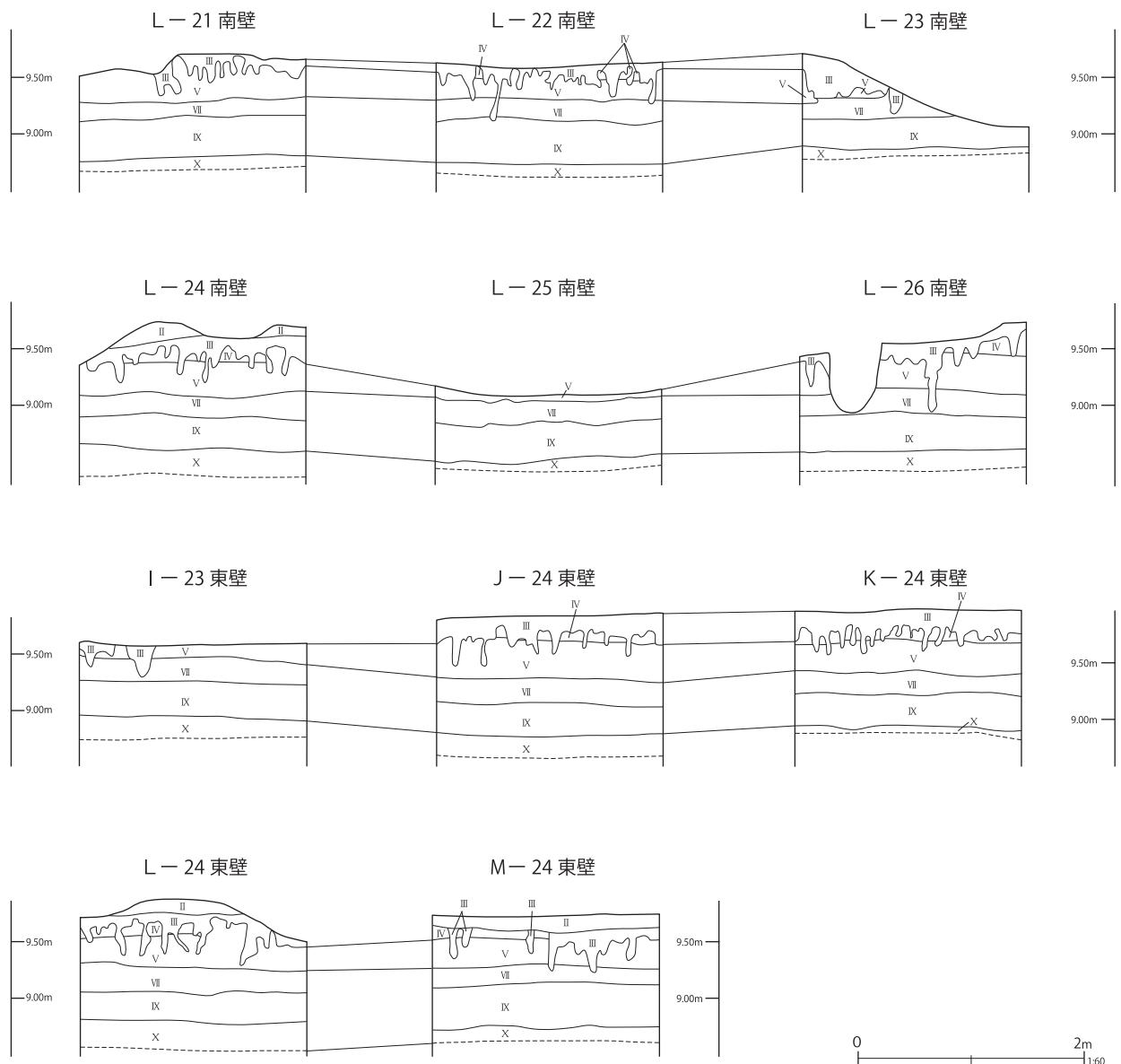
J-26



J-26

- 1 オリーブ土 表土
2 灰色土 浅間A多量
3 灰色土 粘土層
4 灰白土 薄い黒色の腐食土層を挟む 粘土層
5 灰オリーブ土 砂層
6 灰色土 粘土層
7 灰色土 粘土層 薄い黒色の腐食土層が複数枚互層になっている
8 灰色土 粘土層
9 黒色土 古墳時代の表土層
10 暗褐色土 繩文時代の遺物包含層

第21図 基本層序 (1)



- II 暗褐色土 繩文時代の遺物包含層
- III 褐色土 ソフトローム
- IV 黄褐色土 ソフトローム化が進み所々に硬い部分がある
白色粒子少量 遺物は出土していない
- V 暗褐色土 白色粒子多量 硬く締まっている 炭化粒子少量
遺物は出土していない
- VII 黒褐色土 赤色、黒色スコリアを少量 IX層よりボソボソしており、
V層が縞状に入っている
- IX 黒褐色土 赤色、黒色スコリアを少量 しまりが強く硬く粘性が強い
- X 黄褐色土 粘性が弱く、やや砂質になる

*VII層とIX層の分層はあまり明確でない
VII層が不安定で、IX層が明確な暗色帶で区分している

第22図 基本層序（2）

IV 第3次調査区の遺構と遺物

1 旧石器時代の遺物

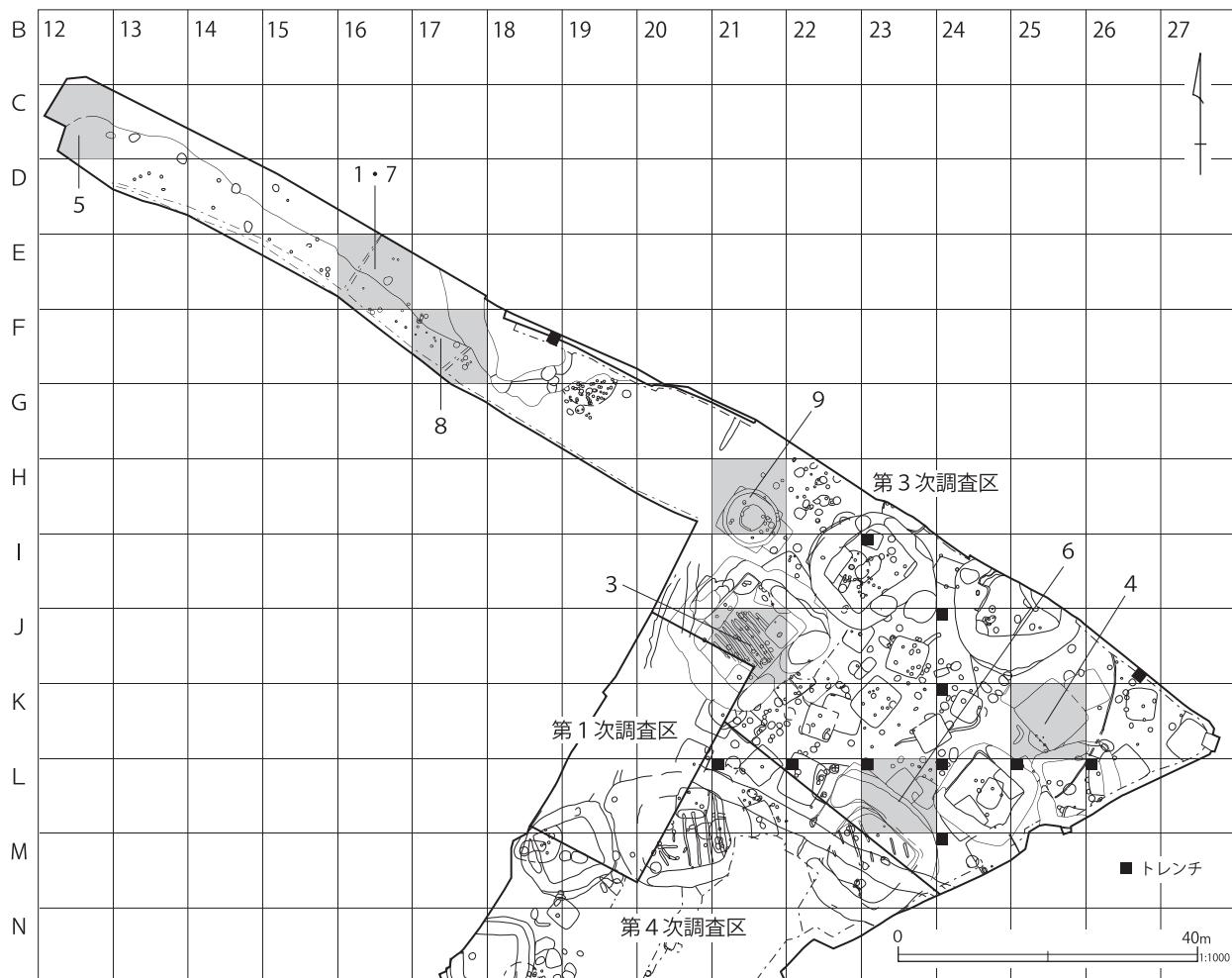
第3次調査区では、古墳時代と縄文時代の遺構確認、および覆土中から広範囲にわたり、旧石器時代の石器が検出された（第23図）。古墳時代と縄文時代の調査終了後、トレンチを設定し、ローム層を掘り下げるが、旧石器時代の石器集中等の遺構・遺物は検出されなかった。

旧石器時代の石器は、槍先形尖頭器4点とナイフ形石器4点、削器1点が検出された（第24図）。

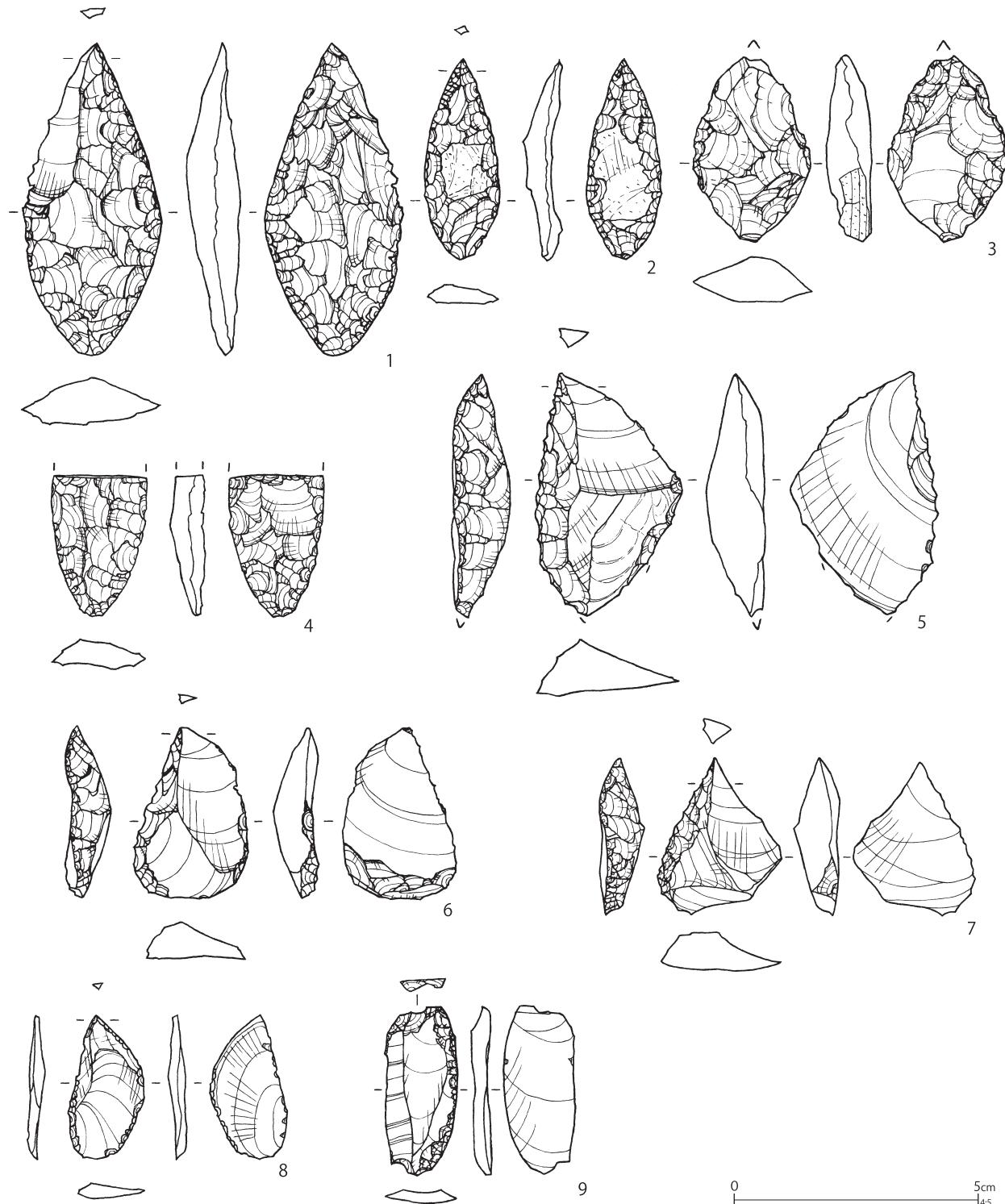
槍先形尖頭器は1・2・4が黒曜石製、3がチャート製である。1は樋状剥離が施された槍先形尖頭器である。形状は、最大幅が基部中央部に位置し左右対称形である。2は小型の両面加工で

ある。基部中央部に原石面を残している。3は平面形状が左右対称になる木葉形の槍先形尖頭器である。調整加工は粗く、右側縁下半部に節理面を残すなど、未成品の可能性が高い。4は上半部を大きく欠損する。両面調整で横断面はレンズ状を呈する。2と似た形状になると考えられる。

ナイフ形石器4点はすべて黒曜石製である。5～7は、幅広で基部が丸くなるティアドロップ型のナイフ形石器である。5は左側縁に調整加工が施され、右側縁下部は素材剥片の縁辺部にわずかに細かい剥離がみられるが、明確な調整剥離とは言えない。しかし、平面の形状は二側縁加工に見



第23図 旧石器遺物出土位置図



第24図 調査区域内出土旧石器

えるように作られている。6は5と似た調整加工が施されているが、基端部裏面に平坦剥離が施され丸く仕上げている。7の平面形状は三角形を呈しているが、調整加工等は5・6と共通する。8は薄手の剥片に微細な加工を施しただけのナイフ

形石器で、ほかと同時期のものかは不明である。

9は縦長剥片を素材とし、右側縁に細かい剥離が施されている。

以上検出された石器を概観した。プライマリーな検出でないため、所属時期の細かい検討は難し

第3次調査

第2表 調査区域内出土旧石器観察表（第24図）

番号	出土位置	器種	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	E-16	尖頭器	黒曜石	6.4	2.9	1.1	14.0	
2	表採	尖頭器	黒曜石	4.1	1.5	0.8	2.9	
3	J-21	尖頭器	チャート	[3.8]	2.4	0.9	8.0	
4	K-25	尖頭器	黒曜石	[2.9]	2.0	0.7	3.4	
5	C-12	ナイフ形石器	黒曜石	5.0	3.0	1.2	12.3	谷遺物包含層
6	L-23	ナイフ形石器	黒曜石	3.5	2.4	0.9	5.2	
7	Q-17	ナイフ形石器	黒曜石	3.2	2.5	0.9	4.7	
8	F-17	ナイフ形石器	黒曜石	2.9	1.5	0.4	0.9	
9	H-21	削器	黒曜石	3.4	1.4	0.4	2.0	二次加工あり

いが、大きく2時期の石器群と考えられる。

1の桶状剥離を有する槍先形尖頭器と5～7のナイフ形石器は、武蔵野台地第V～IV層下部段階の最新期で、大宮台地では明花向遺跡、新屋敷遺跡と近い石器群と思われる。

2・4の小形槍先形尖頭器は、武蔵野台地第III層段階に相当すると思われる。

なお、3は2・4と同時期になるかは定かでない。8のナイフ形石器と9の削器は、時期の特定は難しい。

2 縄文時代の遺構と遺物

第3次調査区は、東側にある水場遺構から西側に谷部が続く東西方向に細長い調査区と、東端のローム台地の調査区に大きく分かれている。古墳時代前期の水場遺構は、南端が検出され北側に続く。平成30年度に行われた第7次調査では、古墳時代前期の水場遺構の下から、縄文時代後期の水場遺構が検出されている（加藤2019）。

調査区の西側では谷への落ち際に土壙や、埋甕が検出された。谷部からは、縄文時代後期中葉の加曽利B式期から、後晩期の安行式期の遺物が検出され、第2次調査と様相が類似する。しかし、検出された遺構の時期は後期前葉である。

水場遺構を西に臨む調査区東側のローム台地上からは、縄文時代後期前葉の遺構や遺物が主体的に出土した。

これらのことから、水場遺構を囲うように、後期前葉の集落が立地していたと考えられる。谷部から検出された後期中葉から晩期の土器は、第2次調査の集落からの流入と考えられる。

グリッドからは、縄文時代早期の条痕文系土器や、前期後半の諸磯式、中期中葉から後期初頭の

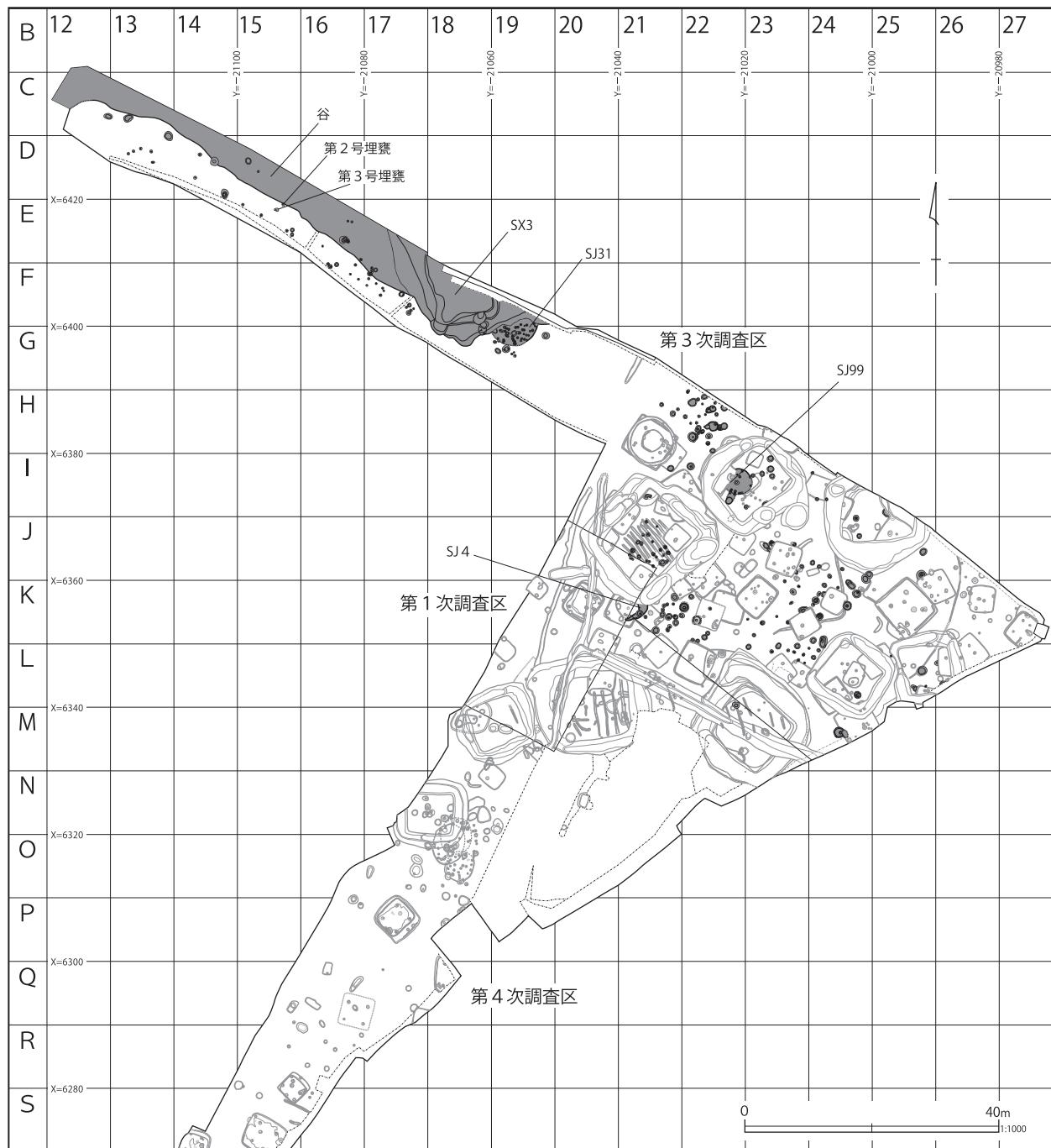
土器群も出土したが、その時期に相当する遺構は検出されなかった。

（1）住居跡

第3次調査区からは、3軒が検出された。いずれも古墳時代前期の遺構などによって壊されており、明確な掘り込みや覆土が確認できたものはなかった。調査区域内からは、縄文時代後期の土器が多数検出されており、縄文時代後期の住居跡数は3軒以上であったと考えられる。

第4号住居跡（第26図、第3・6表）

住居跡は、K-20・21グリッドに位置する。住居跡の西半分は第1次調査で調査されており、今回は、住居跡の東半分が検出された。また、北半分は、古墳時代前期の第3号方形周溝墓によって壊され失われている。古墳時代前期の第4号住居跡と重複しており、第4号住居跡の床面下から検出された。第1次調査ではわずかに覆土が残存していたが、第3次調査では覆土が残っておらず、住居跡の東壁でわずかに壁の立ち上がりを確認することができたのみであった。



第25図 第3次調査区の縄文時代の遺構

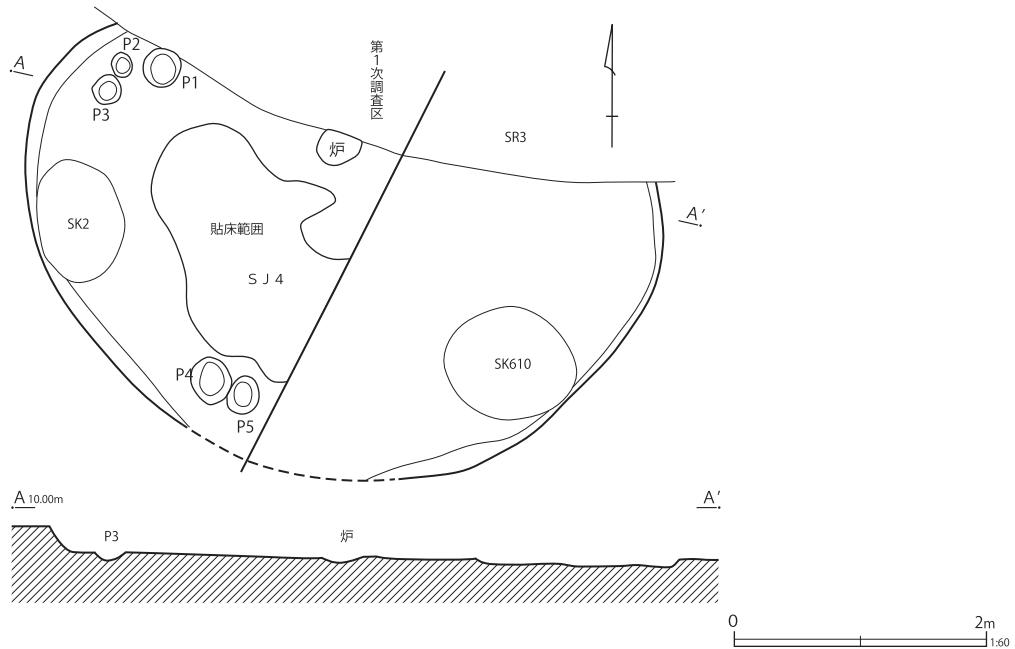
形状は不整円形と推定され、住居跡内には縄文時代の第2号土壙（第1次調査・新旧関係不明）と第610号土壙が重複している。住居跡は、第610号土壙を壊している。

残存する住居跡の規模は、南北方向3.15m、東西方向4.95mである。わずかに残る掘り込み

は0.05mである。主軸方向は不明である。

柱穴は第1次調査で5本が検出された。今回の調査では、検出されなかった。柱穴は壁寄りから検出されている。炉跡は第1次調査側から検出された。住居跡中央やや北側に位置している。

遺物は、今回の調査では検出されなかつたが、



第26図 第4号住居跡

第3表 第4号住居跡ピット計測表

												(cm)		
番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ			
P 1	25.0	25.0	7.0	P 2	18.0	16.0	5.0	P 3	25.0	22.0	4.0			
P 4	37.0	31.0	9.0	P 5	32.0	25.0	6.0							

第1次調査では、土器・石器・土偶が出土しており、堀之内2式期が主体となっていた。

第1次調査から、第4号住居跡の時期は、後期前葉堀之内2式期である。

第31号住居跡（第27～33図、第4・6表）

住居跡はF-19、G-19グリッドに位置する。北半分は、古墳時代前期に掘削された水場遺構により壊されている。掘り込みは残存しておらず、柱穴のみが検出された。推定される住居跡範囲内からは、第468、470、471号土壙が重複して検出された。新旧関係は不明である。南側には、第467号土壙が隣接して検出された。平面形態は円形と推定される。

残存する規模は、長軸方向7.70m、短軸方向3.30mである。主軸方向は不明である。

柱穴は37本が検出された。いずれも規模が小さく、掘り込みも浅い。柱穴は多くが重複しており、複数回建て替えが行われたと考えられる。P4内からは、第33図112の小型磨製石斧が、P

17からは第29図2の小型の鉢形土器が、P21からは第33図114の石棒が出土した。

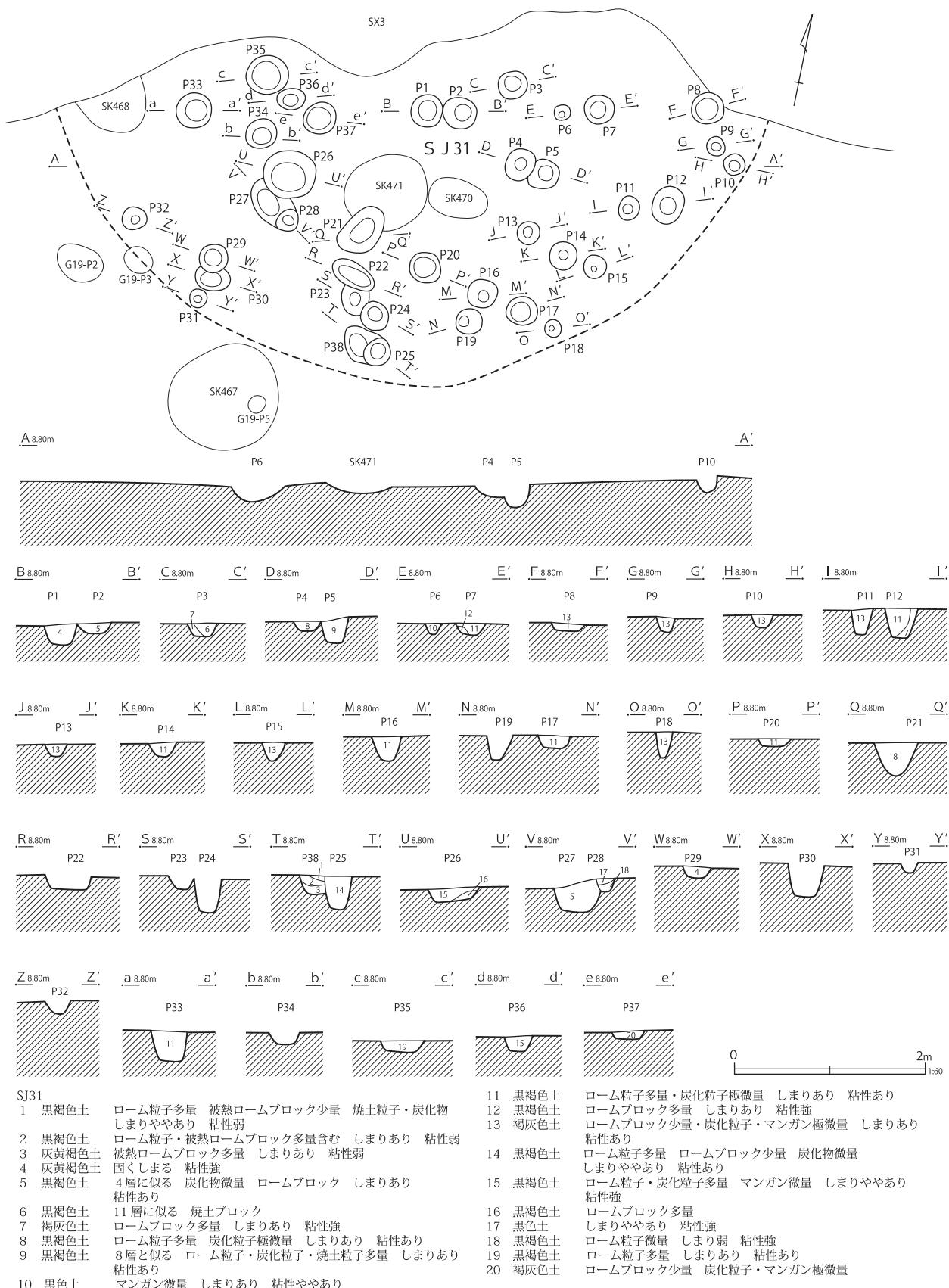
炉跡は検出されなかった。古墳時代前期の水場遺構によって壊されたと考えられる。

出土した遺物から、住居跡の時期は堀之内2式期と考えられる。

第29～32図、第33図104～111は出土した土器である。

第29図1・2は、器形復元が可能な土器である。

1は、深鉢形土器で外傾する口縁部から直線的に底部に至るバケツ状の器形である。口縁は平縁である。口径33.1cm、底径10.7cm、器高33.3cmである。地文は無文で、上半部に沈線によって文様が施文されている。文様は2本1組の懸垂文を6単位垂下させると考えられる。懸垂文は、途中で途切れるものが2単位あり、一方は途切れた先端を曲げて施文されている。また、上端を閉じるように施文する懸垂文も2単位認められる。懸垂文間には6単位の蛇行懸垂文が施文されてい



第27図 第31号住居跡

第3次調査

る。部分的に文様の下側を区画するような、横方向に施文された沈線文が認められる。口縁内面には、沈線が1本巡らされている。

2は小型の広口の無頸壺形土器である。口縁は緩やかに内傾し、胴上部でやや膨らみ底部に至る。口径5.4cm、底径8.1cm、器高6.5cmである。地文は施文されていない。口縁直下に沈線文を1本巡らす。その下側に刻みの入った隆帯を1本巡らしている。口唇部と隆帯を繋げるように、「8」字状の貼付文が4単位施文され、貼付文下に刻みの入った隆帯が垂下されている。

第30図3～42、第31図43～80、第32図81～103は出土した深鉢形土器の破片である。

3～10、17・18は堀之内1式の口縁部の破片である。3～8は口縁部に沈線文を巡らしている。4～6、8～10、17・18は口縁部が肥厚するものである。17・18は口縁に円孔が施されている。17は波状口縁である。3・4、10、18は地文として単節LRの縄文を横方向に施文している。5は胴部に称名寺系の沈線文を施文している。17は条線が胴部に施文されている。

11～16、19～103は堀之内2式期を中心とした深鉢形土器の破片である。

11～16は、口縁が無文で、頸部で括れ胴部が膨らみ底部に至る器形の土器である。刻みが入った隆帯が貼付される。12は胴部に沈線で文様が

施文される。13・15は頸部隆帯から胴部に隆帯を垂下させるもので、隆帯の接点には「8」字文が貼付されている。

19、42は、朝顔形の器形となるものが主体で、胴上部に縄文を充填する平行沈線で、文様を施文し、胴下部は無文となる深鉢形土器の破片である。口端部が内側に内屈するものが多い。

19～23は口縁下に刻みが入った隆帯を巡らす口縁部の破片である。いずれも平縁である。19の縄文は無節Lで、文様の形状に合わせて、横方向の他、斜めや縦方向にも充填されている。21・22は単節LRの縄文が横方向に充填されている。

24～30は、隆帯や貼付文が施文されない平縁の口縁部の破片である。24は橢円形状の文様が、25は三角形状の文様が施文される。沈線間には単節LRの縄文が横方向に充填施文されている。

31～42は、19～30の口縁部をもつと考えられる胴部の破片である。いずれも縄文を充填する平行沈線文で文様が施文されている。31～33は、橢円文など曲線状に文様が施文されている。31・32は単節LRの縄文を、33は単節RLの縄文を施文している。32・33は、曲線形状に合わせた方向で地文が施文されている。33は枠外にも縄文が残っており、磨消縄文となっている。34～42は、直線的な三角形状の文様を施文している。地文は35が無節Lである他は、いずれも単節L

第4表 第31号住居跡ピット計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	(cm)
P 1	34.0	34.0	23.0	P 2	37.0	33.0	11.0	P 3	32.0	30.0	14.0	
P 4	34.0	30.0	10.0	P 5	32.0	28.0	25.0	P 6	17.0	18.0	11.0	
P 7	32.0	30.0	12.0	P 8	35.0	35.0	8.0	P 9	20.0	20.0	15.0	
P 10	22.0	22.0	13.0	P 11	25.0	22.0	26.0	P 12	40.0	32.0	30.0	
P 13	24.0	24.0	13.0	P 14	30.0	29.0	15.0	P 15	24.0	24.0	18.0	
P 16	32.0	30.0	27.0	P 17	34.0	30.0	12.0	P 18	19.0	18.0	26.0	
P 19	26.0	26.0	35.0	P 20	33.0	33.0	8.0	P 21	57.0	36.0	35.0	
P 22	50.0	25.0	12.0	P 23	(28.0)	30.0	13.0	P 24	30.0	30.0	33.0	
P 25	32.0	(27.0)	35.0	P 26	55.0	50.0	14.0	P 27	(42.0)	33.0	32.0	
P 28	25.0	22.0	14.0	P 29	30.0	30.0	11.0	P 30	37.0	(17.0)	32.0	
P 31	9.0	9.0	10.0	P 32	27.0	24.0	8.0	P 33	37.0	37.0	30.0	
P 34	32.0	32.0	18.0	P 35	43.0	42.0	10.0	P 36	30.0	20.0	15.0	
P 37	35.0	34.0	10.0	P 38	34.0	(26.0)	22.0					

Rの縄文を施文している。

43～56は、沈線で文様を施文し、地文として縄文が施文される深鉢形土器である。

43～46は口縁部の破片で、43～45は口縁下に沈線を巡らし、胴部と区画している。43は胴部に三角形状の文様を施文する。44・45は縦方向の懸垂文を複数施文する堀之内1式である。45は沈線間が磨消縄文となっている。46は縦方向の懸垂文と、曲線文が施文される。地文として43、46は単節L R、44・45は単節R Lの縄文が施文される。

47～56は胴部の破片で、44・45、47、53は堀之内1式である。47は頸部で括れる器形で、頸部に4本の沈線を巡らし、胴上部と下部を区画している。胴上部は口縁部から沈線を垂下させている。胴下部は弧線状の沈線を施文している。48は複数の沈線を重ねて鋸歯状に文様を施文している。49は弧状に施文された沈線の一部が施文されている。50～55は複数の沈線を垂下させている。51、56の沈線間は磨消縄文となっている。54は蛇行懸垂文が施文されている。地文として、49、55は無節R、53は単節R、他は単節L Rの縄文を施文している。

57は地文として条線を施文する深鉢形土器の口縁部である。口縁下に沈線を巡らせて胴部と区画している。中期末の可能性がある。

58～85は沈線や条線で文様を施文し、地文が施文されない深鉢形土器である。

58～69は口縁部の破片である。58～65は、口縁下に沈線を巡らせて胴部と区画している。59は半裁竹管で沈線を施文している。58、64・65は櫛歯状の条線で文様を施文している。口端部は内側に内屈状となるものが多く、そのうち58は内屈下をなぞり沈線状となっている。63の胴部は擦痕状に施文されている。胴部文様は、懸垂文を垂下させるもの、鋸歯状に施文するもの、弧状に施文させるものや、橢円形状に施文するものな

ど様々である。66～68は口縁下に沈線文を巡らせらず、いずれも口端部直下に沈線を巡らせていく。66は半裁竹管により、鋸歯状に文様を施文している。67は懸垂文と逆U地文が施文されている。68は懸垂文が施文される。69は口縁部下に円形の刺突文を巡らすものである。

70～85は胴部の破片である。70～72は櫛歯状の条線で文様を施文するもので、弧状に文様を施文している。73は半裁竹管で文様を施文している。上端部に施文される横方向の沈線文は、口縁部下に施文されたものと考えられる。74～85は文様が、単沈線で施文されるものである。75・76は懸垂文と逆U字文を施文している。77は懸垂文と弧状の沈線が施文される。78・79は懸垂文が施文されている。80～84は、懸垂文と蛇行懸垂文が施文されると考えられる。83は大型の深鉢形土器で、外面に焦げ状の付着物が残されている。85は鋸歯状に文様が施文されている。

86～91は地文のみが施文される深鉢形土器の破片である。

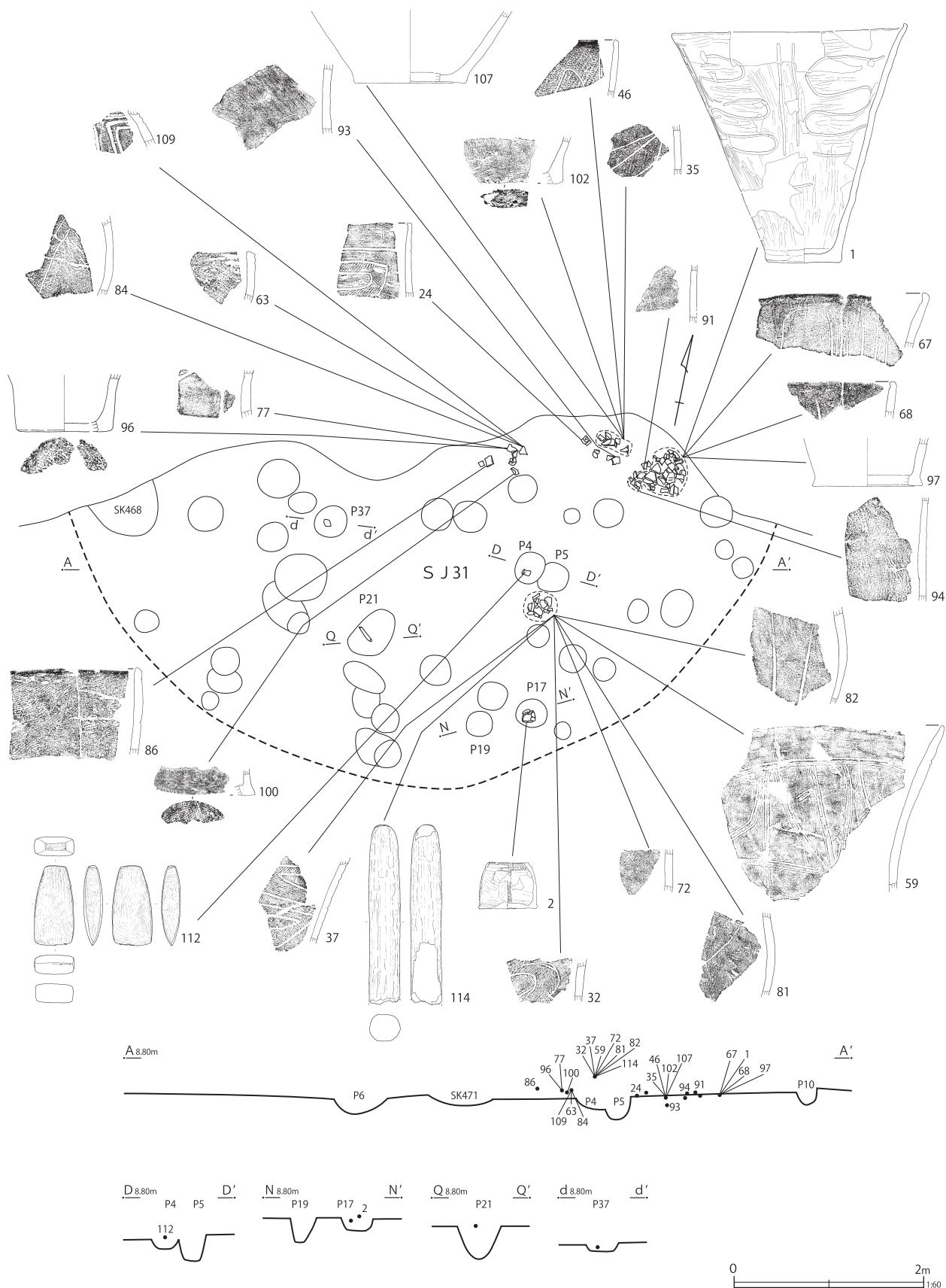
86・87は口縁部の破片である。86の地文は無節Lである。87の地文は単節L Rの縄文である。

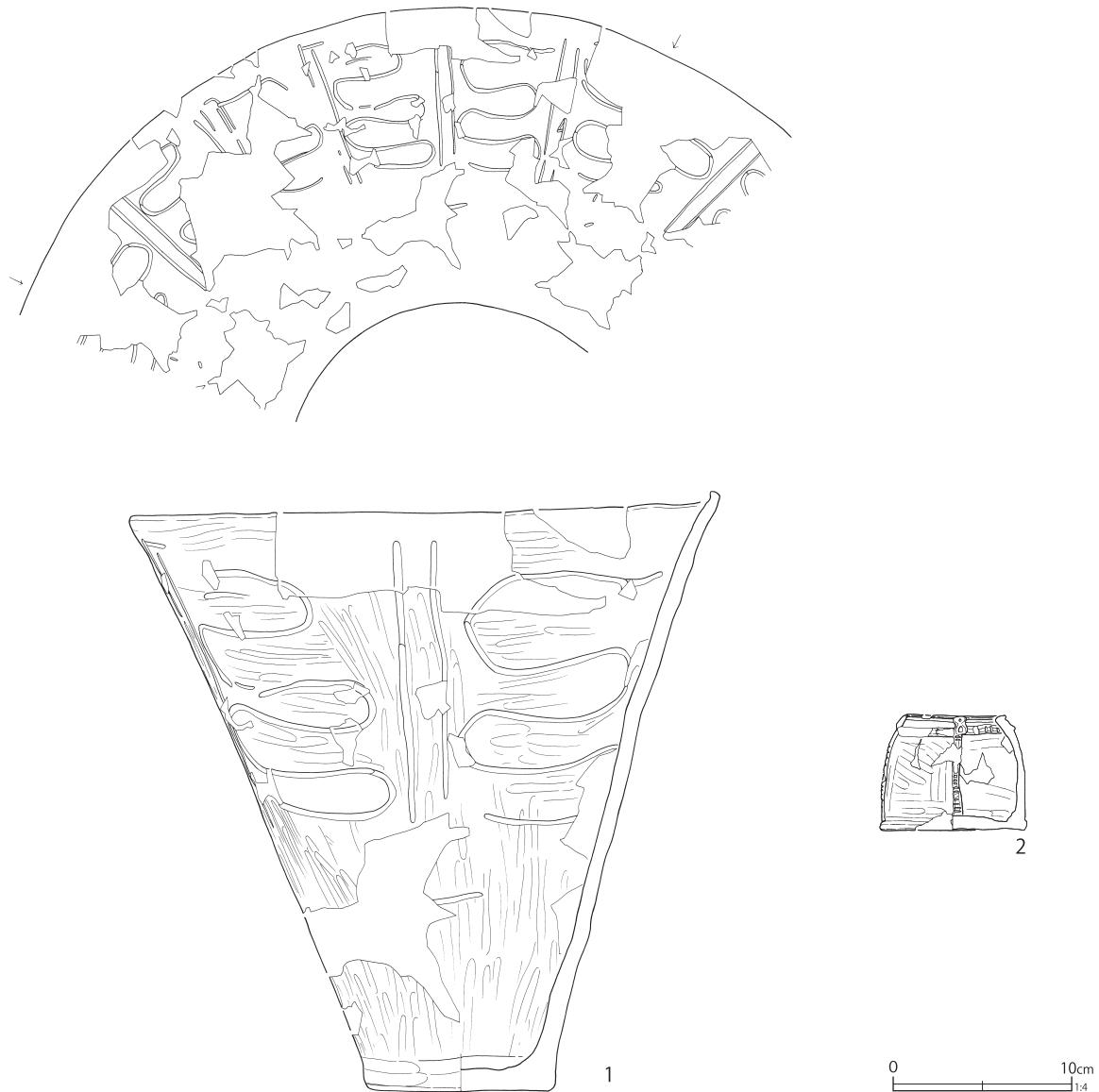
88～91は胴部の破片である。地文はいずれも単節L Rの縄文である。88・89は横や斜め方向に施文し、90・91は横方向に施文している。

92は無文の深鉢形土器の口縁部の破片である。器面の調整は粗く、調整痕が残っている。

93・94は無文の胴部下半の深鉢形土器の破片である。器面は丁寧に磨き状に調整されており、朝顔形の器形の深鉢形土器の胴部であったと考えられる。

95～103は深鉢形土器の底部の破片である。95・96、99・100、103は底部に網代痕が認められたものである。95は胴部に、地文が施文されるもので、無節Rの縄文を施文している。96～102は、無文のもので、朝顔形の器形の深鉢形土器の底部と考えられる。底径が推定できるもの





第29図 第31号住居跡出土遺物（1）

は、95～98で、95の推定底径8.6cm、96は9.6cm、97は11.7cm、98は9.6cmである。

104～107は、鉢形土器または浅鉢形土器の破片である。いずれも無文で、104～106は内外面ともに丁寧な磨き調整を施している。104は口縁部の破片で、薄手のものである。107は底部で、推定底径は11.7cmである。

108～110は注口土器の破片である。108は胴部の破片である。口縁近くと考えられ、丁寧に調整された器面上には、沈線で方形状に文様が施されている。109・110は注口部の破片である。いずれも器面には、丁寧に磨き状の調整が施され

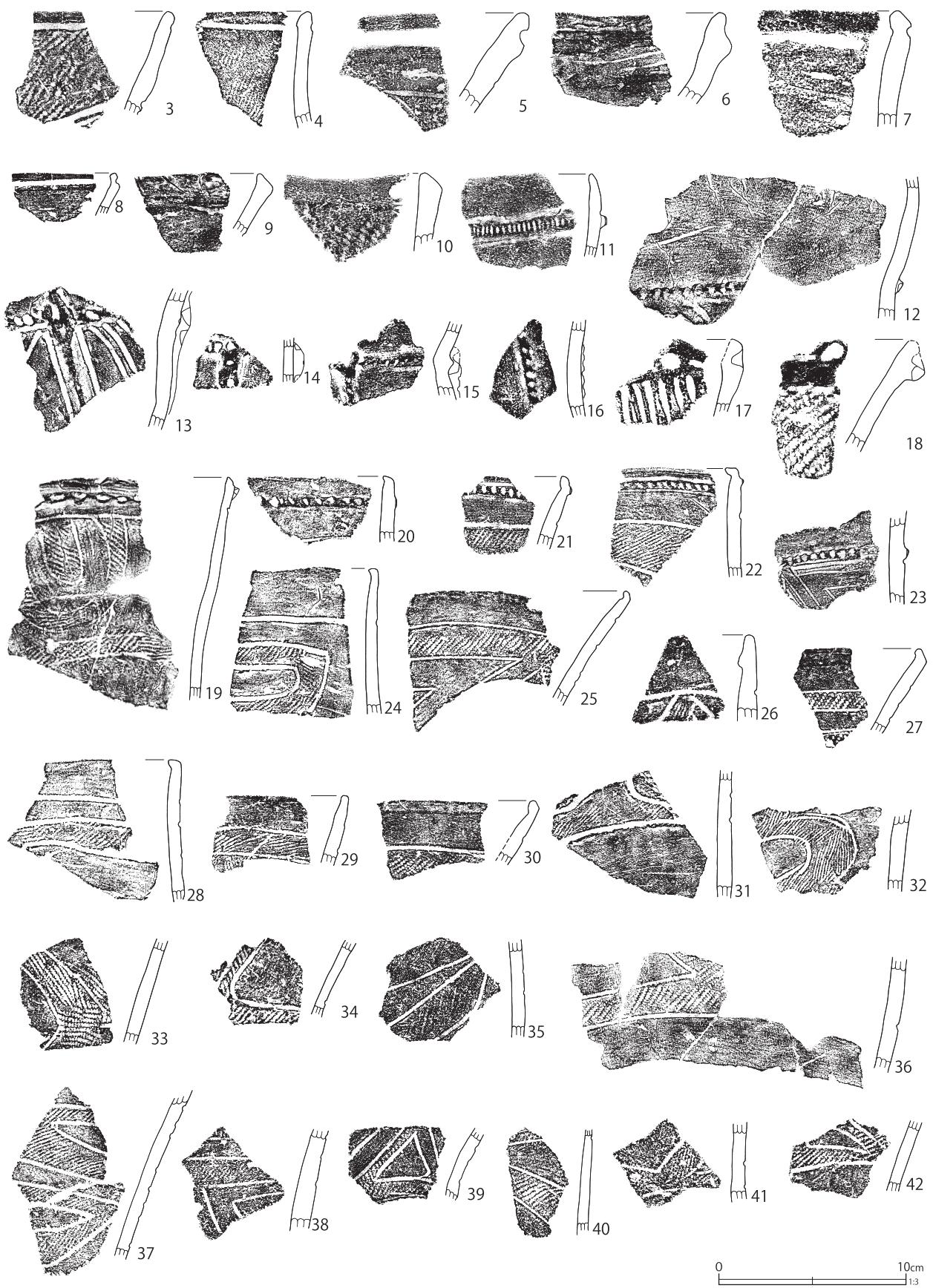
ている。110は体部との接着面が残されており、接着部には沈線文が施文されている。

111はミニチュア土器である。器面は風化が著しい。頸部から底部までが残存している。底径4.5cm、残存高4.0cmである。

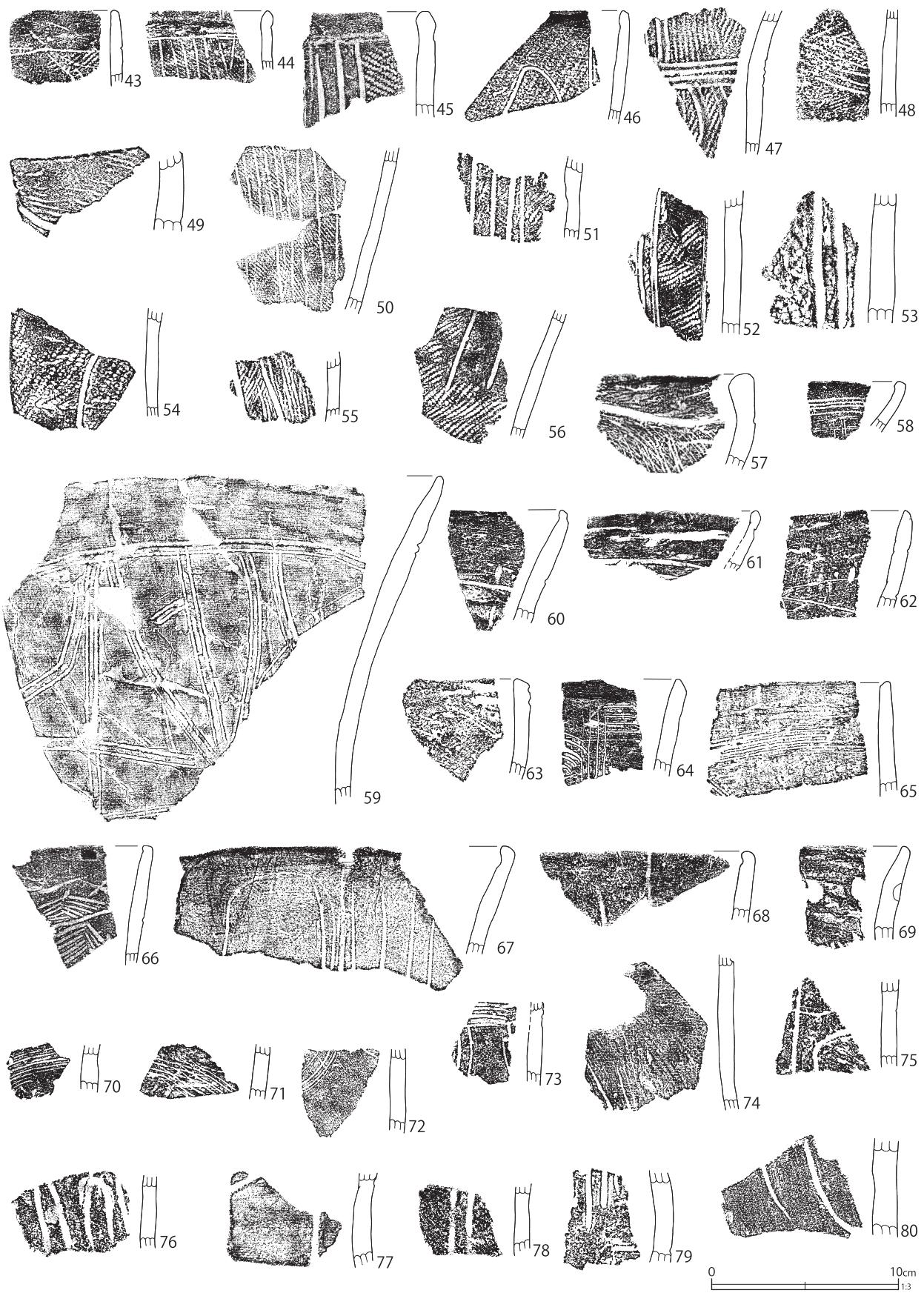
112・113、115は出土した石器である。112は小型の定角式の磨製石斧である。113は石錐である。右側縁に擦れによる、擦痕が認められる。115はチャート製の石核で、部分的に原礫面が残存している。

114は石製品で、小型の石棒である。表裏面の中央部は平坦に磨かれている。下端部は破損している。

第3次調査

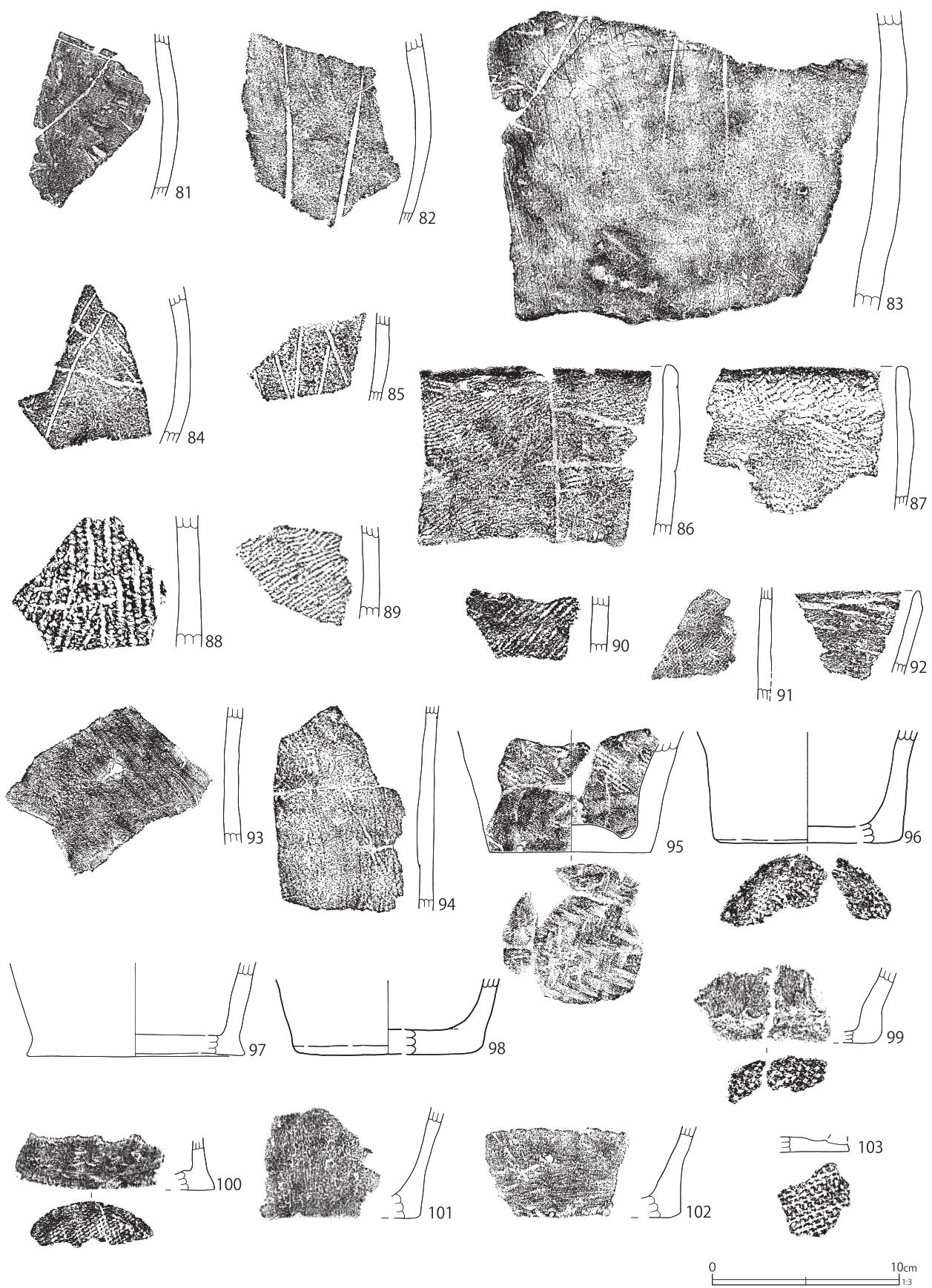


第30図 第31号住居跡出土遺物（2）

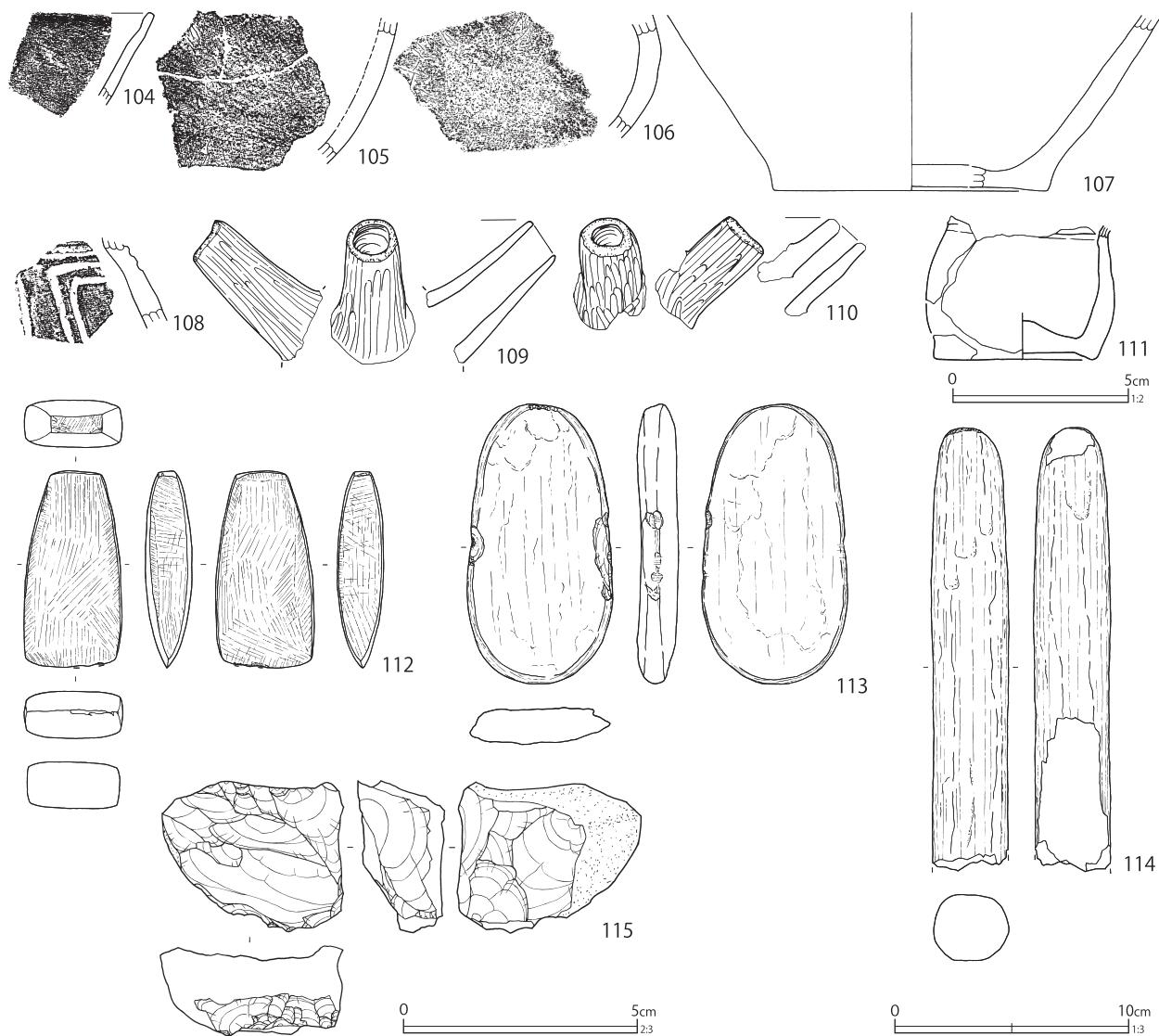


第31図 第31号住居跡出土遺物（3）

第3次調査



第32図 第31号住居跡出土遺物（4）



第33図 第31号住居跡出土遺物（5）

第99号住居跡（第34図、第5・6表）

住居跡はI-22・23グリッドに位置する。西側の一部が古墳時代前期の第76号住居跡によつて壊されている。平面形態は、南西方向に張り出し部をもつ柄鏡形である。主体部は円形で、張り出し部の先端には浅い掘り込みが確認された。覆土は、北壁の一部と張り出し部先端にわずかに残存していた。

残存する規模は、長軸方向が5.89m、短軸方向が4.22mである。主軸方向の主体部は4.03m、張り出し部は1.86mである。

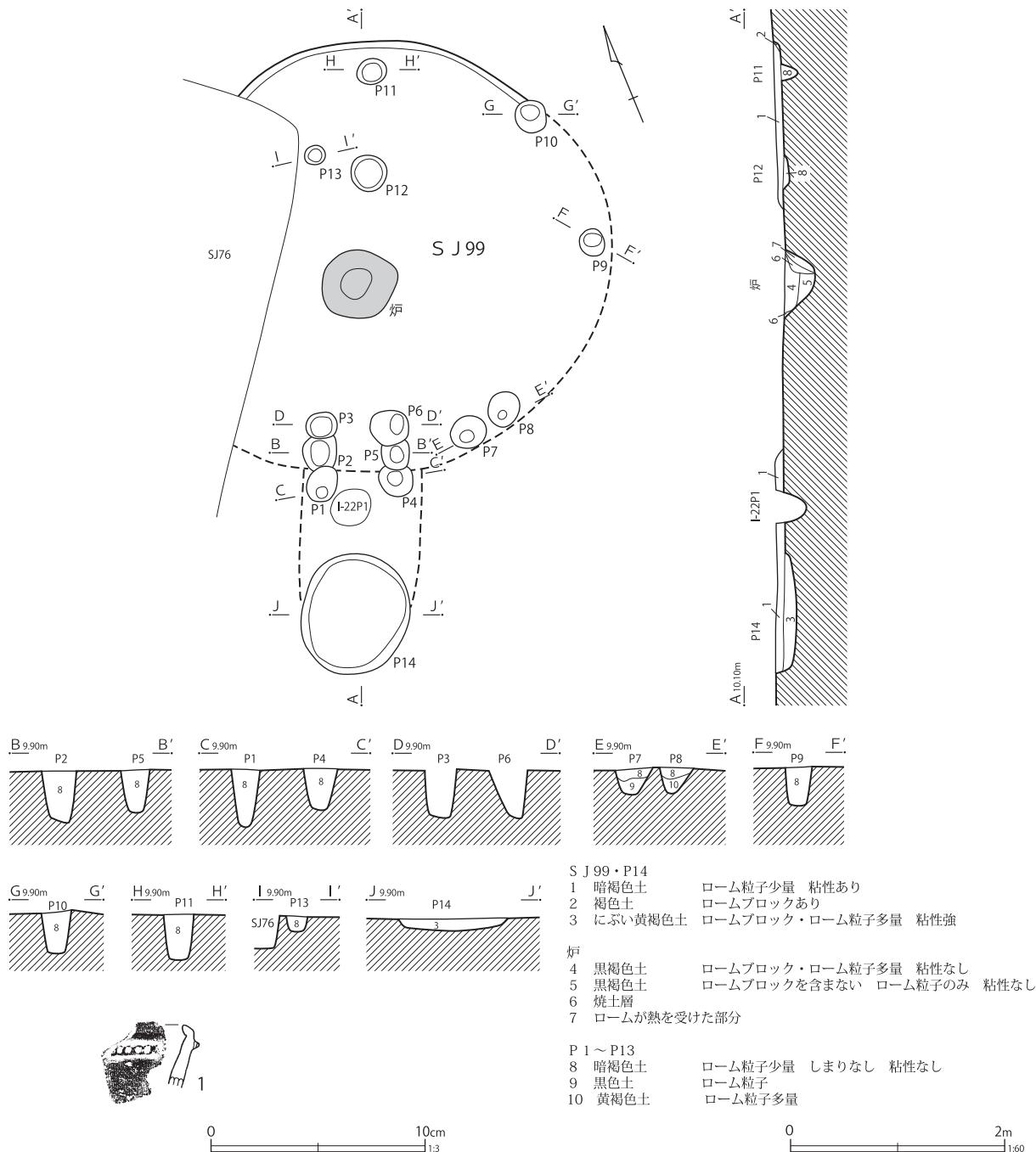
柱穴は13本が検出された。P12、13は浅く

掘り込まれていた。他は壁面に沿つて掘り込まれ、しっかりととした深い掘り込みが残されている。入口部には、P1～3とP4～6が対ピットとして掘り込まれている。

炉跡は主体部のほぼ中央から検出された。擂鉢状に掘り込まれ、地床炉である。規模は、主軸方向0.69m、主軸直交方向0.63mである。

図示できる遺物は、第34図1の土器片のみであった。1は深鉢形土器の口縁部の破片である。口縁部に刻みをもつ隆帯を巡らし、口縁の内面には沈線を1本巡らしている。遺物から、住居跡の時期は堀之内2式期であると考えられる。

第3次調査



第34図 第99号住居跡・出土遺物

第5表 第99号住居跡ピット計測表

番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ	番号	長径	短径	深さ
P 1	33.0	27.0	54.0	P 2	(26.0)	32.0	47.0	P 3	29.0	25.0	44.0
P 4	33.0	29.0	37.0	P 5	(17.0)	26.0	38.0	P 6	37.0	34.0	44.0
P 7	34.0	30.0	23.0	P 8	32.0	28.0	24.0	P 9	25.0	22.0	34.0
P 10	30.0	28.0	39.0	P 11	27.0	25.0	41.0	P 12	33.0	32.0	4.0
P 13	20.0	18.0	12.0	P 14	113.0	100.0	11.0				

第6表 縄文時代の住居跡計測表

遺構名	グリッド	長軸（主軸）	短軸（副軸）	深さ	方位	形態	備考
SJ4	K-20・21	[3.15]	4.95	0.05		不整円形	
SJ31	F-19、G-19	[7.70]	(3.30)	0.04		円形か 柄鏡形	SJ31とSJ32が統合
SJ99	I-22・23	5.89	(4.22)	0.05～0.08	N-23° -E		

(2) 埋甕

埋甕は2基検出された。谷の落ち際から検出されたもので、南北方向に近接して検出された。住居跡の埋甕の可能性も考えられたが、主体部は谷によって失われ、斜面から柱穴も検出されなかつたため、単独の埋甕として報告することとした。

第2号埋甕（第35・36図、第7表）

第2号埋甕は、E-15グリッドに位置する。南側0.8mに、第3号埋甕が検出されている。平面形態は円形である。規模は、長軸0.42m、短軸0.42m、深さ0.25mである。第36図1の深鉢形土器の胴下半部が正位に埋設されていた。時期は後期前葉の堀之内1式期である。

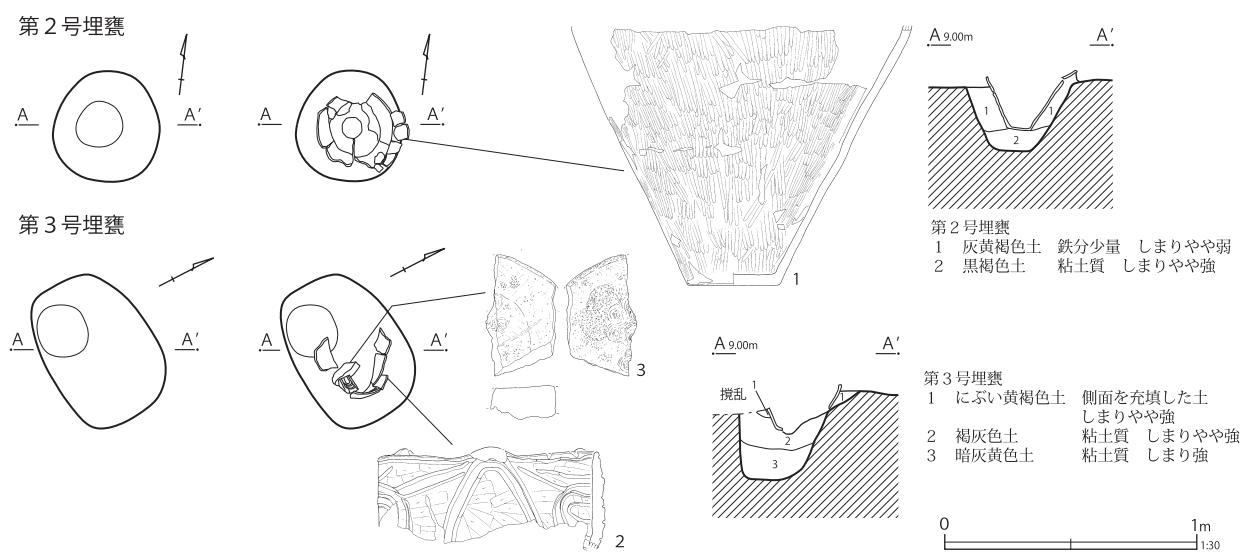
1は、深鉢形土器である。胴上部は失われており、胴下半から底部が残存していた。胴部は無文で、器面はミガキ状に丁寧に調整が施されていた。底径は9.7cm、残存する器高は27.3cmである。

第3号埋甕（第35・36図、第7表）

第3号埋甕は、E-15グリッドに位置する。北側0.8mに、第2号埋甕が検出されている。埋設土器と遺構の一部が搅乱に壊されている。平

面形態は楕円形と考えられる。残存する規模は、長軸0.59m、短軸0.43m、深さ0.34mである。埋設土器は、上層から検出され、第36図2の深鉢形土器の口縁部が正位に埋設されていた。土器の下から、第36図3の石皿の破片が検出された。時期は後期前葉の堀之内1式期である。

2は、深鉢形土器の口縁から胴上部である。口縁は楕円形状で、器形も楕円形状となっている。口縁部は、長径方向が29.4cmと推定され、短径方向は23.5cmである。残存する器高は10.5cmである。口縁は緩やかな突起状の把手が、3単位貼付されている。文様は沈線で施文され、地文は施文されていない。文様は口縁部直下に、1本の沈線文を巡らしている。把手下からは、2本1組の沈線で逆V字状の懸垂文を施文している。口縁直下の沈線文は、逆V地文を抜かして施文されている。把手間の胴部には、沈線で横長の3重の楕円文を施文している。楕円文は、把手から吊り下がるように把手と繋がるように沈線文を施文している。3は、出土した石皿で、破損後破損面を敲石や磨石として再利用している。



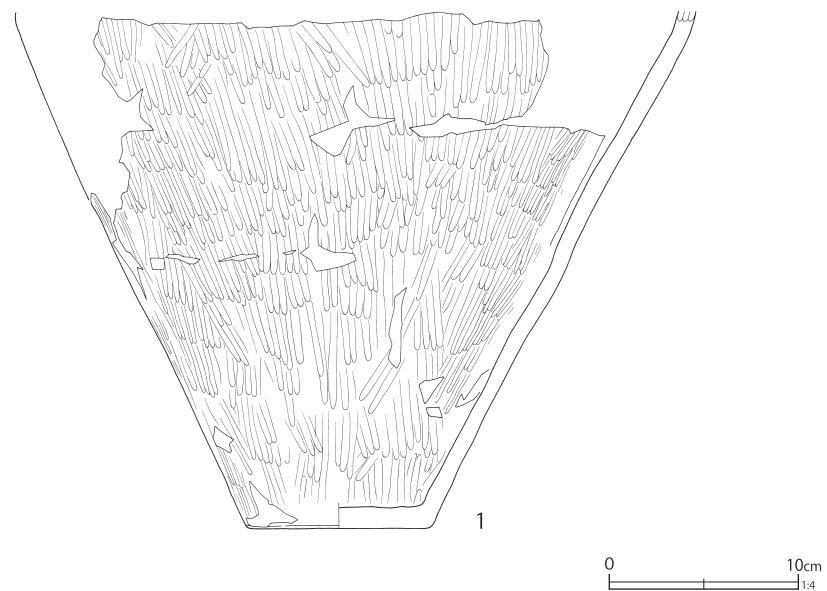
第35図 第2・3号埋甕

第7表 埋甕計測表

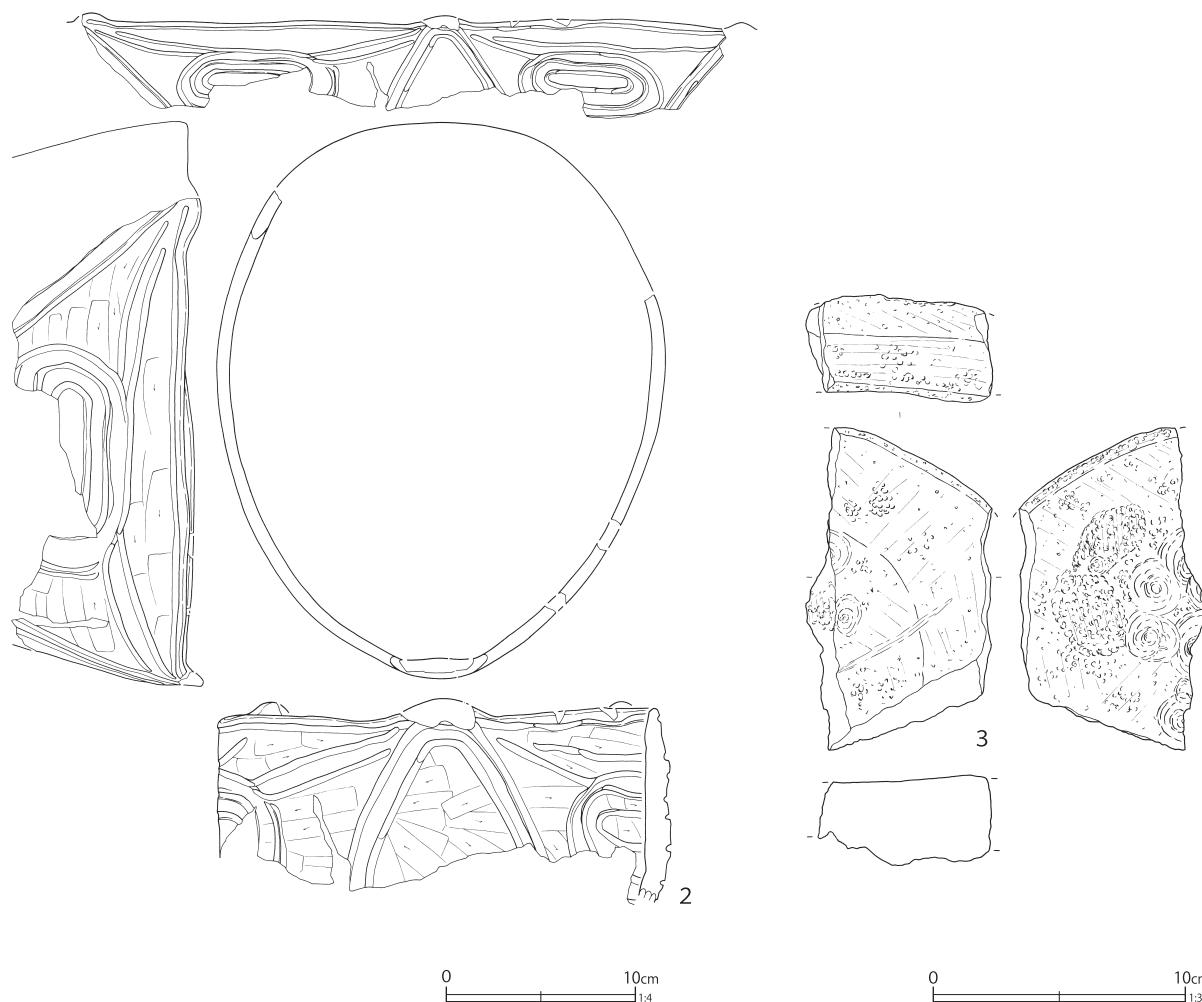
遺構名	グリッド	長軸	短軸	深さ	形態	備考
第2号埋甕	E-15	0.42	0.42	0.25	円形	
第3号埋甕	E-15	0.59	[0.43]	0.34	不整円形	

第3次調査

第2号埋甕



第3号埋甕



第36図 第2・3号埋甕出土遺物

(3) 土壙

第3次調査では、縄文時代の土壙は101基が検出された。調査区全体から検出されている。古墳時代前期以降の遺構などによって、壊されていたものも多数あったと考えられる。遺物が検出されない土壙もあるが、遺物が検出された遺構は、縄文時代後期前葉で、住居跡と同様の時期である。

深く掘られたいわゆる貯蔵穴とされる土壙は、12基検出された。筒状、袋状、フラスコ状の形状をしていた。底面中央に、ピット状の掘り込みがあるものが多数を占めている。また、上層に土器が敷かれたように出土した土壙は、4基検出された。そのうち第673号土壙は中央にピット状の掘り込みが認められた。他に、第650号土壙からは筒形土偶が出土した。

土壙の規模などは、第9表に示した。

第456号土壙（第37・38図）

C-12・13グリッドに位置する。谷部に面する斜面から検出された。

遺物は第38図1の、早期後半の条痕文系土器の胴部破片が1点検出された。覆土は浅く、遺物は流れ込みの可能性もあり、時期は不明である。

第457号土壙（第37・38図）

C-13グリッドに位置する。谷部に面する斜面から検出された。

遺物は第38図2～14が検出された。2・3は、朝顔形の深鉢形土器の破片と考えられる。2は口縁部の破片で、刻みが入る微隆起状の隆帯を2条巡らしている。地文は施文されていない。3は三角形状の文様を施文し、文様内に単節LRの縄文を充填している。4は無文の口縁部で、頸部で括れる器形の深鉢形土器で、頸部に刻みが入った隆帯を巡らして胴部と区画している。5～13は深鉢形土器の胴部の破片である。5～8は沈線で文様を施文している。5は単節RLの縄文を地文としている。6は条線を地文としている。9・10は地文のみが施文される。9は単節RLの縄

文が、10は無節Rの縄文が施文されている。11～13は無文である。14は鉢形土器の底部である。時期は後期前葉堀之内2式期と考えられる。

第458号土壙（第37・38図）

C-13、D-13グリッドに位置する。谷部に面する斜面から検出された。

第38図15～22は出土した土器である。15～19は深鉢形土器の胴部の破片である。15・16は地文が単節LRの縄文で、沈線で文様を施文している。17～19は無文である。朝顔形の深鉢形土器の胴下半と考えられる。20は小型の鉢形土器である。21は深鉢形土器の底部、22は鉢形土器の底部である。

時期は、後期前葉堀之内2式期と考えられる。

第459号土壙（第38・39図）

D-15グリッドに位置する。谷部に面する斜面から検出された。

第39図23～25は出土した土器である。深鉢形土器の胴部の小破片で、23は沈線が施文されている。24は単節RLの縄文が地文として施文される。25は無文の土器である。

時期は後期前葉堀之内式期と考えられる。

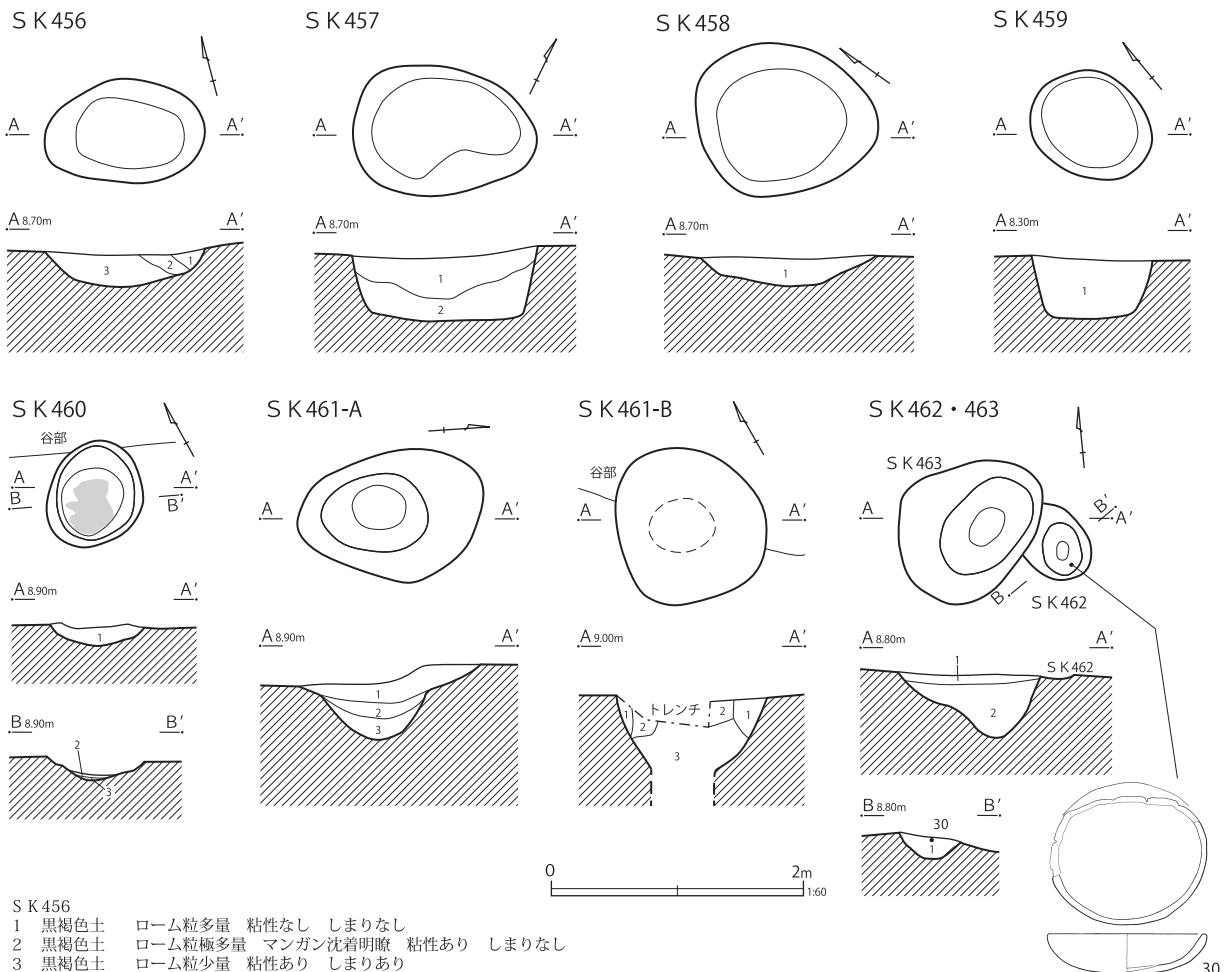
第460号土壙（第37、39～41図）

F-17グリッドに位置する。谷部に面する斜面から検出された。覆土内には焼土が含まれ、最下層から焼土ブロックが多量に検出された。周辺からピットも検出されており、住居跡の炉跡とも考えられるが、確定することができなかつたことから、調査時に土壙としたものである。

覆土内から多量の土器が検出された。第40図1・2は形状が復元できた深鉢形土器である。

1は朝顔形の深鉢形土器である。口縁部から胴上部が残存している。口縁には突起が付き、把手下に「8」字状貼付文を施している。欠損する把手直下には円文が刺突され、把手下に対の円文が刺突されていたと推定される。口縁下は沈線を巡らして、胴部と区画している。口縁の内面には、

第3次調査



SK 456
1 黒褐色土 ローム粒多量 粘性なし しまりなし
2 黒褐色土 ローム粒極多量 マンガン沈着明瞭 粘性あり しまりなし
3 黒褐色土 ローム粒少量 粘性あり しまりあり

SK 457
1 黒褐色土 ローム粒子多量 わずかにマンガン沈着 粘性あり しまりややあり
2 黒褐色土 ローム粒子少量 粘性あり しまりなし

SK 458
1 明褐色土 ローム粒子極多量 粘性なし しまり弱

SK 459
1 黒褐色土 ローム粒子少量 粘性あり
※底面はローム層（黄褐色土）湧水あり

SK 460
1 黒色土 焼土粒子（2～4mm）中量 粘性強 しまり強
2 褐灰色土 焼土粒子（2～5mm）多量 やや粘りあり
3 灰褐色土 焼土ブロック（10～30mm）多量 しまりあり

SK 461-A
1 褐灰色土 ロームブロック混じり 粘性強 しまり強
2 黒褐色土 粘性強 しまり強
3 灰黃褐色土 粘性強 しまり強

SK 461-B
1 黒褐色土 ローム粒子極多量 炭化粒子少量
2 黒褐色土 ローム粒子やや大粒で粗い
3 黒褐色土 ローム粒子多量 炭化粒子わずか
ローム粒子やや大粒
ローム粒子少量

SK 462
1 黒褐色土 砂粒微量 粘性なし しまり極弱

SK 463
1 褐灰色土 粘性強 しまり強
2 黒褐色土 灰色粒（2～3mm）中量 粘性強 しまり強

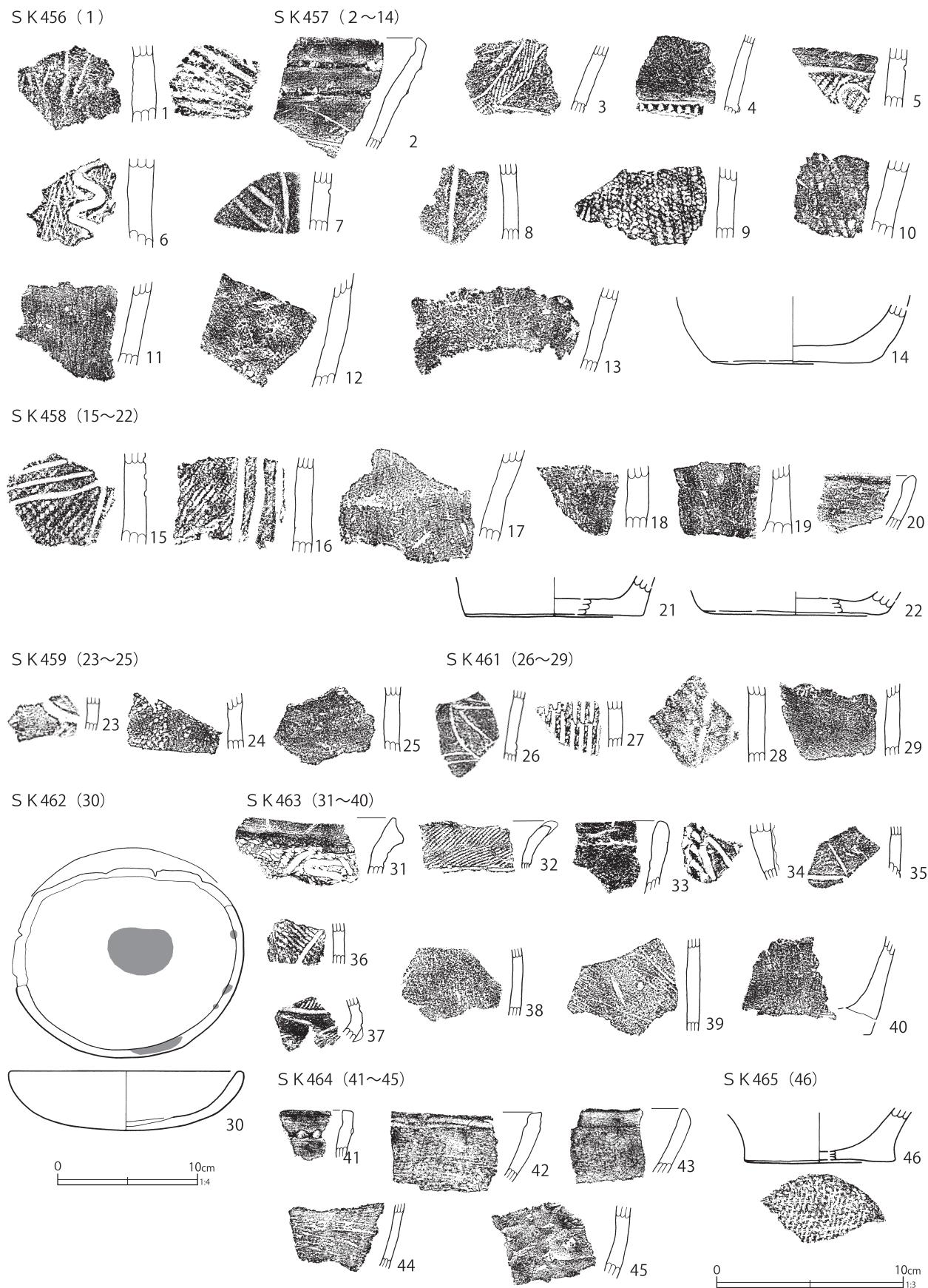
第37図 第456号土壤～第463号土壤

沈線を巡らしている。胴上部を沈線で施文し、やや崩れた三角形状の文様を、入れ子状に施している。沈線文様下には地文として単節L Rの縄文を横や斜め方向に施文している。胴下半は無文で、ナデ状の器面調整が施されている。推定される口径 28.4 cm、残存高 27.8 cmである。

2は深鉢形土器で、口縁から胴上部が残存していた。口縁内面には、沈線を巡らしている。器面に地文は施されず、沈線によって、懸垂文と逆U字文が施文されている。推定される口径 44.8 cm、

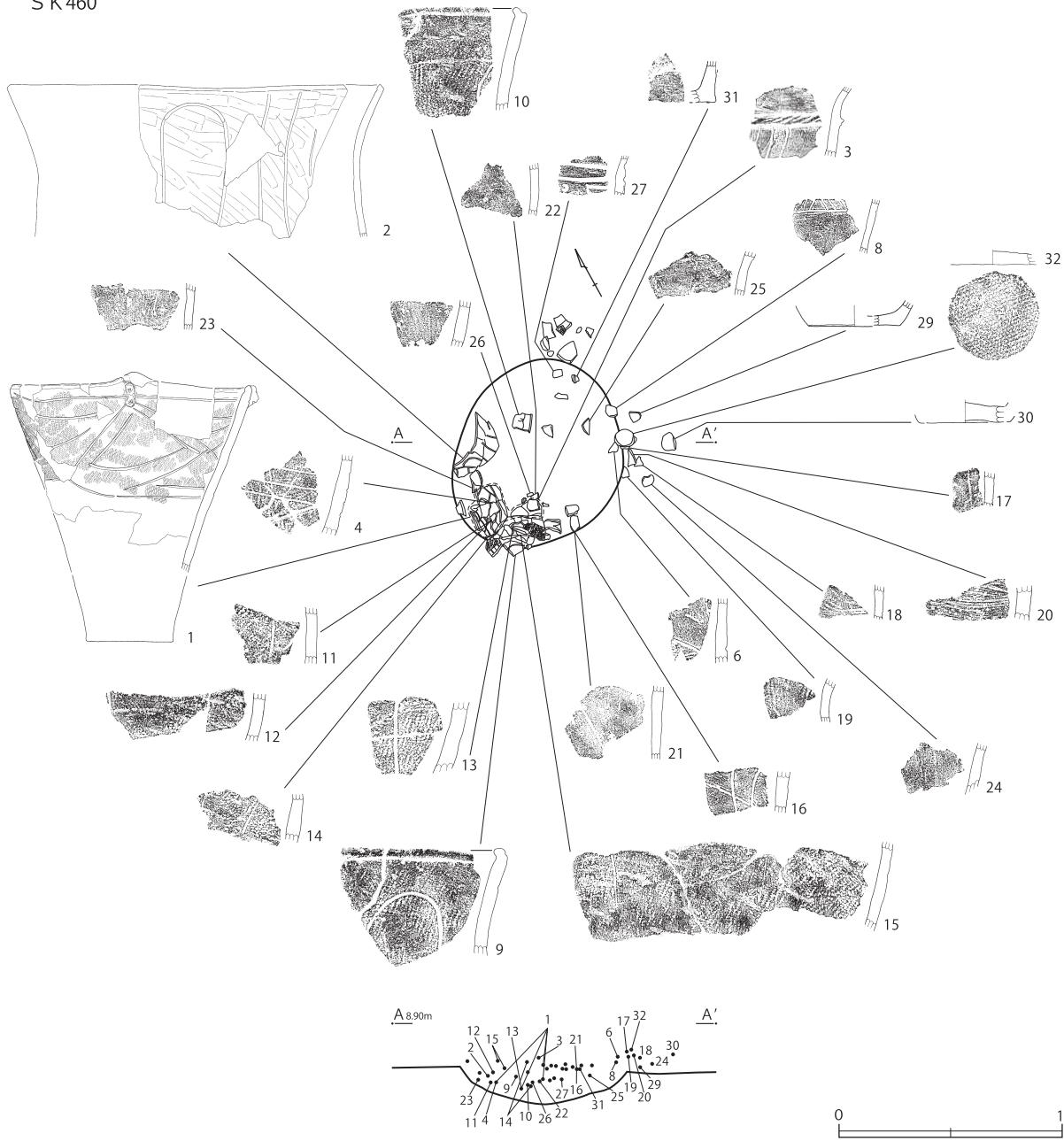
第8表 第462号土壤出土木製品観察表

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ（高さ）	木取り	備考	図版
1	木製品	鉢	(15.0)	(16.8)	4.4	横木取り	No.1 内面炭化 楕円形	



第38図 土壌出土遺物（1）

SK 460



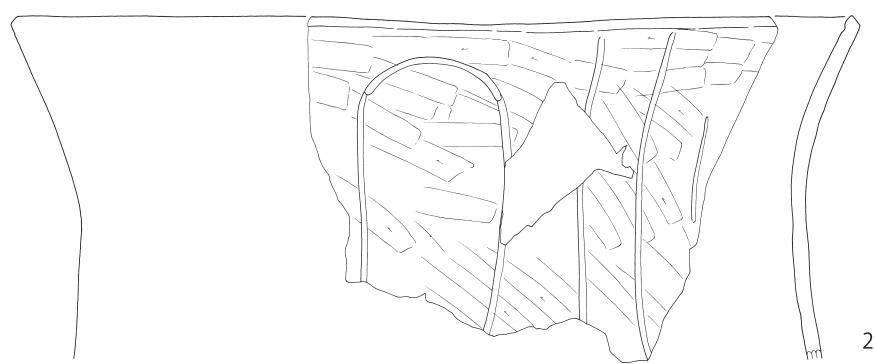
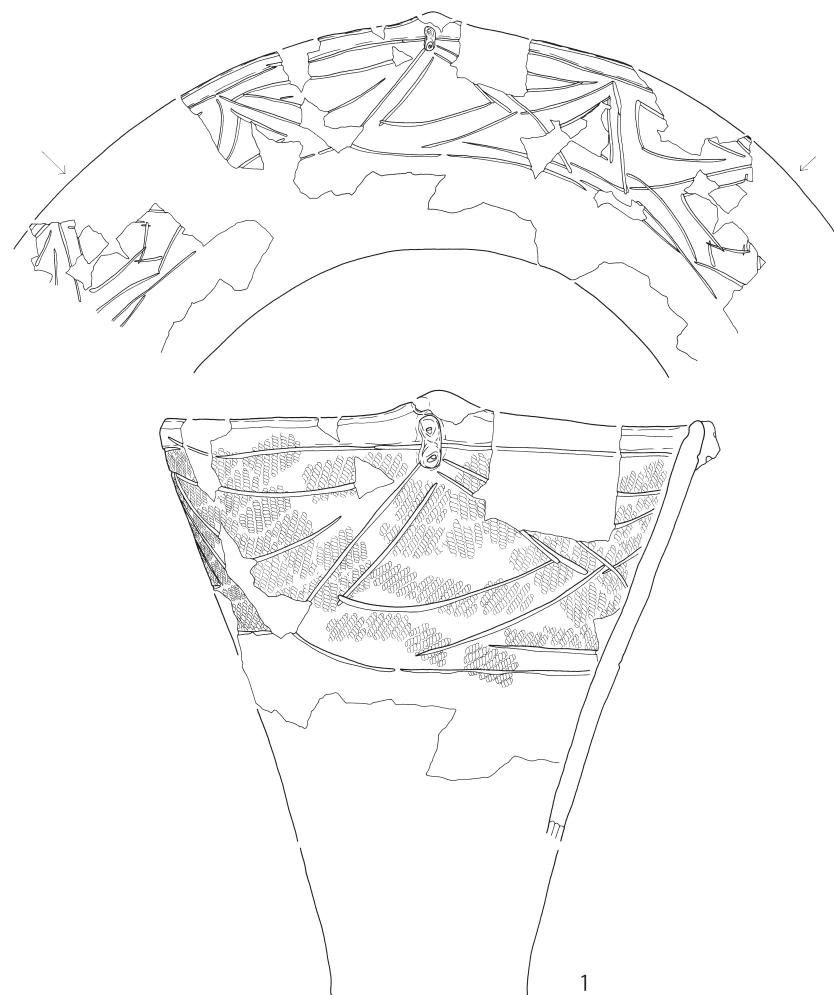
第39図 第460号土壤遺物出土状況

残存高 18.2 cm である。

第41図 3～32 は出土した深鉢形土器の破片である。20 は、早期後半の条痕文系土器の破片である。3 は無文の口縁部から頸部で括れ、胴部は丸みを帯びて底部に至る器形である。頸部に刻みが入る隆帶を巡らしている。胴部には、単節 L R の縄文を充填する平行沈線による文様を施している。4～8 は、朝顔形の器形で、胴上部を沈線で区画し、文様を施すもので、胴下半は無

文となる深鉢形土器である。4～7 は文様内に縄文を充填するもので、そのうち 5 は文様外に縄文を施している。6 は無節 L の縄文を、他は単節 L R の縄文を施している。8 に地文は施されていない。9～15 は、縄文を地文とし、沈線文を施す深鉢形土器である。地文はいずれも単節 L R の縄文である。9 は口唇部が内面に内屈し、その直下に沈線が巡っている。口縁部直下に沈線を巡らし、胴部に逆 U 字文を施している。

SK 460 (1・2)

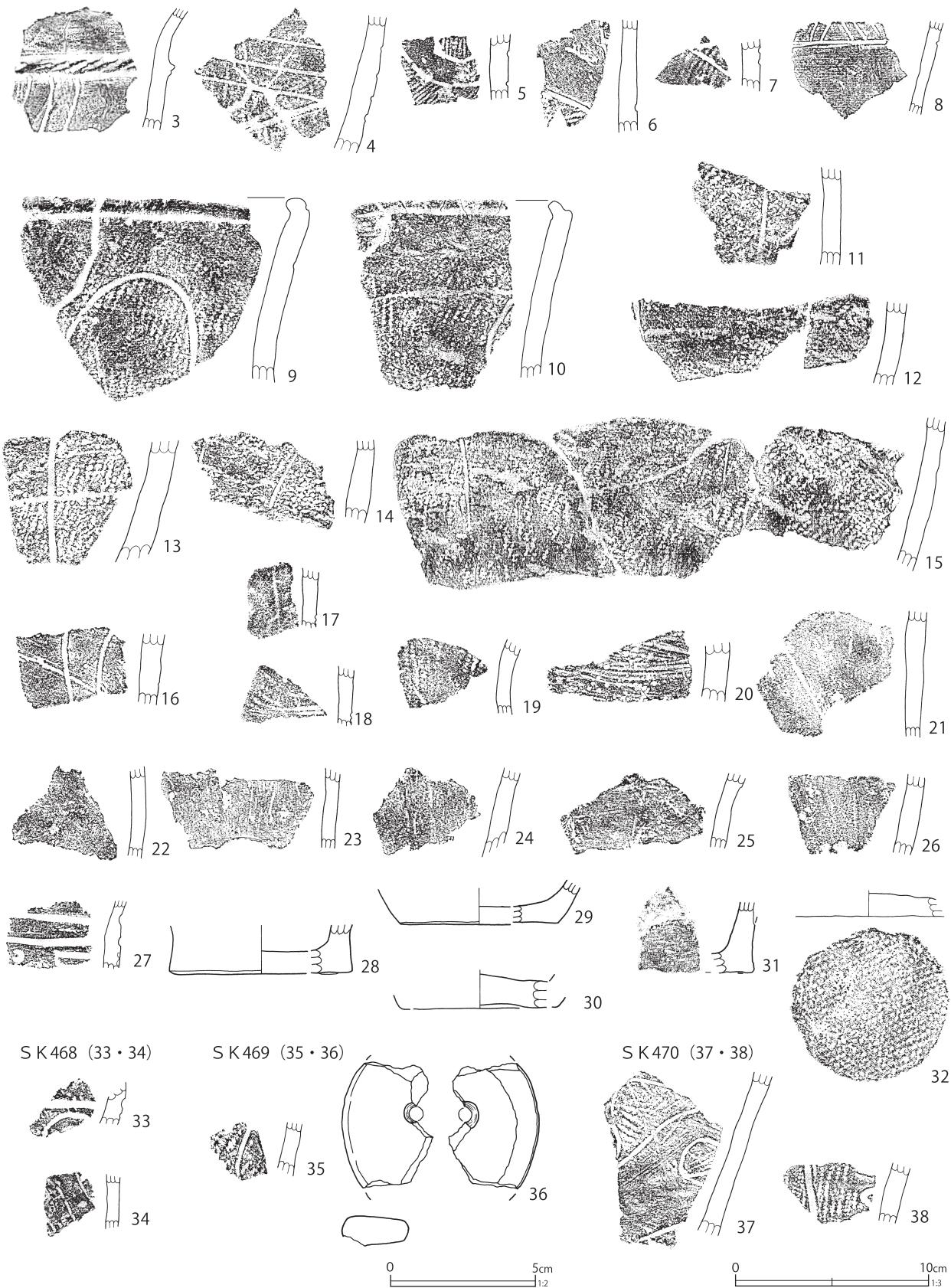


0 10cm
1:4

第40図 土壌出土遺物（2）

第3次調査

SK 460 (3~32)



第41図 土壌出土遺物 (3)

10～15は同一個体と考えられるものである。内面に内屈した口唇部下に沈線を巡らしている。肥厚する口縁部直下には沈線を巡らす。文様は沈線によって施文され、直線的な懸垂文と逆U字文を施文している。16・17は、地文が施文されないもので、沈線によって懸垂文が施文されている。18・19は、地文である単節LRの縄文のみが施文される。21～26は無文で、4～8の土器の胴下半であると考えられる。27は小型の土器で、壺形土器である。28～32は底部の破片である。

時期は堀之内2式期と考えられる。

第461-A号土壙（第37・38図）

D-14グリッドに位置する。谷部に面する斜面から検出された。

第38図26～29は出土した深鉢形土器の胴部の破片である。26は沈線で横方向に区画した内側に弧線で文様を施文している。27は条線を地文として施文している。28は沈線による懸垂文が施文される。29は無文である。

時期は後期前葉堀之内式期と考えられる。

第461-B号土壙（第37図）

D-14グリッドに位置する。谷部に面する斜面から検出された。フラスコ状の土壙になると考えられるが、安全のため調査時は底部まで調査されなかつた。遺物は出土しなかつた。

時期は不明である。

第462号土壙（第37・38図、第8表）

E-16グリッドに位置する。谷部に面する斜面から検出された。第463号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。

第38図30は出土した鉢形木製品である。口縁の形状は橈円形である。内面は炭化していた、

時期は後期と考えられる。

第463号土壙（第37・38図）

E-16グリッドに位置する。谷部に面する斜面から検出された。第462号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。

第38図31～40は出土した深鉢形土器の破片である。31は肥厚する口縁部で、地文として単節LRの縄文を施文する。沈線によって蕨手状蛇行沈線文が施文されている。32は波状口縁で、頸部で括れる器形である。単節LRの縄文が施文されている。33は無文の口縁部である。34は刻みが入る隆帯施文するが、刻みは縄文原体による圧痕で施文している。35は三角形状の沈線文を施文し、単節LRの縄文を充填している。36は沈線文を施文している。地文は無節Rである。37は屈曲するもので、貼付文が施されている。38～40は無文である。31～36は堀之内式期、37～39は加曾利B式期である。

時期は後期と考えられる。

第464号土壙（第38、42図）

F-17グリッドに位置する。谷部に面する斜面から検出された。第472号土壙、グリッドピットP13・14を壊している。

第38図41～45は出土した土器である。41は深鉢形土器で、口縁部下に刻みが入った隆帯を巡らしている。42・43は鉢形土器の無文の口縁部の破片である。44・45は深鉢形土器の無文の胴部破片である。

時期は後期前葉と考えられる。

第465号土壙（第38、42図）

F-17グリッドに位置する。谷部に面する斜面から検出された。第464、472号土壙と隣接している。

第38図46は出土した深鉢形土器の底部である。器面は無文で、底部に網代痕が残されている。

時期は後期前葉と考えられる。

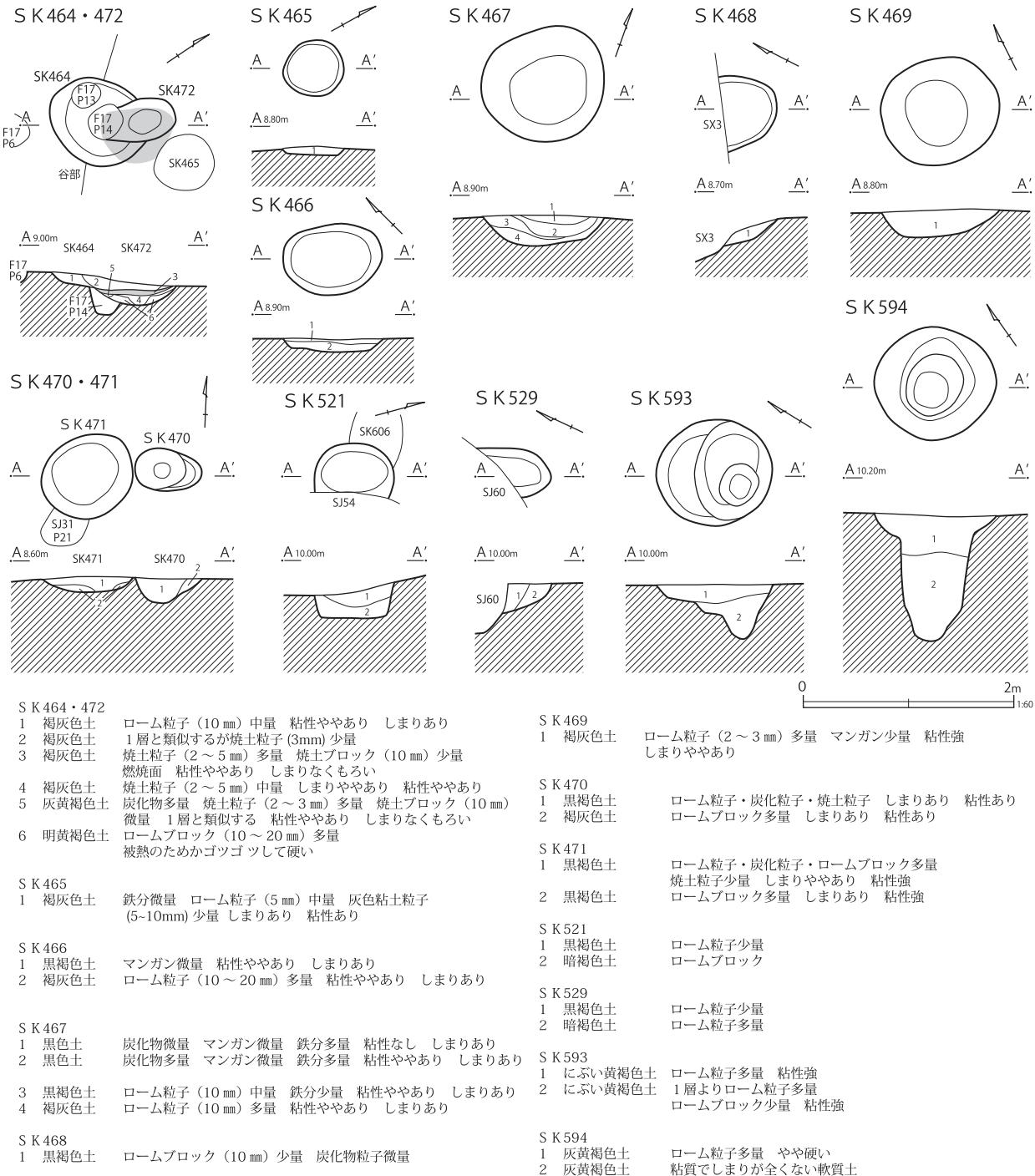
第466号土壙（第42図）

G-19グリッドに位置する。第31号住居跡の南側から検出された。遺物が検出されなかつたため、時期は不明である。

第467号土壙（第42～45図）

G-19グリッドに位置する。第31号住居跡

第3次調査

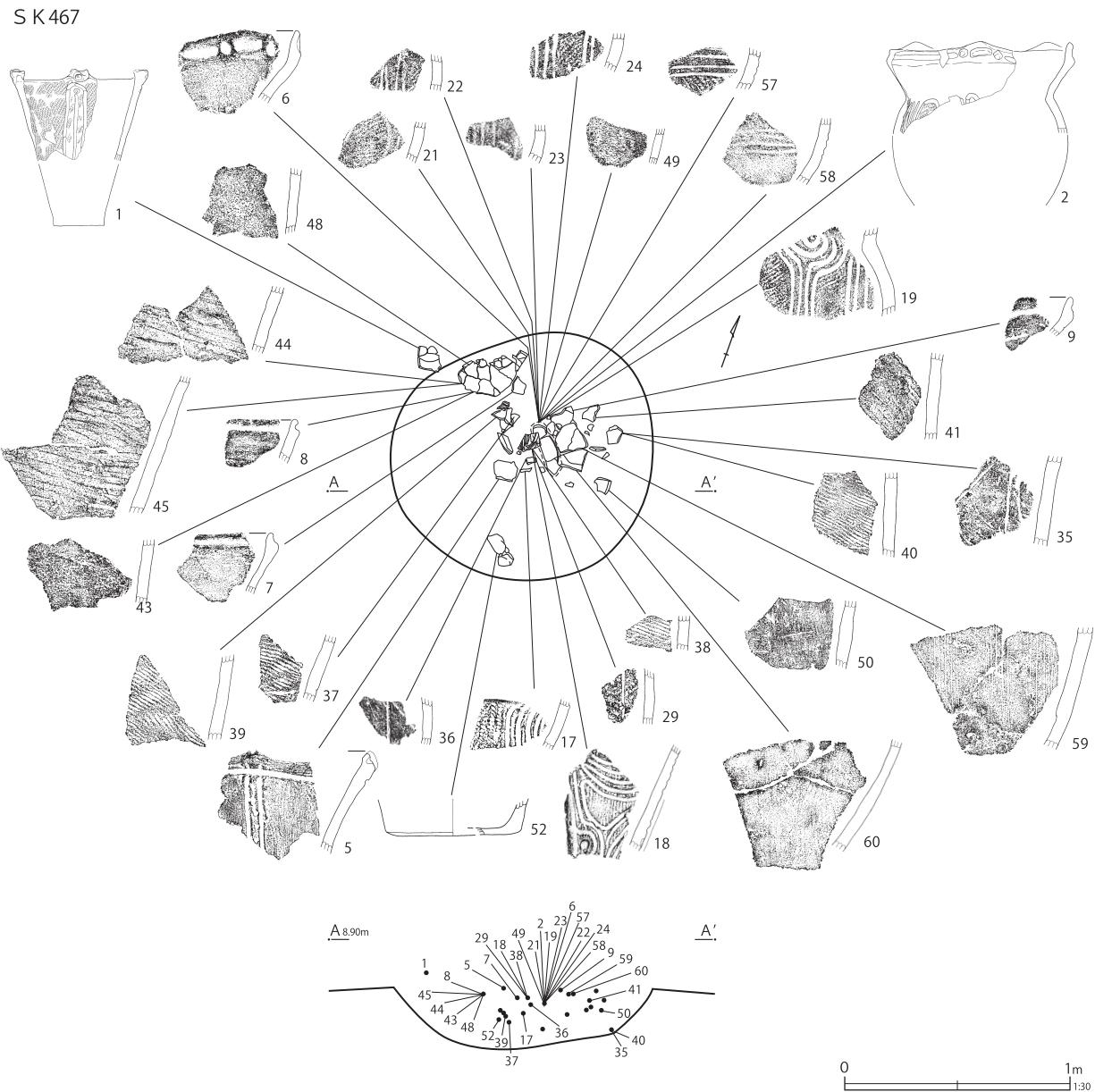


第42図 第464号土壙～第594号土壙

の南側から検出された。西側に第466号土壙が隣接している。覆土内からは、遺物が多量に検出された（第43図）。土器敷状に近い状態で検出され、床面直上からは、第44図35、40の土器片が検出された。

第44図1～43、第45図44～63は出土した土器である。

1・2は器形の復元ができた深鉢形土器である。1は口縁部に4単位の突起が付くと推定される。突起には円文が刺突されている。突起下には逆U字文が施文され、その内側の上端に円文が刺突され、その下から沈線を垂下させている。地文は単節L Rの縄文で横方向に施文している。推定される口径16.3cm、残存する器高10.7cmであ



第43図 第467号土壤遺物出土状況

る。2は肥厚する口縁から頸部で括れ、胴部が丸みを帯びる器形の土器である。口縁は3単位の突起をもつと考えられ、突起下に方形の凹みをつけその両側に円文を施している。肥厚部分の中央に幅広の沈線を施している。胴部には沈線で懸垂文や逆U字文を施している。逆U字文内には単節R Lの縄文を充填している。推定される口径22.2 cm、残存する器高10.8 cmである。

3～63は出土した土器片である。3は後期中葉加曾利B2式の把手である。4～15は深鉢形

土器の口縁部の破片である。4～7、10は波状口縁となるものである。4～10は口縁が肥厚するものである。4は肥厚した下に、他は肥厚部分の中央に沈線を巡らしている。4は把手中央に沈線を施し、把手の両側に円文を刺突している。把手下には平行沈線を垂下させ、その内側に刺突列を施している。6・7は、2と同一個体である。11～30は地文を施し、沈線によって文様を施文する深鉢形土器の破片である。11～14は、口縁部下に沈線を巡らすもので、地文として単節L

第3次調査



第44図 土壌出土遺物 (4)

Rの縄文を横方向に施文する。11・12は同一個体、14・15は同一個体である。14・15の器面には沈線で蕨手状蛇行沈線文を施文している。16～30は胴部の破片で、地文は単節L Rの縄文を施文している。17～19は2と同様の器形である。31～36は地文が施文されないので、沈線で文様を施文している。37～40は地文のみが施文される胴部の破片で、いずれも地文として無節Rの縄文を施文する。41～50は無文の胴部の破片である。44・45は同一個体で、器面に調整痕が残る。51～54は底部である。55～63は深鉢形土器以外の器形の、鉢形や浅鉢形土器である。

時期は後期前葉堀之内1式期である。

第468号土壙（第41・42図）

D-19グリッドに位置する。第31号住居跡内から重複して検出された。古墳時代前期の水場遺構によって、北半分が失われている。

第41図33・34は出土した深鉢形土器の胴部小破片である。

時期は後期前葉と考えられる。

第469号土壙（第41・42図）

G-19グリッドに位置する。古墳時代前期の水場遺構の東側に位置している。

第41図35・36は出土遺物である。35は深鉢形土器の胴部小破片で、地文としてL Rの縄文を施文し、沈線で文様を施文している。36は土製品で、破損した底部中央に円孔を穿孔している。

時期は後期前葉である。

第470号土壙（第41・42図）

G-19グリッドに位置する。第31号住居跡内から検出された。

第41図37・38は出土した深鉢形土器の胴部破片である。いずれも沈線で文様を施文する。37は文様内に、無節Lの縄文を充填している。38は地文として単節L Rの縄文を施文する。

時期は、後期前葉と考えられる。

第471号土壙（第42、48図）

G-19グリッドに位置する。第31号住居跡内から検出され、住居跡のP 21と重複する。

第48図1・2は出土した深鉢形土器の破片である。1は口縁部で、平行沈線文内に単節L Rの縄文を充填している。2は条線を矢羽状に施文している。

時期は後期前葉と考えられる。

第472号土壙（第42図）

F-17グリッドに位置する。第464号土壙に壊されている。遺構は上面に焼土が確認され、底面には燃焼面が検出された。炉跡であった可能性が高い。炉跡とすれば、土壙を囲うように検出された周辺のグリッドピットが柱穴と推定される。

時期は後期前葉と考えられる。

第521号土壙（第42図）

L-25グリッドに位置する。古墳時代前期の第54号住居跡によって東側の一部が壊されている。縄文時代の第606号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第529号土壙（第42図）

J-23グリッドに位置する。古墳時代の第60号住居跡によって西半部が壊されている。遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

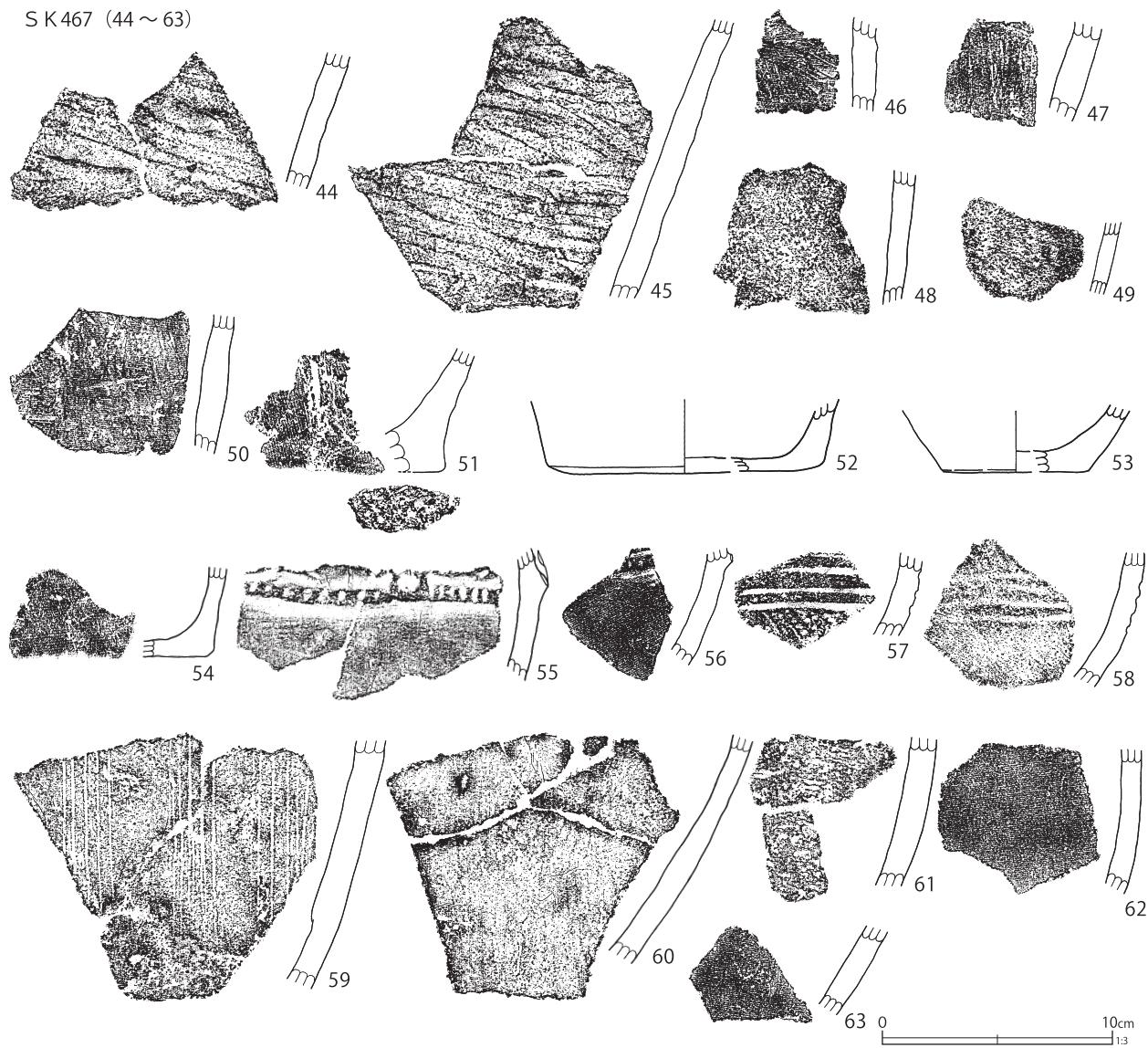
第593号土壙（第42図）

L-24グリッドに位置する。第6号方形周溝墓の方台部分から検出された。遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第594号土壙（第42、48図）

K-24グリッドに位置する。上部が開き、底部にかけて筒状に深くなる土壙である。中央にはピット状の掘り込みが認められる。

第48図3～6は出土した遺物である。3・4は沈線で文様が施文された深鉢形土器の胴部片である。3は半裁竹管で文様を施文する。単節L R



第45図 土壌出土遺物（5）

の縄文を施文している。5・6は無文である。

時期は後期前葉と考えられる。

第596号土壌（第46、48図）

J-25グリッドに位置する。一部が、古墳時代前期の第57号住居跡によって壊されている。筒状に深く掘り込まれるもので、底面中央にはピット状の浅い掘り込みが認められる。

第48図7～14は出土した土器である。7は器形復元が可能であった注口土器である。胴部中央の最大径部分に隆帯を巡らし、口縁部側に2本1組の平行沈線文で文様を施文している。8～14は深鉢形土器の破片である。8～10は口縁部

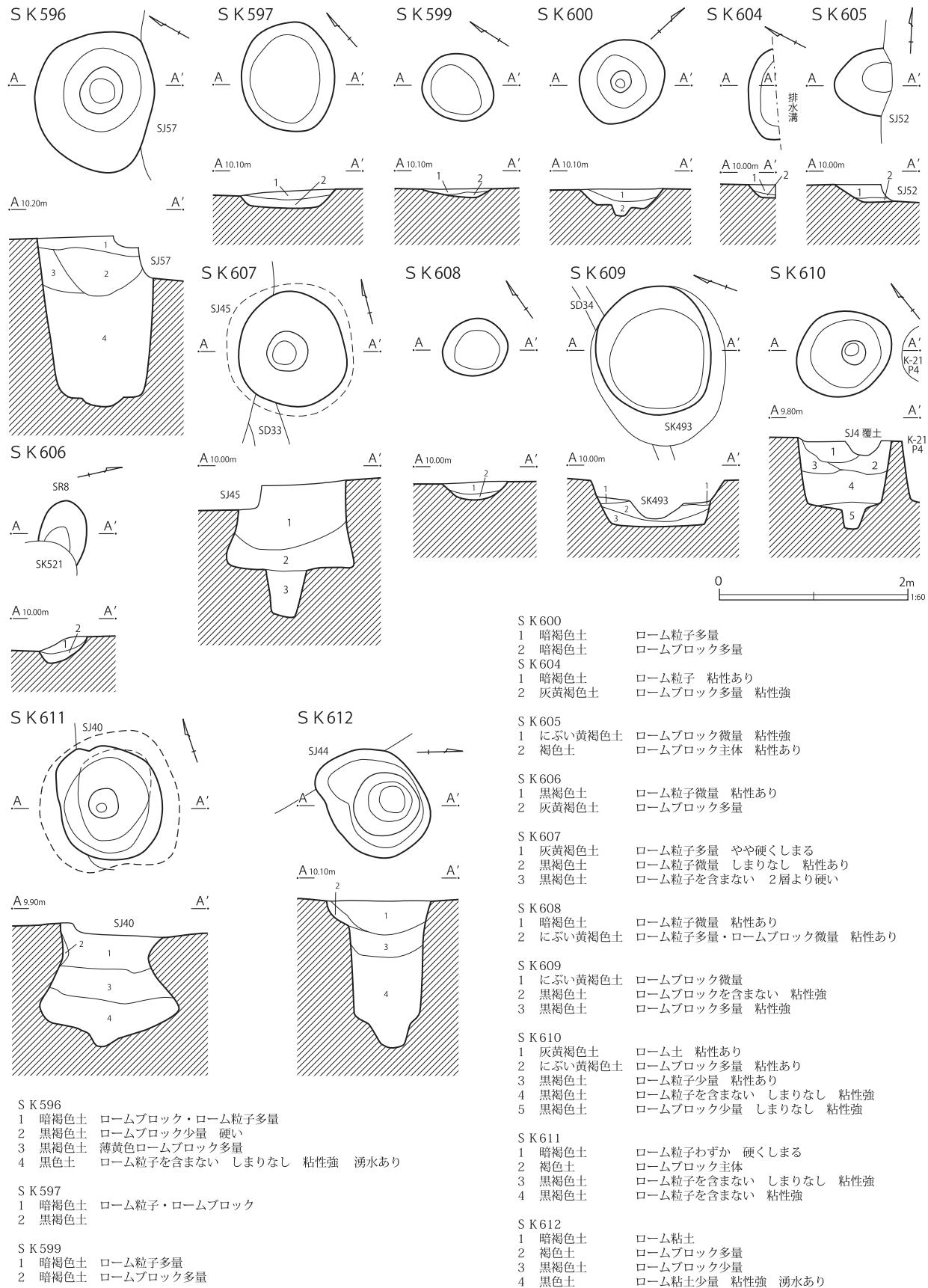
で、11～14は無文の胴部である。8は波状口縁部で、三角形状の平行沈線文間に単節R Lの縄文を施文するものである。口縁部の内面に文様を施文するもので、波頂部下は橢円区画文を施文し、内側に円形刺突列を施している。波底部には円形刺突文を施文している。9は地文である単節R Lのみが施文される。10は沈線で文様を施文している。

時期は、後期前葉堀之内2式期と考えられる。

第597号土壌（第46、48図）

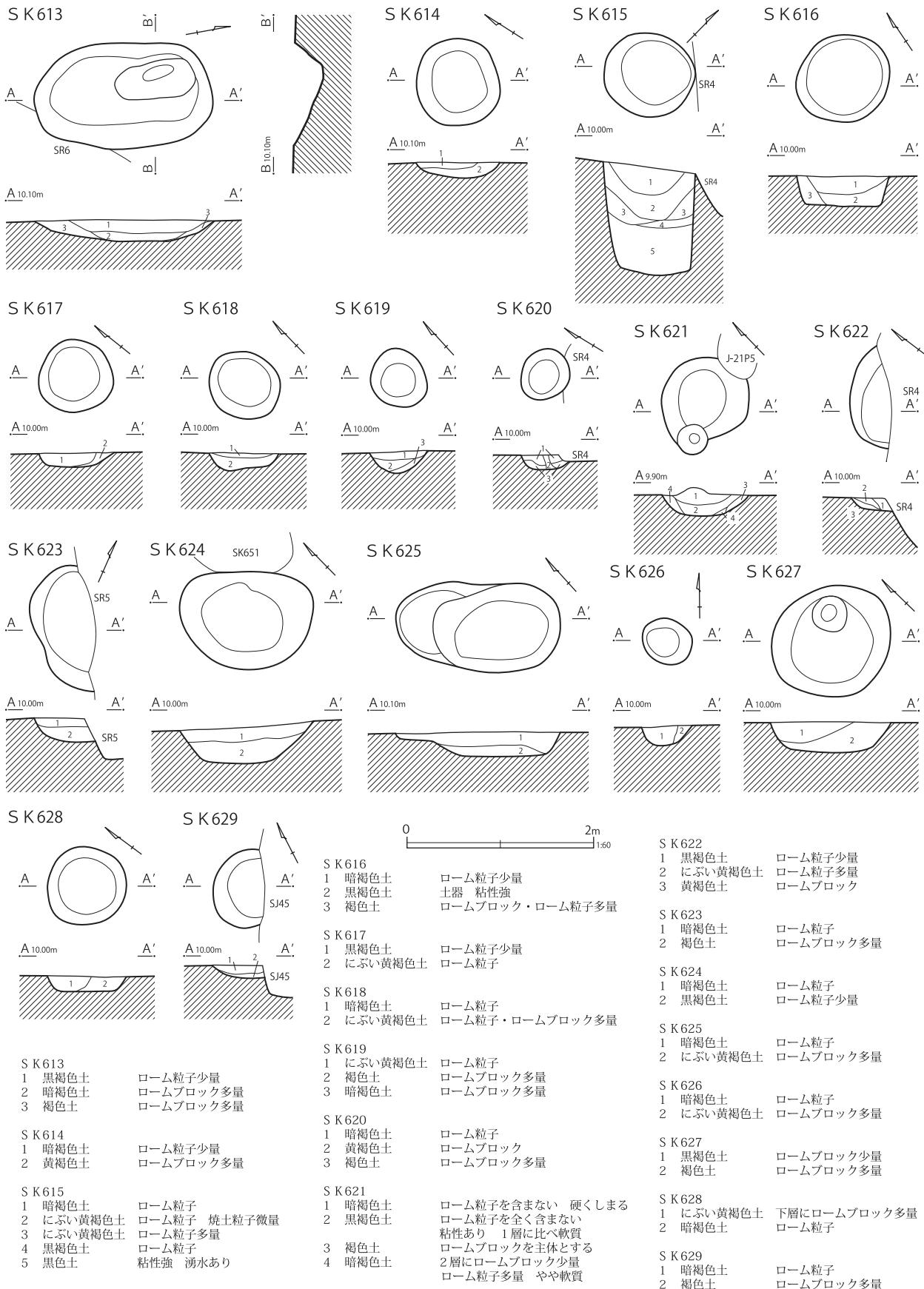
J-25グリッドに位置する。

第48図15～18は出土した土器片である。15



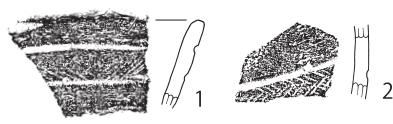
第46図 第596号土壤～第612号土壤

第3次調査

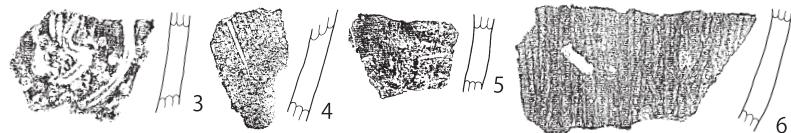


第47図 第613号土壤～第629号土壤

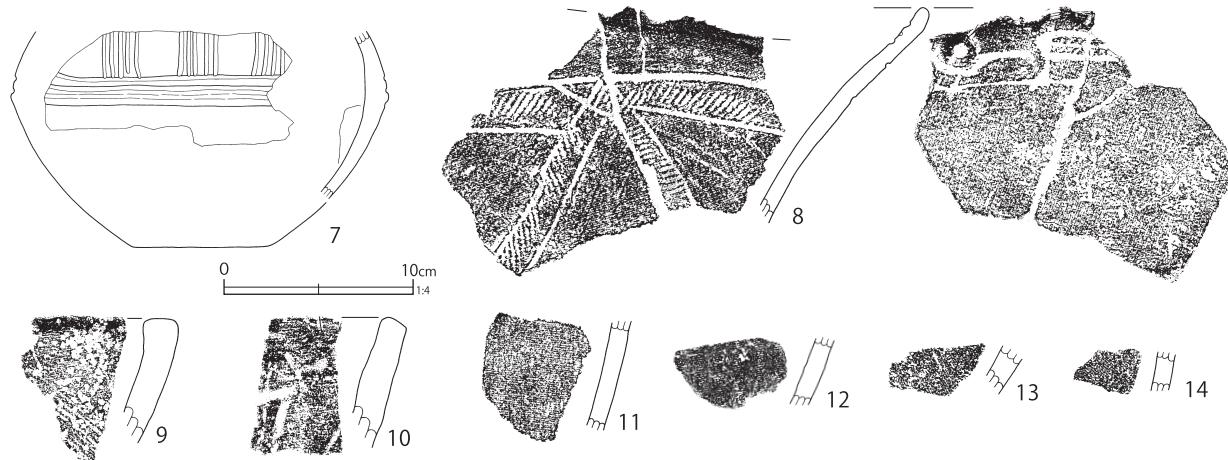
S K471 (1・2)



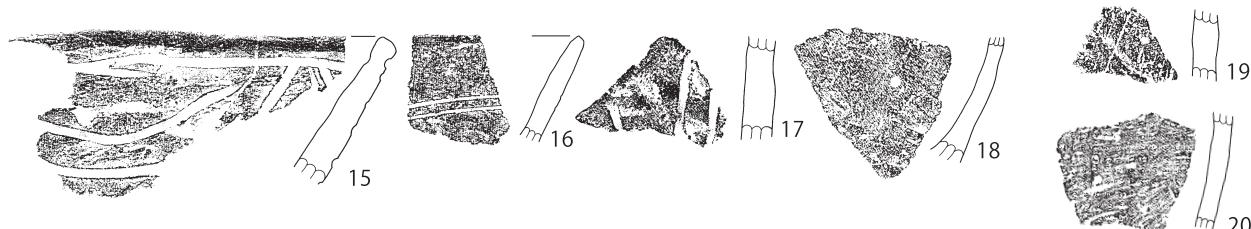
S K594 (3～6)



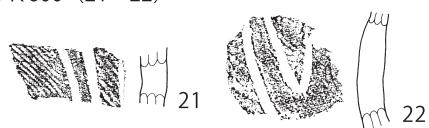
S K596 (7～14)



S K597 (15～18)



S K600 (21・22)



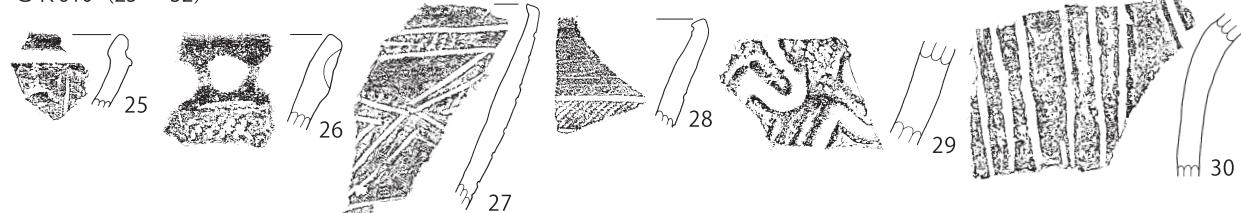
S K604 (23)



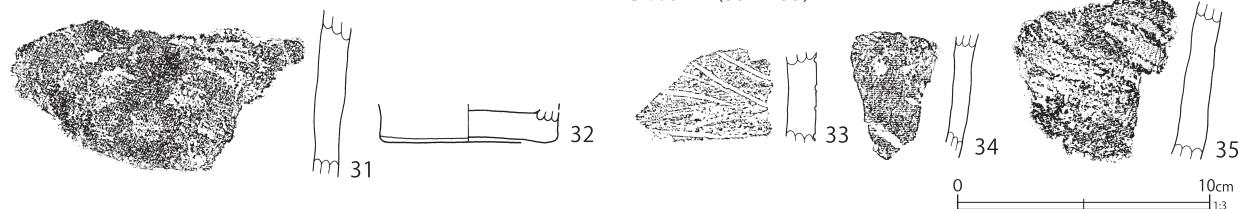
S K607 (24)



S K610 (25～32)



S K611 (33～35)



第48図 土壌出土遺物 (6)

第3次調査

～17は地文がなく、沈線のみで文様を施文した深鉢形土器の破片である。18は無文の鉢形土器の破片である。

時期は、後期前葉堀之内2式期と考えられる。

第599号土壙（第46、48図）

J-24グリッドに位置する。古墳時代前期の第5号方形周溝墓の方台部から検出された。

第48図19・20は出土した深鉢形土器の胴部小破片である。いずれも無文であった。

時期は、後期前葉と考えられる。

第600号土壙（第46、48図）

I-24、J-24グリッドに位置する。古墳時代前期の第5号方形周溝墓の方台部から検出された。底面にピット状の浅い掘り込みが認められる。

第48図21・22は出土した、同一個体の深鉢形土器の胴部破片である。磨消縄文で文様を施文している。地文は無節Rの縄文である。

時期は後期前葉堀之内式期と考えられる。

第604号土壙（第46、48図）

L-26グリッドに位置する。古墳時代前期の第8号方形周溝墓の方台部から検出された。

第48図23は出土した深鉢形土器の胴部破片である。地文として無節Rの縄文を施文している。

時期は後期前葉堀之内式期と考えられる。

第605号土壙（第46図）

L-25・26グリッドに位置する。古墳時代前期の第8号方形周溝墓の方台部から検出され、古墳時代前期の第52号住居跡によって東半部が壊されている。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第606号土壙（第46図）

L-25グリッドに位置する。縄文時代の第521号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第607号土壙（第46、48図）

K-24グリッドに位置する。古墳時代前期の

第45号住居跡と第33号溝跡によって、上層の一部が壊されている。底面が広く掘られるプラスコ状の土壙で、底面中央にはピット状の掘り込みが深く掘られている。

第48図24は出土した深鉢形土器の底部周辺の破片である。器面は無文である。

時期は後期前葉堀之内式期と考えられる。

第608号土壙（第46図）

L-24グリッドに位置する。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第609号土壙（第46図）

L-25グリッドに位置する。上部は、古墳時代前期の第493号土壙によって壊されている。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第610号土壙（第46、48図）

K-21グリッドに位置する。縄文時代後期前葉の第4号住居跡に、上部を壊されている。筒状の土壙で、底面の中央やや東よりにピット状の掘り込みが認められる。

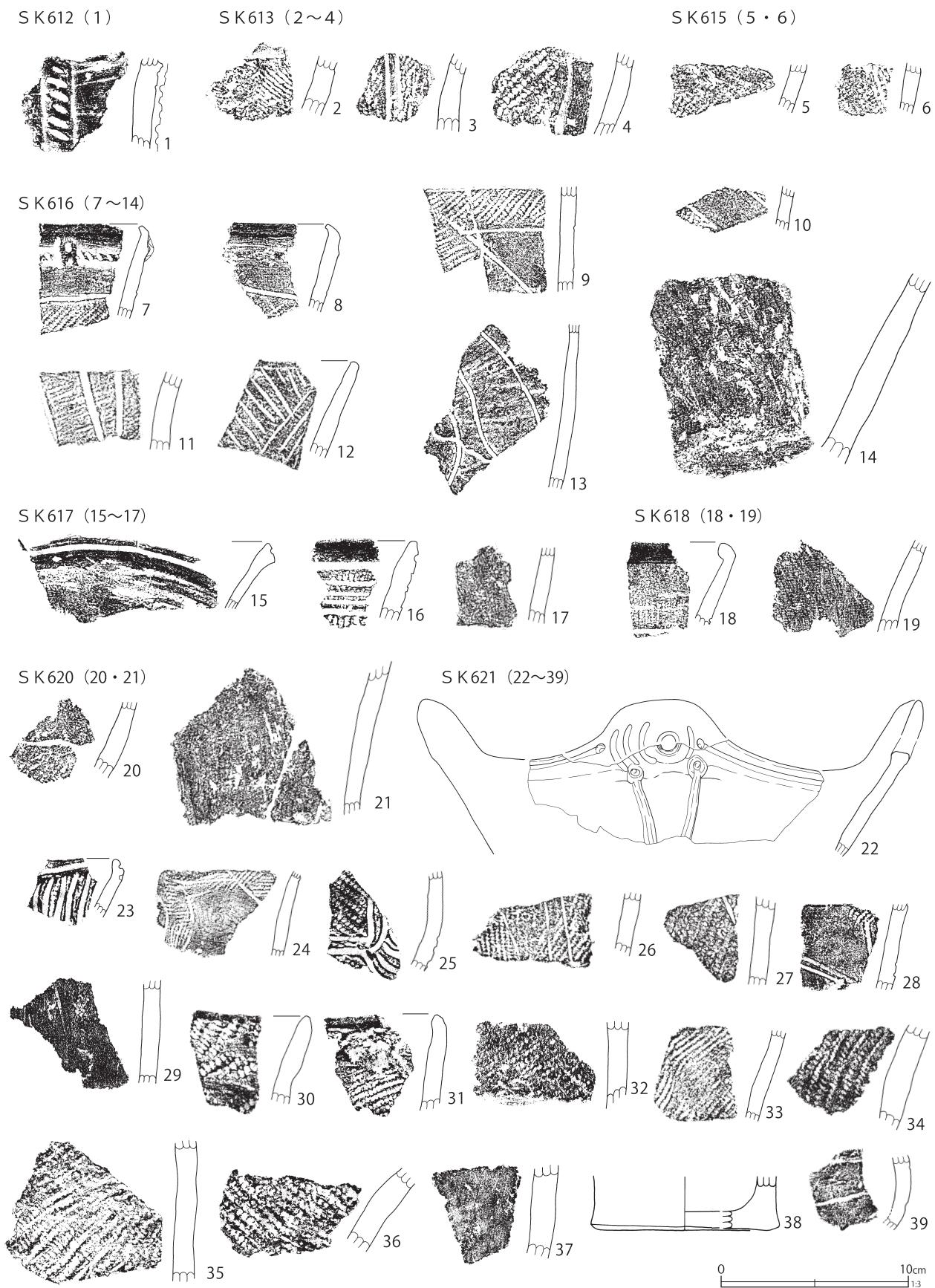
第48図25～32は出土した深鉢形土器の破片である。25・26は堀之内1式期の肥厚する口縁部である。27・28は堀之内2式期の平行沈線内に縄文を充填する口縁部である。29～31は胴部の破片で、29は無節Rの縄文を地文としている。32は底部である。

時期は、後期前葉堀之内1式期と考えられる。

第611号土壙（第46、48図）

K-22グリッドに位置する。古墳時代前期の第40号住居跡に上部の一部が壊されている。底面付近で、入り口部より大きく張り出す袋状土壙で、底面に浅いピット状の掘り込みが認められる。

第48図33～35は出土した深鉢形土器の胴部破片である。33は沈線文が施文される。34・35は無文で、35は粗い調整痕がそのまま残っている。



第49図 土壌出土遺物 (7)

第3次調査

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第612号土壙（第46、49図）

K-24グリッドに位置する。古墳時代前期の第44号住居跡に一部壊されている。筒状の深い土壙で、底面にピット状の掘り込みが認められる。

第49図1は出土した深鉢形土器の破片である。刻みが入った隆帯を器面に垂下させている。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第613号土壙（第47、49図）

K-24、L-24グリッドに位置する。古墳時代前期の第6号周溝墓の周溝に一部壊されている。

第49図2～4は出土した深鉢形土器の胴部破片である。沈線で文様が施文され、2の地文は無節Rの縄文で、他は単節LRの縄文である。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第614号土壙（第47図）

K-24グリッドに位置する。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第615号土壙（第47、49図）

I-23グリッドに位置する。古墳時代前期の第4号方形周溝墓の周溝と接している。筒状の深い土壙である。最下層の5層は黒色土が厚く堆積していた。

第49図5・6は出土した深鉢形土器の胴部破片で、同一個体である。器面では、地文である単節LRの縄文のみが確認できた。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第616号土壙（第47、49図）

I-23グリッドに位置する。古墳時代前期の第4号方形周溝墓の方台部から検出された。

第49図7～14は出土した深鉢形土器の破片である。7～10は同一個体で、朝顔形の器形と考えられる。口縁部下に刻みが入った隆帯を巡らし、部分的に「8」字状貼付文を施文している。文様は胴上部に縄文を充填する平行沈線文で、三

角形状に施文している。地文は単節LRの縄文である。11は無節Lの縄文を地文とするもので、懸垂文を施文している。12・13は沈線で文様を施文するもので、地文は施されない。12は波状口縁となる。14は無文で、器面に粗い調整痕が残存している。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第617号土壙（第47、49図）

I-23グリッドに位置する。古墳時代前期の第4号方形周溝墓の方台部から検出された。

第49図15～17は出土した深鉢形土器の破片である。15は肥厚する口縁には沈線が巡っている。16は単節LRの縄文を地文とし、半裁竹管で文様が施文されている。17は無文である。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第618号土壙（第47、49図）

I-23グリッドに位置する。古墳時代前期の第4号方形周溝墓の主体部によって一部が壊されている。第617号土壙の西側に位置する。

第49図18・19は出土した深鉢形土器の破片である。18は口縁部で、括れる頸部に沈線を巡らしている。地文として単節LRの縄文を施文する。19は無文の胴部である。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる

第619号土壙（第47図）

I-22・23グリッドに位置する。古墳時代前期の第4号方形周溝墓の方台部から検出された。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第620号土壙（第47、49図）

I-23グリッドに位置する。古墳時代前期の第4号方形周溝墓によって一部が壊されている。

第49図20・21は出土した深鉢形土器の胴部片である。同一個体で、器面は無文である。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第621号土壙（第47、49図）

J-21グリッドに位置する。古墳時代前期の

第3号方形周溝墓の方台部に位置している。第2号畠跡、グリッドピットに壊されている。

第49図22～39は出土した土器である。

22は器形復元が可能な土器で、波状口縁の把手部分である。大きく開く口縁から頸部で括れる器形と考えられる。把手中央には円孔が貫通する。円孔を囲うように弧線文が施文され、把手を中心として盲孔（円文）をつなぐ沈線が口縁部に巡る。把手下には左右に円形貼付文を施し、そこから隆帯を垂下させている。

23～38は出土した深鉢形土器の破片である。23は波状口縁で、口縁直下に沈線を巡らし、胴部には沈線で文様を施文している。24は平行沈線で文様を施文するもので、文様内に単節LRの縄文を充填している。25～28は地文として単節LRの縄文を施文し、その上に沈線文を施文する。29は沈線のみが施文される。30～36は地文のみが施文されるもので、36が単節RLの縄文で、それ以外は単節LRの縄文を施している。37は無文である。38は底部である。39は浅鉢形土器の破片である。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第622号土壙（第47図）

I-23グリッドに位置する。古墳時代前期の第4号方形周溝墓の方台部から検出された。周溝によって半分が失われている。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第623号土壙（第47図）

I-25グリッドに位置する。古墳時代前期の第5号方形周溝墓の方台部から検出され、掘り方によって半分が失われている。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第624号土壙（第47図）

J-24、K-24グリッドに位置する。第651号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。時

期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第625号土壙（第47、52図）

J-24、K-24グリッドに位置する。

第52図1～3は出土した深鉢形土器の破片である。1・2は口縁部で、1は口縁部に楕円区画文を施文し、区画文間に円形刺突文を施している。胴部には沈線で文様を施文している。2は口縁部下を半裁竹管による平行沈線文を巡らしている。3は無文の胴部破片である。

時期は、後期初頭称名寺式期と考えられる。

第626号土壙（第47、52図）

J-24グリッドに位置する。南側に第625号土壙が近接している。

第52図4・5は出土した深鉢形土器の破片である。4は器面に沈線文を施している。5は底部で、器面、底面ともに粗い調整が施されている。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第627号土壙（第47図）

K-24グリッドに位置する。北側には第625号土壙が近接している。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第628号土壙（第47図）

K-23、L-23グリッドに位置する。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

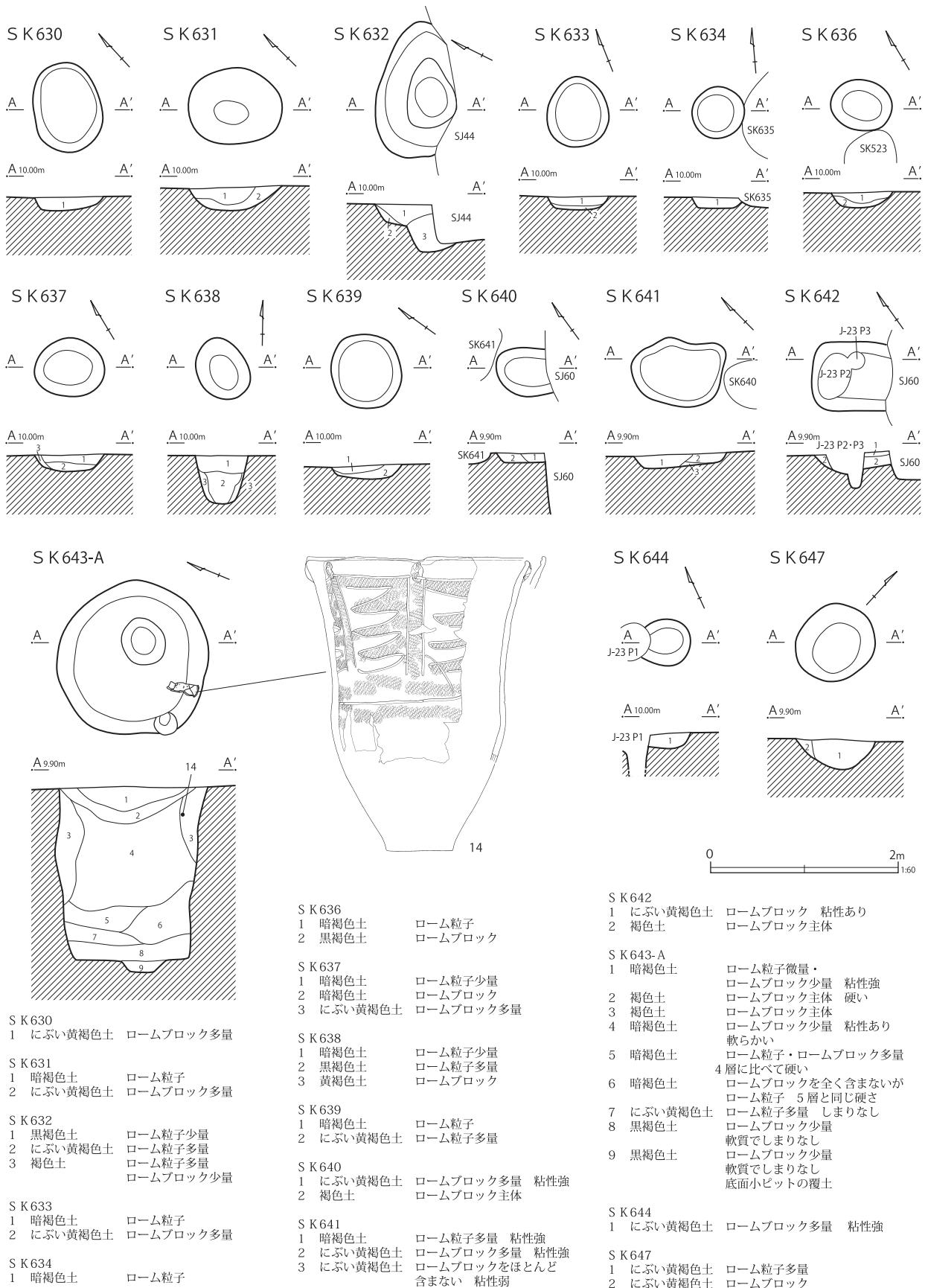
第629号土壙（第47・52図）

K-24グリッドに位置する。古墳時代前期の第45号住居跡によって、東側が壊されている。

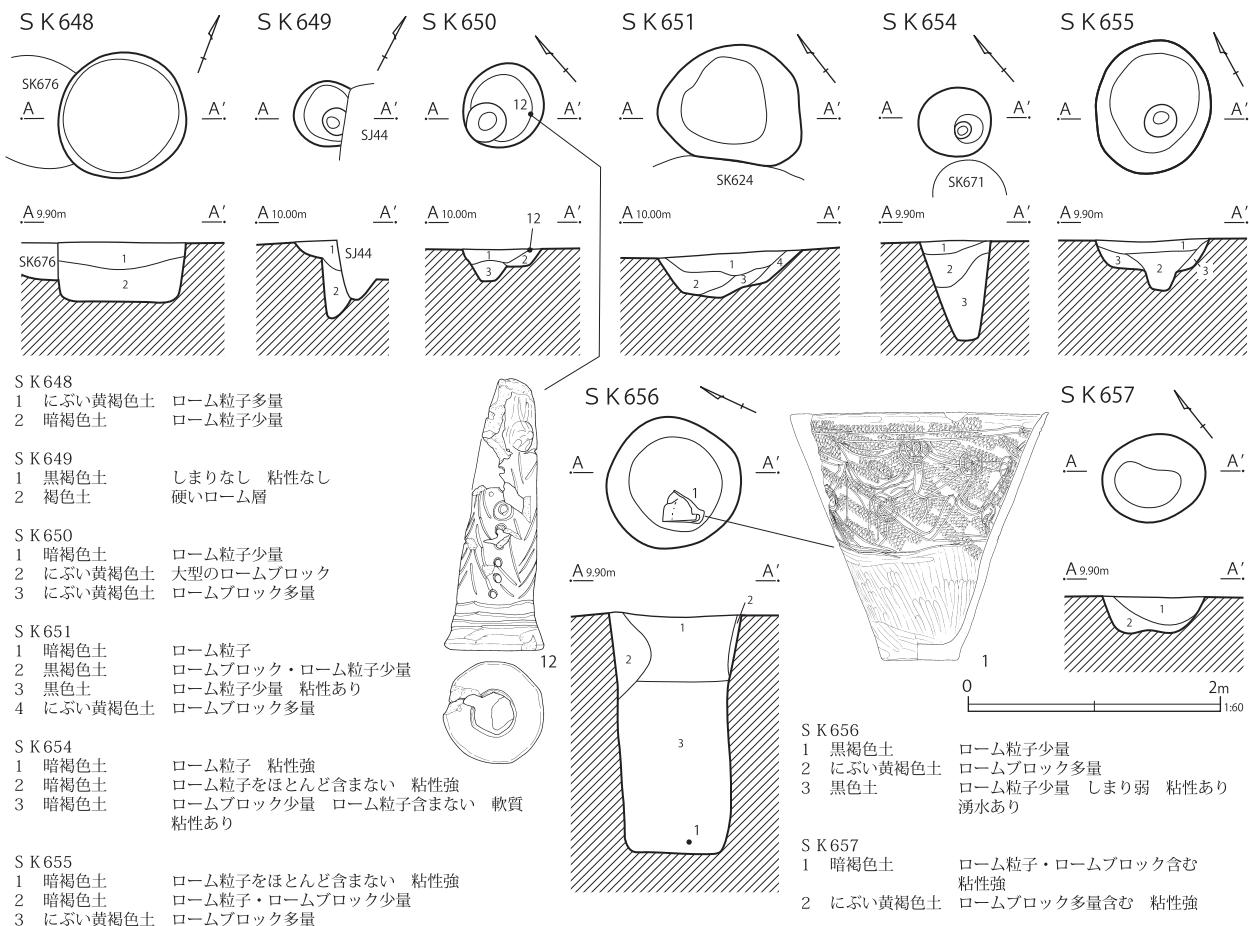
第52図6～8は出土した土器の胴部破片である。6・7は深鉢形土器で、8は鉢形土器である。6は地文が施されないもので、沈線文は深くしっかりと施文されている。7は櫛歯状の条線を施文している。8は単節LRの縄文を施文し、その後沈線で文様を施文している。

時期は後期前葉堀之内式期と考えられる。

第3次調査



第50図 第630号土壌～第647号土壌



第51図 第648号土壤～第657号土壤

第 630 号土壤 (第 50 図)

K-23、L-23 グリッドに位置する。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第 631 号土壤 (第 50 図)

K-23 グリッドに位置する。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第 632 号土壤 (第 50、52 図)

K-23 グリッドに位置する。南半分を古墳時代前期の第44号住居跡によって壊されている。第52図9は出土した深鉢形土器の胴部破片である。地文はなく、沈線文を垂下させている。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第 633 号土壤 (第 50、52 図)

J-24 グリッドに位置する。東側に第 634 号土壌が近接している。

第52図10は出土した深鉢形土器の胴部破片である。器面は無文であった。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる
第 634 号土壙（第 50 図）

第 634 号土壤 (第 50 図)

J-24 グリッドに位置する。第 635 号土壙によって一部壊されている。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第 636 号土壤 (第 50 図)

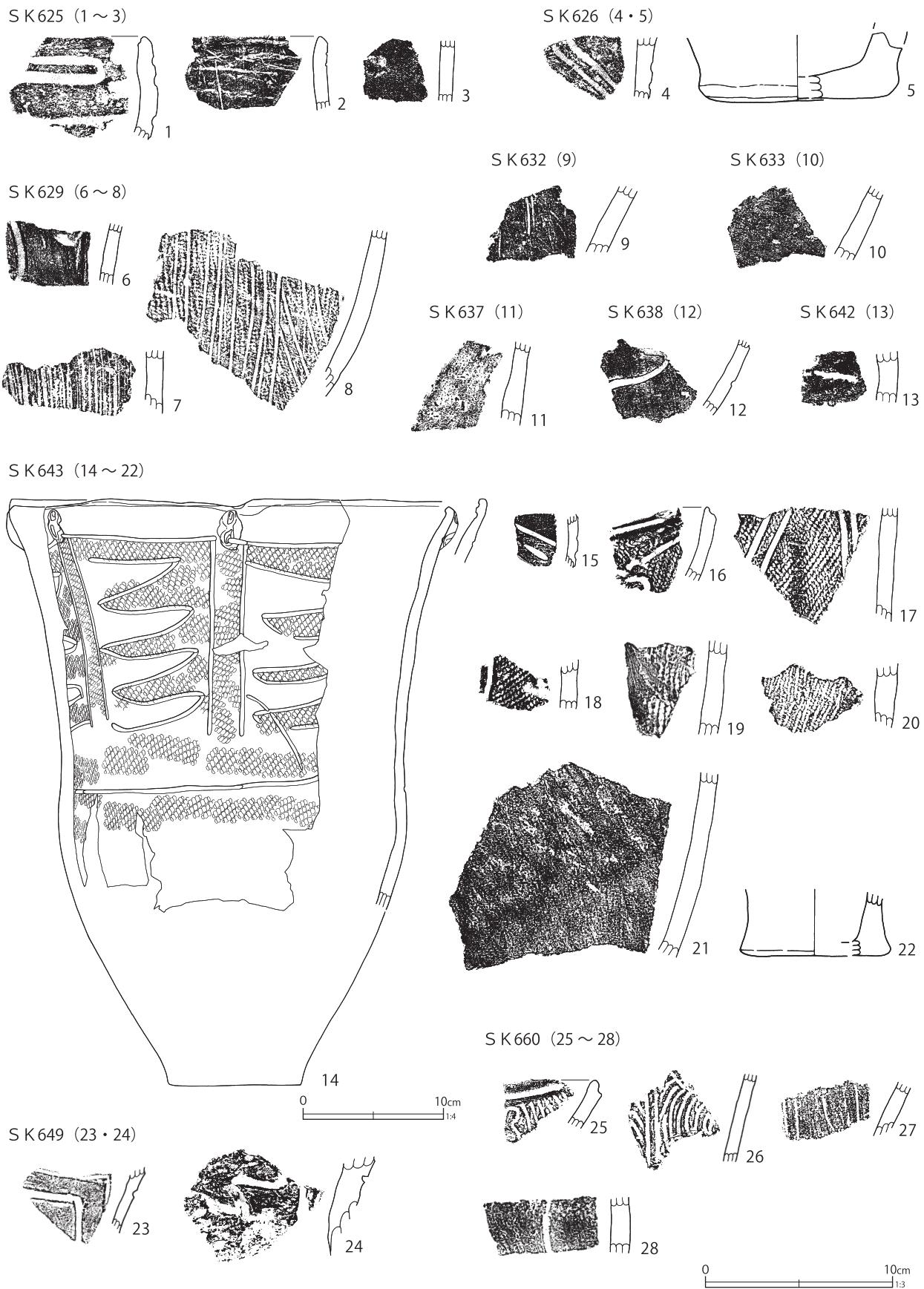
J-23 グリッドに位置する。古墳時代以降の第523号土壙と接している。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明である。

第637号土壤(第50、52図)

K-24 グリッドに位置する。南側に第 629 号土壌が近接している。

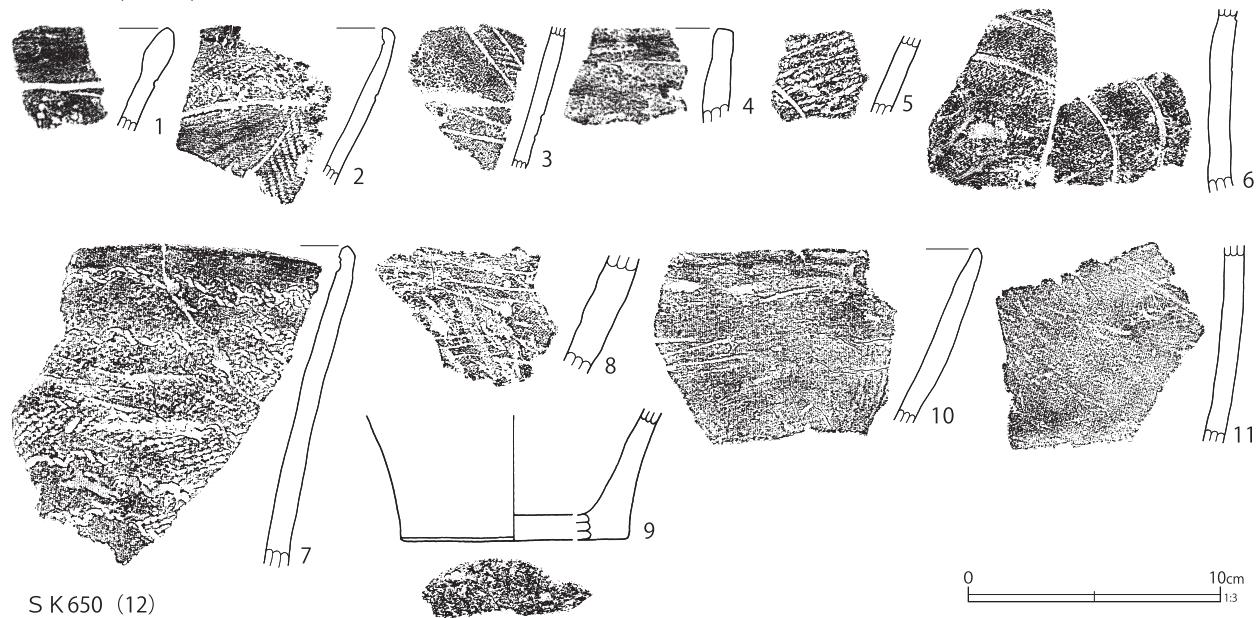
第52図11は出土した深鉢形土器の胴部破片

第3次調査



第52図 土壤出土遺物 (8)

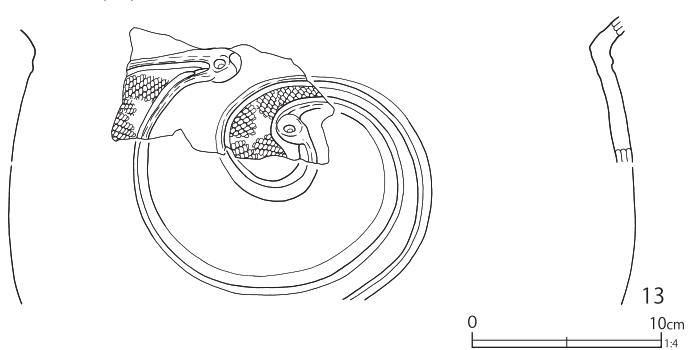
S K648 (1~11)



S K650 (12)



S K651 (13)



第53図 土壌出土遺物 (9)

第3次調査



第54図 土壌出土遺物 (10)

である。器面の風化が著しく、調整など不明である。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第 638 号土壙（第 50、52 図）

J-24 グリッドに位置する。北側に第 635 号土壙が近接している。

第 52 図 12 は鉢形土器の破片である。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第 639 号土壙（第 50 図）

K-23、L-23 グリッドに位置する。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第 640 号土壙（第 50 図）

J-23 グリッドに位置する。第 641 号土壙と接し、北側に第 642 号土壙が隣接する。古墳時代前期の第 60 号住居跡によって一部が壊されている。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第 641 号土壙（第 50 図）

J-23 グリッドに位置する。第 640 号土壙と接している。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第 642 号土壙（第 50、52 図）

J-23 グリッドに位置する。古墳時代前期の第 60 号住居跡とグリッドピットによって一部が壊されている。

第 52 図 13 は、出土した深鉢形土器の胴部破片である。沈線文が施文されている。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第 643-A 号土壙（第 50、52 図）

M-24 グリッドに位置する。古墳時代前期の第 65 号住居跡調査後の床面下から検出された。筒状に深く掘られる土壙で、底面中央にはピット状の掘り込みが認められる。最下層は、軟質でしまりのない黒褐色土が堆積していた。

第 52 図 14～22 は出土した土器である。

14 は器形復元が可能な土器で、深鉢形土器の

口縁から胴部下半である。口縁直下には「8」字状貼付文を施文し、正面の貼付文上にわずかな凹みを付け、右側の口縁部を非対称の扇状に成形している。一段高い口縁部内側には 2 条、平縁部の内側には 1 条の沈線を巡らしている。表面では、貼付文の下側で、胴中央に沈線文を巡らし、文様帶を区画している。貼付文下には平行沈線文を垂下させ、文様帶を区画する平行沈線文間に蛇行沈線文を施文している。文様内には単節 L R の縄文を充填しており、縦方向の文様内は縦方向に、それ以外は横方向に施文している。文様からはみ出た地文は磨消している。また、胴部側の 1 本の区画沈線文の上下にも地文が施文されている。推定口径 31.6 cm、残存高は 29.3 cm である。

15～22 は出土した土器片である。15～20、22 は深鉢形土器の破片である。15 は平行沈線文間に列点を施文している。16～18 は同一個体で、地文として単節 L R の縄文を施文し、その上に沈線文を施文している。16 は口縁部で、口縁端部に沈線を巡らしている。19・20 は地文である単節 L R の縄文のみが施文されている。22 は底部で、器面は無文で、丁寧に調整が施されている。21 は鉢形土器の胴下部の破片である。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第 644 号土壙（第 50 図）

J-23 グリッドに位置する。西側の一部がグリッドピットによって壊されている。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第 647 号土壙（第 50 図）

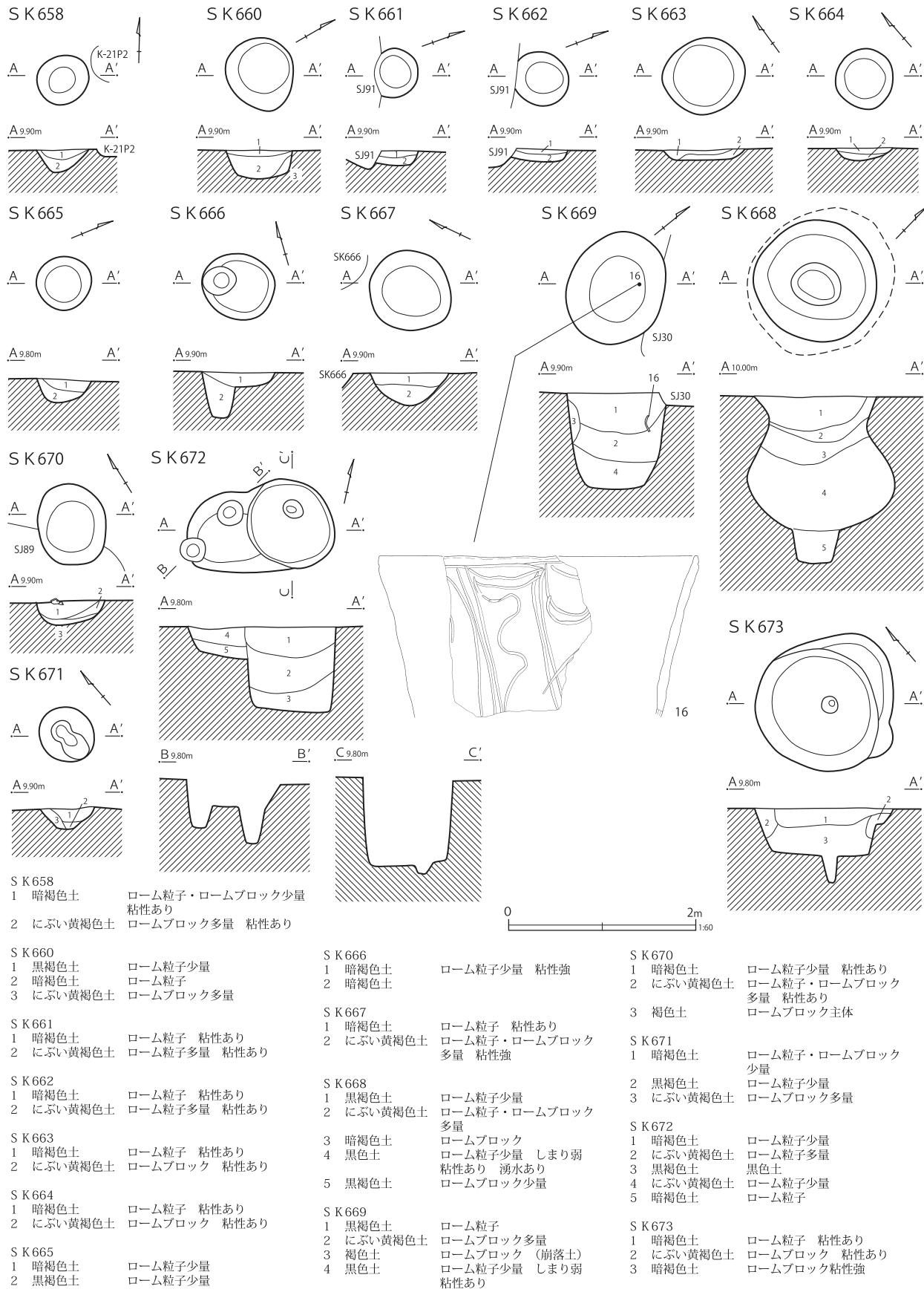
H-21 グリッドに位置する。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第 648 号土壙（第 51、53 図）

H-22 グリッドに位置する。第 676 土壙を壊している。

第 53 図 1～11 は出土した土器である。1～

第3次調査

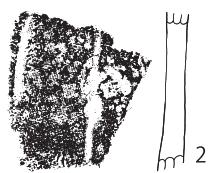


第 55 図 第 658 号土壤～第 673 号土壤

S K 663 (1)



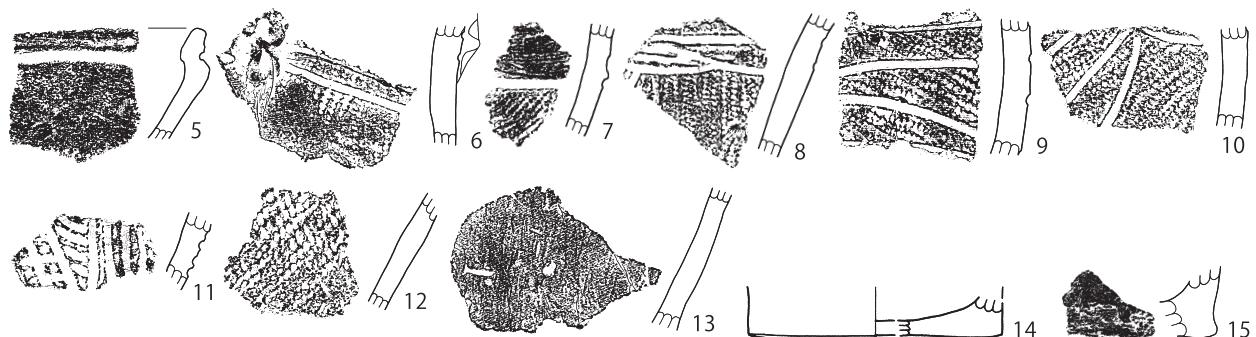
S K 664 (2)



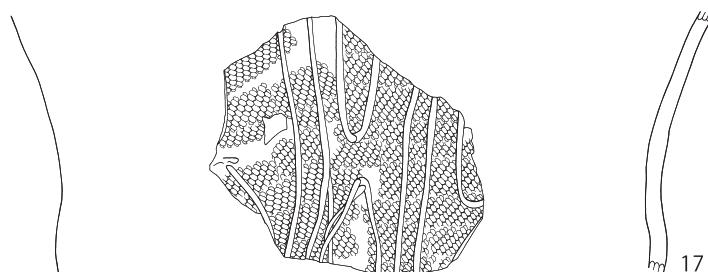
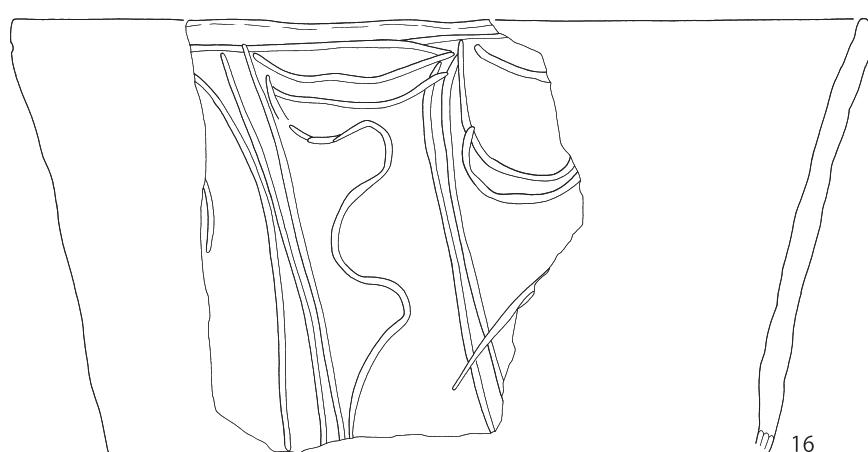
S K 665 (3・4)



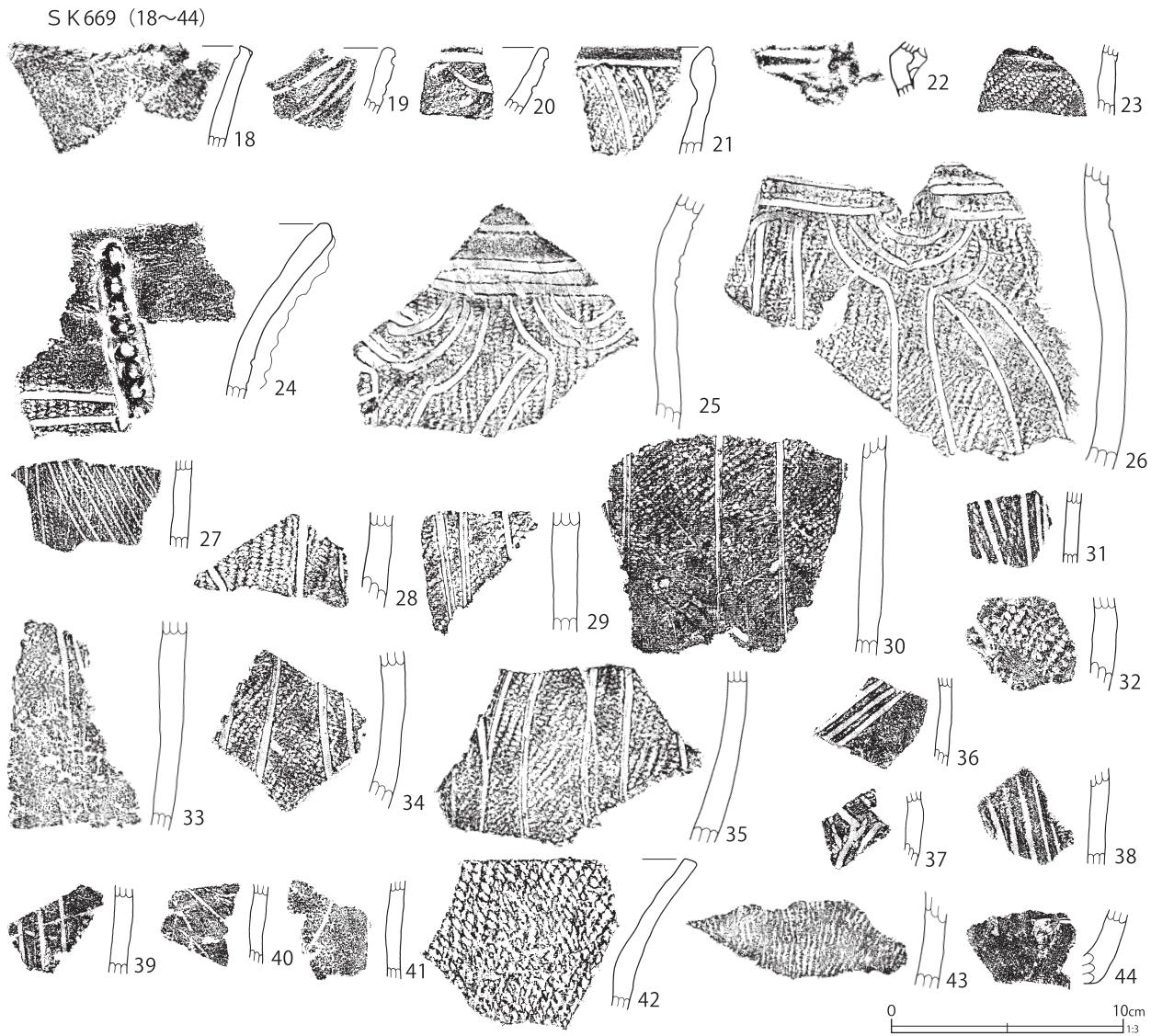
S K 668 (5～15)



S K 669 (16・17)



第56図 土壌出土遺物 (11)



第57図 土壌出土遺物 (12)

7、9は深鉢形土器の破片である。1は口縁部下に沈線を巡らすもので、単節LRの縄文を地文としている。2・3は口縁が大きく開く器形で、平行する沈線文内に単節LRの縄文を充填している。4は地文がないもので、沈線を施文している。5は地文として無節Lを施文し、沈線で文様を施文している。6に地文はなく、平行する沈線文で曲線的に文様が施文されている。7は地文のみが施文され、末端を結節する縄文が施文される。口縁内面には1条沈線が巡っている。9は2・3の器形の底部で、底部に網代痕が残されている。8、10・11は鉢または浅鉢形土器である。

時期は、後期前葉堀之内2式期と考えられる。

第649号土壌 (第51・52図)

K-23グリッドに位置する。古墳時代前期の第44号住居跡によって一部が壊されている。

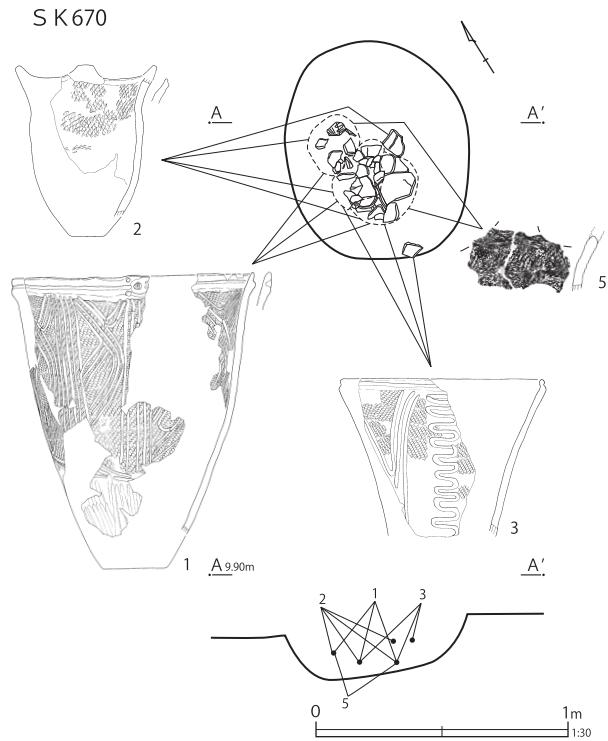
第52図23・24は出土した土器である。深鉢形土器の胴部の破片で、沈線文が施文されている。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第650号土壌 (第51、53図)

K-23グリッドに位置する。

第53図12は出土した中空の筒形土偶である。顔部分は欠損している。先端部に口につながる口腔部分が認められた。正面には乳房が貼付される



第58図 第670号土壙遺物出土状況

が、左側は欠損していた。手足の表現は認められなかった。中央には、乳房下から円孔が列状に穿孔されている。胴中央部は穿孔されず、円形の刺突が施されている。背中は首から円孔が列状に穿孔されるが、穿孔しない円形刺突が施されている。両脇にも、円孔が穿孔され、列状に施されている。下端はスカート状に開き、4条の沈線文を巡らしている。胸部には矢羽状の沈線が施されている。残存高14.3cm、底径5.3cmである。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第651号土壙（第51、53図）

J-24グリッドに位置する。北側の一部が、第5号方形周溝墓の周溝部分と重複している。第624号土壙と重複するが、新旧関係は不明である。

第53図13は出土した器形復元した深鉢形土器である。無文の開く口縁で、頸部で括れ胴部に丸みをもつ器形と考えられる。残存する胴部には渦巻き文が隆帯によって施文され、文様の変化点には円形貼付文が施されている。磨消縄文で、地

文として単節RLの縄文を施文している。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第654号土壙（第51図）

K-21グリッドに位置する。南側で第671号土壙と接している。ピット状に斜めに深く掘り込まれていた。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第655号土壙（第51図）

K-21グリッドに位置する。西側に第670号土壙、東側に第666号土壙が近接している。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第656号土壙（第51、54図）

K-21グリッドに位置する。古墳時代前期の、第89号住居跡下から検出された。筒状で、中層から下層には黒色土が堆積していた。底面直上から第54図1の深鉢形土器が検出された。

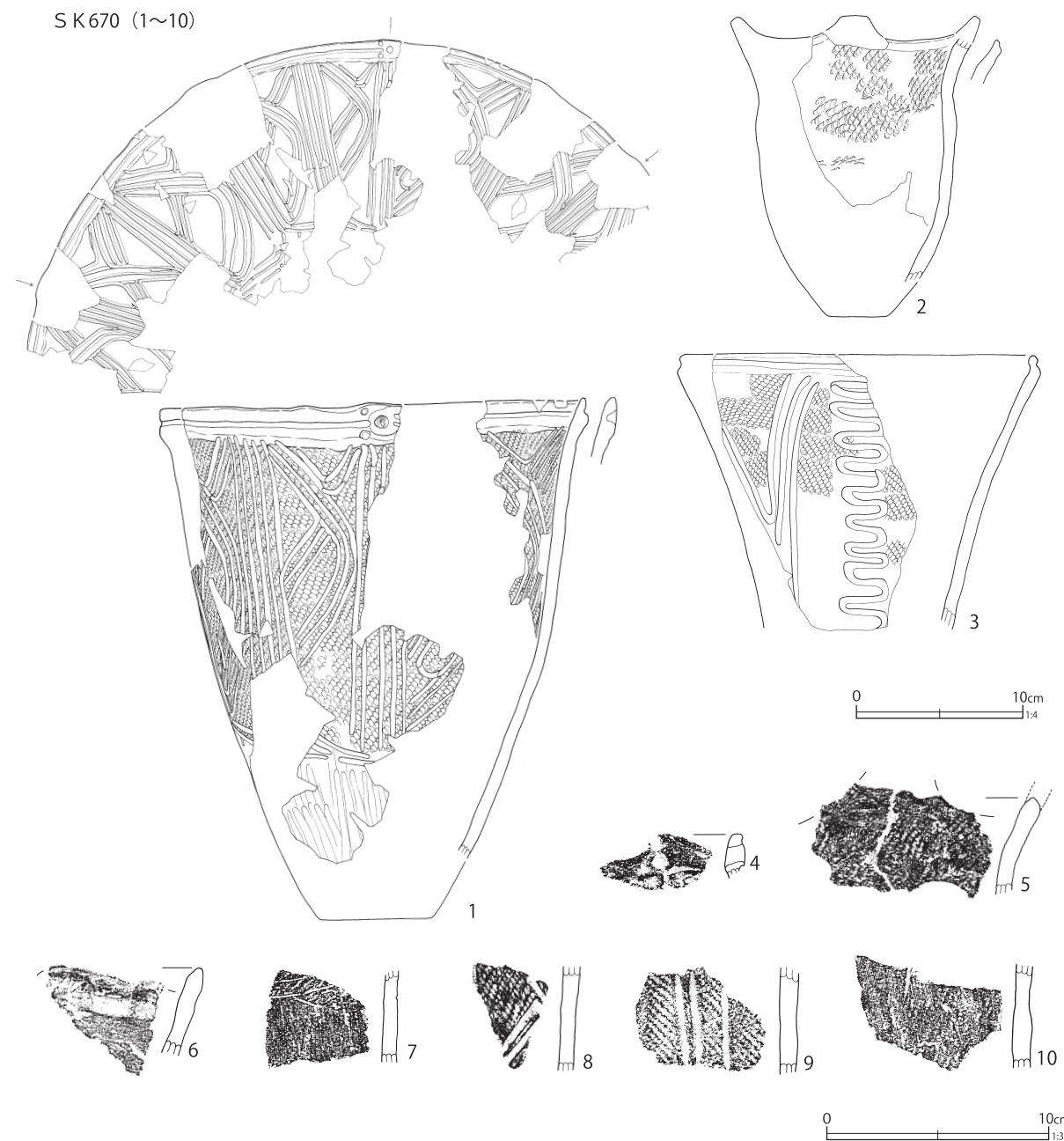
第54図1～18は出土した遺物である。

1・2は器形復元ができた土器である。

1は口縁が大きく開く朝顔形の器形で、口縁下と胴中央に平行沈線文を施文して文様帶を区画している。文様帶内には、無節LRの縄文を地文として施文しているが、区画内からはみ出したり、施文していない部分があったりと、粗雑に施文している。2本1組の平行沈線文で文様を施文しているが、三角形状や弧状に施文する。文様の交差部分には円文を施文している。口縁内面には、沈線を巡らせていている。推定口径27.3cm、推定底径8.0cm、器高26.0cmである。

2は胴部の破片で、括れ部分に相当している。器面には平行沈線による三角形状の文様や、三角区画文が施文され、単節LRの縄文を充填している。残存高は16.2cmである。

4～8は深鉢形土器の破片である。4～8は平行沈線による文様内に単節LRの縄文を充填している。4は平縁の口縁部だが、隆帯の貼付は認められなかった。9・10は地文を施文し、沈線

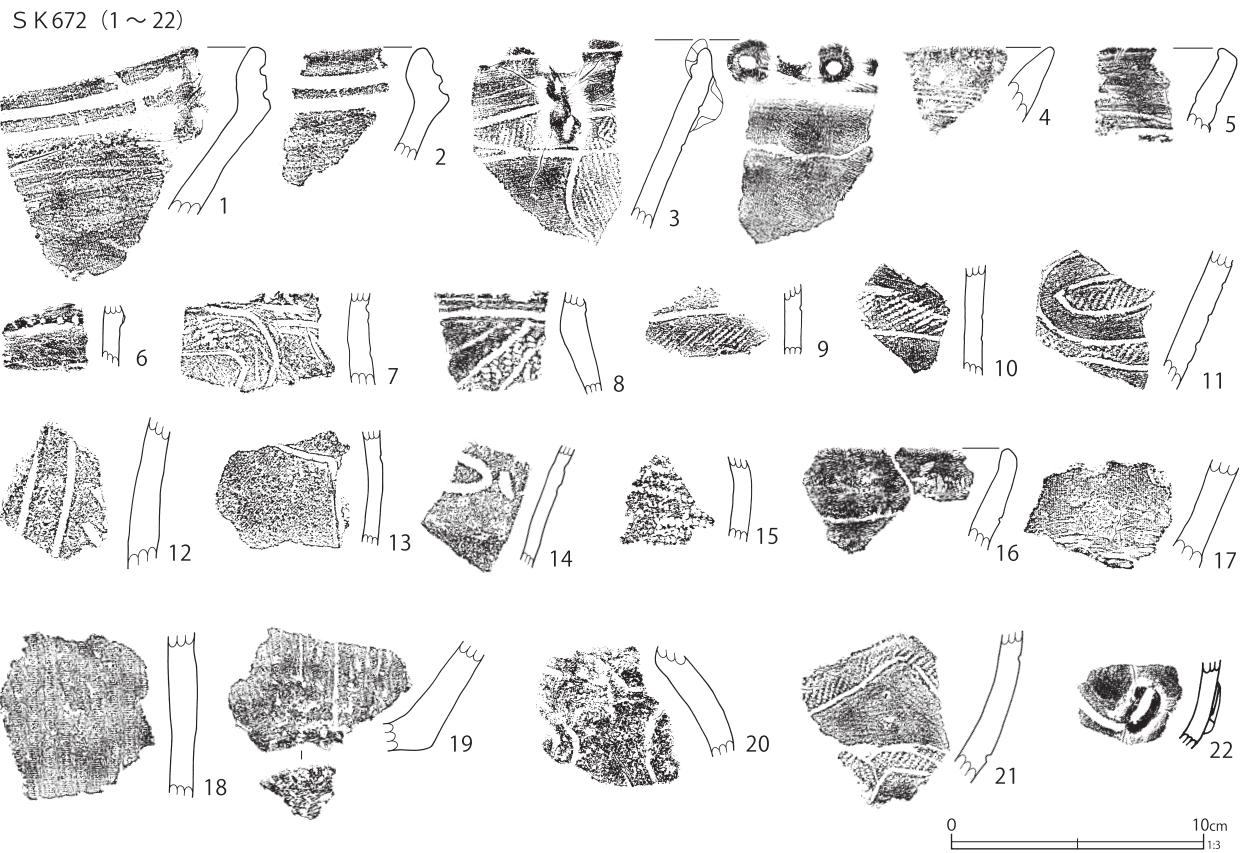


第59図 土壌出土遺物（13）

によって文様を施文している。9の地文は単節R Lの縄文で、10は単節L Rの縄文である。11・12は同一個体で、地文ではなく沈線による懸垂文と逆U字文が交互に施文されている。口縁内面には二条の沈線を巡らせていている。13～16は地文を施文しないもので、13には沈線文が確認できる。14～16は無文であった。17・18は鉢形土器である。17は波状口縁で、波頂部下に把手を貼付

している。口縁直下に沈線を巡らし、波頂部直下には円形刺突文を施文している。内面も幅広の浅い沈線を巡らし、波頂部下には円形刺突文を施文している。地文は単節L Rの縄文で、沈線文を施文している。18は底部近くの破片で、胴中央に横方向に施文した沈線が認められる。沈線文より上方に単節L Rの縄文を施文している。

3は土偶である。中実の遮光器系の土偶の腕か



第60図 土壙出土遺物 (14)

ら手の先端部である。沈線で渦巻き文などが施されている。先端には、手の平を連想させる凹みが施されている。

時期は、後期前葉堀之内2式期と考えられる。

第657号土壙（第51図）

K-21・22グリッドに位置する。西側に第666号土壙、北側に第668号土壙が隣接している。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第658号土壙（第55図）

K-21グリッドに位置する。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第660号土壙（第52、55図）

K-22グリッドに位置する。

第52図25～28は出土した深鉢形土器の破片である。25・26は同一個体と考えられる土器である。波状口縁で、口縁端部が肥厚し、口縁直下

に沈線を巡らしている。胴部には沈線で蛇行沈線や懸垂文を垂下させ、それを中心に弧線を重弧状に施文している。27・28は胴部の破片で、沈線で文様を施文している。地文は施文されていない。

時期は後期前葉堀之内1式期である。

第661号土壙（第55図）

K-22グリッドに位置する。南側の一部が、古墳時代前期の第91号住居跡によって壊されている。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第662号土壙（第55図）

K-22グリッドに位置する。南側の一部が、古墳時代前期の第91号住居跡によって壊されている。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第663号土壙（第55・56図）

K-22グリッドに位置する。北側に第664号土壙が隣接している。

第3次調査

第56図1は、出土した深鉢形土器の無文の胴部小破片である。調整は丁寧に施されている。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第664号土壙（第55・56図）

K-22グリッドに位置する。南側に第663号土壙が隣接している。

第56図2は、出土した深鉢形土器の胴部破片である。沈線によって懸垂文が垂下している。地文は施されていない。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第665号土壙（第55・56図）

H-21グリッドに位置する。東側に第647号土壙が近接している。

第56図3・4は出土した深鉢形土器の胴部小破片である。いずれも地文はなく、3は沈線で文様が施文される。4は無文である。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第666号土壙（第55図）

K-21グリッドに位置する。西側に第655号土壙、東側に第657号土壙、南側に第667号土壙が隣接している。底面西側にピット状の掘り込みが認められる。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第667号土壙（第55図）

K-21グリッドに位置する。北側に第666号土壙、南側に第654号土壙が隣接している。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第668号土壙（第55・56図）

K-22グリッドに位置する。南側に第657号土壙が隣接している。袋状土壙で、入口部は狭いが、下層で大きく横に壁面が張り出している。底面中央には、ピット状の掘り込みが認められる。下層には、黒色土が堆積していた。

第56図5～15は出土した土器の破片である。5は浅鉢形土器の口縁で、口縁下に沈線を巡らし

ている。内外面ともに丁寧に調整を施している。6～15は深鉢形土器の破片である。6は「8」字状貼付文を施すもので、貼付文を中心に沈線文を施文し、文様内に単節RLの縄文を充填している。文様からはみ出た地文は、磨り消されていない。7も6と同様に沈線文内に地文である単節LRの縄文を充填している。8～10は地文を施文した後、沈線文を施文するもので、8、10は単節LRの縄文を9は単節RLの縄文を施文している。11は沈線を密に施文するものである。沈線は深く施されている。12は地文のみが残るもので、単節LRの縄文を地文としている。13は底部近くの破片で、無文である。内面にはコゲ状の付着物が認められる。14・15は底部である。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第669号土壙（第55～57図）

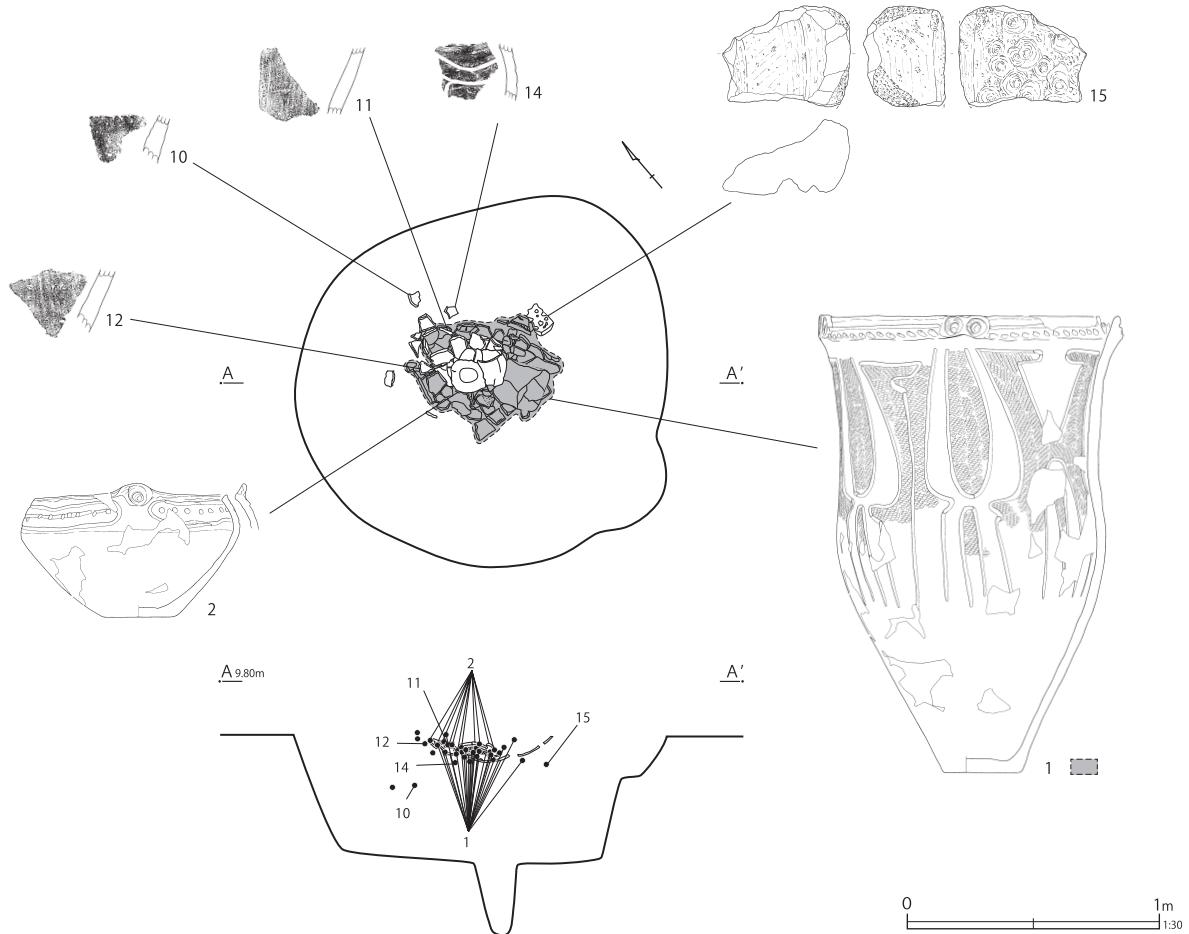
K-21グリッドに位置する。古墳時代前期の第30号住居跡によって、上層の壁の一部が壊されていた。土壙は筒状に深く掘り込まれていた。

第56・57図は出土した土器である。

第56図16・17は器形復元が可能な土器である。16は深鉢形土器の口縁から胴上部である。やや肥厚する口縁直下には、沈線を巡らしている。地文はなく、沈線で文様が施文されている。文様は、縦位の懸垂文を施文し、その間を蛇行沈線文や弧線文などを施文している。推定口径45.2cm、残存する器高22.8cmである。17は深鉢形土器の胴部で、開く口縁から続く括れ部分である。単節LRの縄文が地文として施され、その上に沈線文を施文している。残存部には、垂下する平行沈線文とその間に対向するU字文が施文されている。

第57図18～44は出土した深鉢形土器の破片である。18・19は波状口縁で、18は口唇部に刻みが施されている。20・21は平縁の口縁下に沈線を巡らすもので、地文が施された後に沈線文が施文されている。20は無節Lの縄文を、21は单

SK673



第61図 第673号土壤遺物出土状況

節LRの縄文を地文として施文している。22～27は、開く口縁から頸部で括れ、胴部が丸みをもつ器形の土器である。22は頸部の区画文を沈線で施文している。また、頸部には「8」字状貼付文を添付している。23は頸部区画文が細く施文されている。24～26は同一個体と考えられる。無文の開く口縁には、押圧が施された隆帯を垂下させている。胴部には単節LRの縄文を地文として施文し、沈線文を施文している。頸部の区画文からは、胴下半に向けてY字状の文様を施文している。文様間には弧線文や懸垂文が施文されている。27は胴部の破片である。地文として単節LRの縄文を施文し、その上に細い条線状の文様を施文している。28～35は地文が施文される深鉢

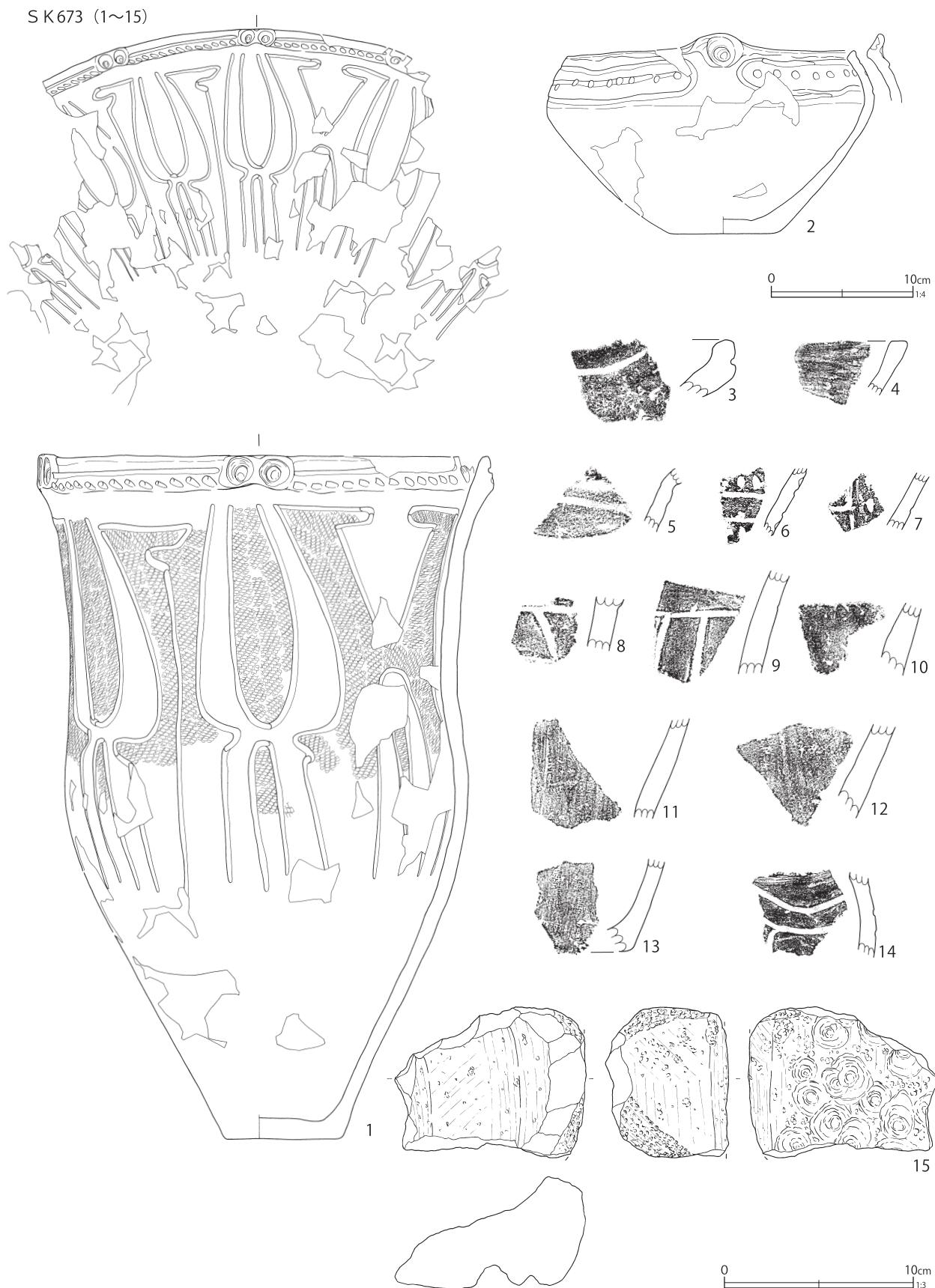
形土器の胴部片で、沈線によって懸垂文が施文されている。29は半裁竹管によって文様が施文されている。地文はすべて単節LRの縄文で施文されている。36～41は地文が施文されないもので、沈線文が施文されている。42・43は地文のみが施文されるもので、42は口縁部の破片である。いずれも単節LRの縄文が地文として施文されている。44は底部である。器面は無文である。

時期は、後期前葉堀之内1式期と考えられる。

第670号土壤（第55、58・59図）

K-21グリッドに位置する。古墳時代前期の第89号土壤に、南側の一部が壊されている。東側に第655号土壤が隣接している。土壤の中央、1層内から多量に遺物が検出された（第58図）。

第3次調査



第62図 土壌出土遺物 (15)

第59図1～10は出土した土器である。

1～3は器形復元が可能であった深鉢形土器である。1は底部以外ほぼ全周した土器である。口縁は平縁で肥厚している。口縁部に円形の貼付文を施文し、中央に円文を刺突している。貼付文の左側には上下に円形刺突を施し、その中央から口縁直下の沈線文を巡らしている。右側は欠損のため円形刺突の有無は不明である。胴部には口縁から5本1組の懸垂文を6単位垂下させる。懸垂文間には逆「く」の字状の文様や、斜沈線を施文している。文様帶は下端を沈線で区画しており、それより底部側は無文である。文様帶には、地文として単節LRの縄文を施文している。口径25.6cm、残存高27.5cmである。2は小型の深鉢形土器で、口縁から胴部が残存していた。口縁が開き胴上部で括れ、緩やかに膨らみ底部に至る器形である。口縁は4単位の波状口縁であると推定される。胴上部に無節Lの末端結節縄文を施文する。胴下半は無文である。推定口径14.0cm、残存高15.9cmである。3は朝顔形の器形で、口縁から胴部が残存していた。肥厚する口縁には、沈線を巡らしている。口縁はやや内屈し、内面にも凹線が巡っている。地文は単節LRの縄文を施文するが、胴上部のみで、下部には施文していない。胴部には、蛇行沈線文を施文し、それを中心に、弧状に沈線文を重ねて施文している。一番内側はV字状に沈線を施文している。推定口径21.8cm、残存高16.5cmである。

4～10は深鉢形土器の土器片である。4～6は口縁部が波状となり、6は波頂部に浅く円形の凹みを施している。7～10は胴部で、7は平行沈線文を施文し、内側に単節LRの縄文を充填している。8・9は地文を施文するもので、8は単節LR、9は単節RLの縄文を施文している。沈線で文様を施文している。10に地文はなく、沈線のみ施文している。

時期は、後期前葉堀之内1式期と考えられる。

第671号土壙（第55図）

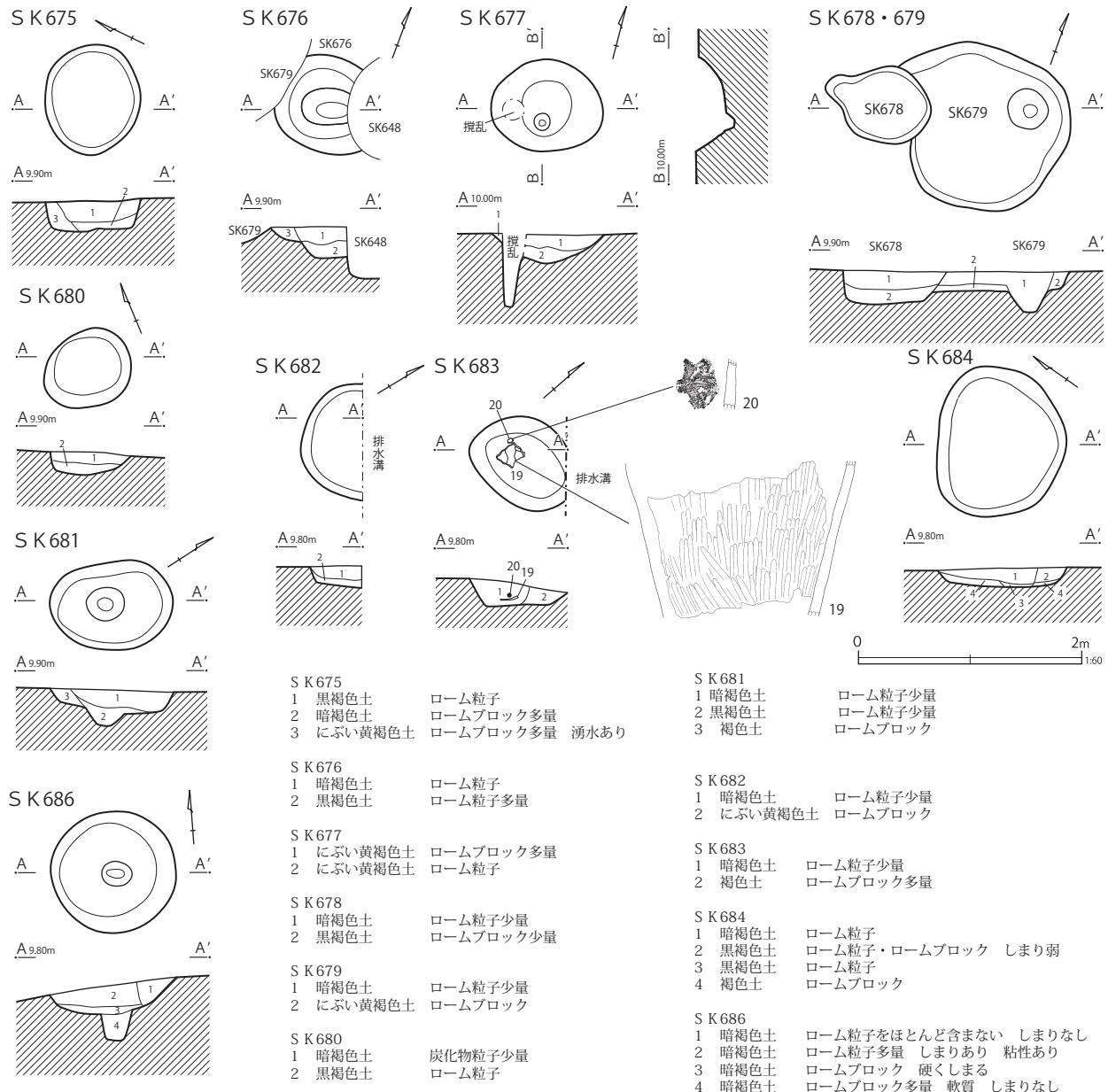
K-21グリッドに位置する。第654号土壙と接している。時期は後期と考えられるが、遺物が出土しなかつたため、詳細な時期は不明である。

第672号土壙（第55、60図）

H-22グリッドに位置する。東側に第682号土壙が隣接している。西側に深い土壙と東側にそれを壊して深く筒状に土壙が掘られている。本来ならば、2基だがここでは1基として取り扱った。深い土壙からはピット状の掘り込みが2基検出された。東側の深い土壙の底面には深いピット状の掘り込みが認められる。最下層の3層は黒色土が堆積していた。

第60図1～22は出土した土器である。1～5は深鉢形土器の口縁部で、1・2は屈曲する口縁部に、2条の沈線を巡らしている。3は「8」字状貼付文を施すもので、貼付文上の口縁端部を凹ませ、凹みの両側に突起を作り出している。突起の内面には、円形貼付文を貼り付け、貼付文の中央に円形の刺突を施している。口縁直下の内面に、沈線を巡らしている。器面には地文として単節LRの縄文を施文し、沈線文を施文している。4・5は口縁部下に沈線を巡らすもので、4は櫛歯状の沈線を巡らしている。6～15は深鉢形土器の胴部破片である。6は刻みが入った隆帯を巡らしている。7・8は頸部で括れ、胴部が膨らむ器形のものである。7～11は、平行沈線文で文様を施文し、文様内に地文を充填している。7、11は無節Lの縄文を、他は単節LRの縄文を施文している。12～14は沈線と列点を施文するもので、12は文様内に列点文を施文している。15は地文である単節RLの縄文のみが施文される。16～18は無文の深鉢形土器の破片である。19は深鉢形土器の底部である。器面には沈線で懸垂文が施文されている。20～22は注口土器の破片である。21は文様内に単節LRの縄文を充填している。22は刻みを入れる貼付文を貼り付けている。

第3次調査



第63図 第675号土壤～第686号土壤

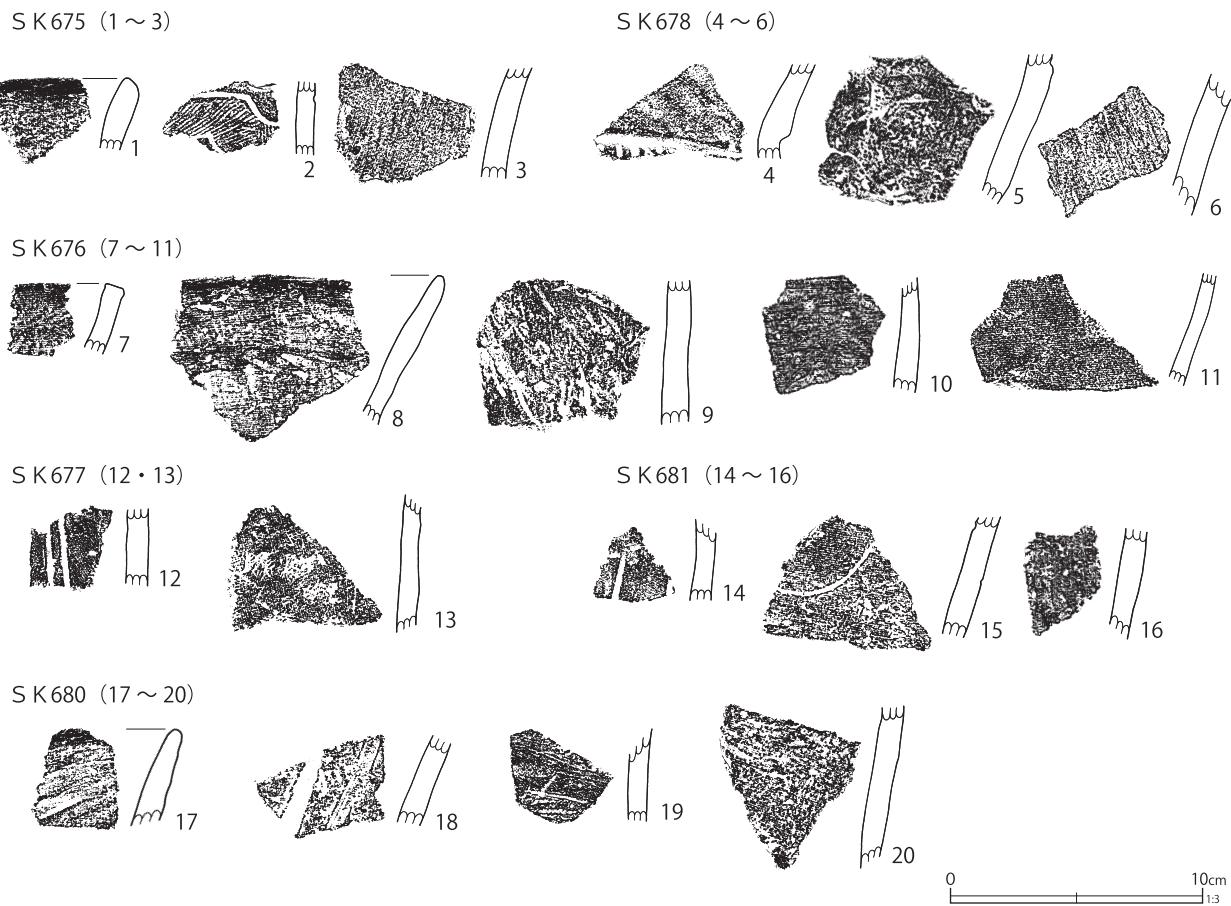
時期は、後期前葉堀之内2式期と考えられる。

第673号土壤（第55、61・62図）

H-22グリッドに位置する。北側に第681号土壤が隣接している。底面中央には、細いピット状の掘り込みが認められる。土壤中央上層から、敷かれたように遺物が検出された。接合したところ、完形に近い土器が2点復元された。土器が敷かれた東端からは、石皿の破片が出土した。

第62図1～15は検出された遺物である。

1・2は完形に近く復元された土器である。1は深鉢形土器で、口縁が開き胴中央よりやや上で緩やかに括れ、その後丸みを帯びて膨らみ底部に至る器形である。平縁の口縁は肥厚している。肥厚部分には2個1組の円形刺突を4単位施文している。円形刺突間の口縁部には、沈線文1条とその下に列点状の刻みを施文している。胴部に施文された文様は、スペード文など称名寺系の文様が施文される。文様の外側に単節L Rの縄文を充填



第64図 土壌出土遺物（16）

している。地文は胴部の膨らみ部分まで、沈線文は胴部中央やや下まで施文されるのみで、胴下半は無文となっている。口径 32.2 cm、底径 8.0 cm、器高 48.5 cm である。2 は鉢形土器である。口縁部は突起を作り出し、突起部分の内外面に円形刺突文を施文している。口縁部は楕円区画文を施文し、その内側に列点文を施文しており、突起左側は中央に沈線文を横方向に施文した上に列点文を施文している。口径 23.3 cm、底径 8.0 cm、器高 14.0 cm である。

3～14 は出土した土器片である。3～13 は深鉢形土器である。いずれも地文はなく、無文の 10～13 以外は沈線で文様が施文される。6・7 は沈線文内に列点文を施文している。14 は鉢形土器の破片である。

15 は出土した石皿である。周辺を打ち欠いて

再加工し、敲石や磨石として再利用している。

時期は、後期前葉堀之内 1 式期と考えられる。

第675号土壌（第63、64図）

I-21 グリッドに位置する。古墳時代前期の第74号住居跡内から検出された。

第64図 1～3 は出土した深鉢形土器の破片である。1、3 は無文である。2 は平行沈線で文様を施文し、文様内に単節 L R の縄文を充填している。

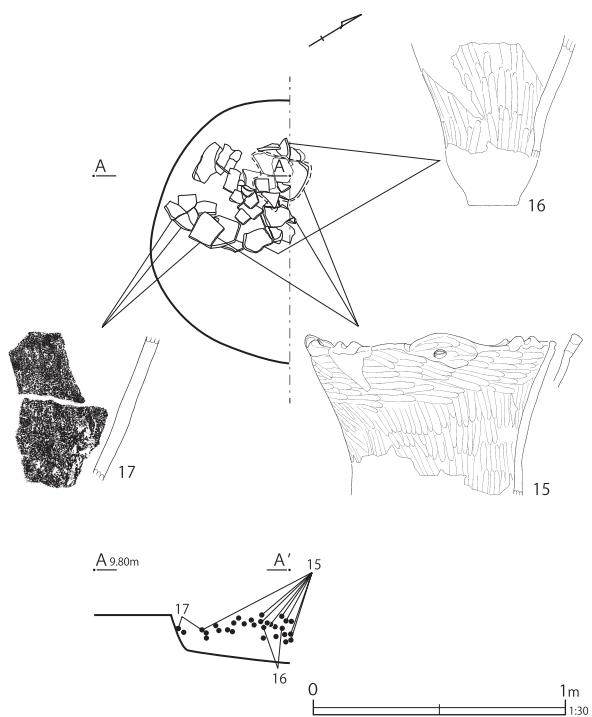
時期は後期前葉堀之内式期と考えられる。

第676号土壌（第63・64図）

H-22 グリッドに位置する。第648号土壌、第679号土壌によって壊されている。

第64図 7～11 は出土した土器片である。7、9・10 は深鉢形土器の破片で、7 は単節 L R の縄文を地文として施文している。8、11 は浅鉢

SK 682



第65図 第682号土壙遺物出土状況

形土器で、内外面とも丁寧に調整が施されている。時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第677号土壙（第63・64図）

H-22グリッドに位置する。北側に第679号土壙が近接している。

第64図12・13は出土した深鉢形土器の胴部破片である。12は平行沈線文を垂下させている。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第678号土壙（第63・64図）

H-22グリッドに位置する。第679号土壙を壊している。

第64図4～6は出土した深鉢形土器の胴部破片である。4は頸部に沈線と刻みが施文されている。5は上端部に沈線文が横方向に残存していた。6は無文である。

時期は後期と考えられる。

第679号土壙（第63・66図）

H-22グリッドに位置する。第678号土壙に壊されている。

第66図1～14は出土した土器片である。1～3は平行沈線文とその内側に地文である縄文を充填する深鉢形土器で、地文として1は単節LR、2は無節L、3は単節RLの縄文を施文している。4～9は、地文のみが施文される土器片である。4・5、7、9は同一個体で、無節Rの縄文を地文としている。6、8は単節LRの縄文を施文している。10・11は無文深鉢形土器の破片である。12は底部である。13・14は同一個体の小型の鉢形土器である。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第680号土壙（第63・64図）

H-22グリッドに位置する。古墳時代前期の第4号方形周溝墓と重複している。

第64図17～20は出土した深鉢形土器の小破片である。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる

第681号土壙（第63・64図）

H-22グリッドに位置する。南側に第673号土壙が隣接している。

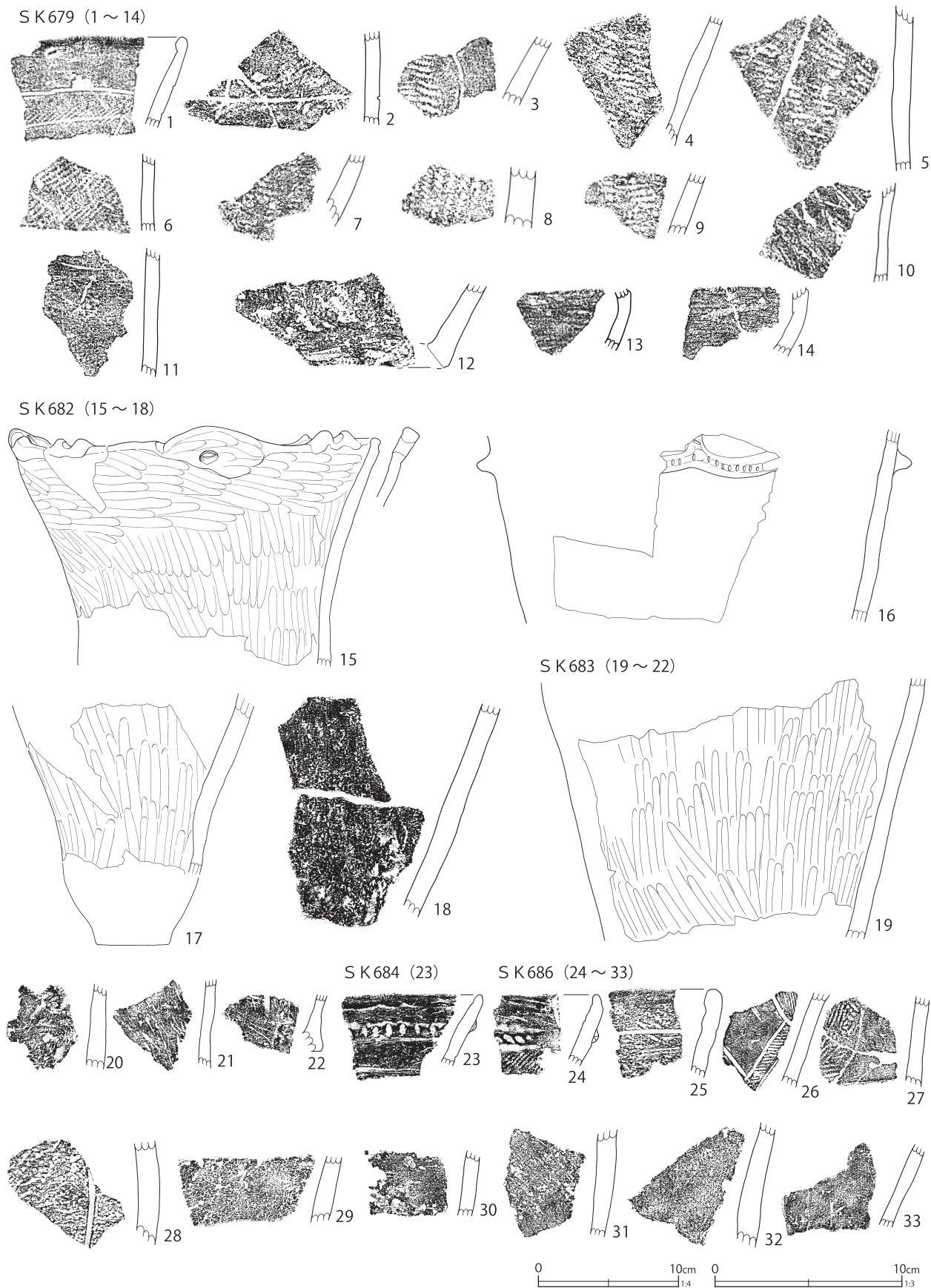
第64図14～16は出土した深鉢形土器の胴部破片である。地文はなく、14・15は沈線で文様が施文されている。

時期は、後期と考えられる。

第682号土壙（第63・65・66図）

H-22グリッドに位置する。西側に第672号土壙が近接する。調査区端で、半分ほどしか検出することができなかった。第673号土壙と同様に、覆土上層から土器が敷きつめられるように検出された。2点、器形復元が可能であった。

第66図15～18は出土した土器で、15～17は器形復元が可能であった深鉢形土器である。15は口縁部に3単位の把手を作り出し、把手中央は円孔を穿孔している。把手間には口唇部に双頭の小突起を貼付している。推定口径26.5cm、残存高17.2cmである。16は刻みが入る隆帯を貼付している。胴部は無文である。残存高13.7cmである。



第66図 土壌出土遺物 (17)

第3次調査

第9表 第3次調査区の縄文時代の土壙計測表

遺構名	グリッド	長軸(主軸)	短軸(副軸)	深さ	方位	形態	備考
SK456	C-12・13	1.27	0.82	0.28	N-87° -W	楕円形	
SK457	C-13	1.45	1.02	0.49	N-63° -E	楕円形	
SK458	C-13 D-13	1.46	1.22	0.22	N-20° -W	不整円形	
SK459	D-15	1.00	0.82	0.46	N-18° -W	楕円形	
SK460	F-17	0.86	0.74	0.15	N-46° -E	楕円形	
SK461-A	D-14	1.45	1.05	0.45	N-4° -E	楕円形	旧 SK461
SK461-B	D-14	1.30	1.19	[0.55]	N-12° -W	円形	旧 SE6
SK462	E-16	[0.58]	0.50	0.16	N-31° -W	楕円形	SK463
SK463	E-16	1.25	1.03	0.49	N-46° -E	不整楕円形	SK462
SK464	F-17	0.79	[0.50]	0.11	N-53° -W	不整円形	SK472 GP13 GP14
SK465	F-17	0.57	0.54	0.10	N-27° -W	円形	
SK466	G-19	0.94	0.67	0.12	N-44° -W	楕円形	
SK467	G-19	1.15	1.10	0.29	N-24° -E	円形	
SK468	D-19	[0.48]	0.69	[0.13]	N-35° -W	(楕円形)	SJ31 SX3
SK469	G-19	1.12	1.03	0.27	N-71° -W	円形	
SK470	G-19	0.62	0.40	0.20	N-88° -E	楕円形	SJ31
SK471	G-19	0.89	0.80	0.15	N-60° -E	円形	SJ31 P21
SK472	F-17	0.69	0.61	0.11	N-32° -E	不整円形	SK464
SK521	L-25	0.77	[0.52]	0.23	N-15° -E	楕円形	SJ54 SK606
SK529	J-23	[0.70]	0.45	[0.32]	N-20° -W	楕円形	SJ60
SK593	L-24	1.09	1.00	0.52	N-30° -W	円形	
SK594	K-24	1.16	1.06	1.20	N-55° -W	円形	
SK596	J-25	1.50	[1.25]	1.80	N-0°	(円形)	SJ57
SK597	J-25	1.13	0.99	0.17	N-35° -E	楕円形	
SK599	J-24	0.75	0.71	0.09	N-10° -E	円形	SR5
SK600	I-24 J-24	0.92	0.82	0.28	N-10° -E	円形	SR5
SK604	L-26	0.95	[0.43]	0.12	N-59° -E	楕円形	SR8
SK605	L-25 L-26	[0.61]	0.70	0.18	N-87° -E	(楕円形)	SJ52
SK606	L-25	[0.52]	0.52	0.22	N-55° -W	(楕円形)	SK521
SK607	K-24	1.20	1.18	1.45	N-43° -W	円形	SJ45 SD33
SK608	L-24	0.70	0.60	0.12	N-53° -W	楕円形	
SK609	L-25	1.70	1.43	0.27	N-69° -E	楕円形	SK493 SD34
SK610	K-21	1.05	0.89	0.94	N-80° -W	楕円形	SJ3・4・89
SK611	K-22	1.20	1.07	1.27	N-25° -E	不整円形	SJ40
SK612	K-24	[1.07]	1.00	1.57	N-49° -E	楕円形	SJ44
SK613	K-24 L-24	1.90	1.14	0.21	N-10° -E	楕円形	SR6
SK614	K-24	0.93	0.90	0.16	N-60° -E	円形	
SK615	I-23	0.98	0.90	1.17	N-46° -E	円形	SR4
SK616	I-23	1.02	0.94	0.32	N-67° -W	円形	SR4
SK617	I-23	0.80	0.78	0.13	N-39° -W	円形	SR4
SK618	I-23	0.80	0.70	0.19	N-2° -W	円形	SR4
SK619	I-22・23	0.64	0.58	0.22	N-0°	円形	SR4
SK620	I-23	0.57	0.50	0.15	N-90°	円形	SR4
SK621	J-21	1.06	0.94	0.24	N-59° -E	不整円形	SR3 GP5 SL2
SK622	I-23	1.10	[0.45]	0.12	N-50° -W	楕円形	SR4
SK623	I-25	1.33	0.67	0.25	N-34° -W	不整楕円形	SR5
SK624	J-24 K-24	1.43	1.01	0.40	N-41° -W	不整楕円形	SK651
SK625	J-24 K-24	1.76	0.94	0.27	N-48° -W	楕円形	
SK626	J-24	0.55	0.47	0.21	N-70° -W	円形	
SK627	K-24	1.27	1.18	0.33	N-43° -W	円形	SK 内の Pit
SK628	K-23 L-23	0.85	0.85	0.14	N-0°	円形	
SK629	K-24	0.84	[0.55]	0.13	N-32° -E	円形	SJ45
SK630	K-23 L-23	0.95	0.73	0.13	N-37° -E	楕円形	
SK631	K-23	0.99	0.81	0.25	N-44° -W	楕円形	
SK632	K-23	1.43	[0.87]	0.52	N-60° -W	不整楕円形	SJ44
SK633	J-24	0.75	0.66	0.13	N-20° -E	楕円形	

遺構名	グリッド	長軸(主軸)	短軸(副軸)	深さ	方位	形態	備考
SK634	J-24	0.56	0.56	0.10	N-0°	円形	SK635
SK636	J-23	0.66	0.54	0.16	N-49° -W	楕円形	
SK637	K-24	0.73	0.62	0.17	N-58° -W	楕円形	
SK638	J-24	0.67	0.52	0.51	N-20° -W	楕円形	
SK639	K-23 L-23	0.82	0.75	0.14	N-18° -E	円形	
SK640	J-23	[0.60]	0.51	0.09	N-58° -W	楕円形	SJ60
SK641	J-23	0.95	0.68	0.14	N-35° -W	不整楕円形	SK559
SK642	J-23	0.80	0.73	0.15	N-56° -W	長方形	SJ60 GP2 GP3
SK643-A	M-24	1.64	1.58	2.00	N-74° -E	円形	SJ65
SK644	J-23	0.82	0.50	0.65	N-64° -W	(円形)	GP1
SK647	H-21	0.85	0.78	0.33	N-0°	円形	
SK648	H-22	1.00	1.00	0.46	N-0°	円形	SK676
SK649	K-23	0.52	0.52	0.62	N-0°	円形	SJ44
SK650	K-23	0.68	0.63	0.25	N-90°	円形	
SK651	J-24	1.13	[0.92]	0.35	N-53° -W	不整円形	SR5 SK624
SK654	K-21	0.57	0.53	0.79	N-51° -W	円形	SK671
SK655	K-21	1.05	0.92	0.38	N-40° -E	円形	
SK656	K-21	1.03	1.03	1.86	N-0°	円形	SJ89
SK657	K-21 K-22	0.81	0.68	0.29	N-52° -W	楕円形	
SK658	K-21	0.53	0.53	0.25	N-0°	円形	
SK660	K-22	0.79	0.71	0.30	N-61° -W	不整円形	
SK661	K-22	0.54	0.54	0.17	(N-0°)	円形	SJ91
SK662	K-22	0.62	0.55	0.13	N-21° -E	円形	SJ91
SK663	K-22	0.87	0.83	0.10	N-50° -W	円形	
SK664	K-22	0.64	0.64	0.12	N-0°	円形	
SK665	H-21	0.57	0.57	0.25	N-0°	円形	
SK666	K-21	0.79	0.69	0.48	N-60° -W	円形	
SK667	K-21	0.90	0.86	0.35	N-21° -E	円形	
SK668	K-21 K-22	1.30	1.30	1.77	N-0°	円形	
SK669	K-21	1.21	1.02	1.03	N-22° -W	楕円形	SJ30
SK670	K-21	0.87	0.72	0.24	N-24° -W	楕円形	SJ89
SK671	K-21	0.62	0.56	0.21	N-0°	円形	SK654
SK672	H-22	1.57	0.94	0.92	N-79° -E	不整形	
SK673	H-22	1.55	1.54	0.78	N-82° -E	不整円形	GP13
SK675	I-21	1.00	0.87	0.25	N-79° -E	楕円形	SJ74 内
SK676	H-22	0.88	0.88	0.26	N-70-E	(円形)	SK648 679
SK677	H-22	1.00	0.81	0.65	N-77° -E	楕円形	
SK678	H-22	0.96	0.68	0.28	M-90°	不整形	SK679
SK679	H-22	[1.23]	1.47	0.35	N-70° -E	不整形	SK676・678
SK680	H-22	0.81	0.68	0.21	N-90°	円形	SR4
SK681	H-22	1.11	0.77	0.30	N-31° -E	楕円形	
SK682	H-22	1.05	[0.52]	0.19	N-0°	(円形)	
SK683	H-22	0.98	0.74	0.23	N-80° -E	楕円形	
SK684	H-22	1.33	1.15	0.18	N-63° -E	不整円形	
SK686	I-22	1.13	1.09	0.49	N-87° -W	円形	

17は無文の胴部である。残存高12.9cmである。

18は無文の胴部破片である。

時期は、後期前葉堀之内式期と考えられる。

第683号土壙（第63、66図）

H-22グリッドに位置する。第684号土壙の東側に近接している。

第66図19～22は出土した深鉢形土器片で、

19は器形復元が可能であった土器である。器面は無文で、残存高18.5cmである。

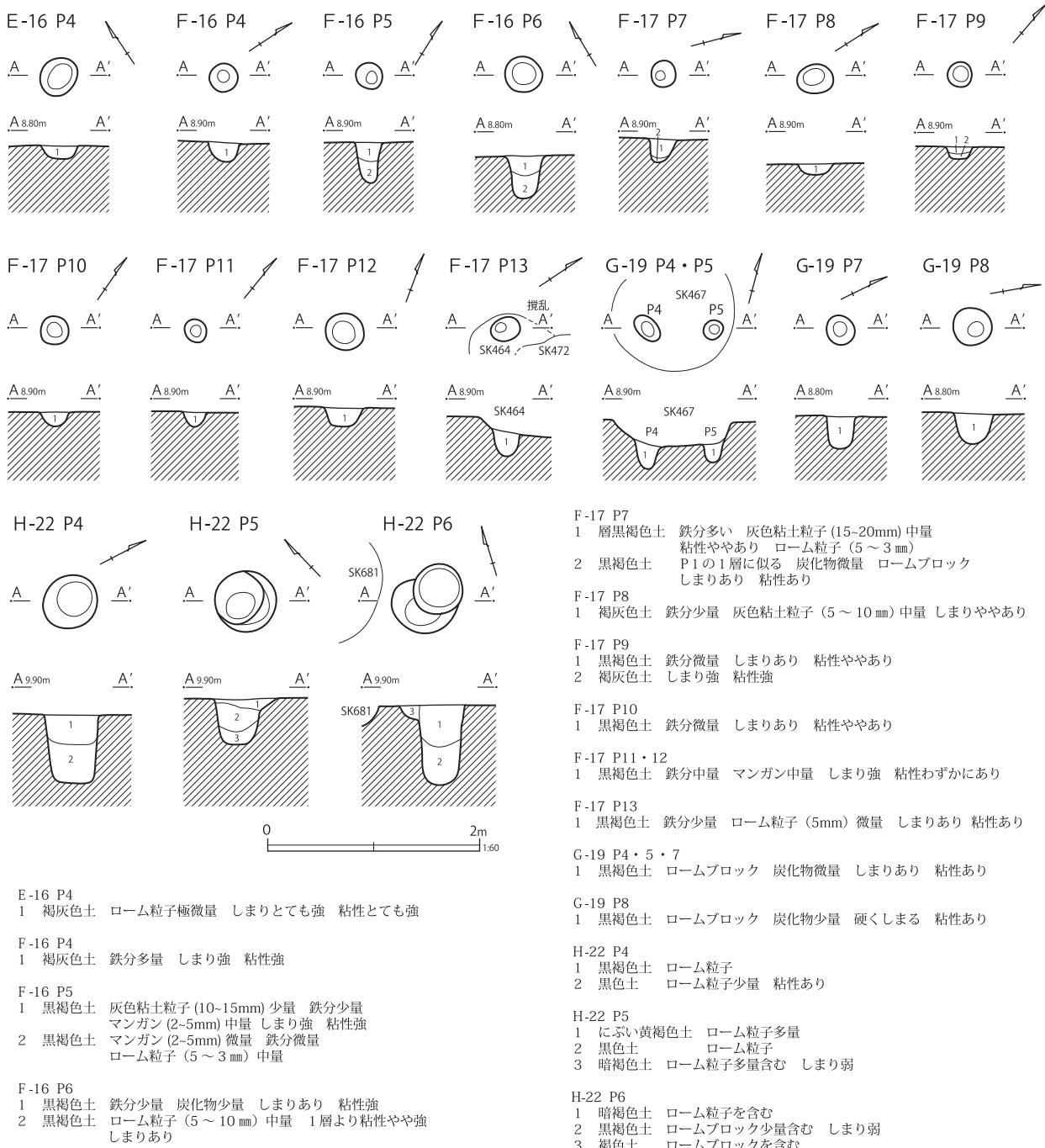
20～21は胴部の破片である。

時期は後期である。

第684号土壙（第63、66図）

H-22グリッドに位置する。第683号土壙の西側に近接している。

第3次調査



第67図 第3次調査区の縄文時代のピット（1）

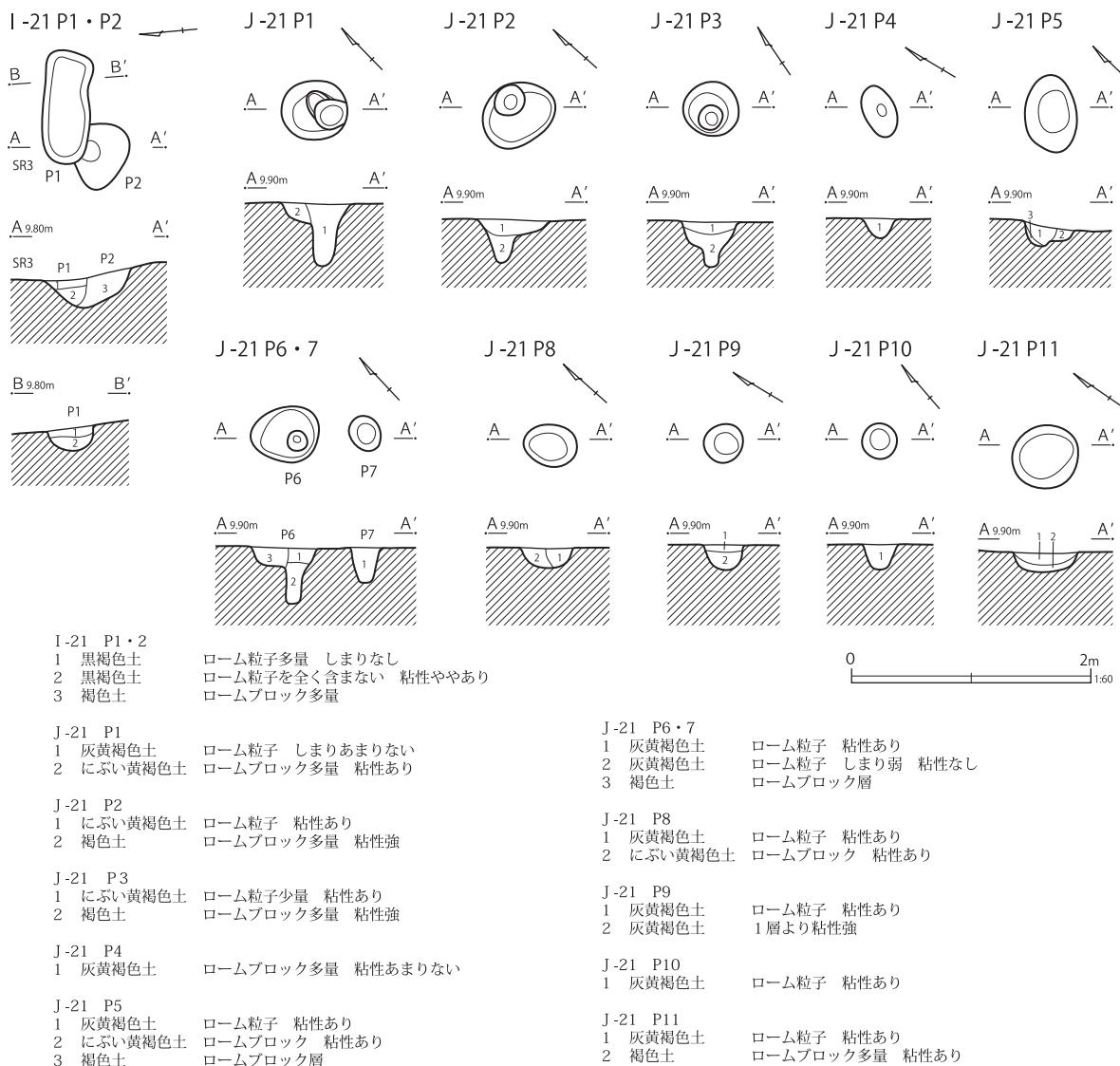
第66図23は出土した深鉢形土器の口縁部破片である。刻みが入る隆帯を巡らしている。胴部には、半裁竹管で櫛歯状の文様を施文している。時期は後期前葉堀之内2式期と考えられる。

第686号土壌（第63、66図）

I-22グリッドに位置する。

第66図24～33は出土した深鉢形土器の破片で

ある。24～27は平行沈線文内に地文を充填している。24は刻みが入る隆帯を口縁部に巡らしている。24は無節L、25は単節R L、26は無節R、27は単節L Rの縄文を地文としている。28は地文として単節L Rの縄文を施文し、その上に沈線文を施文する。29～33は無文の胴部破片である。時期は、後期前葉堀之内2式期と考えられる。



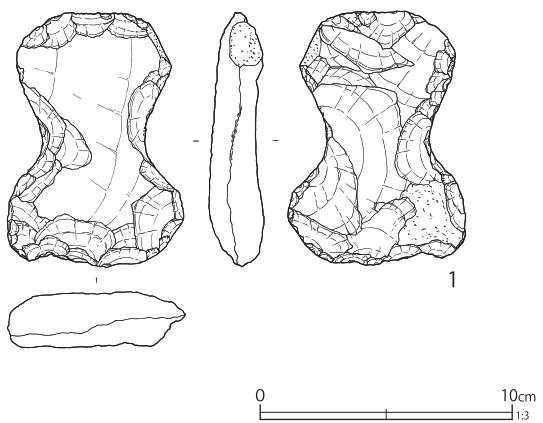
第68図 第3次調査区の縄文時代のピット（2）

(4) ピット

調査区域内からは、ピットと呼ばれる小穴状の遺構が検出されている。

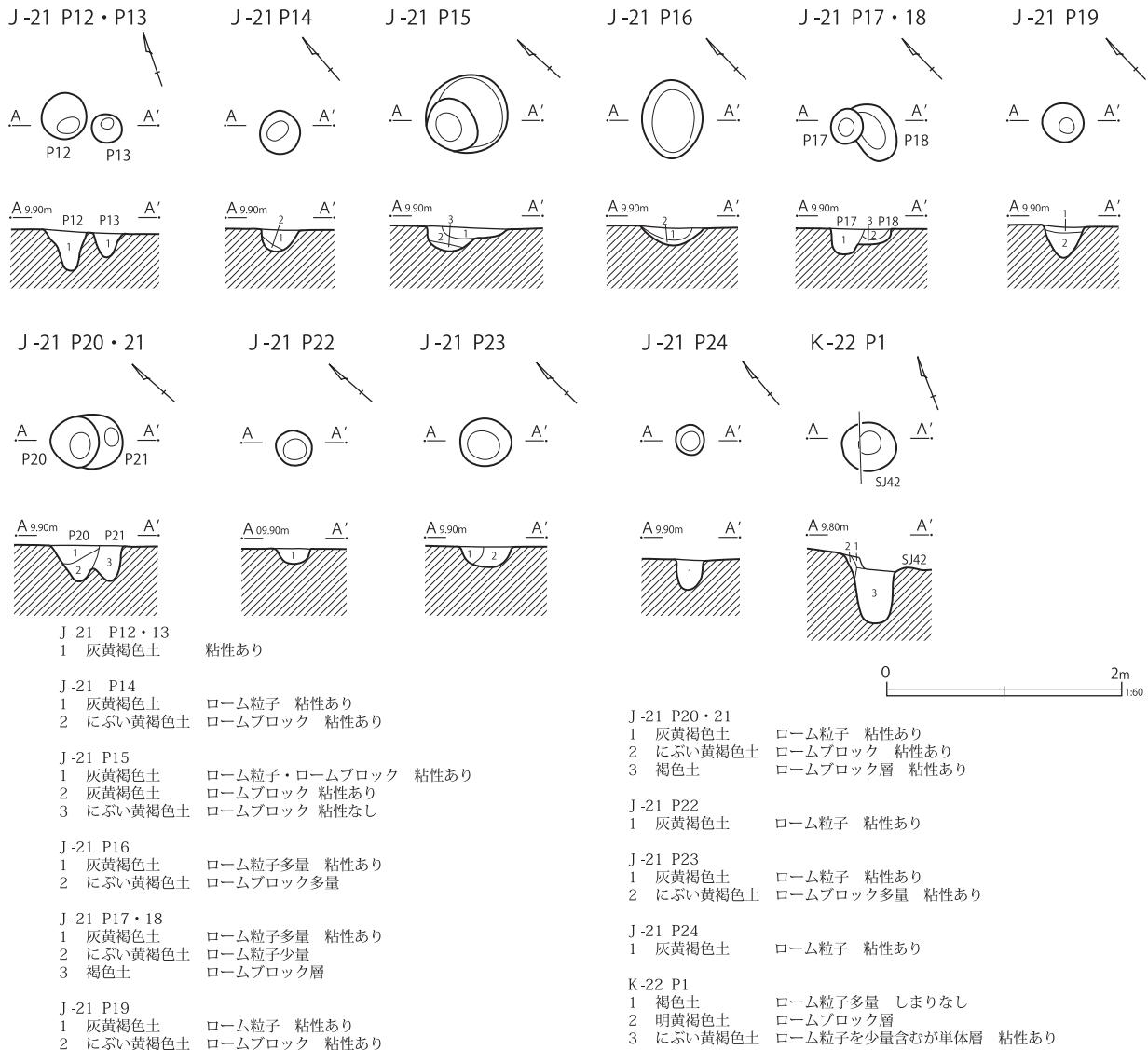
縄文時代のピットは、調査区域内の縄文時代の住居跡や土壙周辺に主に分布していた。グリッドピットの多くは、ごく浅いものであった。これは、方形周溝墓の方台部や、古墳時代以降の遺構によって上層が削平されたものであると考えられる。

グリッドピットのうち、特に炉跡の可能性が高い、第460号土壙や、第472号土壙の周辺から検出されたグリッドピットについては、住居跡の



第69図 ピット出土遺物

第3次調査



第70図 第3次調査区の縄文時代のピット（3）

柱穴であった可能性がある。

また、H-22 グリッドから検出されたグリッドピットは、掘り込みが深いものが多く、円形に近い範囲が確認できた。

他には、方形周溝墓や畠跡に上層が削平されているが、J-21 グリッドからも、グリッドピットが円形に近い範囲で確認できた。

これらのグリッドピットの分布範囲が住居跡であった可能性もある。しかしながら、炉が検出されなかつたことや遺物が出土しなかつたことから

グリッドピットとして扱った。

遺物はほとんど出土しておらず、土器については図示できるものは検出されなかつた。

図示できたものは、D-3 グリッドP 4から出土した、第69図1の打製石斧のみであつた。

1は、出土した打製石斧である。側縁の中央部に、大きく抉りを入れるので、いわゆる分銅形のものである。右側縁の上端部に、原礫面が残存している。剥片を利用したもので、1次剥離面側が表面側となっている。

第10表 第3次調査区の縄文時代のピット計測表

グリッド	ピット番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	グリッド	ピット番号	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)
D-13	P1	0.35	0.34	24		P10	0.32	0.34	31
	P2	0.36	0.33	31		P11	0.32	0.34	31
	P3	0.40	0.35	21		P12	0.30	0.28	31
	P4	0.41	0.35	55		P13	0.34	0.30	42
	P5	0.48	0.26	17	I-21	P1	0.93	0.37	20
D-14	P1	0.43	0.41	20		P2	0.56	0.46	33
	P2	0.52	0.46	13		I-22	P1	0.32	0.40
D-15	P1	0.30	0.27	13		P2	0.40	0.34	17
E-15	P1	0.34	0.33	29		P3	0.26	0.20	13
	P2	0.37	0.34	35		P4	0.46	0.40	10
	P3	0.39	0.37	38		P5	0.26	0.24	17
	P4	0.57	0.56	44		P6	0.24	0.20	69
	P5	0.52	0.44	23		P7	0.26	0.26	56
E-16	P1	0.24	0.18	16		P8	0.40	0.26	49
	P2	0.26	0.25	13	I-23	P1	0.41	0.38	17
	P3	0.26	0.24	26		P2	0.50	0.40	31
	P4	0.38	0.32	13		P3	0.22	0.18	8
F-16	P1	0.55	0.54	39		P4	0.30	0.26	15
	P2	0.66	0.60	19		P5	0.24	0.20	11
	P3	0.40	0.38	25		P6	0.26	0.24	12
	P4	0.28	0.26	19		P7	0.30	0.28	29
	P5	0.26	0.20	38		P8	0.36	0.32	14
	P6	0.34	0.32	40		P9	0.30	0.26	28
F-17	P1	0.60	0.53	17		P10	0.24	0.23	12
	P2	0.31	0.30	20		P11	0.25	0.22	15
	P3	0.71	0.68	29	I-24	P1	0.42	0.35	16
	P4	0.40	0.36	24		P2	0.45	0.38	29
	P5	0.25	0.22	17		P3	0.50	0.45	15
	P6	0.30	0.28	13	J-21	P1	0.56	0.49	50
	P7	0.25	0.23	26		P2	0.63	0.50	37
	P8	0.35	0.27	10		P3	0.45	0.45	41
	P9	0.24	0.23	13		P4	0.44	0.26	17
	P10	0.26	0.25	14		P5	0.65	0.40	20
	P11	0.22	0.20	13		P6	0.57	0.45	49
	P12	0.36	0.34	22		P7	0.30	0.25	30
	P13	0.29	0.20	25		P8	0.46	0.35	16
	P14	0.35	0.28	24		P9	0.34	0.32	19
G-19	P1	0.53	0.32	25		P10	0.30	0.26	21
	P2	0.52	0.36	31		P11	0.58	0.50	15
	P3	0.22	0.26	18		P12	0.40	0.38	16
	P4	0.29	0.18	27		P13	0.25	0.24	19
	P5	0.18	0.17	22		P14	0.36	0.32	22
	P6	0.20	0.18	26		P15	0.68	0.66	23
	P7	0.29	0.28	31		P16	0.64	0.50	16
	P8	0.38	0.38	30		P17	0.29	0.28	23
H-21	P1	0.40	0.38	73		P18	0.55	0.32	16
H-22	P1	0.60	0.58	60		P19	0.36	0.35	29
	P2	0.60	0.36	69		P20	0.45	0.40	33
	P3	0.46	0.44	65		P21	(0.45)	(0.40)	32
	P4	0.54	0.50	65		P22	0.31	0.30	15
	P5	0.58	0.54	45		P23	0.45	0.40	16
	P6	0.70	0.44	78		P24	0.25	0.24	26
	P7	0.36	0.32	38	J-23	P1	0.40	0.38	65
	P8	0.26	0.22	28		P2	0.52	0.31	12
	P9	0.28	0.24	15		P3	0.20	0.17	17

第3次調査

グリッド	ピット番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	グリッド	ピット番号	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)
J-26	P1	0.38	0.28	35	K-26	P4	0.61	0.60	7
	P2	0.33	0.24	0		K-27	P1	0.32	0.32
K-21	P1	0.35	0.33	14	L-23	P1	0.43	0.40	35
	P2	0.44	0.36	12		P2	0.44	0.35	24
	P3	0.55	0.47	122		P3	0.32	0.30	35
	P4	0.45	0.45	69		P4	0.55	0.52	38
K-22	P1	0.46	0.40	61		P5	0.47	0.35	33
K-23	P1	0.38	0.36	15		P6	0.45	0.37	32
	P2	0.38	0.28	84		P7	0.27	0.24	20
	P3	0.62	0.33	38	L-24	P1	0.37	0.36	46
	P4	0.30	0.29	29		P2	0.42	0.38	28
	P5	0.32	0.25	49		P3	0.35	0.29	33
	P6	0.50	0.48	13		P4	0.60	0.52	53
K-24	P1	0.80	0.43	79		P5	0.34	0.34	39
	P2	0.49	0.42	48		P6	0.46	0.44	24
	P3	0.36	0.35	18		P7	0.52	0.47	15
K-26	P1	0.39	0.37	37	L-25	P1	(0.33)	0.22	25
	P2	0.33	0.28	14	P2	0.28	0.22	7	
	P3	0.50	0.46	11	M-23	P1	0.30	0.29	10

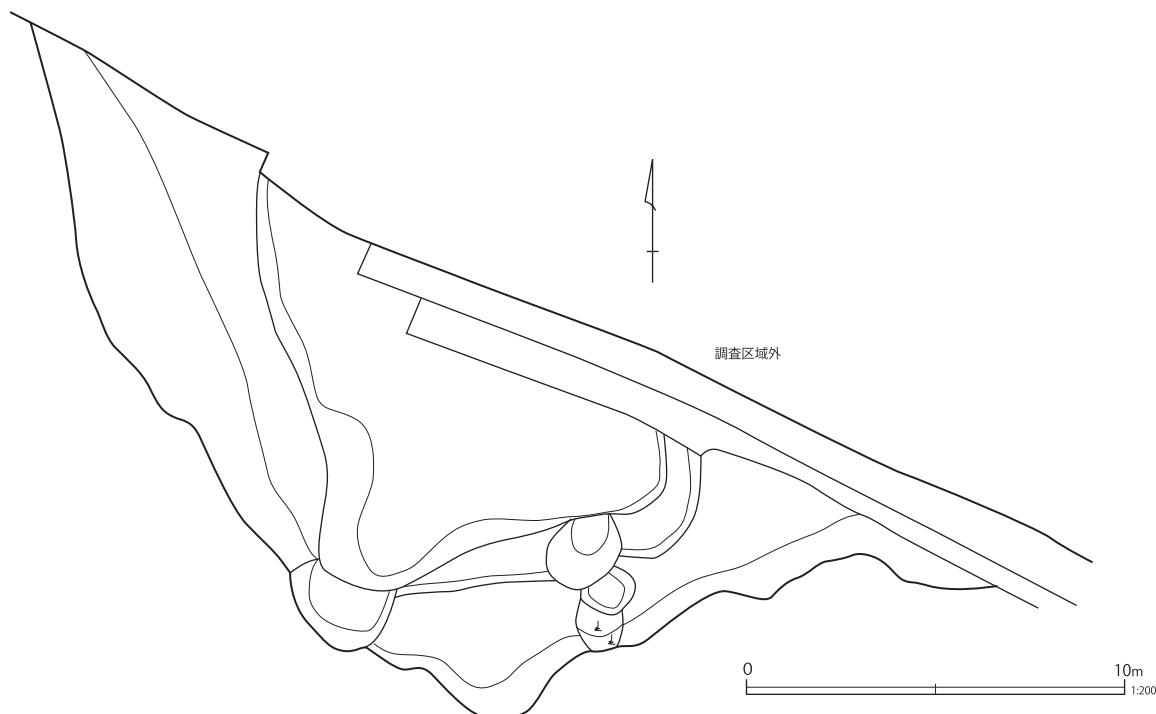
(5) 水場遺構出土遺物

発掘調査当時、第3号性格不明遺構として調査された箇所である。ここは、第IV章－3－(3)で詳述するように、古墳時代前期の水場遺構とされ、第1・2号木組遺構が検出された箇所である。縄文時代の遺物は、これらに混入していた遺物で

ある。

その後の第6次・7次調査において、北側に続く古墳時代前期の水場遺構調査後、深い位置から縄文時代後期の水場遺構が検出された。

第31号住居跡が古墳時代前期の水場遺構の掘削によって半分が壊されていることから、縄文時



第71図 水場遺構の検出状況

代の水場遺構埋没後に、古墳時代前期の水場遺構が南側に広げるように掘削されたと考えられる。

こうしたことから、今回水場遺構から出土した遺物は、縄文時代後期の水場遺構に関連すると考えられる。また、第31号住居跡に関連する遺物も多く含まれていると考えられる。

そこで調査当時、第3号性格不明遺構から出土した縄文時代の遺物について、一括して水場遺構出土遺物として報告することとした。

出土した土器は、後期後葉堀之内式期が主体を占めていた。土器については、(7) グリッド出土遺物のグリッド出土土器の分類に則って記す。

出土土器

第Ⅲ群土器

中期の土器群を一括する。

第1類（第73図8）

中期中葉の土器を一括する。第73図8は、勝坂系の深鉢形土器の破片である。隆帯に沿って爪形文と三角押文が施文される。勝坂式中段階の藤内式に相当すると考えられる。

第2類（第73図9）

中期後葉の土器を一括する。9は深鉢形土器の胴部破片で、2本1組の沈線を垂下させている。沈線間は磨消縄文を施している。地文は単節RLの縄文を施文している。加曾利EⅢ式期に相当すると考えられる。

第V群土器

後期前葉の土器群を一括する。

第1類（第73図12～21、24～30、第74図44）

堀之内1式土器を一括する。

12、14～18は地文を施文した後、沈線文を施文する深鉢形土器の破片である。いずれも単節LRの縄文を地文としている。12、14・15は口縁部で、肥厚する口縁部に沈線を巡らしている。12は波状口縁である。14・15は沈線で蕨手状蛇行沈線文を施文している。13、17・18は口縁が大きく開き、頸部で括れる器形である。19～28、

44は地文を施文しない深鉢形土器の破片である。沈線で文様を施文している。44は口唇部に列点文を巡らしている。19・20は波状口縁である。24・25は17・18と同様の器形であると考えられる。26・27は称名寺系の文様が施文される。29・30は地文のみ施文する深鉢形土器の口縁破片である。29は単節RL、30は単節LRの縄文を施文している。

第2類（第72図1～3、第73図11、31～43、第74図45～54）

堀之内2式土器を一括する。

1は器形が復元できた深鉢形土器の胴部である。口縁は開き、胴中央でゆるやかに括れ、胴下半は丸みを帯びて底部に至る器形である。地文はなく、沈線で懸垂文を4本垂下させ、懸垂文間には対向するU字文を施文している。残存高30.6cmである。

2・3は器形が復元できた深鉢形土器である。いずれも朝顔形の器形である。口縁から胴上部が残存していた。2は口縁部に「8」字状貼付文を貼付する。口縁部下に沈線を粗雑に2条巡らせている。沈線で文様を施文し、その内側には単節LRの縄文を充填しているが、一部外側に施文している。口縁内面に1条沈線文を巡らしている。推定される口径27.6cm、残存高11.1cmである。3は、口縁下に1条刺突を施した隆帯を巡らしている。胴部には沈線文を施文し、文様内に単節LRの縄文を充填している。推定される口径14.0cm、残存高7.2cmである。

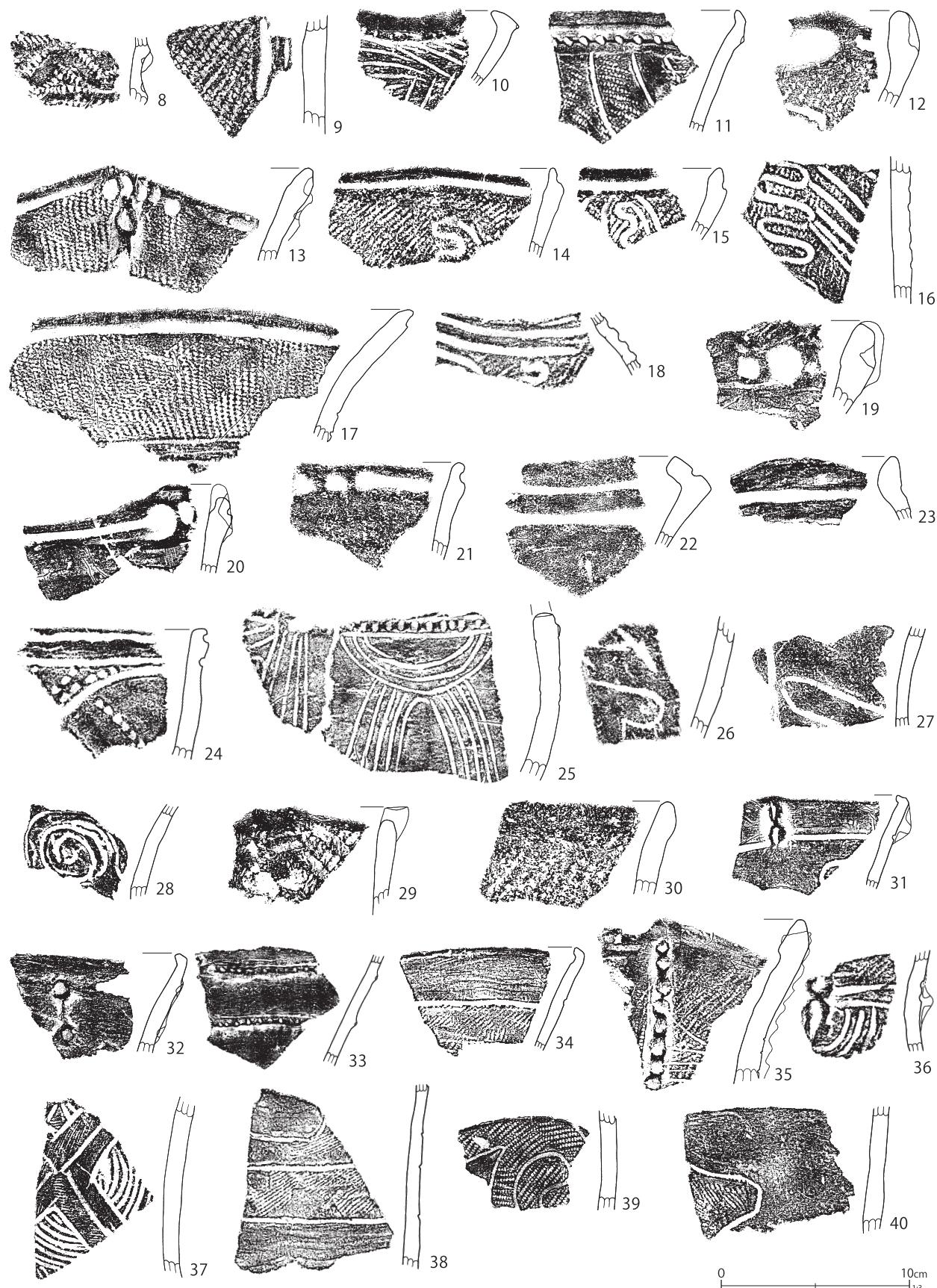
31～34は朝顔形の器形の深鉢形土器の破片である。31は口縁部に「8」字状貼付文を貼付する。32・33は口縁部に刻みが入る隆帯を2条巡らしている。32は上下の隆帯間に「8」字状貼付文を貼付している。34、37～40は平行沈線文様内に地文を充填している。34、37、39は単節LRの縄文を、38は無節Lを、40は単節RLの縄文を地文としている。37は、平行沈線で菱形状に



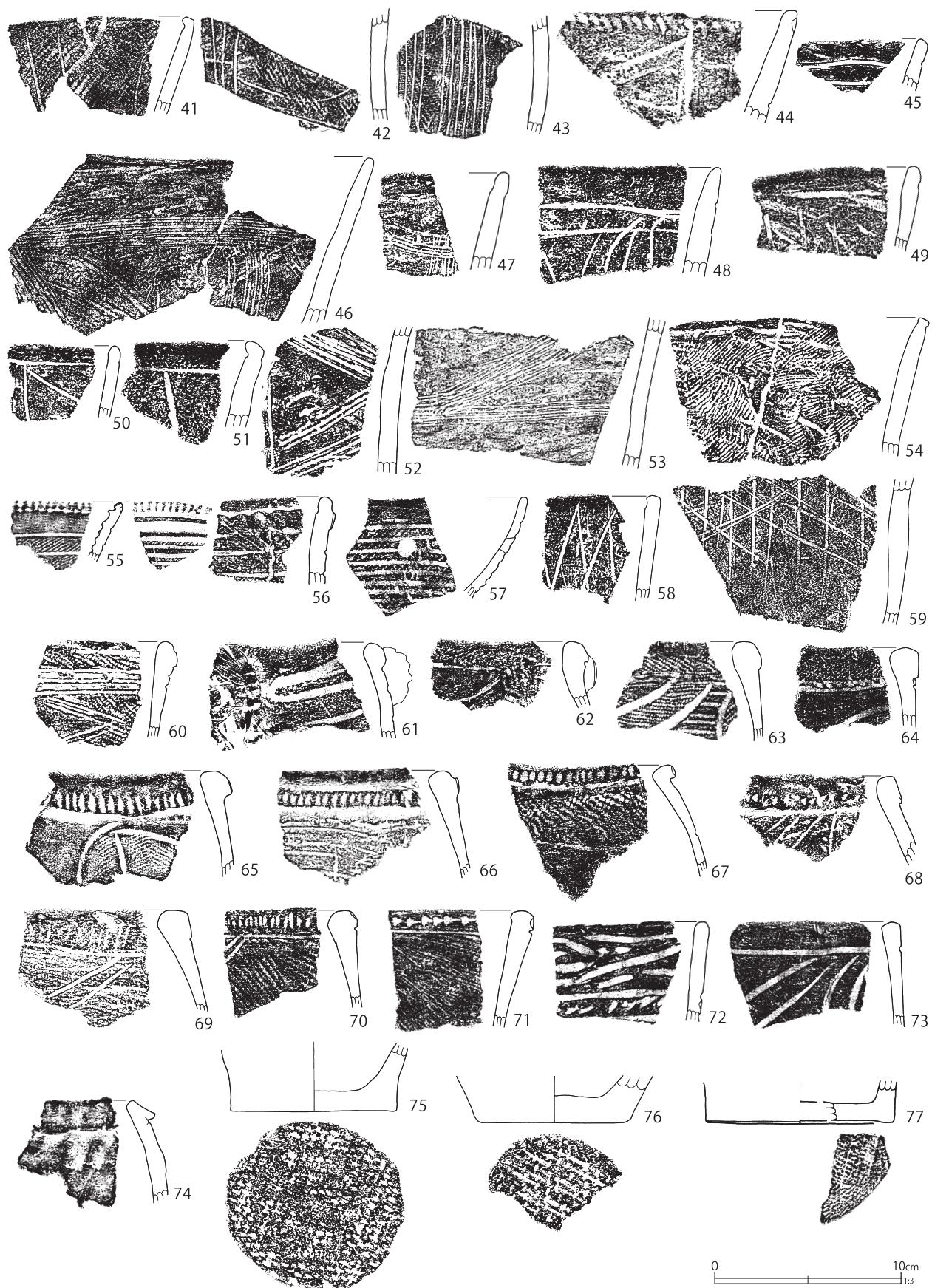
第72図 水場遺構出土遺物（1）

文様を施し、文様の外側に沈線を重弧状に施している。35・36は口縁部が大きく開き、頸部で括れる器形の土器で、35は口唇部から頸部に刻みが入る隆帯を垂下させる。36は頸部に「8」字状貼付文を貼付している。単節L Rの縄文を、41～43は地文を施し、細い沈線で文様を施文

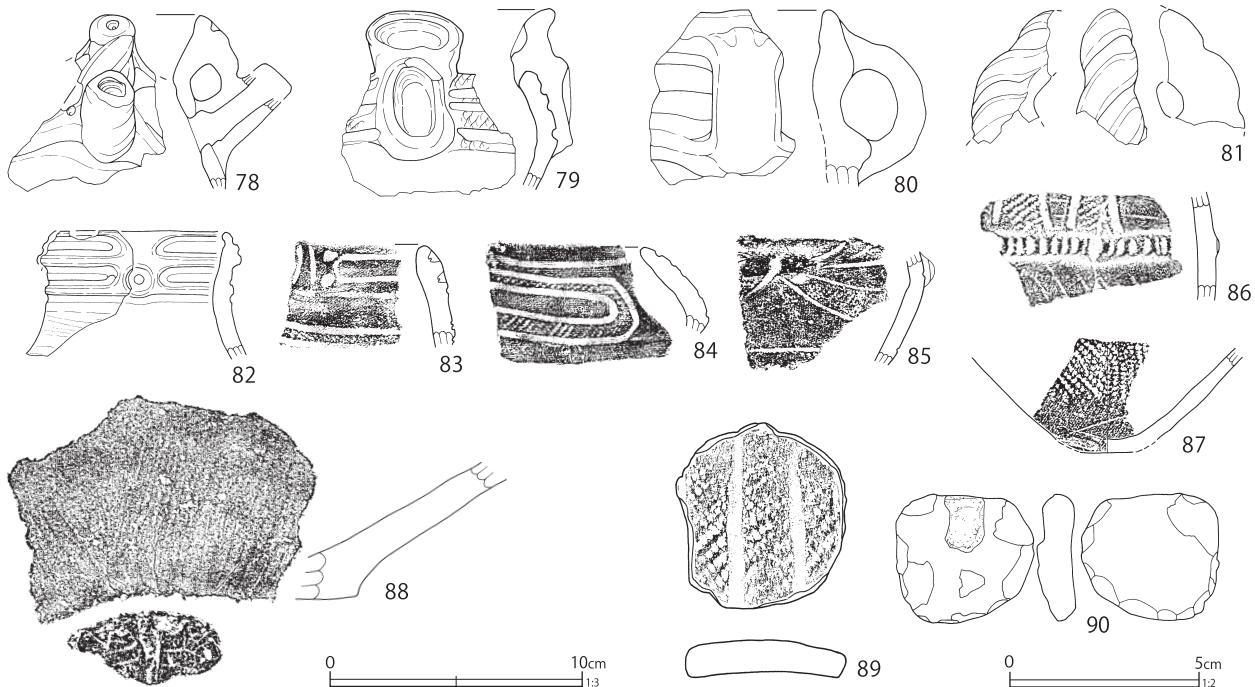
している。45～53は地文がなく、沈線文を施している。46・47、52・53は櫛歯状の集合沈線で文様を施文している。47、50・51は、口縁内面に沈線を巡らしている。49は無節Lの地文のみを施文する。



第73図 水場遺構出土遺物（2）



第74図 水場遺構出土遺物（3）



第75図 水場遺構出土遺物（4）

第VI群土器

後期中葉の土器群を一括する。

第1類（第73図10、第74図55）

加曾利B式期の深鉢形土器の破片である。10は波状口縁で、口唇部に刻みが入っている。矢羽状に文様が施文される。55は精製土器で、口縁内面には複数の沈線を施文する。

第3類（第74図56、58・59）

紐線文系土器・粗製土器を一括する。56は紐線文系土器である。58・59は格子目文を施文する土器である。

第VII群土器（第72図6、第74図60～74）

後期後葉から晩期の土器群を一括する。

第1類（第74図60～64）

後期安行式土器を一括する。

60～64は後期後葉の安行1から2式期の深鉢形土器の口縁部破片である。60は口縁部が直立し、他は口縁が内湾している。

第2類（第72図6、第74図72・73）

晩期安行式土器を一括する。

6は晩期安行式期の5単位の大型の波状把手を

もつ深鉢形土器である。口縁から胴上部が出土した。把手端部に刻みが入り、把手部に2段の刻みが入る貼付文を貼付する。推定される口径21.5cm、残存高12.2cmである。

72・73は沈線文、列点文を施す平口縁の深鉢形土器の破片である。72は口縁が外傾し、73は内湾する。安行3c式期の土器である。

第3類（第74図65～71）

紐線文土器・粗製土器を一括する。

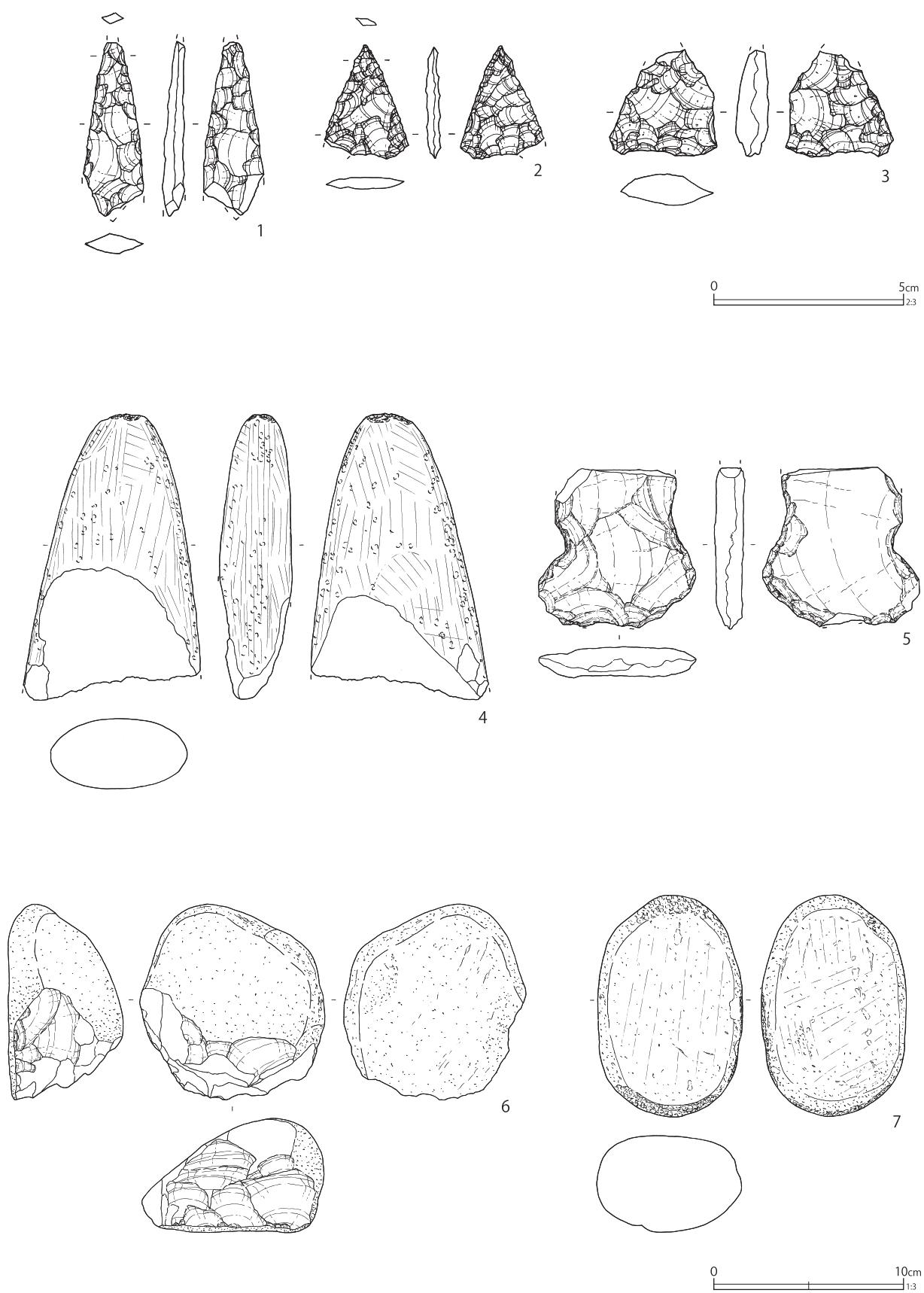
69～71は、口縁部に紐線を施さず、沈線、列点を施す土器である。条線を施文している。安行1～3a式期の土器である。65～68は紐線を施文するもので、66は条線を施文するが他は条線が施文されない。65は沈線文と文様内に单節R Lの縄文を充填する。67は单節R Lの縄文が、68は沈線文を施文している。後期末～晩期前葉の土器である。

74は晩期の無文の粗製土器である。

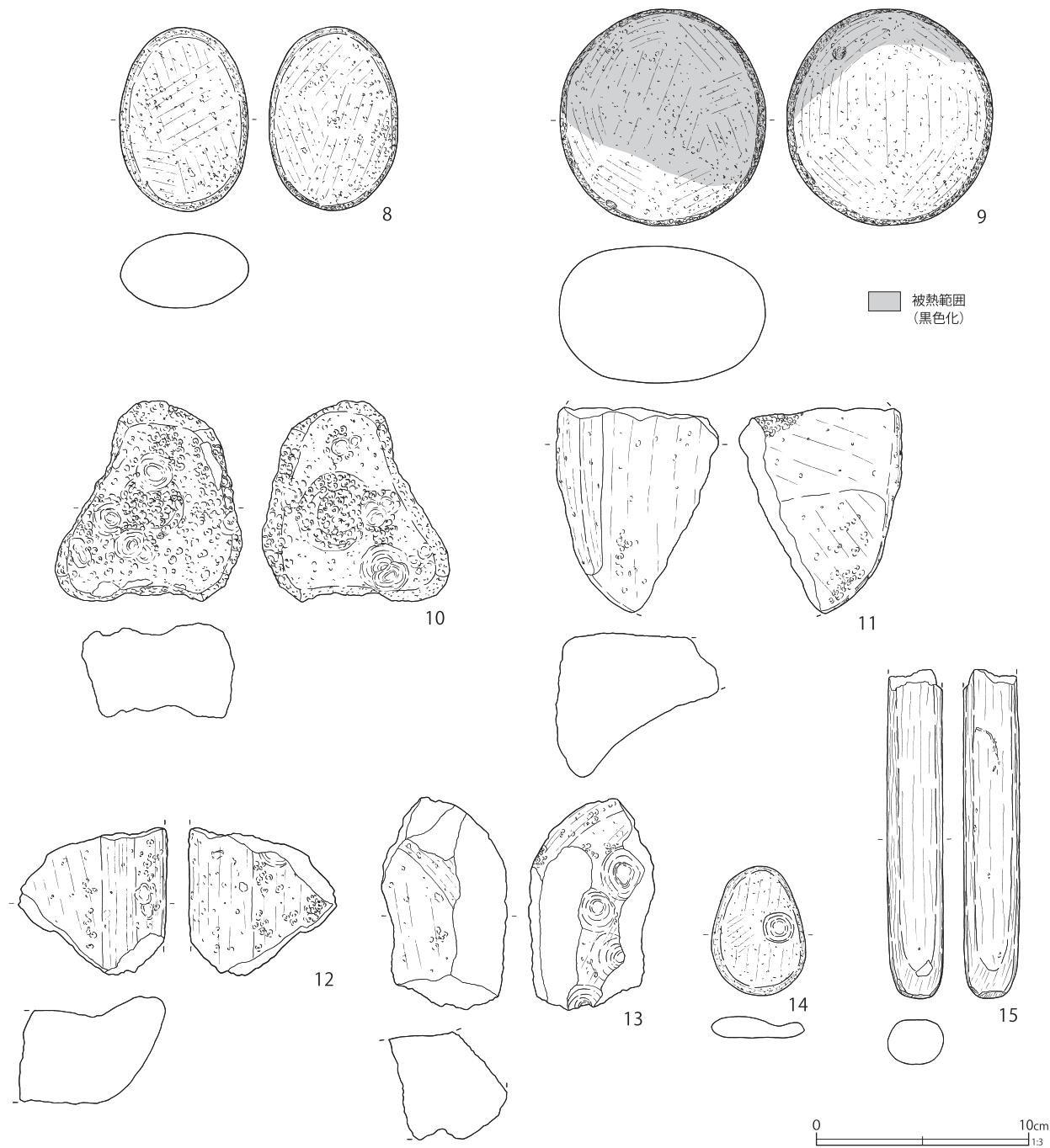
第VIII群土器（第72図4、7、第74図75～77）

底部を一括する。4は後期安行式期の底部と考えられる。7、75～77は、後期前葉の堀之内式

第3次調査



第76図 水場遺構出土石器（1）



第77図 水場遺構出土石器（2）

期の底部の破片と考えられる。底面に網代痕が認められる。

第IX群土器（第72図5、第73図22・23、第74図57、第75図78～88）

深鉢形土器以外の器種の土器群を一括する。5、22・23、57、84～88は鉢形や浅鉢形土器の破片である。

5は、後期中葉の加曾利B1式期の器形が復元

できた浅鉢で、口唇部に刻みを入れ、列点文や「の」の字文、平行沈線文の内文をもつ。推定口径28.4cm、残存高7.8cmである。

57、84・85は後期中葉の鉢形土器の破片である。57は器面に補修孔が穿孔されている。84・85は胴部が大きく屈曲している。

82・83は壺形土器の口縁部で、78、80・81は注口土器の破片である。

出土土製品（第75図89・90）

89・90は土製円盤である。89は円形に加工され、90は口縁部を打ち欠いて加工している。

出土石器（第76図1～7、第77図8～14）

出土量は少なく、破損品が多い。

1は尖頭器である。先端と基部を欠損する。2・3は石鏃で、3は未製品である。基部の抉りは浅く入れられている。4は磨製石斧である。刃部を欠損している。5は両側縁に大きく抉りが入る分銅形の打製石斧である。6は礫器である。自然石の一部を打ち割り刃部としている。7～10は磨石類である。8・9は側縁に敲打が認められる。9は器面の一部が被熱のため黒色化している。10は表裏面に複数の凹部をもち、表裏面や側縁に敲打が認められる。11～13は石皿でいずれも小破片である。14は砥石と考えられる。浅い凹部が一箇所認められる。

出土石製品（第77図15）

15は石棒である。小型のもので、基部側を破損している。先端部は丁寧に磨かれている。

（6）谷遺物包含層出土遺物

水場遺構の西側に位置する谷と斜面部では、縄文時代の遺物包含層が認められ、堆積した黒色土中から縄文時代後期を中心とした多量の遺物が出土した。

谷に面する斜面からは、土壙などの遺構が検出されたが、いずれも後期前葉のものであった。包含層内からは、後期前葉が多く出土するが、後期中葉、後葉、晩期の遺物も少なからず出土した。今回報告する調査区から検出された遺構の時期は後期前葉である。前回報告した第2次調査では、後期後葉から晩期の遺構が中心であった。谷部が第2次調査区に面しており、第2次調査範囲の遺構に関連する遺物が多く含まれると考えられる。

土器については、（7）グリッド出土遺物のグリッド出土土器の分類に則って記す。

出土土器

第Ⅱ群土器（第84図39・40）

前期後葉の土器群を一括する。いずれも諸磯式期の深鉢形土器の破片である。39は小突起をもつ口縁部で、半裁竹管文が施文される。諸磯b式と考えられる。40は単節L Rの縄文を横方向に施文し、原体の末端の結節と思われる結節回転文が施文されている。前期前葉と考えられる。

第Ⅲ群土器

中期の土器群を一括する。

第1類（第84図41）

中期中葉の土器を一括する。41は勝坂系の深鉢形土器の口縁部の破片である。隆帶上に刻みを施し、隆帶脇に沈線文を施文している。勝坂式終末の井戸尻式に相当すると考えられる。

第2類（第84図42～47）

中期後葉の土器を一括する。42・43は加曽利E II式で、隆帶で文様を施文している。44・45は加曽利E III式で、口縁部の文様は沈線で円形などの区画文を施文し、区画内に地文を施文している。46・47は加曽利E IV式で、中期末から後期初頭の土器である。微隆起状の隆帶が施文される。

第Ⅳ群土器（第84図48～54）

後期初頭の土器群を一括する。

48～54は後期初頭の称名寺式土器で、48・49は沈線文内に単節Lの縄文を施文している。50は把手である。51～54は沈線文内に列点を施文している。称名寺I c～II式に相当する。

第V群土器

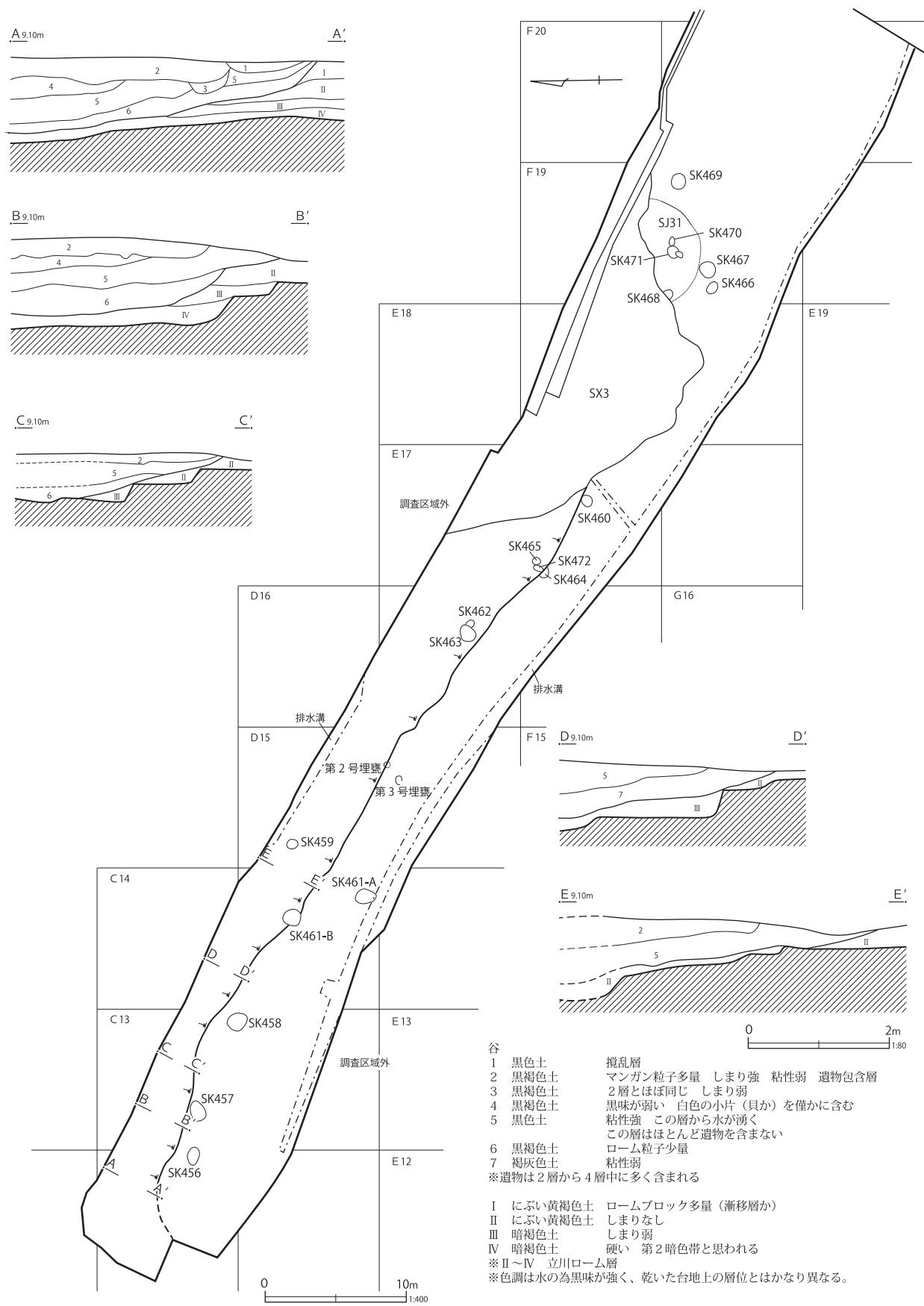
後期前葉の土器群を一括する。出土遺物の主体となる時期である。

第1類（第79図1～5、第84図55～71、第85図72～101）

堀之内1式土器を一括する。

1～5は器形復元できた深鉢形土器である。

1はバケツ形の器形で、口縁は小波状になっている。口縁部に沈線を巡らし、波頂部の把手には



第78図 谷部